

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.10 1998年度



The Board of Education in Oita City 1999

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.10 1998年度

The Board of Education in Oita City 1999

序 文

本年報は、平成10年度に大分市教育委員会が行いました発掘調査の概要を収録したものです。

大分市では、21世紀へ向けた「心かよい緑あふれる躍動都市」づくりをめざしておりますが、公共事業や民間開発に伴う遺跡の発掘調査は年々増加する傾向にあります。

今年度も、国指定史跡亀塚古墳の保存整備事業の3年次目として、引き続き古墳本体の整備を実施するとともに、学習施設としてガイダンス施設の躯体製作を実施しました。また、本年は、方2町といわれる大友氏館の内部の調査で、巨石を配した庭園遺構や、土塁状遺構などが発見され、国指定史跡豊後国分寺跡では当時の梵鐘を鑄造したと思われる遺構が見つかるなど、数多くの大きな成果を挙げることができました。

この年報が郷土の歴史研究や文化財の保護と理解への一助となり、多くの方々に活用されますことを心より願いたします。

最後になりましたが、当市の文化財行政に対してご協力いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

平成11年12月24日

大分市教育委員会

教育長 清瀬 和弘

例 言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会が平成10年4月1日から平成11年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容をまとめた年報である。
2. 平成10年度における調査地点は表2および第3図に示している。
3. 本書の執筆は各担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受贈図書目録は、平成10年4月1日から平成11年3月31日の期間中に大分市教育委員会文化財室に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受贈図書目録の作成は斎藤かおり・佐藤志乃（大分市教育委員会文化財室臨時職員）による。
6. 遺構・遺物の実測、図版の作成等において、井口あけみ・堤美智代・山下順子・飛高裕子・菅真奈美・沖本美和子・町田ユカリ・太田牧枝・伊東祥子・平田美智子・池爪由紀子・佐藤志信・敷島佳代子・高木麻奈美・阿部真知子・黒田きくみ・今村信子・宮成美恵・藤内美佐・吉田純子・内田順子・伊東みほ・甲斐光代・白坂直美・薬師寺流美加・野崎香織・結城由利恵・小田原由実・三重野京子・野崎豊子（以上大分市教育委員会文化財室臨時職員）の協力を得た。
7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影した。
8. 本文中に掲載した地図は、大分市都市計画図を使用した。（縮尺は1万分の1である）
9. 本書の編集、校正は池邊の他、井口が行った。

目次

第Ⅰ章	大分市教育委員会生涯学習課文化財室概要	1
	1 沿革	1
	2 組織	1
	3 大分市文化財調査委員会	2
第Ⅱ章	平成10年度事業概要	4
	1 開発事前審査事業	4
	(1) 平成10(1998)年度の概要	4
	2 発掘調査事業	6
	3 教育普及活動	13
	(1) 大分市文化財だより(1998年度号)の発行	13
	(2) 第5回海部のまつり 古墳説明会	13
	(3) 遺跡現地説明会	13
	(4) 研修参加	13
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要	14
	I 下郡遺跡群第106次調査 J区 q・r-9地点	14
	II 下郡遺跡群第107次調査 D区 n-23地点	18
	III 下郡遺跡群第108次調査 I区 r-15・16地点	20
	IV 下郡遺跡群第109次調査 I区 q-15地点	27
	V 下郡遺跡群第110次調査 I区 q~r-10・11地点	31
	VI 下郡遺跡群第111・116・117次調査地点	34
	VII 下郡遺跡群第112次調査 E区 ℓ-14・15地点	39
	VIII 下郡遺跡群第113次調査 H区 q-16・17地点	41
	IX 下郡遺跡群第114次調査 E区 k~n-14地点	45
	X 横尾遺跡群第67次調査	47
	XI 横尾遺跡群第68次調査	49
	XII 横尾遺跡群第69次調査 c-16・17地点	51
	XIII 横尾遺跡群第70次調査	53
	XIV 横尾遺跡群第71次調査	55
	XV 横尾遺跡群第72次調査	57
	XVI 横尾遺跡群第73次調査	59
	XVII 横尾遺跡群第74次調査	60
	XVIII 中安遺跡第1次調査	61
	XIX 久土遺跡第4次調査	63
	XX 上野遺跡群(上野丘東遺跡)	65
	XXI 豊後国分寺跡平成10年度確認調査	69
	XXII 中世大友城下町跡第4次調査	73
	XXIII 大友館跡第1次調査	79
	XXIV 上野遺跡群(上野廃寺跡)	83
	XXV 大友館跡第2次調査	87
	XXVI 府内城・城下町第11次調査	91
	XXVII 津守遺跡第3次調査	93
	XXVIII 大道条里遺跡	95
	XXIX 大友館跡下水道立会調査	96
第Ⅳ章	受贈図書目録	99
	1 調査報告書	99
	2 定期刊行物・図録等	110

挿図目次

第1図	地域区分図	4
第2図	地区別事前審査割合	5
第3図	調査遺跡位置図	7
第4図	現地説明会	13
下郡遺跡群第106次調査 J区q・r-9地点		
第5図	調査地点位置図	14
第6図	遺構配置図(1/200)	14
第7図	調査区全景(東方向から)	15
第8図	出土遺物実測図(1/4)	16
第9図	石製フイゴ羽口出土状況	17
下郡遺跡群第107次調査 D区n-23地点		
第10図	調査地点位置図	18
第11図	遺構配置図(1/200)	18
第12図	調査区全景(西方向から)	19
第13図	貯蔵穴(SK)・溝(SD)出土遺物実測図(1/4)	19
下郡遺跡群第108次調査 I区r-15地点		
第14図	調査地点位置図	20
第15図	遺構配置図(1/400)	20
第16図	調査区全景(西方向から)	21
第17図	遺物実測図(1/4)	21
第18図	SD315完掘状況(北方向から)	22
第19図	SD178完掘状況(北方向から)	23
第20図	SD178遺物出土状況	23
第21図	SX1002遺物出土状況	24
第22図	SX195検出状況	25
下郡遺跡群第109次調査 I区q-15地点		
第23図	調査地点位置図	27
第24図	遺構配置図(1/200)	27
第25図	出土遺物実測図(1/4)	28
第26図	調査区全景(北方向から)	29
第27図	調査区全景(南西方向から)	29
第28図	SD011完掘状況(北方向から)	30
下郡遺跡群第110次調査 I区q~r-10・11地点		
第29図	調査地点位置図	31
第30図	遺構配置図(1/800)	31
第31図	調査区全景(東方向から)	32
第32図	SD002・003完掘状況(北東方向から)	32
第33図	出土遺物実測図(1/4)	33
下郡遺跡群第111・116・117次調査		
第34図	調査地点位置図	34
第35図	第111・116・117次調査区全景	34
第36図	SK012遺物出土状況	34
第37図	SK083遺物出土状況	34
第38図	遺構配置図(1/400)	35
第39図	第116次調査区全景(南西方向から)	36
第40図	SK091遺物出土状況	36
第41図	SK102土層断面	36
第42図	SK102遺物出土状況	36
第43図	SD173完掘状況	37
第44図	SD180完掘状況	37
第45図	SE005検出状況	38
下郡遺跡群第112次調査 E区l-14・15地点		
第46図	調査地点位置図	39
第47図	南側調査区完掘状況(北方向から)	39
第48図	北側調査区完掘状況(北方向から)	39
第49図	SK005完掘状況	39
第50図	SX001検出状況	40
第51図	遺構配置図(1/400)	40

下郡遺跡群第113次調査 H区q-16・17地点

第52図 調査地点位置図41

第53図 調査区全景（北方向から）41

第54図 SX433土層断面41

第55図 遺構配置図（1/200）42

第56図 SX379検出状況43

第57図 出土遺物実測図（1/4）43

第58図 SD308・SD404検出状況（東方向から）44

下郡遺跡群第114次調査 E区k~n-14地点

第59図 調査地点位置図45

第60図 調査区全景45

第61図 調査地点位置図45

第62図 遺構配置図（1/800）46

横尾遺跡群第67次調査

第63図 調査地点位置図47

第64図 調査区全景（西方向から）48

第65図 出土遺物実測図（1/3）48

第66図 遺構配置図（1/400）48

横尾遺跡群第68次調査

第67図 調査地点位置図49

第68図 調査区全景（南方向から）49

第69図 遺構配置図（1/400）50

第70図 SF005掘り下げ状況（南方向から）50

横尾遺跡群第69次調査

第71図 調査地点位置図51

第72図 遺構配置図（1/200）51

第73図 S004完掘状況（南東方向から）52

第74図 道路状遺構検出状況（北方向から）52

第75図 出土遺物実測図（1/3）52

横尾遺跡群第70次調査

第76図 調査地点位置図53

第77図 調査区全景（南方向から）53

第78図 遺構配置図（1/250）54

第79図 出土遺物実測図（1/4・1/3）54

横尾遺跡群第71次調査

第80図 調査地点位置図55

第81図 調査区全景（西方向から）56

第82図 遺構配置図（1/400）56

第83図 出土遺物実測図（1/3）56

横尾遺跡群第72次調査

第84図 調査地点位置図57

第85図 調査区全景（北方向から）57

第86図 遺構配置図（1/300）58

第87図 S034遺物出土状況58

第88図 出土遺物実測図（1/4）58

横尾遺跡群第73次調査

第89図 調査地点位置図59

第90図 調査区全景（東方向から）59

第91図 S008遺物出土状況59

第92図 遺構配置図（1/400）59

横尾遺跡群第74次調査

第93図 調査地点位置図60

第94図 遺構配置図（1/400）60

中安遺跡第1次調査

第95図 調査地点位置図61

第96図 調査区全景（東方向から）61

第97図 方形周溝遺構と溝状遺構62

第98図 遺構配置図（1/300）62

久土遺跡第4次調査

第99図	調査地点位置図	63
第100図	調査区全景（西方向から）	63
第101図	溝状遺構と石列遺構	64
第102図	遺構配置図（1/400）	64

上野遺跡群（上野丘東遺跡）

第103図	調査地点位置図	65
第104図	遺構配置図（1/125）	65
第105図	遺構平面図（1/100）	66
第106図	出土遺物実測図（1/3・1/6）	67
第107図	調査区全景（南方向から）	68

豊後国分寺跡平成10年度確認調査

第108図	調査地点位置図	69
第109図	遺構配置図（1/200）	69
第110図	掛木埋設痕近景	70
第111図	鋳造坑全景	70
第112図	梵鐘鋳造遺構実測図（1/60）	70
第113図	梵鐘鋳造遺構出土遺物実測図（1/4）	71
第114図	梵鐘鋳造遺構出土遺物実測図（1/4）	71
第115図	鋳型（内型）	72
第116図	鋳型（外型）	72

中世大友城下町跡第4次調査

第117図	調査地点位置図	73
第118図	遺構配置図（1/200）	73
第119図	調査区全景（東方向から）	74
第120図	SK064完掘状況	74
第121図	SK064出土遺物実測図①（1/4）	74
第122図	SK064出土遺物実測図②（1/4）	75
第123図	SK160完掘状況	76
第124図	SK160出土遺物実測図（1/4）	76
第125図	SX061出土遺物実測図（1/4）	77
第126図	SD140遺物出土状況	78
第127図	SX061遺物出土状況	78
第128図	火災処理土坑土層断面	78
第129図	SF190土層断面	78

大友館跡第1次調査

第130図	調査地点位置図	79
第131図	遺構配置図（1/500）	79
第132図	庭園遺構東端の石組み	80
第133図	S008遺物出土状況	80
第134図	S019遺物出土状況	80
第135図	庭園遺構出土遺物実測図（1/3）	81
第136図	S008出土土器実測図（1/3）	82
第137図	S019出土土器実測図（1/3）	82

上野遺跡群（上野廃寺跡）

第138図	調査地点位置図	83
第139図	上野廃寺跡全景（空撮）	84
第140図	遺構配置図（1/200）	85
第141図	豊後国分寺創建軒平瓦出土状況および土師器	86
第142図	百済系軒丸瓦出土状況	86
第143図	瓦拓影（1/4）	86
第144図	遺物（瓦・土師器等）廃棄状況	86
第145図	礎石建物跡遺構検出状況	86

大友館跡第2次調査

第146図	調査地点位置図	87
第147図	調査区南側壁土層図（1/60）	87
第148図	調査区南側壁土層観察時（北方向から）	87
第149図	第2次整地層土層観察時（北方向から）	88
第150図	第2次整地層（SX065・070）土層図（1/60）	88

第151図	SX031・SE045出土遺物実測図（1/4）	88
第152図	第3面遺構配置図（1/200）	89
第153図	第3面調査区全景	90
第154図	土塁跡（SX035）土層観察時（北方向から）	90
第155図	土塁跡（SX035）土層図（1/80）	90
第156図	SE060・SD030出土遺物実測図（1/4）	90
第157図	華南三彩鳥形水注片	90
第158図	ガラス製皿片	90
第159図	鉄砲弾	90
府内城・城下町第11次調査		
第160図	調査地点位置図	91
第161図	石列検出状況（西方向から）	91
第162図	焼継文字を有する磁器碗	92
第163図	調査区全景	92
津守遺跡第3次調査		
第164図	調査地点位置図	93
第165図	遺構配置図	94
第166図	調査区全景（空中写真）	94
第167図	ST01検出状況（南西方向から）	94
大道条里遺跡		
第168図	調査地点位置図	95
第169図	遺構配置図（1/200）	95
大友館跡下水道立会調査		
第170図	調査地点位置図	96
第171図	調査地・拡大図（網掛部分が調査地）	96
第172図	平面・断面図位置図	96
第173図	A地点溝・平面図（1/40）	97
第174図	A地点溝・平面図（1/40）	97
第175図	F地点溝・平面図（1/40）	97
第176図	F地点溝・平面図（1/40）	97
第177図	出土遺物実測図（1/3）	97
第178図	溝状遺構検出状況（東方向から）	97

表目次

表1	開発事前審査件数一覧	5
表2	大分市平成10年度発掘調査地一覧	8
表3	大分市平成10年度試掘調査地一覧	9
表4	上野丘東遺跡遺物観察表	68

第Ⅰ章 大分市教育委員会生涯学習課文化財室概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組
平成10年4月1日	大分市教育委員会生涯学習課文化財室に改組

2. 組織

生涯学習課	課長	園田裕彦	
	参事	秦永政博	
文化財室	主幹	玉光洋	
	室長	植木正己	
	次長	讃岐和夫	
	主査	福田誠一	
	指導主事	後藤典幸	
	指導主事	藤沢敏夫	
	指導主事	甲斐猛	(平成11年度～)
	主任	安部貴美代	
	主任技師	塔鼻光司	
	主任技師	坪根伸也	
	主任技師	池邊千太郎	
	技師	高畠豊	
	技師	河野史郎	
	技師	塩地潤一	
	嘱託	杉崎重臣	
	嘱託	高木隆司	(平成11年度～)
	嘱託	大野康弘	
	嘱託	奥村義貴	
	嘱託	羽田野達郎	
	嘱託	橋本幸治	
	嘱託	神尾至	
	嘱託	佐藤道文	(平成11年度～)
	嘱託	荻幸二	(平成11年度～)
	嘱託	宮川泰男	(平成11年度～)
	嘱託	横山歩	(平成11年度～)
	嘱託	早田利宏	(平成11年度～)
理財課付		文化財調査員(臨時)	近藤晃弘
下郡区画整理事務所付		文化財調査員(臨時)	幸しのぶ
		文化財調査員(臨時)	荻谷史穂
		文化財調査員(臨時)	古木裕文
横尾区画整理事務所付		文化財調査員(臨時)	小野貴史(平成11年度から嘱託)
		文化財調査員(臨時)	永松正大(平成11年度から嘱託)
		文化財調査員(臨時)	野中慶誠
		文化財調査員(臨時)	水上仁
		文化財調査員(臨時)	安部知美
		文化財調査員(臨時)	栃原嘉明(平成11年度から嘱託)

大分市文化財室設置規則（抜粋）

昭和59年6月28日教育委員会規則第5号
改正昭和62年9月29日教委規則第16号
平成5年3月30日教委規則第13号
平成9年3月7日教委規則第2号
平成10年3月6日教委規則第4号

（設 置）

第1条 文化財行政の円滑な推進を図るため大分市文化財室（以下「室」という。）を設置する。

（組 織）

第2条 室は、教育委員会事務局生涯学習課に所属するものとする。（平5教委規則13・平10教委規則4・一部改正）

（分掌事務）

第4条 室の分掌事務は、次のとおりとする。

- （1）文化財調査委員に関すること。
- （2）文化財に関すること。
- （3）文化財保護思想の普及啓蒙に関すること。

附 則 抄

（施行期日）

1 この規則は、昭和59年7月1日から施行する。

附則(昭和62年教委規則第16号)

この規則は、昭和62年10月1日から施行する。

附則(平成5年教委規則第13号)

この規則は、平成5年4月1日から施行する。

附則(平成9年教委規則第2号)

この規則は、平成9年4月1日から施行する。

附則(平成10年教委規則第4号)

この規則は、平成10年4月1日から施行する。

3. 大分市文化財調査委員会

大分市文化財調査委員会委員（平成10年4月1日現在）

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
委 員 長	佐 藤 真 一	元荷揚町小学校長	動 植 物
副委員長	豊 田 寛 三	大分大学・教育学部長	近 世
	北 野 隆	熊本大学・教授	建 造 物
	日 高 稔	上野丘高校・校長	地質鉱物
	橘 昌 信	別府大学・教授	考古埋蔵
	橋 本 操 六	大分大学非常勤講師・前県総務課参事	中 世
	西別府 元 日	広島大学文学部・助教授	古 代
	宗 像 健 一	大分県立芸術会館・学芸第一課長	美 術
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・主幹学芸員	工 芸
	小 泊 立 矢	大分県立先哲史料館・副館長	民 俗

大分市文化財調査委員会条例

昭和 51 年 3 月 29 日 条例 第 4 号
改正 平成 4 年 12 月 21 日 条例 第 41 号
“ 平成 10 年 3 月 27 日 条例 第 18 号

(設 置)

第 1 条 地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の 4 第 3 項の規定に基づき、大分市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に大分市文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任 務)

第 2 条 委員会は、教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議する。

(組 織)

第 3 条 委員会の委員は、10人以内とし、学識経験者のうちから教育委員会が委託し、又は任命する。

2 委員は、非常勤とする。

(任 期)

第 4 条 委員の任期は、2 年とし、その欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。ただし、再任を妨げない。

(委 員 長)

第 5 条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、委員会の会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代行する。

(会 議)

第 6 条 会議は、必要に応じ、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

3 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(部 会)

第 7 条 委員会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。

(庶 務)

第 8 条 委員会の庶務は、教育委員会事務局生涯学習課において処理する。（平4条例41・平10条例18・一部改正）

(委 任)

第 9 条 この条例に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則 抄

(施行期日)

1 この条例は、昭和51年 5 月 1 日から施行する。

附 則（平成 4 年条例第41号）抄

(施行期日)

1 この条例は、平成 5 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（平成10年条例第18号）

この条例は、平成10年 4 月 1 日から施行する。

第Ⅱ章 平成10年度事業概要

1 開発事前審査事業

(1) 平成10（1998）年度の概要

表1は平成10年度における開発申請内容を示したものである。

平成10年度の申請総面積は2,212,053.52㎡、総申請件数109件を数える。

その内訳は、開発計画事前審査申請9件、開発行為事前協議申請55件、開発行為変更事前協議申請1件、宅地造成工事前協議申請22件、都市計画法32条協議申請4件、墓地経営関係2件、土地売買等の届出14件、事業計画事前審査申請1件、市街化調整区域における大規模開発1件である。また、本年度は開発行為事前審査申請、大規模土地取引事前指導申請は申請件数が0件であった。

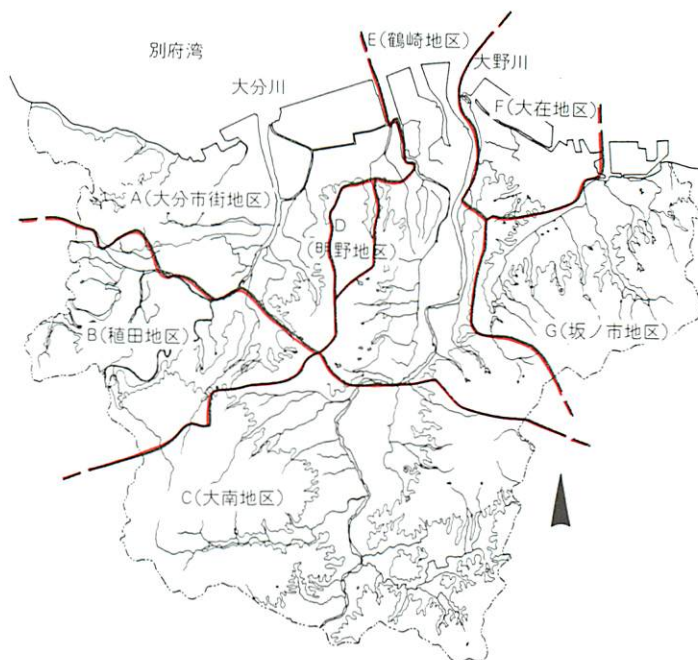
これを平成9年度の申請内容と比較すると、総件数では約33%の減少がみられる。これは開発行為事前協議申請が前年80件が55件、土地売買等の届出が、前年38件が14件と、大幅に落ち込んでいることが大きな要因といえよう。また、これは土地の売買が冷え込み、それに伴って大型開発の計画が減少した事が如実に現われているといえよう。

次に、数年来減少傾向にあった申請面積は、本年になって激減している。なんと前年比で約42%減、昨年度の約1/2ということになる。明野・大在・坂ノ市地区は、増加しているものの、特に、大分市街区で前年の20%、植田地区で前年の35%、鶴崎地区で前年の5%の申請となっている。これは大分市街地区での開発、再開発が減少する傾向が看守できる。なお、植田、鶴崎地区は昨年度に大型の開発が計画されたためであり、一過性のものと考えられる。

申請エリアに関しては、昨年が鶴崎地区（E）で全体の4.5割を占め、残りを大分市街地区（A）、植田地区（B）、で占められていたが、本年度は坂ノ市地区（G）と明野地区（D）に開発申請が集中しており、2地区で大分市全体の約67%を占めている。これは、今後の発掘調査件数の増加の要因となると考えられる。

本年の特徴としては、前述のとおり申請面積が激減したことがあげられる。前年比で1/2に減少しており、申請件数でも約1/3となっている。このように件数、面積共に減少傾向はとどまらず、やはり長引く経済不況の影響が如実に現れているといえよう。

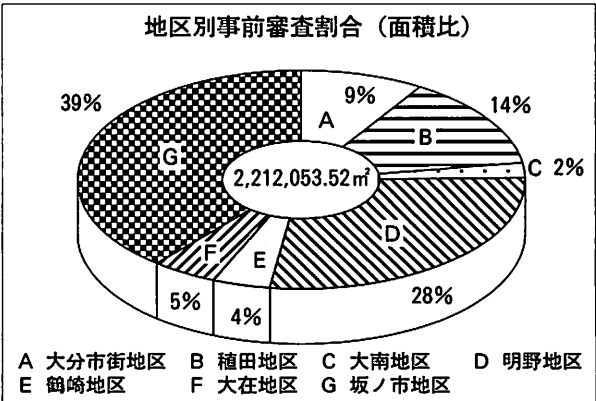
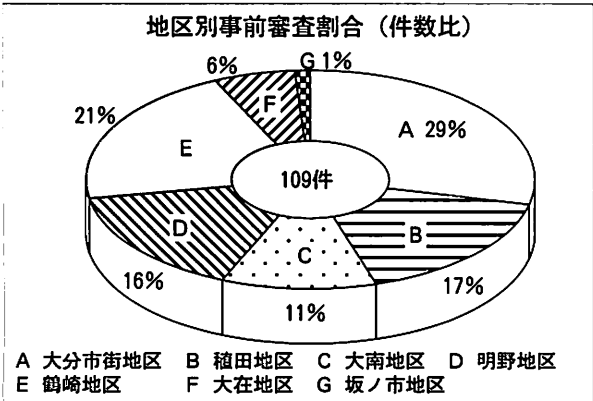
（塔鼻）



第1図 地域区分図

表 1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市街地区	B-穂田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴崎地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【開発計画事前審査申請】								
件数	2	1	1	2	2	1	0	9
面積（㎡）	70,861.60	11,604.22	10,874.21	283,015.44	14,652.79	60,622.36	0	451,630.62
【開発行為事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積（㎡）	0	0	0	0	0	0	0	0
【開発行為事前協議申請】								
件数	15	8	8	9	13	1	1	55
面積（㎡）	41,680.73	18,946.79	32,717.36	313,819.29	51,838.63	17,569.81	851,800.00	1,328,372.61
【開発行為変更事前協議申請】								
件数	0	0	0	0	0	1	0	1
面積（㎡）	0	0.00	0	0	0	28,996.28	0	28,996.28
【大規模土地取引事前指導申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積（㎡）	0	0	0	0	0	0	0	0
【宅地造成工事事前協議申請】								
件数	9	5	2	2	4	0	0	22
面積（㎡）	4,263.72	4,748.28	2,414.87	3,753.87	5,442.64	0	0	20,623.38
【都市計画法32条協議申請】								
件数	3	1	0	0	0	0	0	4
面積（㎡）	68,086.51	10,000.00	0	0	0	0	0	78,086.51
【土地売買等の届出】								
件数	2	2	1	3	3	3	0	14
面積（㎡）	7,007.72	5.37	2,380.00	11,296.60	4,235.00	11,903.21	0	36,827.90
【墓地経営に関する事前審査】								
件数	1	0	0	1	0	0	0	2
面積（㎡）	238.42	0	0	2,128.27	0	0	0	2,366.69
【事業計画事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	1	0	0	1
面積（㎡）	0	0	0	0	5,494.53	0	0	5,494.53
【開発協議会における質問事項】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積（㎡）	0	0	0	0	0	0	0	0
【市街化調整区域における大規模開発】								
件数	0	1	0	0	0	0	0	1
面積（㎡）	0	259,655.00	0	0	0	0	0	259,655.00
【総合計】								
件数	32	18	12	17	23	6	1	109
件数比（％）	29%	17%	11%	16%	21%	6％	1％	100%
面積（㎡）	192,138.70	304,959.66	48,386.44	614,013.47	81,663.59	119,091.66	851,800.00	2,212,053.52
面積比（％）	9％	14%	2％	28%	4％	5％	39%	100%



第 2 図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

本年度市内で実施された発掘調査件数は130件である。その内訳は試掘確認調査が85件、分布調査11件、立会調査3件、本格調査31件を数える。内訳は表2・3に示している。

このうち試掘確認調査の内容について概観する。

96件の調査件数の中で遺跡の存在が確認されたものは全体の約16%に及び、設計変更等による盛土保存により本格調査に移行しなかったものを除くと、本格調査へ移行したものは総調査件数の約20%である。

以下において本年度（平成10年度）の発掘調査の成果を概観する。

弥生時代

弥生時代の遺構が、下郡遺跡群第107・108・109・113・114次調査、横尾遺跡群第67・68・70・72次調査、津守遺跡第3次調査の、3遺跡・10調査地点で確認されている。

弥生時代中期の遺構・遺物については、下郡遺跡群の第107次調査で検出された貯蔵穴、第109次調査で検出された溝状遺構、第113次調査で検出された竪穴住居跡・方形周溝状遺構・貯蔵穴、横尾遺跡群第68次調査で検出された溝状遺構が挙げられる。特に、横尾遺跡群の第68次調査で検出された溝状遺構は調査区東に位置する第62次調査で確認された環濠の続きであり、逆台形の環濠の下層から廃棄されたと思われる安国寺式の複合口縁壺、甕、鉢、器台や、赤く塗られた高坏が出土している。

弥生時代後期の遺構については、下郡遺跡群の第108次調査で竪穴住居跡7基が検出されている。

古墳時代

当該期の遺構は、下郡遺跡群第108・110・113・117次調査、中安遺跡第1次調査、津守遺跡第3次調査において確認されている。

下郡遺跡群の第108次調査では、6世紀末から7世紀初頭と推定される竪穴住居跡4基が検出されている。

中安遺跡第1次調査では、方形周溝遺構および竪穴住居跡が検出されている。方形周溝遺構の周溝からは土師器の壺や磨製石斧が出土したが、中央部の土坑からは土墳墓と特定される遺物は出土していない。

津守遺跡第3次調査では、隅丸長方形を呈する土坑が検出されており、古墳時代初頭の甕形土器破片が出土している。

古代

今年度の調査では、下郡遺跡群第108・109・113次調査、横尾遺跡群第67・68・69・70・73次調査、上野遺跡群上野丘東遺跡・上野廃寺跡、豊後国分寺跡の4遺跡11調査地点で確認されている。

下郡遺跡群第109次調査では、官衙的な遺構が8世紀後半、ならびに9世紀まで存続している事実が知られた。これは、調査区東側の道路状遺構の存続年代に符合するものであり、主要道路沿線という地理的環境に起因するものと考えることができる。この段階ではすでに大型建物跡は存続しておらず、8世紀中頃から後半の段階とは異なる性格の遺構の展開が予見される。

横尾遺跡群第73次調査では、溝状遺構や土器溜まり遺構が確認されている。器種は、蓋・甕・甑・埴・坏・皿・移動式カマドをはじめ、黒色土器A類埴・製塩土器・土錘など多くの遺物が出土している。裾部に溝を巡らし、その内側に多量の土師器が出土している状況から、平成8年に調査が行われた井ノ久保遺跡に類似している。

豊後国分寺跡調査では、残存状況も良好な梵鐘鑄造遺構が検出され、古代の鑄造技術を復元するうえで貴重な情報が得られた。出土遺物には、鑄型・溶解炉（こしき炉）・銅滓・瓦・土師器等がある。鑄型については、外型・内型共に出土しており、その製品復元に加え鑄型成形技法の復元に係わる貴重な情報が得られた。また、古

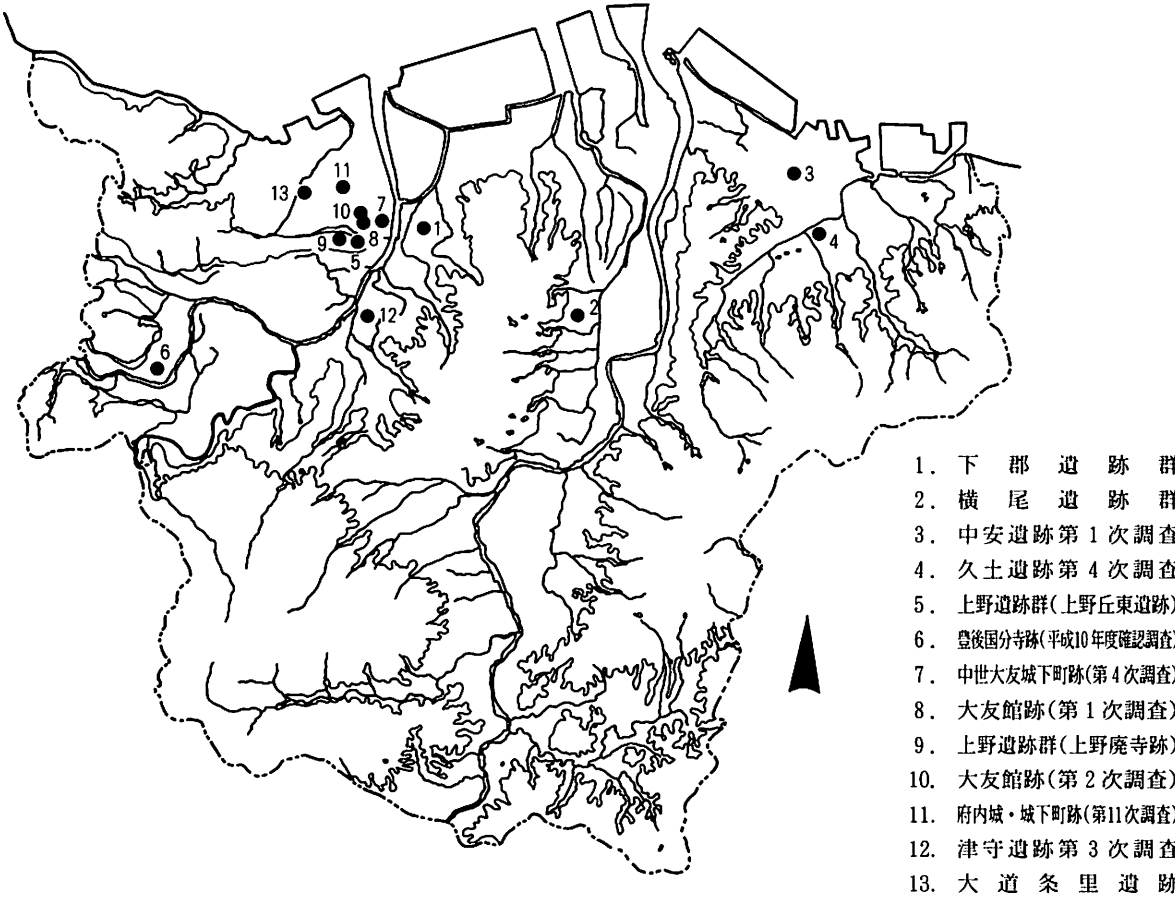
代鋳物師の動向や、諸国国分寺の実態に至るまで、様々な問題を投げかけるものである。

上野廃寺跡調査では、版築基壇遺構とそれに伴う礎石建物跡が発見されている。礎石建物跡は、すでに礎石は抜き取られているが、径1.5mの掘り方と拳大の根石が残っており、推定される建物規模は4間×5間+αであり、4面庇をもつ大型の建物跡であることが判明した。出土瓦には、百済系単弁軒丸瓦や豊後国分寺創建時軒平瓦、上野廃寺跡で特徴的な複弁七葉蓮華文軒丸瓦・均正唐草文軒平瓦があり、その他に緑釉陶器片2点と白磁I類片1点やレンガ状の埴の破片などがみられた。

中世

当該期の遺構は、下郡遺跡群第106～108・110～114・117次調査、横尾遺跡群第67～72・74次調査、久土遺跡第4次調査、上野遺跡群上野丘東遺跡、中世大友城下町跡第4次調査、中世大友館跡第1・2次調査、府内城・城下町跡第11次調査、津守遺跡第3次調査の、8遺跡23調査地点において確認されている。

今年度、特に注目されるのは、中世大友館跡第1・2次調査において発見された庭園遺構と館を囲む土塁跡である。これにより大友館の存在位置をほぼ確定することができた。庭園遺構は南北16m以上、東西35m以上にわたり、西側・南側にさらに広がっている。その規模を全国の出土例と比較すると、一乗谷朝倉館の庭園や山口大内氏館のそれを凌駕する。大友館自体の規模が、約200m四方と推定されるものであり、それにふさわしい規模といえる。土塁跡は、推定大友館の西側外郭線上において期待通り検出された。復元幅約10m程で掘り込み地業と呼ばれる工法によって構築され、調査区南西部において東側にL字状に折れ曲がることも判明した。さらに、この土塁跡は16世紀後半段階において削平され、大規模な盛土整地によって埋められたことも判明した。さらに、



第3図 調査遺跡位置図

表 2 大分市平成10年度発掘調査地一覧

調査地点	種 別	事 業 内 容	遺 跡 名	調 査 地	調査担当	遺跡面積 (2段面・㎡)	開発面積 (㎡)	調 査 期 間
98001	公共事業	下郡土地区画整理事業	下郡遺跡群	大分市大字下郡				
			第106次調査	J区q・r-9地点	坪根伸也・橋本幸治 神尾 至	(232)		980402～980417
			第107次調査	D区n-23地点	河野史郎・荻谷史穂 古木裕文	(385)		980403～980529
			第108次調査	I区r-15地点	坪根伸也・幸しのふ他	(771)		980507～980806
			第109次調査	I区q-15地点	坪根伸也・荻谷史穂	(183)		990108～990217
			第110次調査	I区q～r-10・11地点	坪根伸也・近藤晃弘	(1,434)		980826～981015
			第111次調査	E区n・o-15地点	坪根伸也・幸しのふ 荻谷史穂	(531)		980825～990217
			第116次調査	E区o-15・16地点				
			第117次調査	E区o-14・15地点				
			第112次調査	E区ℓ-14・15地点	坪根伸也・幸しのふ	(1,605)		981002～981020
			第113次調査	H区q-16・17地点	坪根伸也・近藤晃弘	(301)		981019～981222
			第114次調査	E区k～n-14地点	坪根伸也・幸しのふ	(451)		981026～981204
98002	公共事業	横尾土地区画整理事業	横尾遺跡群	大分市大字横尾				
			第67次調査		池邊千太郎・安部知美	(900)		980420～980625
			第68次調査		池邊千太郎・永松正大	(950)		980604～981026
			第69次調査		高 豊・野中慶誠	(252)		980610～980710
			第70次調査		池邊千太郎・水上 仁	(800)		980715～981118
			第71次調査		池邊千太郎・安部知美	(1,300)		981008～990203
			第72次調査		池邊千太郎・永松正大	(600)		981117～990302
			第73次調査		池邊千太郎	(800)		990201～990308
			第74次調査		池邊千太郎	(1,010)		990216～990331
98003	公共事業	道路建設	中安遺跡 第1次調査	大分市大字城原	藤沢敏夫・神尾至	1,200		980427～980710
98004	公共事業	道路建設	久土遺跡 第4次調査	大分市大字久土	藤沢敏夫・神尾至	1,800		980728～981224
98005	民間開発	共同住宅建設	上野遺跡群 (上野丘東遺跡)	大分市上野丘東	後藤典幸	80		980603～980703
98006	公共事業	確認調査	豊後国分寺跡 平成10年度確認調査	大分市大字国分	河野史郎	270		980704～980901
98007	民間開発	マンション建設	中世大友城下町 跡第4次調査	大分市錦町	河野史郎	330		981214～990331
98008	公共事業	駅周辺総合整備事業	大友館跡 第1次調査	大分市顕徳町	高 豊	2,200		980721～990331
98009	民間開発	共同住宅建設	上野遺跡群 (上野虎寺跡)	大分市上野丘	讃岐和夫	416		980601～980723
98010	民間開発	分譲マンション建設	大友館跡 第2次調査	大分市顕徳町	塩地潤一	557		981104～990430
98011	民間開発	ビル建設	府内城・城下町跡 第11次調査	大分市荷揚町	玉永光洋・橋本幸治	250		980728～981031
98012	民間開発	共同住宅建設	津守遺跡 第3次調査	大分市大字津守	塔鼻光司・橋本幸治	502.23		980525～980629
98013	公共事業	確認調査	大道条里遺跡	大分市大道	塩地潤一・塔鼻光司 野中慶誠・羽田野達郎	95		980629～980706

表 3 大分市平成10年度試掘調査地一覧

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調 査 期 間	開 発 原 因
1	分布(民間)	大分市大字古国府字芝原156- 1	—	954.14	98.04.03	アパート建設
2	試掘(公共)	大分市大字横瀬404番地 他 8 筆	70	10,000	98.04.07	清掃事業所移転
3	分布(民間)	大分市大字下郡字高畑1736- 3	—	496.42	98.04.08	マンション建設
4	試掘(公共)	大分市大字駄原1640番地の 1	70	9,120	98.04.14	駅南代替地
5	試掘(民間)	大分市大字羽屋1060- 6	154	860	98.04.15～98.04.17	アパート建設
6	試掘(公共)	大分市大字下郡 A-16 リ	51	465	98.04.20	下郡土地区画整理事業
7	試掘(公共)	大分市大字下郡 D-17 ハ・ニ	39	700	98.04.21	下郡土地区画整理事業
8	試掘(公共)	大分市大字下郡 C-23 カ	7	241.5	98.04.22	下郡土地区画整理事業
9	試掘(公共)	大分市大字下郡 C-23 ヘ	32	875	98.04.22	下郡土地区画整理事業
10	試掘(公共)	大分市大字下郡 E- 5 ロ	38	955	98.04.23	下郡土地区画整理事業
11	試掘(公共)	大分市大字下郡 F-10 リ	52	540	98.04.24	下郡土地区画整理事業
12	分布(公共)	大分市大字下郡 D-17 レ	—	124.8	98.05.06	下郡土地区画整理事業
13	分布(公共)	大分市大字下郡 C-11 イ	—	530	98.05.06	下郡土地区画整理事業
14	分布(民間)	大分市大字古国府416- 1、419- 2	—	1,342.25	98.05.06	共同住宅建設
15	試掘(民間)	大分市上野丘2丁目599-1の一部 599-2、3、4	20	768.39	98.05.07	共同住宅建設
16	試掘(公共)	大分市顕徳町 1 丁目2824- 6 他 1 筆	20	359	98.05.07	駅周辺総合整備事業
17	試掘(民間)	大分市大字古国府581- 3、582- 5 586- 1、587- 1、580- 4	30	870.74	98.05.12	共同住宅建設
18	試掘(公共)	大分市大字下郡 A-19 ナ	25	300	98.05.13	下郡土地区画整理事業
19	分布(民間)	大分市大字下郡小柳1687、1690- 1、1686	—	1,329	98.05.14	和食レストラン建設
20	試掘(公共)	大分市顕徳町 1 丁目2821-15 (61)	25	149.46	98.05.15	駅周辺総合整備事業
21	試掘(民間)	大分市大字大分上井東4294-1、4298-1 4299、4300、4293、4295-1、4296-1	214	6,895	98.05.19～98.05.21	葬祭場建設
22	試掘(公共)	大分市金池南 1 丁目1145-7 (47)	20	198.17	98.05.25	駅周辺総合整備事業
23	試掘(公共)	大分市金池南 1 丁目1140-16 (48)	13	208	98.05.25	駅周辺総合整備事業
24	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1146-14 (31)	15	147.31	98.05.26	駅周辺総合整備事業
25	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1108-34 (33)	7	123.16	98.05.26	駅周辺総合整備事業
26	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1108-26 (41)	12	100.32	98.05.27	駅周辺総合整備事業
27	試掘(民間)	大分市大字羽屋字甲斐本194-1、-3 194-6、-7、-8、217-10	36	1,017.12	98.06.01	店舗兼倉庫
28	試掘(公共)	大分市大字下郡 A-15 ニ	12	530.4	98.06.05	下郡土地区画整理事業
29	試掘(公共)	大分市金池南 1 丁目1143-9 他 1 (44)	25	240.53	98.06.08	駅周辺総合整備事業
30	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1146-10 (37)	13	148.38	98.06.10	駅周辺総合整備事業
31	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1146-18 (38)	24	216.91	98.06.10	駅周辺総合整備事業
32	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1145- 6 他 4 (42)	26	343.56	98.06.11	駅周辺総合整備事業
33	試掘(公共)	大分市金池南 1 丁目2445- 8 (24)	20	239.15	98.06.12	駅周辺総合整備事業

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
34	試掘(民間)	大分市大字永興字土毛103- 1	38	1,145.29	98.06.16	民間開発
35	分布(民間)	大分市大字片島字荷付2448番15	—	200	98.06.16	無線基地局建設
36	試掘(公共)	大分市大字下郡字谷水1905番地(C-5 二)	43	1,174	98.06.18	下郡土地区画整理事業
37	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2471- 17 他2 (16)	14	393.01	98.06.24	駅周辺総合整備事業
38	試掘(公共)	大分市金池南 2 丁目2646- 7 他1 (51)	17	175.79	98.06.25	駅周辺総合整備事業
39	試掘(公共)	大分市大道町 2 丁目	95	315	98.06.29 98.0702~98.07.07	東大道南春日線道路改築
40	試掘(民間)	大分市大字猪野字東ノ平209- 1 外 8 筆	28	2,968.72	98.06.30	宅地造成
41	分布(民間)	大分市大字羽屋字太田211番 2 外 3 筆	—	196	98.07.10	貸ビル建設
42	試掘(公共)	大分市大字下郡字小柳1664- 8、1665- 5、- 6、- 8 大分市大字下郡字尾西1636- 1、1637- 1、 1638- 1、- 5 大分運転所用地 (20353㎡) の一部	108	2,578.08	98.07.13~98.07.14	大分市土地開発公社 大分運転所用地 駅周辺総合整備事業
43	試掘(公共)	大分市大字下郡D- 14 ツ・ラ・ヨ・ワ・カ	84	1,600	98.07.16	下郡土地区画整理事業
44	試掘(民間)	大分市顕徳町 2 丁目3056- 1	8	469.42	98.07.23	ビル建設
45	試掘(民間)	大分市上野丘 1 丁目487- 8、- 9	40	372	98.07.30~98.07.31	個人住宅建設
46	試掘(公共)	大分市大字下郡字高田1778、1785- 1 大分運転所用地 (20353㎡) の一部	60	935	98.08.03	大分市土地開発公社 大分運転所用地(駅南)
47	試掘(民間)	大分市上野丘東188- 1、188- 2	20	428.68	98.08.18	個人住宅建設
48	立会(公共)	大分市上野丘西	5.75	166.64	98.08.24	公共下水道工事
49	試掘(民間)	大分市大字奥田字横蒔741番 3、741番12	11	1,204.27	98.08.28	アパート建設
50	試掘(公共)	大分市金池南 1 丁目2445- 20 (25)	20	246.99	98.08.31	駅周辺総合整備事業
51	試掘(公共)	大分市大道町 2 丁目2279- 143 他1 (1)	37	273.79	98.09.01	駅周辺総合整備事業
52	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2279- 119 (3)	18	186.4	98.09.01	駅周辺総合整備事業
53	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2514- 5 (17)	16	109.28	98.09.02	駅周辺総合整備事業
54	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2513- 4 他2 (19)	23	426.74	98.09.02	駅周辺総合整備事業
55	試掘(公共)	大分市東大道 2 丁目2416- 5 (4)	17	361.06	98.09.03	駅周辺総合整備事業
56	試掘(公共)	大分市東大道 2 丁目2416- 11 (5)	7	162.02	98.09.03	駅周辺総合整備事業
57	試掘(公共)	大分市大字南字鶴ノ鶴	136	17,556	98.09.08	公園管理事務所移転用地
58	試掘(民間)	大分市大字奥田字上河角698- 5	50	1,280	98.09.11	マンション建設
59	試掘(民間)	大分市顕徳町 2 丁目3029- 2、- 5、- 6	75	663.08	98.09.16~98.09.17	下郡土地区画整理事業
60	試掘(公共)	大分市大字下郡A- 6 イ・ハ	76	1,400	98.09.18	個人住宅建設
61	試掘(民間)	大分市錦町 2 丁目3210番 3	12	369.69	98.09.25	駅周辺総合整備事業
62	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2443- 8 (14)	35	387.18	98.10.05	駅周辺総合整備事業
63	試掘(公共)	大分市東大道 2 丁目2415- 4 (10)	17	232.34	98.10.05	駅周辺総合整備事業
64	試掘(公共)	大分市東大道 1 丁目2442- 10 他11 (11)	46	2,014.71	98.10.06	駅周辺総合整備事業
65	試掘(民間)	大分市顕徳町 2 丁目3033- 1	15	301.13	98.10.08	共同住宅建設
66	分布(民間)	大分市大字羽田24番地 1	—	777	98.10.12	共同住宅建設

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
67	試掘(公共)	大分市大字下郡字寺小路2584番地 (B-13ロ)	4	420	98.10.26	下郡土地区画整理事業
68	試掘(公共)	大分市東大道1丁目2479-3・2485-2 (70・71)	35	1,465.02	98.10.29	駅周辺総合整備事業
69	試掘(公共)	大分市中戸次4280番 (戸次小学校) (拡張調査)	23	400	98.11.16 98.12.08～98.12.10	校舎増築
70	分布(民間)	大分市大字葛木字南原307番地	—	828.63	98.11.17	共同住宅建設
71	試掘(民間)	大分市大手町1丁目1529～1541合併の2	35	407.94	98.11.18	共同住宅建設
72	試掘(公共)	大分市大字横尾D-5の一部(YKS-98S01)	212.5	1,000	98.11.24～98.11.25	横尾区画整理事業
73	試掘(公共)	大分市大字横尾D-3・D-5の一部 (YKS-98S02)	102.1	450	98.11.24～98.11.25	横尾区画整理事業
74	試掘(公共)	大分市大字横尾D-17の一部(YKS-98S03)	62.7	600	98.11.25	横尾区画整理事業
75	試掘(公共)	大分市大字横尾B-17の一部(YKS-98S04)	86.5	600	98.11.25～98.11.26	横尾区画整理事業
76	試掘(民間)	大分市大字羽屋123-6、123-7	52	876.48	98.12.01	診療所建設
77	試掘(民間)	大分市錦町2丁目3373-4(矢野内科医院)	14.5	170.34	98.12.03	デイケア棟増築
78	試掘(公共)	大分市大字下郡B-7 ト・チ・リ B-8 ヲ	76	1,410	98.12.04	下郡土地区画整理事業
79	試掘(公共)	大分市大字横尾3号緑地・C-9・17・18 (YKS-98S05)	451.39	3,100	98.12.14	横尾区画整理事業
80	試掘(公共)	大分市大字横尾A-4・6の一部 (YKS-98S06)	236	2,600	98.12.15～98.12.16	横尾区画整理事業
81	試掘(公共)	大分市大字下郡B-7 ヘ・ヌ・ル B-8 イ	64	1,351	98.12.18	下郡土地区画整理事業
82	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2465-1 (69)	230	12,989.83	98.12.21～98.12.22	駅周辺総合整備事業
83	試掘(民間)	大分市大字玉沢1220の1	72	281	99.01.08	電波塔建設
84	試掘(民間)	大分市上野六坊北4番23号	7	650	99.01.11	木造二階建て建物建設
85	立会(公共)	大分市顕徳町3丁目			99.01.11～99.01.27	公共下水道工事
86	試掘(民間)	大分市大字古国府字平生分192番1の 土地の一部	18	859.48	99.01.20	宅地造成
87	試掘(民間)	大分市大字猪野字山野1408-1、1415-1 1417、14720-1	68	2,625	99.01.22	長屋建設
88	試掘(民間)	大分市大字玉沢楠本755番地の1外 140768㎡ (A区)	572	10,000	99.01.25～99.02.05	大型店舗建設
89	試掘(民間)	大分市府内町1丁目105番、107番	20	372.68	99.02.01	店舗建設
90	試掘(公共)	大分市大字下郡A-19街区のチ・リ・ル・ヲ	90	2,068	99.02.09	下郡土地区画整理事業
91	分布(民間)	大分市大字下郡字松女ヶ迫1184-1他 (新設鉄塔10ヶ所)	—	250	99.02.09	鉄塔建設
92	立会(公共)	大分市大字下郡字出口2986番地(A-27ヌ) 字辻2887-1番地(A-27ル)	2	114	99.02.16	浄化槽埋設
93	試掘(民間)	大分市大字羽田字挟間961-1、962-1	14	1,141.13	99.02.16	共同住宅建設
94	試掘(民間)	大分市大字古国府字カモ田116-1、167-2	30	1,302	99.02.18	ビル建設
95	試掘(民間)	大分市大字羽屋字牛踏93番1	32	1,802	99.02.19	アパート建設
96	試掘(民間)	大分市大字中尾字平244、245-1、248-1、249-1、 249-2、250-1、-2、251-1、-2、252、253、254、255	44	5,457.37	99.02.23	病院建設
97	試掘(民間)	大分市大字松岡字向原西8365番1、8365番2	2.5	1,405.82	99.02.25	保育園建設
98	試掘(民間)	大分市大字玉沢字楠本755番地の1外 140768㎡ (C区)			99.03.01～99.03.10	大型店舗建設
計			4,897.94	139,455.74		

今回の調査では、絵図には詳細に描かれていない館の構造が部分的ではあるが明らかとなり、大友館の変遷について検討する上で、貴重な成果を挙げることができた。また、遺物も戦国大名大友氏の居館にふさわしいものが多く出土し、南蛮貿易を盛んに行った大友氏ならではの遺物組成となっている。今後の調査により、よりはっきりとした状況がつかめるものと確信する。なお、大友館跡は国指定史跡の方針が出されている。

その他、下郡遺跡群第106・108・110次調査では、多くの溝状遺構を検出している。遺物は2例目となるタイ・ノイ川窯産焼締四耳壺胴部破片が出土している。また、横尾遺跡群第60・70・72次調査では、多くの掘立柱建物跡や溝状遺構が確認され、一辺30m前後の方形の溝で囲まれた居館の存在が想定されている。上野遺跡群上野丘東遺跡では、多くの京都系土師器が出土し、掘立柱建物跡群も検出された。さらに、中世大友城下町跡第4次調査では、3面の遺構面が確認され、それぞれに火災の痕跡が検出されている。遺物は、備前焼の茶陶器類が目につき、タイ、ベトナム等の東南アジア系の遺物がまとまって出土しているのも注目される。上市町と工座町を画する東西道路も検出され、複数時期の路面を有することが確認された。特にその最終面を切る火災処理土坑の存在は、中世大友府内町の終焉に関する良好な資料といえよう。

近世

今年度の調査では、下郡遺跡群第110・111・113・114・116・117次調査、横尾遺跡群第68・69・70・71・72次調査、府内城・城下町跡第11次調査の3遺跡12調査地点で確認されている。

下郡第114次調査では、溝状遺構が多数検出され、字図と重ねると字境と一致し、字境の区画溝と考えられる。また、一部では旧道と字境が同じ位置にあることから、旧道は本来溝があった部分を利用して作られていることが分かった。

府内城・城下町跡第11次調査（荷揚町）では、武家屋敷跡の礎石列と土坑及び連続する井戸群、石列などが確認された。調査区南側の石列は、「府内城下の復元図」による浄安寺の北側外郭線上で検出されており、推定の裏付けができた。また、廃棄土坑からは、18世紀後半から19世紀中頃に比定される陶磁器類が大量に出土し、その中に「森下氏」という焼継銘のある陶磁器が認められた。森下氏は当該屋敷の歴代当主として文献上に記録されており、考古学的に実証されたといえよう。

3 教育普及活動

（1）大分市文化財だより 1998年度号の発行

平成3年度から発行を続けている文化財だよりの1998年度号（第8号）の作成、配布を行った。

本号は、平成10年8月に国史跡豊後国分寺跡でみつかった梵鐘の製作跡を特集し、発掘調査による最新の成果を掲載した。また、保存整備の進む亀塚古墳についても紹介した。

（2）第5回 海部のまつり 古墳説明会

平成10年9月6日（日）

まつりは今年で5回目となり、「今よみがえる太古の世界」をテーマにおこなった。会場では、亀塚古墳発掘調査で出土した船形埴輪や大型船が描かれた埴輪、スジガイ文様の埴輪などの遺物を展示し、パンフレットを配布して現地説明会を行った。

（3）遺跡現地説明会

本年度は平成10年8月23日に豊後国分寺跡梵鐘鑄造遺構を、同年11月28日に大友館跡の現地説明会を実施した。

豊後国分寺跡梵鐘鑄造遺構現地説明会では、九州で初めて確認された古代の梵鐘鑄造遺構が発見されたことも

あって300人にもおよぶ見学者で賑わった。

一方の大友館跡現地説明会では、推定大友館の庭園遺構や土塁跡などの説明で700人もの見学者があった。

(4) 研修参加

奈良国立文化財研究所による埋蔵文化財技術者専門研修「測量外注管理課程」および「水田遺跡調査課程」に各1名の職員を派遣した。



第4図 現地説明会

上 豊後国分寺跡梵鐘鑄造遺構現地説明会

下 大友館跡現地説明会

I 下郡遺跡群第106次調査 J区q・r-9地点

調査面積	232㎡	調査期間	98.04.02～98.04.17
地域	A	調査担当	坪根伸也・橋本幸治・神尾 至

第106次調査地点は、下郡遺跡群の西側部分にあたり、同地区の西側高位面を縦走するJR豊肥線の西側に相当する。

調査の結果、戦国期の所産になると考えられる溝状遺構7条の他、柱穴を検出した。以下、各遺構ごとにその概要について記述する。

SD001

SD001は調査区西側に位置し、SD021の上部に構築された溝状遺構である。溝断面の形状は緩慢なU字形をなし、土層断面の観察から数回の掘り返しの痕跡を認めることができる。溝は調査区を北から南に向かって縦走しており、主軸をN-4°-Wにとる。検出面での最大幅約1.6mを測る。溝の南北両端は調査区外へと延びている。

出土遺物は概して少なく、弥生時代後期土器、8世紀代に比定される豊後型甕片、備前焼陶器片（間壁編年V期）、褐釉陶器片、瓦質鉢、白磁片などがある。埋土状況、掘り込み確認面などの所見から最終掘削段階は前述の出土遺物の下限となる16世紀末と考えられる。

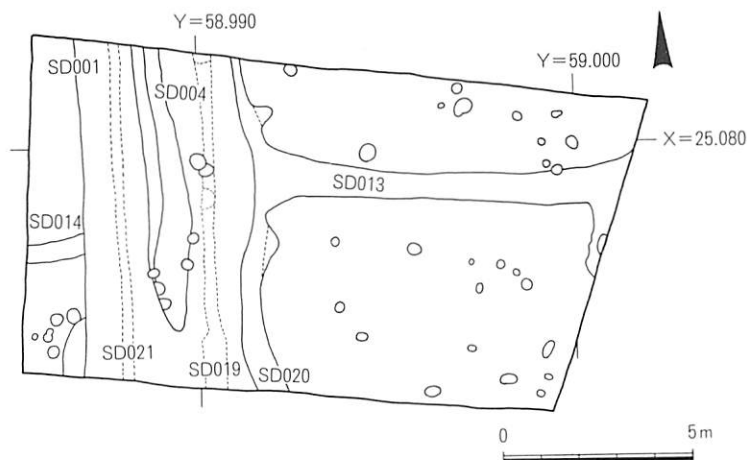
第8図に示した出土遺物実測図の中で、SD001から出土したものは、2・4・6である。2は中国青花碗（小野E群）の口縁部破片である。復元口径13.2cmを測る。4は中国漳州窯系青花碗の口縁部破片である。復元口径17.4cmを測る。6は備前焼播鉢口縁部破片である。内外面とも赤褐色を呈する。間壁編年のV期に相当するものである。

SD004

SD004はSD001に隣接して検出された溝状遺構である。SD001と同様に主軸をN-4°-Wにとり、検出段階ではSD001と並列する形で検出される。SD001と同様の埋土を有しており、断面観察においても切り合いによる両者の先後関係を確認することはできなかった。上端の最大幅は約2.0mを測り、長さ約8.8mについて調査を実施した。土層断面観察から数回の掘り返しが認められ、最下部層には集石と遺物の集中出土が認められる。



第5図 調査地点位置図



第6図 遺構配置図 (1/200)

遺物はこの集石部分を中心に出土する。遺物には弥生時代後期の土器片他、須恵器片、東播系鉢口縁部片、亀山焼甕片、龍泉窯系青磁碗片、備前焼播鉢片（間壁編年Ⅴ期）、16世紀とみられる京都系土師器皿、白磁碗Ⅳ類などがある。注目される遺物としては、石製フィゴ羽口がある。これは長さ約25cm、径約14cmを測る大型のものであり、使用痕跡のある完存品とその未製品と思われる石塊が出土した。石材は両者とも花崗岩が使用されている。また、出土遺物の中で特筆されるものとしてタイ・ノイ川窯産焼締四耳壺胴部破片がある。溝掘削の時期は京都系土師器や備前焼播鉢からみて16世紀末前後と考えて大過ないであろう。



第7図 調査区全景（東方向から）

第8図1・3・5・7・8には主要出土遺物を示している。1は溝埋土内から出土した京都系土師器皿である。内外面はナデにより仕上げられ口縁端部には強いヨコナデが施される。3は内外面灰白色を呈し、淡橙色の陶胎を有する粗製の青磁碗である。復元口径12.6cmを測り、外面口縁部下には櫛状工具による波状文が一条めぐる。5は内外面とも暗茶褐色を呈するタイ・ノイ川窯産と考えられる焼締陶器破片である。4条+αの沈線文が認められ胎土中には褐色、白色粒子を含む。7は備前焼播鉢口縁部破片であり外面・赤褐色、内面・茶褐色を呈する。間壁編年Ⅴ期に相当する資料である。8は大型の石製フィゴ羽口である。花崗岩製であり上部には強い被熱痕が認められる。

SD013

この遺構は調査区ほぼ中央を東西に横走しており、検出面での最大幅約1.0m、検出長約9.0mを測る。主軸方位N-85°-Wをとり、断面形態は浅い凸レンズ状を呈する。

この遺構からは弥生後期土器、8・9世紀代の土器片の他、備前焼播鉢（間壁編年Ⅳ期）、瓦器碗口縁部、龍泉窯青磁碗Ⅰ類破片等が出土している。

この遺構は遺構埋土の状況等からSD020と接続して存在していた可能性が高い。出土した備前焼播鉢片から溝の掘削年代を15世紀～16世紀に求めることができる。

SD014

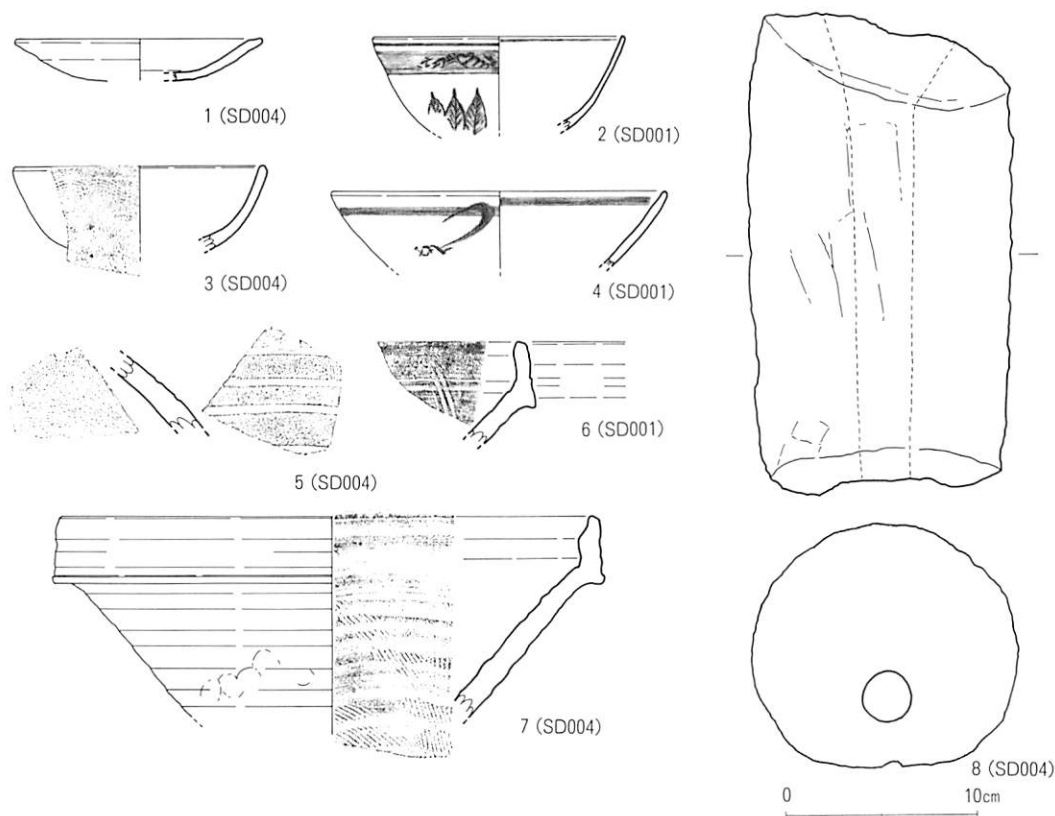
この遺構は調査区西隅に位置し、SD001やSD004らと直交する。主軸をN-82°-Eにとる。検出面での最大幅0.5m、検出長1.5mを測る。この遺構からは時期を特定できる遺物の出土は認められなかった。

SD019

SD019はSD004の下部において確認される溝状遺構である。主軸をN-3°-Wにとる。遺存部分での最大幅約0.4m、検出長約9.0mを測る。溝底面には階段状の凹凸がみられる。そのため底面は平坦でなく、また特定方向への傾斜もみられない。暗茶褐色土を埋土とする。この遺構からは弥生後期土器の他、瓦質土器口縁部片等が出土しているが遺物はいずれもローリングを受けており、出土状況からもこれらの遺物が、直接溝状遺構の年代を示すとは考え難い。

SD020

SD020はSD004により切られており、東側肩部がかろうじて遺存する。検出長約8.0mを測り、暗茶褐色土と黄



第8図 出土遺物実測図 (1/4)

白色ブロックの混土を埋土とする。現存部から推定される主軸方位はN-6°-Wを示す。

この遺構からは弥生時代後期土器、8世紀末頃に比定される高台付坏が出土しているが明確に遺構の時期を示唆する出土状況は認められなかった。ただ、先述したSD013と接続し、複数回にわたる精査においても遺構の切り合いを確認することができなかったことから、両者は接続するものと考えられる。したがって、SD020もSD013に示される15世紀～16世紀の時期所産を想定することができよう。

SD021

この遺構はSD001の下部において確認される。溝の断面形態はU字状を呈し、主軸をN-2°-Wにとる。検出面段階での最大幅約0.4mを測る。埋土の最下部層は淡茶褐色土と灰色粗砂の混土層により形成されており、堆積状況からも溝機能時に流水があったことが想定される。

この遺構からは弥生時代後期土器、備前焼陶器片、常滑焼陶片、漳州窯系青花片等が出土した。これらからこの遺構は16世紀末を下限とするものと考えられる。

今回の調査地点は下郡字庵ノ浦にあたる。周辺には他に角屋敷、城ノ内、辻、柳屋敷など屋敷関連地名が数多く残っている。さらに今回の調査地点の北側約100mに位置する下郡遺跡群第97次調査地点では、東西方向および直角に近く南方向へ屈曲する溝状遺構が検出されており、戦国期に帰属する館跡に随伴するものである可能性が指摘されている。これにより、同地区内には方形に区画された館跡の存在も考慮され、同地域の今次の調査では、前述のように溝状遺構7条、柱穴を検出した。柱穴に関しては建物として完結する状況は確認できなかった。

7条の溝の切り合い関係から判明する遺構の新旧関係は以下のとおり示される。

新	→	旧
SD001	→	SD021
	→	SD013
SD004	→	SD019
	→	SD020・SD013

検出した溝状遺構のうち、SD021とSD019は主軸方位をほぼ同じくし、掘削深度こそ異なるが、埋土状況等において極めて類似した様相を示す。前段で示したように時期もほぼ同一の内容を示し、同時期に併存していた可能性は極めて高いと考えられる。

この並列して存在する溝状遺構の機能を考えるにあたり、北壁土層断面において確認された溝間の空間地上面に確認される混土層の存在が注視される。これは明らかに人為的に積土したものと判断され、一部には杭痕のような痕跡も確認することができる。このような状況からこの溝間には土塁様の施設の存在が想定され、館的な空間に付随するものと考えられよう。周辺に残る屋敷地名との関連が注目される。

SD004からは大型の石製フィゴ羽口が出土している。市内においても同様の遺物の出土は古国府岩屋寺遺跡、中世大友城下町跡第1次調査など、中世末期にあって大友氏と関連の深い地域で出土している。下郡地域には、この時期の鍛冶関連の記録として天明3年に書かれた関家文書「代々庄屋役覚書」の中に次のような記事がある。

下郡は元亀元年（1570）にそれまで万寿寺領であったものが、万寿寺の焼失によりこの時から大友宗麟の領地となった。この時下郡に入ったのが関美作守であり、記録では元和元年（1615）にその息子の喜兵衛が柞原宮の鍛冶職人をつとめたという内容である。

この記事から中世末期の段階から、下郡に居宅したと考えられる関氏が「鍛冶」に深く関与していた事実が知られ、今次の調査で出土した大型石製フィゴ羽口との関連が注目される。



第9図 石製フィゴ羽口出土状況

（坪根・橋本）

Ⅱ 下郡遺跡群第107次調査 D区n-23地点

調査面積 385㎡
地域 A

調査期間
調査担当

98.04.03～98.05.29

河野史郎・荻谷史穂・古木裕文

第107次調査の調査地点は、遺跡群の南端部中央のD区n-23地点にあたる。調査の結果、弥生時代中期の貯蔵穴・中世の井戸、溝状遺構、近世の溝跡が検出された。以下、各時代毎の主要遺構について、その概要を記す。

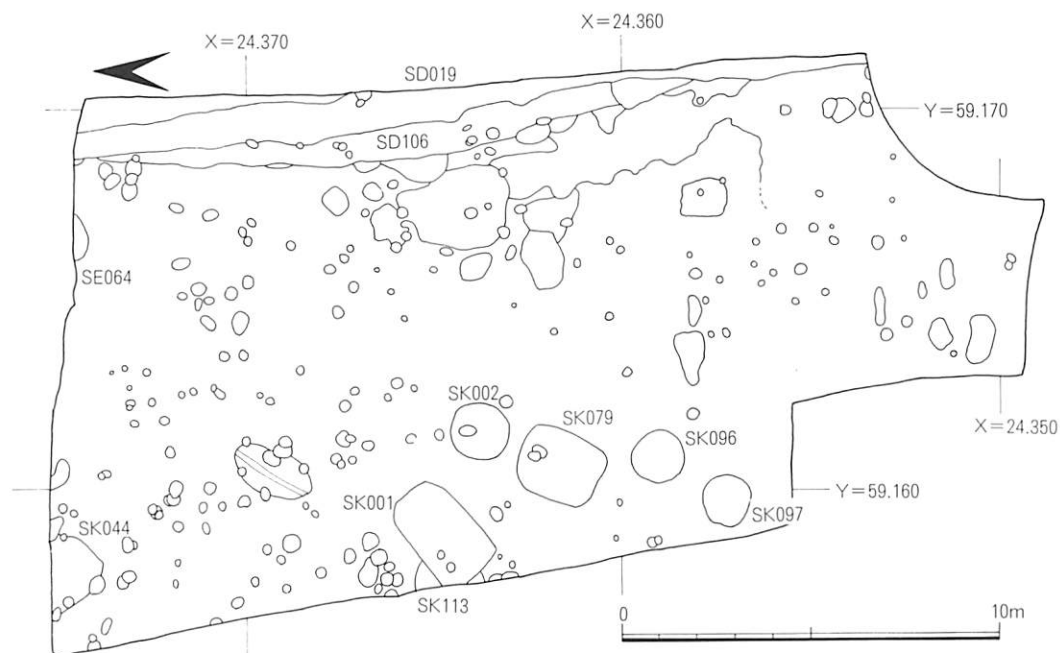
弥生時代

弥生時代の遺構については、貯蔵穴があげられる。検出された貯蔵穴は、計7基、その平面形態で円形と隅丸長方形の2形態、断面形態では袋状と方形の2形態が確認されている。即ち、円形+方形を呈するSK002、096、097、円形+袋状を呈するSK113、隅丸長方形+方形のSK001、044、079である。円形プランを呈する貯蔵穴がサークル状に配されている状況も注目されるところである。

これら貯蔵穴の時期的な位置づけについてであるが、遺構の切り合いでは、隅丸長方形+方形が、円形+袋状を切る状況が確認されている。出土遺物は全体に少ないが、SK001、113よりややまとまった遺物が出土している。1～3は、SK113の出土遺物で、1は、端部及び口縁部下に刻目を有する突帯を巡らす下城式の甕である。2は、短く外反した口縁端部を肥厚させた甕である。3は、口縁端部に竹管による文様、肩部から胴部にかけては半截した竹管による重弧文が施された下城式の壺である。4は、SK001の出土遺物で、外反する口縁部の内側に突帯が巡る壺である。これらの出土遺物の時期的な位置づけについては、弥生時代中期前半～中頃と考えられ、切り合いを有するSK001と113については、壺の口縁部形態からSK001がやや後出する印象である。



第10図 調査地点位置図



第11図 遺構配置図 (1/200)

中世

中世の遺構については、溝状遺構(SD106)、井戸跡(SE064)がある。溝状遺構(SD106)は、調査区の東端を南北方向に延びており、その東半部は、近世溝跡(SD019)に切られている。出土遺物には、いずれも小破片であるが、土師器坏、皿、畿内系の瓦質土器羽釜、白磁皿Ⅵ類・碗Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a類、同安窯系青磁Ⅰ-1b類等がある。井戸跡(SE064)は、調査区北端部で検出されている。遺構の大半が調査区外にあるが、平面円形を呈する素掘りの井戸であると考えられる。出土遺物には、土師器坏、和泉型瓦器碗、白磁碗Ⅴ類、皿Ⅵ類等がある。

これら2つの中世の遺構については、その出土遺物により、ほぼ12世紀後半～13世紀初頭の年代が考えられ、一連の遺構であると考えられる。しかし、検出された柱穴群の中には掘立柱建物を構成するものは無く、その主体的な部分は調査区外になるようである。

5は、SD106出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a類で、高台径4.2cmを測る。

近世

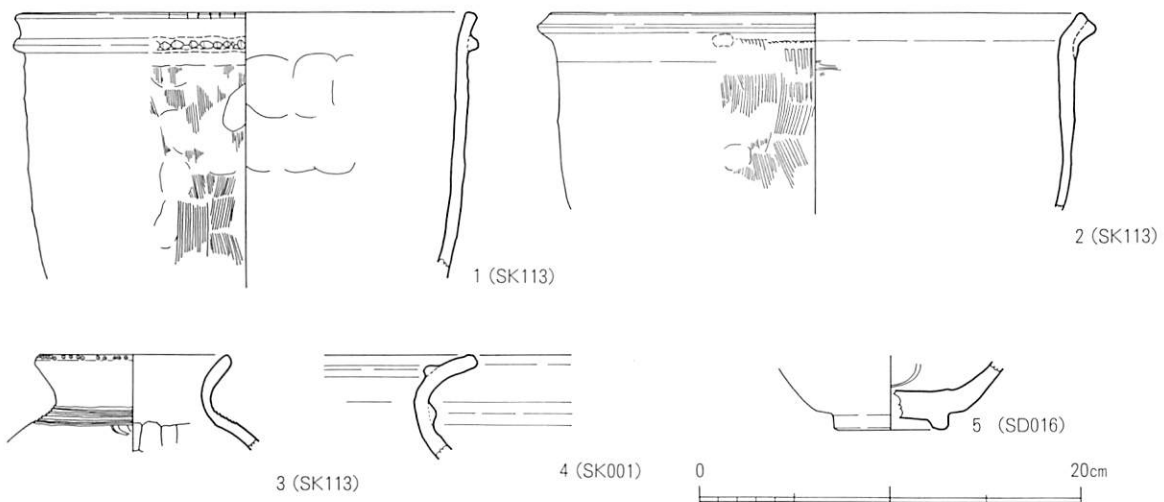
近世の遺構については、溝跡(SD019)がある。溝跡(SD019)は、調査区東端を南北方向に延びており、幅1.2m、深さ0.5mを測る。断面は、U字状を呈し、その土層観察からは複数の掘り直しが確認された。出土遺物についてもこの土層観察を裏付けるかのように17世紀初頭～18世紀後半までの広範囲にわたる時期の遺物が確認されている。

この他、サブトレンチによる土層観察から、河川の氾濫による堆積層上面に形成された遺構面の下部に、もう1面の遺構面(柱穴数基)を確認した。この遺構面の時期の確定には至らなかったが、第1遺構面の遺構掘り下げの際に縄文後期の遺物群も出土しており、この遺構群の位置づけが注目される所であるが、今後の隣接調査区の調査成果を待ちたい。

(河野)



第12図 調査区全景（西方向から）



第13図 貯蔵穴 (SK)・溝 (SD) 出土遺物実測図 (1/4)

Ⅲ 下郡遺跡群第108次調査 I区r-15地点

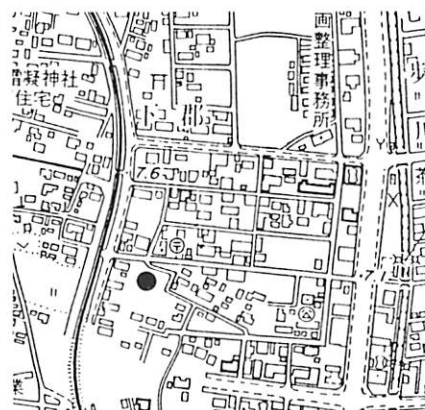
調査面積	771m ²	調査期間	98.05.07～98.08.06
地域	A	調査担当	坪根伸也・幸しのぶ他

調査地点は大分川の右岸の標高4.0～5.0mの自然堤防上に立地する下郡遺跡群内に所在し、下郡遺跡群 I 区r-15地点に相当する。調査は宅地整地工事に伴う事前調査として実施した。

調査の結果、弥生時代、古墳時代、古代、古代末～中世、中世の遺構・遺物を確認した。これらの各遺構について時代順に概要を記述する。

弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡 7 基、溝状遺構 1 条、土坑 1 基を確認している。



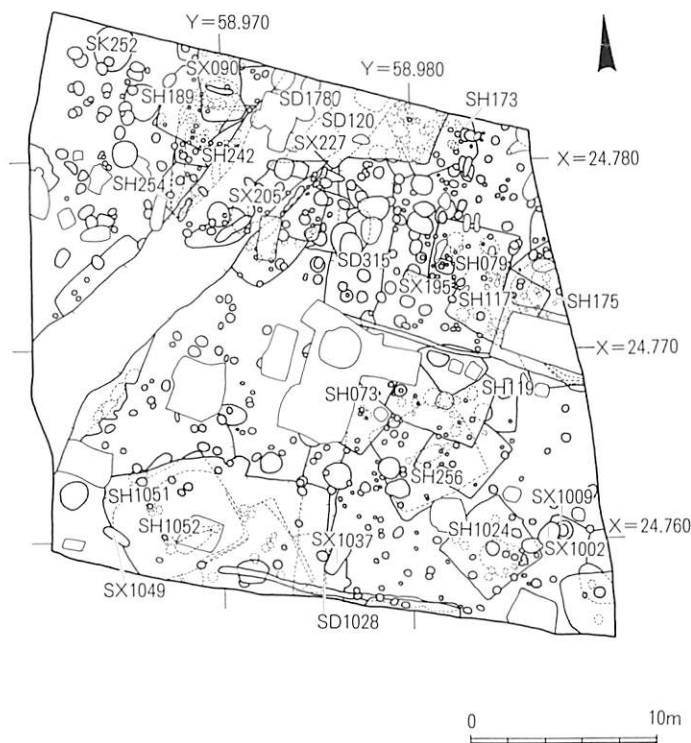
第14図 調査地点位置図

SH173

調査区北東で検出された竪穴住居跡で、遺構の一部は調査区外に延びている。平面プランは方形プランと考えられる。現存規模は約3.7m×3.8+αmを測り、検出面からの深さは約0.5mである。主柱は4本で、貼床が認められた。貼床面では付帯施設等を確認することはできなかったが、貼床下で灰溜まり遺構と、南壁側に壁溝を検出することができた。したがって当該住居の生活面は現存する貼床を行う前とそれ以前の複数の生活面の存在が予想される。

土層の堆積は自然堆積で大きく2層に分層できる。上層部分では古墳時代初頭の土器が廃棄された状態で多数

出土し、床面直上では甕形土器1点が出土している。床面直上出土の土器からこの住居跡の帰属年代は弥生時代後期後葉から終末に比定でき、住居埋没途中に土器の廃棄場になったものと考えられる。



第15図 遺構配置図 (1/400)

SH175

調査区の東端で検出した竪穴住居跡で、遺構の半分以上は調査区外に延びている。また、大部分を大型の攪乱土坑に切られており遺存状態は良くない。そのため平面プランを明確に認識することはできないが、現状から隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈していたものと考えられる。現存規模は約6m×3.5+αmを測り、検出面からの深さは約0.5mである。主柱と考えられる柱穴を1つ検出したが、他は攪乱土坑により欠失したり、調査区外にあるため主柱が何本であったかは不明である。また、貼床が認められ、貼床を除去した段階で壁溝を検出した。

遺物は概して少ないが、出土遺物からこの住居跡の帰属年代は弥生時代後期後葉から終末に比定できる。

SH242

調査区の北側で検出した竪穴住居跡で、上部をSX090、SH189に切られており、住居東側をSD178に切られている。また、SH242はSH254を切って構築されている。現存規模は約3m×4+αmであり、長方形プランを呈するものと考えられる。主柱は2本である。遺物出土状況から住居埋没途中に土器が廃棄されたものと考えられる。出土遺物からこの住居跡の帰属年代は弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての所産を考えることができる。



第16図 調査区全景（西方向から）

SH254

調査区の北側で検出された竪穴住居跡である。現存規模は約6.0m×3.5+αmを測り、検出面からの深さは0.58mであった。主柱は2本を確認したが、住居の平面プランと柱の配置状況から4本柱であったと推定される。住居中央部分で地床炉を確認した。また、住居床の全面には貼床が認められ、地床炉は貼床上面に構築されている。この貼床を除去すると灰溜土坑、および住居西側壁面沿いに浅い壁溝を認めることができる。このような点からもこの住居に関しても貼床の充填に伴う生活面の改変が行われた可能性を指摘できる。

この住居跡の帰属年代は出土遺物から弥生時代後期後葉から終末に比定される。

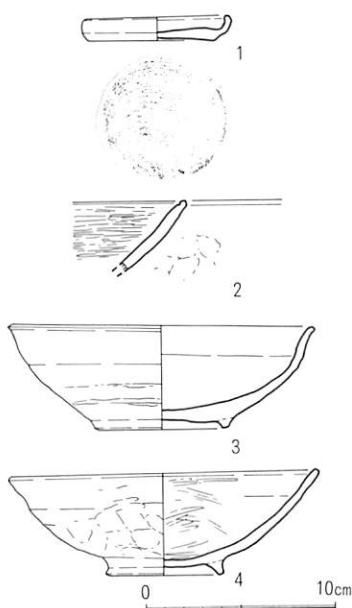
SH256

調査区のやや中央よりの部分で検出した竪穴住居跡でSH073、SH119に切られている。約4.7m×4.7mの方形プランを呈し、検出面からの深さは約0.4mを測る。主柱は2本で住居中央部に灰溜土坑を有する。貼床が認められ、灰溜土坑は貼床上面で検出される。また、住居南西隅部分に不整プランが認められ、当住居構築以前の竪穴住居の一部である可能性も指摘できる。断面土層観察から住居埋没途中に複数回の掘り返しの事実が知られ、掘り返し土坑内に焼土と土器片が多数認められる。焼土は大部分がブロック状を呈しているが、一部に土層ラインに沿うに硬化部位が認められる。この点からこれらの焼土は搗鉢状に掘られた土坑内で火が焚かれ、その後の最終掘り返し時に攪乱、投棄されたものと考えられる。出土遺物から上部と下部の焼土混土層内の出土土器には傾向として土器様相に新古が認められる。これらの土器群はおおむね弥生時代終末～古墳時代初頭に編年されるものである。

SH1051

調査区の南西部分で検出された。SH1052の建て替えにより構築された竪穴住居跡である。現存規模は5.8m×5.5mの方形プランを呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。主柱は4本で南側主柱間に長楕円の土坑を有している。また、南東隅には壁溝が敷設される。長楕円形土坑の中には南側方向からの一括廃棄が想定される状況で土器が出土している。

この住居跡の帰属年代は土坑内出土の土器から弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての時期と考えることができる。



第17図 遺物実測図（1/4）

SH1052

調査区の南西部分で検出された竪穴住居跡である。現存規模は約6.0m×5.0mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さは約0.2mを測る。主柱は4本で灰を内包する楕円形土坑を有する。楕円形土坑と住居南側壁面の間の床面直上に土器が出土しており、この土器から本住居跡の帰属年代は弥生時代後期後葉から終末に位置づけられる。



第18図 SD315完掘状況（北方向から）

SD315

調査区のほぼ中央を南北に走る溝状遺構で、現存規模は溝幅約2.0～2.7m、検出面からの深さは約0.65mである。断面形状は逆台形を呈す。

遺物は概して少ないが僅かに下城式甕形土器が出土しており、弥生時代中期前半以降の所産と考えられる。

SK252

調査区の北西で検出された土坑で一部調査区外に展開する。現存規模は約2.1m×2.3+αmの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは約0.85mを測る。底面の中央付近に浅いくぼみが認められ、同遺跡群内で確認される貯蔵穴形状に類似することから同種の遺構と考えられる。埋土には地山ブロックが認められ、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

遺物は概して少ないが僅かに出土した土器から弥生時代中期前半以降の所産と考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構には竪穴住居跡4基を確認している。

SH117

調査区の東側で検出された竪穴住居跡で一部攪乱土坑により切られている。重複する住居跡との切り合いから判明する先後関係は、SH079に先行し、SH175よりも後出する。現存規模は約4.2m×3.8m、検出面からの深さ約0.1mを測る。主柱は4本で北西側壁面中央部で造り付けのカマドを検出したが、遺存状態が悪く袖石などは遺存していない。

遺物は少ないが、住居の北東隅で須恵器坏蓋（小田編年Ⅳ期）の完存品が1点出土しており、この須恵器からこの住居跡の帰属年代は6世紀末から7世紀初頭に比定できるものと考えられる。

SH119

調査区東側で検出した竪穴住居跡であり、住居の北西側を攪乱土坑に、北側を時期不明の大型遺構に切られている。約5.3m×3.8mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。主柱は4本であり、カマドや地床炉は確認されなかった。

遺物は概して少ないが南壁際の床面直上から須恵器坏蓋（小田編年Ⅳ期）の完存品が出土しており、この住居跡の帰属年代は6世紀末から7世紀初頭に比定できる。

SH189

調査区北側で検出した竪穴住居跡で、SX090に切られている。現存規模は約3.0m×3.5m、検出面からの深さ約0.5mを測る。主柱は2本でカマドや地床炉は確認されなかった。

ほぼ床面での検出であったので遺物も非常に少ないが、出土した遺物の中に須恵器坏身（小田編年Ⅳ期）が含まれている。この遺物からこの住居跡の帰属年代は6世紀末から7世紀初頭の時期を考えることができる。

SH1024

調査区の南東部分で検出をした竪穴住居跡である。現存規模は約4.0m×4.0mの方形プランを呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。支柱は4本で、貼床が確認された。住居の北西側壁面中央部でカマドを検出した。カマドは遺存状態が悪かったが、カマドの両側に袖石が確認された。

出土遺物は少ないが、住居跡埋土から須恵器坏蓋（小田編年Ⅳ期）の完存品が出土しており、この住居跡の帰属年代は6世紀末から7世紀初頭の時期を考えることができる。

古代

SX090

調査区の北側で検出された不定形の土坑で、北側部分は調査区外に延びている。検出面からの現存深度は約0.05mを測る。埋土中には土師器坏蓋・坏身、須恵器坏蓋・坏身の完存品が多数一括廃棄された状態で出土した。調査区北壁での土層観察によって、埋没途中で廃棄されていることを確認している。

遺物には前述の土師器坏蓋・坏身、須恵器坏蓋・坏身、企救型甕、製塩土器などがあり、なかでも製塩土器は多数出土している。この土坑の帰属年代は出土遺物から8世紀後半から末の年代が考えられる。

また、これ以外に古代の遺構と考えられる遺構にSD1028とSX1049がある。SD1028とSX1049は調査区の南側で検出した溝状の遺構である。現存規模はSD1028は幅約0.35mで検出面からの深さは約0.15mを測る。SX1049は幅約0.5m、現存深度約0.15mを測り断面形状はU字状を呈する。

出土遺物は少なく、SD1028では時期決定を行える遺物は出土していない。SX1049で古代のものと考えられる土師器坏が出土しているが明確な時期比定はできない。しかしながら、SD1028は南接する第90次調査で確認されたSD076とほぼ並行しており、SX1049はSD076の延長線上に位置する。このような位置関係からSD1028とSX1049は第90次調査で確認されたSD076と一連の遺構であると考えられる。SD076は8世紀後半に位置づけられており、SD1028とSX1049の帰属年代はこれに近い時期を考えることができる。

また、本調査地点の南東に位置する第92次調査、第104次調査では8世紀末から9世紀初頭にかけての東西方向の道路状遺構が検出されている。これらの調査の成果で道路の南側側溝と北側側溝の様相は一樣ではなく、北側側溝の方が規模が小さいことが確認されている。本調査で検出したSD1028とSX1049、第90次調査で検出したSD076は第92次調査、第104次調査で確認されている道路状遺構の延長線上に位置する。また、南側に位置するSD076よりも北側



第19図 SD178完掘状況（北方向から）



第20図 SD178遺物出土状況

のSD1028のほうが規模が小さいことなどを考慮すると、SD1028・SX1049はすでに確認されている道路状遺構の側溝の延長部である可能性が高いと考えられる。

古代末～中世

古代末～中世の遺構には溝状遺構が3条、土器廃棄土坑2基、土器埋納土坑1基、土坑1基がある。

SD120・SD178・SX227

調査区の西側で検出した溝状遺構で、切り合っていることが土層観察によって確認された。新旧関係はSX227→SD178→SD120である。SX227はSD178やSD120と同様の溝状遺構であると考えられるが、調査区北壁付近で途切れている。溝幅はSD178に切られているので不明であるが、現状で1.23m、検出面からの深さは約1.35mを測る。断面土層の観察から複数回の掘り返しを認めることができる。

埋土中からは土師器小皿や輸入陶磁器の破片などが多く出土しており、これらは出土陶磁器による大宰府陶磁器出土傾向のC期にあたる。出土遺物の中に確実に11世紀代にさかのぼりうる資料は認められないことからSX227の帰属年代は12世紀前半から中頃の時期を考えることができよう。

SD178は溝幅約2.5m、検出面からの深さ約1.4mを測り断面形状は逆台形を呈している。

出土遺物には土師器小皿、輸入陶磁器、研磨土師器碗、和泉型瓦器碗などがあり、大宰府陶磁器の出土傾向のD期にあたる。また、土師器や瓦器碗から12世紀中頃から後半の時期が考えられ、磁器による年代と土師器による年代が矛盾しないことからSD178の帰属年代は12世紀中頃から後半の時期を考えることができよう。

SD120は調査区北壁での土層の観察で溝幅約4.95mを測り、水田盤直下から掘り込まれていることを確認している。検出面からの現存深度約1.25mを測り、断面形状は逆台形を呈している。複数回の掘り返しを確認することができる。

出土遺物は比較的多く、土師器小皿・坏、輸入陶磁器、研磨土師器、羽釜、鍋、瓦器碗、石鍋、東播系須恵器鉢などが出土している。大宰府陶磁器出土傾向のD期にあたり、出土土師器の年代観もほぼ12世紀後半に位置づけられ、大きく齟齬がないことからSD120の帰属年代は12世紀後半前後の時期を考えることができよう。

SX205

調査区のはほぼ中央で検出した土坑である。約1.9m×1.2mの楕円形プランを呈し、埋土内からは土師器坏や小皿が大量に出土した。遺物出土状況から土師器坏や小皿が北側から廃棄された状況を看取できる。遺物は完存品も多く、一括廃棄されたものと考えられる。

出土遺物からこの土坑の帰属年代はほぼ12世紀後半から末に比定できよう。

SX1002

調査区の南東で検出した土坑で、SX1009を切っている。約1.3m×1.0mの楕円形プランを呈しており、埋土内からは土師器坏、小皿が大量に出土した。遺物は完存品も多く一括廃棄されたものと考えられる。

出土遺物からこの土坑の帰属年代は12世紀末と考えられる。

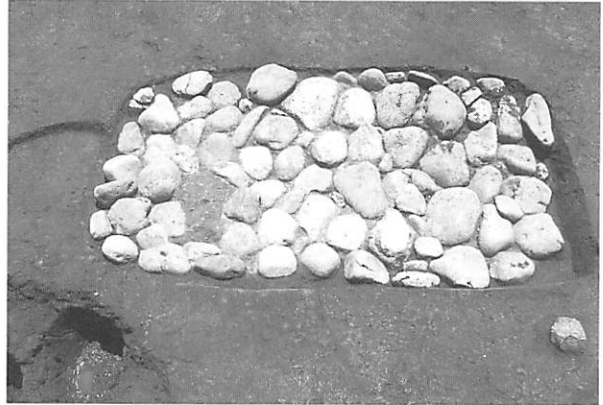


第21図 SX1002遺物出土状況

SX1009

調査区の南東で検出した土坑で、SX1002に切られている。約0.7m×0.6mの円形プランを呈し土師器坏、小皿が並べられたような状態で出土した。遺物出土状況から埋納されていたものと考えられる。

出土遺物からこの土坑の帰属年代は12世紀後半から末の時期を考えることができる。



第22図 SX195検出状況

SX1037

調査区の南側で検出した長方形プランの土坑である。

約2.1m×0.85mで検出面からの深さは約0.2mである。土層は単一層で、土坑の北東隅に研磨土師器碗の完存品と須恵器の破片が出土した。出土状況から遺物は土坑を埋める途中で置いたものと考えられる。平面プランと遺物出土状況、ならびに埋土の様態から土墳墓の可能性が高いと考えられる。

出土した研磨土師器碗はSX227、SD178、SD120出土の研磨土師器碗と同様の口縁部形状を呈している。また、SX1037はSX227、SD178、SD120とはほぼ同じ方向であることから、同時期（12世紀後半）に存在した可能性が考えられる。

中世

中世の遺構には配石土坑1基を確認している。

SX195

調査区の中央付近で検出した配石土坑である。約1.4m×0.8mの長方形プランを呈しており、現存深度約0.1mを測る。床面に河原石を敷き詰めている。この遺構の性格は不明であるが、敷石はフラット面を意識して配置されており、規模的にも現状では墓の可能性が最も高いのではないかと考えている。床面直上での検出であったため出土遺物はほとんどないが、検出途中に土師器坏の完存品が上部位置で1点出土しており、本遺構に属するものであれば13世紀代の帰属年代を付与することができる。

また、第90次調査で確認された13世紀代の掘立柱建物跡であるSB003、SB005、SB009の方向とSX195の方向はほぼ同じであり、13世紀代に比定しうる可能性の高いことを示唆している。

その他に中世の遺構と考えられる遺構にSB1097、SB1098がある。SB1097、SB1098とも調査区の南東で検出された掘立柱建物跡で、いずれも糸切りの土師器小皿の小破片を出土している。遺物が小破片であるため細かい時期比定は行えないが中世の所産と考えることができる。また、SB1098は第90次調査で確認されたSB001と同一遺構である。

今回の調査では弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての集落跡、6世紀末～7世紀初頭の集落跡、古代末から中世にかけての大型溝状遺構を確認した。

以下には各時代の特筆される成果を列举し、まとめとしたい。

今次の調査で弥生時代後期終末から古墳時代初頭に比定される集落跡を確認したが、これらに属する住居跡について特徴的な現象を看取することができる。

まず第1に住居の造り替え行為についてである。多くの住居跡が同一地点において建て替えを行っている。規模に関しては、建て替えによって拡大するものと縮小するものの両者が存在し、一定の傾向を見いだすことはで

きないが、造り替えに伴う住居付帯施設の変異にひとつの方向性を認めることができる。具体的には、多くの住居が建て替えに際して粘土の充填による貼床を形成する。この過程において、前段階の南側主柱間に存在した長楕円土坑は埋められ、最終段階の住居床面には存在しない事例が多い。この南側主柱間の長楕円形土坑は大分平野における弥生後期住居に特徴的な施設であり、地床炉に近接して設置される。土坑内部に灰の堆積が認められる例が多いことから灰溜まりとしての機能が考えられている土坑である。後期にあっては住居平面プランの差異に関わりなく付設されるという極めて普遍的な遺構であり、この遺構の消失はひとつの大きな画期となろう。これを時間軸に対応させるといわゆる布留式最古段階にほぼ対応する。この状況の証左となるように大分平野において庄内式新段階～布留式最古段階に比定されている大分市守岡遺跡19号住居跡にはこの種の遺構はすでに本来あるべき位置には存在せず、規範の弛緩が認められる。

また、昨年調査を実施し、今回の調査地点に近接する下郡遺跡群第90次・92次調査での検出住居跡にも同様の現象が確認され、同地点に構築された布留式最古段階～古段階に比定される住居はほぼ正方形プランを呈し一部にベッド状遺構を有するものであり、検出された3基ともにこの長楕円土坑を付設していない。

ところで、下郡遺跡群では、弥生時代後期後葉から終末の集落跡について、これまでの調査によって二つの環濠集落が確認されており、今回発見された集落跡はこの二つの環濠集落のほぼ中間地点に位置する。また、既往の調査で確認されている環濠集落の時期的変遷の上での大きな特徴として、環濠が廃絶する庄内式新段階～布留式最古段階を境とし、住居密度が希薄になるという現象を指摘することができる。これに対し今回の調査地点を中心とする集落には布留式古段階まで集落が継続し、しかも、他に比して在地土器と伴出する布留式系土器の割合が高いという点を大きな特徴とする。これらの相違点は環濠を有する他の二つの集落との質的な差異を反映している可能性があり、弥生時代終末～古墳時代初頭の集落動向のひとつの様相として興味深い内容を有しているといえよう。

古墳時代について特筆されるものとしては、6世紀末から7世紀初頭の集落跡の発見があげられる。当該時期の集落は大分市内でも調査例が少なく、北ノ後遺跡が確認されているにすぎない。そうした状況の中で、下郡遺跡群内での当該集落の確認は、遺跡東側に展開する鶴崎丘陵崖面に造営されている多数の横穴墓群との関連において極めて重要といえよう。今後の当該地域における横穴墓と集落遺跡との有機的関連性追求の端緒を開くものとして期待される。

古代～中世の遺構に関しても諸々の所見を得ることができた。

SX227、SD178、SD120については、遺物が多量に出土しており、その中に下郡遺跡群では初めての出土である楠葉型瓦器碗や青白磁皿などが含まれている。12世紀後半の土器資料が少ない現段階では貴重な資料となるであろう。楠葉型瓦器碗については大分県内でも臼杵市の野村台遺跡で出土しているのみであり、今回の発見は県内2例目である。遺構の性格については、土層観察から滞水していた状況が看取され、堀としての機能を有していた可能性が考えられる。なぜ、古代末～中世にかけての時期に大規模な堀が掘削されたのか、今後、時代背景を踏まえ、検討が必要である。

(坪根・幸)

参考文献

- ・「大宰府条坊跡」Ⅱ 太宰府市教育委員会 1983
- ・神田高士 1997「臼杵荘と磨崖仏―遺跡からみる臼杵の中世」『中世都市研究4 都市と宗教』中世都市研究会
- ・九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⑬ 「馬姓遺跡 北ノ後遺跡 乙院屋敷遺跡」
大分県教育委員会 1999
- ・八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 「八坂中遺跡現地説明会資料」大分県教育委員会 1999

IV 下郡遺跡群第109次調査 I区q-15地点

調査面積 183㎡
地域 A

調査期間 99.01.08～99.02.17
調査担当 坪根伸也・菊谷史穂

今回の調査地点は同遺跡群の西側エリア中央付近に位置し、8世紀後半から9世紀前半に比定される道路状遺構の検出された第98・99次調査地点とJR豊肥線を挟み対峙する位置にあたる。

調査の結果、弥生時代中期から近世に至る複数の遺構を確認した。以下、主要遺構に関して時代順に概要を記す。

弥生時代

弥生時代のものとしては、中期に比定される溝状遺構1条（SD145）を検出している。

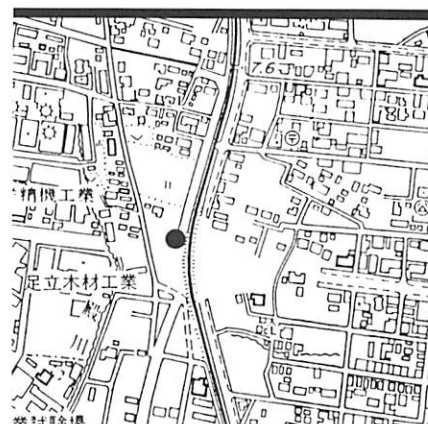
SD145は調査区西側で検出され、出土遺物から中期に比定される。主軸はN-35°-Eの方向でほぼ直線的に掘削され、検出面での幅2.4m、深さ約0.7mを測る。断面形状は逆台形を呈し、土層観察の結果、複数回の掘り返し痕跡を認める事ができた。さらに、同遺構の中央付近からは、溝埋没初期段階に於いて人為的に埋め戻した状況を看取できる土坑が確認され、さらに埋没末期段階には当該時期の土器資料を一括廃棄した土坑の存在も認められた。

古墳時代

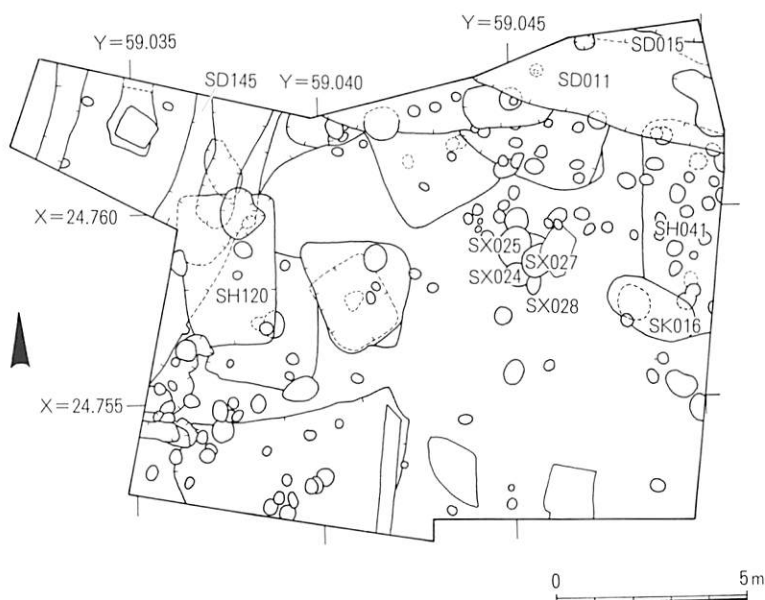
古墳時代の所産となるものと考えられる遺構には竪穴住居跡（SH120・SH041）がある。

SH120は調査区の西側で検出された。長軸約4.0m、短軸約2.5m、壁高約0.25mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。明確に主柱と判断できる柱穴を確認することは出来なかったが、床面のほぼ中央部にしっかりとした柱穴が検出されており、これが主柱となる可能性も考えられる。また、住居跡北壁のやや東よりにカマドが付設される。このカマドは住居跡壁よりやや突出して造られており、平面形状は不整円形を呈する。焚口前面に淡黄灰白褐色を有する砂岩系の袖石を2本横置きさせ、焚口を意図的に封鎖した状況が推定される。カマド周辺からは土師器・須恵器の小片が出土しており、これらの遺物からこの竪穴住居跡は古墳時代後期の所産である可能性が高いと考える。

SH041は調査区の東側で検出した竪穴住居跡である。遺構の大半が調査区外に展開する為全容は不明であるが、調査区内で主柱と考えられる柱穴2基を確認しており、現状からおおよその形状を推定することがで



第23図 調査地点位置図



第24図 遺構配置図 (1/200)

きる。推定される平面形状は正方形を呈し、4本の主柱を有する住居跡であったと考えられる。出土遺物は概して少なく、帰属年代の推定は難しいが、想定される住居形状から古墳時代前半期頃の所産である可能性が高い。

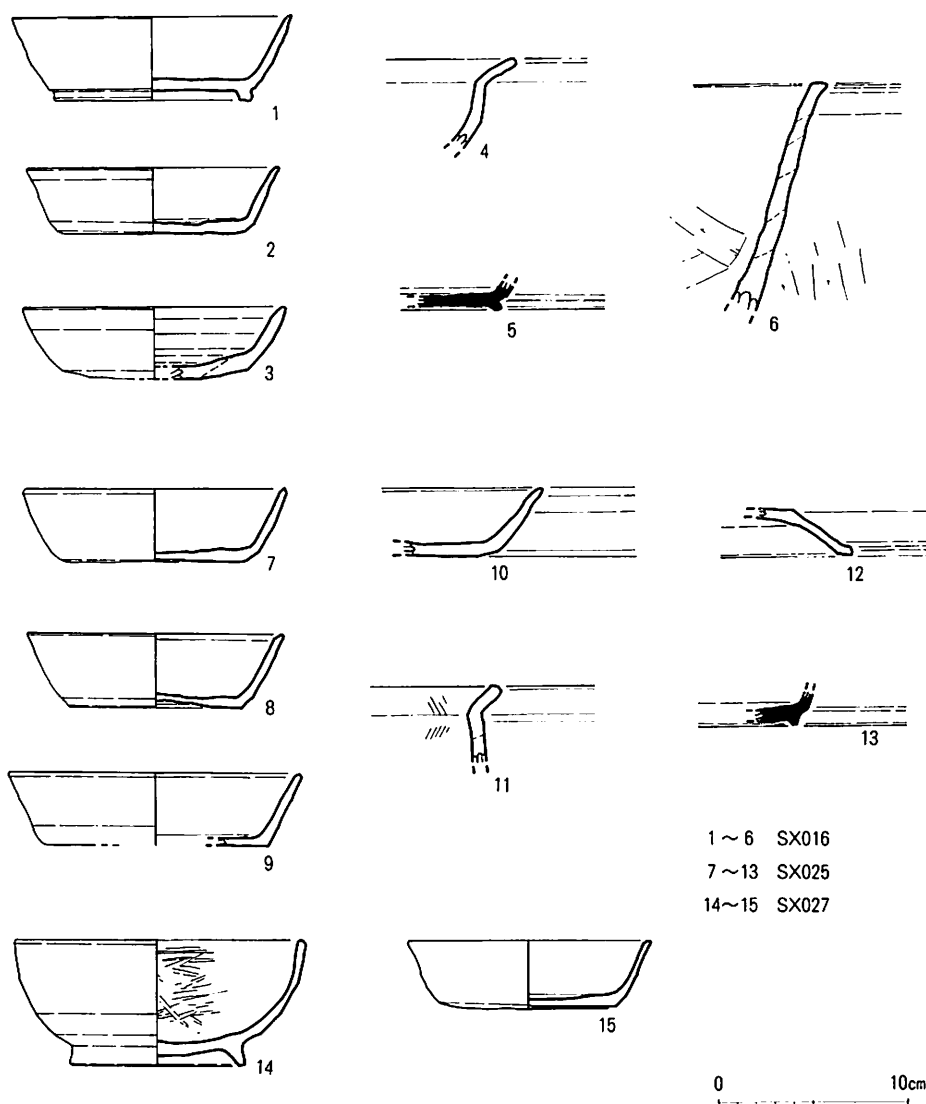
古代

奈良・平安時代のもと考えられる遺構には、土坑（SK016）、柱穴？（SX027・SX028）がある。

SK016は先述のSH041を切る形で構築されており、長軸約2.5m、短軸約1.3mを測る楕円形を呈している。検出面から約0.1mで底面に達する。この遺構からは8世紀後半代に比定される土師器・須恵器が出土しており、ほぼこの時期の所産と考えて大過ないであろう。出土遺物はすべて埋置されたものではなく、土坑埋没途中に廃棄されたような状況で検出される。

出土遺物には、土師器、須恵器の坏、土師器鉢などがある。

第25図1は、土師器高台付坏である。復元口径14.4cm、底径10.3cm、器高4.5cmを測る。2は復元口径13.0cmを測る土師器坏である。底部にはヘラ切り離しの痕跡を残し、内外面は回転ナデにより仕上げられる。3は約1/4遺存する土師器坏の口縁部破片である。復元口径13.4cmを測り、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられる。



第25図 出土遺物実測図（1/4）

4は土師器鉢の口縁部片である。暗褐色を呈し、胎土中には、角閃石粒、石英粒、褐色粒子を含む。内外面ともナデ調整により仕上げられる。小破片のため口径の復元は確実性には乏しいが、16.0cm前後になるものと推定される。5は暗灰褐色を呈する須恵器杯の高台部破片である。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられる。6は直線的に口縁部にいたり端部を平坦に仕上げる。口縁部下は内外面ともヨコナデにより調整され胴部下半はケズリにより調整される。破片のため全体形状は不明であるが、平底を呈する鉢形状をなすものと考えられる。

SX027は調査区のほぼ中央で確認された。現状で長軸約0.9m、短軸0.5mを測る柱穴状の土坑である。一部を攪乱穴により削平されている。上部層から8世紀代に比定される土師器片と焼土塊が検出されている。また、遺構壁面にも焼土の痕跡が明確に遺存しており、埋没途中における焼成行為の実施が推定される。

SX025は調査区のほぼ中央で検出された土坑である。長軸幅約1.0mを測るが、南側をSX024・027により切られており欠失する。出土遺物には土師器杯、蓋、土師器甕片がある。7は橙褐色土を呈する土師器杯である。約1/2が遺存する資料であるが、復元口径13.6cm、復元底径9.6cm、器高3.8cmを測る。底部はヘラにより切り離され最終調整にはナデが施されている。8～10も7と同種の土師器杯である。内外面とも赤褐色を呈し、丁寧なナデ調整により仕上げられる、底部の切り離しはいずれもヘラによるものである。11は土師器甕の破片資料である。小破片のため詳細は不明であるが、内面には部分的にハケ目調整の痕跡が認められる。12は土師器杯蓋である。約1/4程度の資料であるが、端部の内面には沈線が形骸化したと思われるくぼみがあり内外面ともヨコナデにより調整される。13は須恵器高台付杯片である。断面形状が逆台形を呈する高台が貼付される。14・15はSX027からの出土遺物である。14は内外面とも暗茶褐色を呈する土師器碗である。外面ヨコナデ調整、内面には手持ちヘラミガキが施される、内面には明確な黒色化は認められないものの器形、調整などから、本来は黒色土器A類碗として製作されたものと考えられる。15は土師器杯である。約1/2が遺存する資料であるが、外面淡橙褐色、内面茶褐色を呈し、復元口径12.6cmを測る。底部はヘラ切り離し後ナデにより調整される。

SX028はSX027を切る形で検出された。長軸約0.5m、短軸約0.35mの楕円形を呈し、上部層からは黒色土器A類碗のほぼ完存品が1点出土している。9世紀の所産と考えられる。

中世

中世の遺構には溝状遺構（SD141）、墓と考えられる土坑（SX144）などがある。

SD141は、調査区の西端をN-15°-Eの方向で南北に縦断する形で検出されている。検出面での幅約0.8m、深さ約0.7mを測り、堆積土層は3層からなる自然堆積層で断面形状はV字形を呈する。この溝の形態及び位置関係から、下郡遺跡群第92次調査で確認されたSD303と接続する可能性が高い。埋土中層から瓦質の播鉢底部片が1点出土しており、この溝は14世紀以降のものと考えられる。

SX144は、検出面段階での埋土がSD141の上部埋土と類似しているが、平面及び断面観察に於いて裏込め土の



第26図 調査区全景（北方向から）



第27図 調査区全景（南西方向から）

存在が認められており、井戸若しくは墓の可能性が推定された。この所見のもとに掘り下げを行ったが、遺物は概して少なく、現存深度が約0.3m弱であり、湧水点に達していないという点や、堆積土層の中に滞水を想起させるような状況が認められない点などから、現状では、墓である可能性が高いと判断している。

近世

近世段階に帰属されるものとして、2条の溝状遺構（SD011・SD015）がある。

SD011は、調査区の北東をN-75°-Wの方向で東西に横断する形で検出された。検出面での幅約2.0m、深さ約0.5mを測るが、遺構の大半が調査区外に展開するため、詳細は不明である。土層観察の結果から、上層は人為的に埋め戻した状況が認められ、現状で推定される断面形状は逆台形を呈する可能性を指摘することができる。出土遺物は、少量ながら近世に比定される陶磁器類が認められたが、明確な時期を確定するにはいたっていない。底面はほぼ平坦で、その北側底面に於いてSD015を検出した。SD015も同様にその大半が調査区外に存する為全容は不明である。SD011と同様にN-75°-Wの方向で東西に展開し、検出面での現状の幅0.6m、深さ約0.7mを測る。断面形状はV字形を呈するものと考えられる。土層観察の所見から、埋土は2層の堆積で、下層底面からは拳大の礫が多く認められた。なお、出土遺物は概して少なく所産時期を明らかにすることはできなかったが、切り合い関係からSD011に先行するものであることは確実である。



第28図 SD011完掘状況(北方向から)

今回の調査では、弥生時代中期から近世におよぶ遺構を確認した。

弥生時代中期に比定される溝状遺構は、位置関係や調査所見内容から近接する既往の調査地点で確認された溝状遺構と接続する可能性が高い。今次の調査による新たな所見としては、溝埋没初期段階に於いて人為的に埋め戻された土坑が存在し、さらに、末期段階には当該時期の土器資料を一括廃棄した土坑も認められたという点を挙げる事が出来よう。考古学的な事象をもって証明するにいたっていないが、前者はこれまで当遺跡群で不明であった弥生時代墓である可能性もあり、今後の理化学的手法による土壌分析結果などにより検証していく必要がある。

古墳時代には、前期から後期において広範な集落の展開状況が改めて明らかとなり、弥生時代終末期の環濠集落廃絶後の集落景観がおぼろげながら明らかとなりつつある。

古代段階の当地区には官衙的な遺構・遺物が広く分布することが既往の調査により知られているが、今回の調査では、調査面積が狭小なこともあり、建物配置などに言及するだけのデータを得ることはできなかった。これまでの所見では、8世紀中頃から後半に遺跡のピークがあることが知られているが、今次の調査で検出された遺構・遺物から8世紀後半、ならびに9世紀まで存続している事実が知られた。これは調査区東側で検出されている当該期の道路状遺構の存続年代に符号するものであり、主要道路沿線という地理的環境に起因するものと考えることができよう。この段階ではすでに大型建物跡は存続しておらず、8世紀中頃から後半の段階とは異なる性格の遺構の展開が予見される。

中世においては、下郡地区に於ける地割と溝状遺構の関連が注目される。現状で確認される溝状遺構は、現況地割と一致する例が多くこの命題を解決する糸口となりえる可能性を有している。今回の調査に於いても近接する既往の調査地点で確認された溝状遺構との接続が明白となり、今後の周辺調査による状況把握に基づく地割構成の解明が期待される。

(坪根・荻谷)

V 下郡遺跡群第110次調査 I区q~r-10・11地点

調査面積 1,434m²
地域 A

調査期間 98.08.26~98.10.15
調査担当 坪根伸也・近藤晃弘

今回の調査は、都市計画道路下郡羽田線の築造に伴う調査である。

調査の結果、溝状遺構、墓壇、井戸跡、土坑、竪穴住居跡等を検出した。以下に主要遺構に関してその概要を記述する。

ST060・ST062は調査区のほぼ中央、SD027の東側地点で検出した墓遺構である。両者の墓壇は切り合い関係を有し、ST062→ST060の順番で構築されたことがわかる。

ST060は平面形状が径1.35mの円形を呈し、現存深度約0.6mを測る。土層断面観察結果から裏込め埋土を確認しており、円筒状の座棺（早桶）を有する墓であったと考えられる。最下層において人骨、銅銭4枚が出土している。

ST062は径約1.3mの円形プランを呈し、底面までの深さ約1.05mを測る。検出面から約0.6m掘り下げた段階で、テラスを確認し、この段階で土層断面の観察を試みた結果、ST060と同様に裏込め土を確認した。南側を底面まで掘り下げた結果、最下層底面で人骨、銅銭数枚、外面にコンニャク印判がみられ、見込み部分に蛇ノ目釉剥ぎを施す肥前染付碗の完存品1点が出土した。出土した銅銭の表面には網目痕及び繊維と思われる物質の付着が認められる。これらの出土遺物から遺構の帰属年代を18世紀前半～中頃と想定することができる。

今回、検出した溝状遺構はすべて南北方向に展開する。

SD001・SD002・SD003は調査区の西側部分で検出された溝状遺構である。

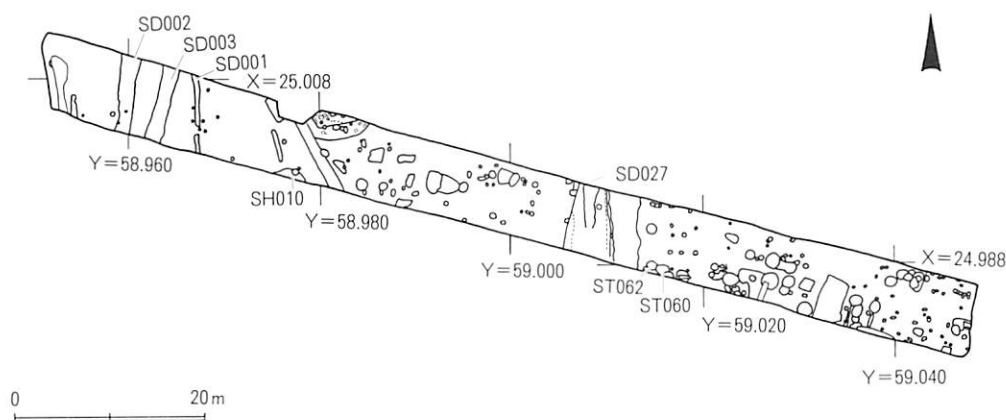
SD001は検出面での幅約0.5m、現存深度0.12mを測る断面形状U字形を呈する溝状遺構である。底面は平坦であり、暗茶褐色砂質土の単一土を埋土とする。溝は調査区内で一度途切れ、約1.0mの空間を配して再度展開する。溝主軸はほぼ真南北を示す。出土遺物は皆無に近く、所産時期の確定にはいたっていない。

SD002は検出面での幅約1.5m、深さ0.9mの断面形状がU字形を呈する溝状遺構である。調査区内で確認される溝方向はN-16°-Eを示す。底面は平坦だが部分的に径0.15~0.20m程の円形の窪みを穿っている。この溝からは、16世紀代に位置付けられる青花小片が1点確認された。

SD003は検出面での幅約1.5m、深さ0.85mを測る。断面U字形を呈する溝状遺構である。N-4°-Eの方向に展



第29図 調査地点位置図



第30図 遺構配置図 (1/800)



第31図 調査区全景（東方向から）



第32図 SD002・003完掘状況（北東方向から）

開する。底面は平坦だが中央部付近で部分的にSD002と同様の窪みを穿っている。この溝からは、備前焼播鉢口縁部片（間壁編年Ⅴ期）が1点確認されている。

SD002及びSD003は形状や埋土状況などが酷似し、出土遺物の面からも共に16世紀代に位置付けることが可能であることから、同時併存した溝状遺構である可能性が高いと考えられる。

SD027・SD028・SD044・SD080・SD129は調査区のほぼ中央を南北方向に重複しながら縦走する溝状遺構である。SD027は検出面での幅約3mを測り、埋土中には拳大の集石及び陶磁器片を多量に内包する。現存深度約1.0mを測り、断面形状は上面の広いU字形を呈している。SD129はSD027に重複し、下面において確認することのできる溝状遺構である。

SD028はSD027に併走する溝状遺構であるが、この溝内においても下部において重複する溝状遺構（SD044・080）の存在を確認することができた。SD044は淡灰色砂質土の単一層を埋土する溝状遺構である。SD080はSD129と酷似した溝埋土を有している。埋土は硬質で褐色粒子を含んでいる。これらの4条の溝状遺構の帰属年代を明らかにすることはできなかったが、遺構の検出段階において、16世紀代に比定される京都系土師器皿口縁部片・備前焼播鉢片（間壁編年Ⅴ期）などが近世陶磁器と混在する形で出土しており、これらの溝の中で特に切り合い関係から古く位置づけられるSD129・044・080のいずれかは16世紀末前後の所産となる可能性がある。ちなみに、以上の溝の新旧関係を整理すると次のようになる。

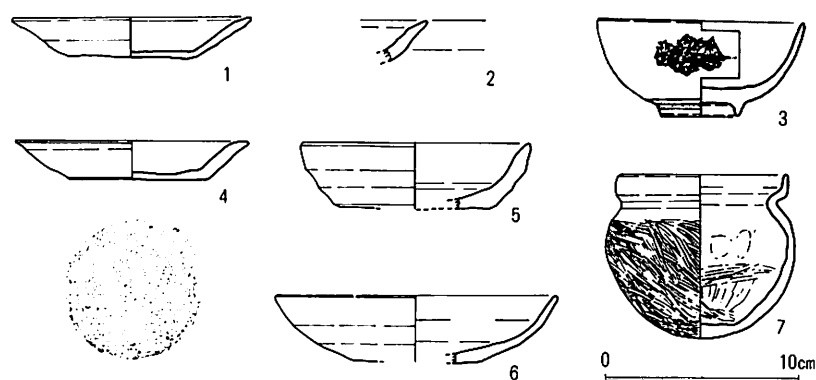
古	新
SD129	→ SD027
SD044・080	→ SD028

今次の調査では4基の竪穴住居跡を確認している。

SH006・007・118は調査区西側部分の北壁部分に3基重複する形で確認された。住居跡の大半は調査区北側外へ展開しており、時期決定に有効な遺物も出土していないため遺構の全容は不明である。切り合い関係から判断される遺構の新旧関係は、（新）SH006→118→007（旧）である。SH006は残存壁高約0.1mを測り、住居西側壁部の一部において壁溝を確認した。

SH010は先述した住居跡の南側部分で検出した竪穴住居跡である。この住居もコーナー部分のみの検出であり、その大半が調査区南側外へと延びている。明確な住居の規模は不明である。現存する壁高は約0.4mで、壁際には壁溝が付設されている。また、住居床面には貼床が施されている。出土遺物としては、小型丸底壺のほぼ完存品1点が床面直上で確認されており、この土器形態からこの住居の帰属年代を古墳時代初頭～前半頃のものと判断した。

第33図には、今次の調査で出土した主要遺物を提示している。1はSD028から出土したてずくね成形による、



第33図 出土遺物実測図 (1/4)

いわゆる京都系土師器皿である。内外面淡黄褐色を呈し、胎土中には石英・褐色粒子等を含む。器壁は薄く、16世紀代の京都系土師器皿のなかでも古相の属性を有するものである。口径12.5cm、底径6.5cm、器高2.1cmを測る。SX121から破片の一部が出土し接合した。2はSD003から出土した京都系土師器皿の口縁部片である。外面淡赤褐色、内面淡黄褐色を呈し焼成は良好である。胎土中には角閃石、長石、褐色粒子を内包する。口縁端部が外反し厚味を有し、さらに器高が高くなっている点などは明らかに1の資料よりも後出するものである。3はST062から出土した肥前くらわんか碗である。器外面にはコンニャク印判が三ヶ所に施される。また内面見込み部分には蛇の目釉剥ぎが認められ、口径10.8cmを測る完存品である。4は口径12.1cmを測る土師器皿である。底部は回転糸切り離し痕が残し、その上に板状圧痕がつけられている。本資料は底部の状況が示すようにロクロ成形によるものであるが、内面および器形状況はまさに京都系土師器皿を模倣したものであり注目される資料である。5はSD003から出土した土師器杯である。おおよそ全形の1/4が遺存する資料であり反転による復元図を示しているが、これにより推定される復元口径は12.0cm、器高3.5cmを測り、底部には糸切り離しの痕跡を残している。色調は淡黄橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、褐色粒子等を含む。焼成は良好である。6はSD002から出土した土師器杯である。底部には回転糸切り離し痕を残し、胴中位に稜線をもって内湾気味に立ち上がる器形を特徴とする。内外面は回転ナデ調整により仕上げられ復元口径14.4cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、褐色粒子等を含む。焼成は良好である。7はSH010から出土した小型丸底壺である。内外面とも淡黄橙色を呈し胎土中には角閃石、石英粒等を内包する。外面は丁寧なミガキにより調整され、内面はミガキ・削ズリなどにより調整される。口径8.4cm、器高8.7cm、胴部最大径9.8cmを測る。焼成は良好でありほぼ完存する資料である。

今回の調査区は道路建設予定地ということもあり、東西に長く、遺跡の面としての展開状況の把握は困難であるが、特徴的なのは、数条にわたって確認された南北方向に展開する溝状遺構である。大きくは戦国期に掘削機能し、その後踏襲されることのなかったものと、調査区中央で検出された溝状遺構のように戦国期に掘削され、近世段階まで踏襲されるものとの二者に分別することができる。下郡遺跡群の既往の調査所見では戦国期の屋敷地に付随すると推定される堀跡が確認され、近世においても中世段階の地割りを踏襲したと考えられる溝状遺構が展開していたことが認められている。今回の調査によっても断片ではあるがそれらを裏付ける資料を提示することができ、これらの資料集成に基づいた各地点で確認されている溝状遺構相互の空間分布のさらなる検討が危急の課題といえよう。

(坪根・荻谷)

VI 下郡遺跡群第111・116・117次調査

調査面積 531m²
地域 A

調査期間 98.08.25～99.02.17
調査担当 坪根伸也・幸しのぶ・荻谷史穂

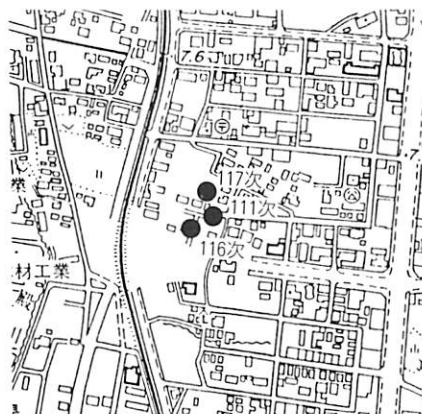
今回の調査は、区画街路6-29・6-30号線の築造に伴う調査である。調査地点は、工事進捗の関係から3地点に別れており、平成10年8月25日から平成11年2月17日の間に断続的に調査を実施した。三つの調査地点は

下郡遺跡群第111次調査（E区n・o-15地点）

下郡遺跡群第116次調査（E区o-15・16地点）

下郡遺跡群第117次調査（E区o-14・15地点）

であり、以下に各調査地点の概要を記す。



第34図 調査地点位置図

第111次調査地点

調査は、現在使用されている仮舗装の道路を対象とした。そのため調査区は幅約3.0mのトレンチ状をなしている。調査の結果、弥生時代の所産となる土坑、近世の井戸跡などを確認した。

弥生時代の遺構としては、土坑2基（SK012・SK083）がある。

SK012は調査区の中央やや東寄りの部分で確認された土坑である。西半分を後世の攪乱穴により切られている。約1.0mを測る不定円形プランを呈し、現状で約0.3mの深度を有する。埋土は基本的に淡黄褐色粒子、少量の焼土粒を含む暗茶褐色土の単一層により構成される。埋土中からは少量ながら土器破片が出土しており、出土土器からおよそ中期後半前後の所産になるものと考えられる。出土土器には、口縁部破片、底部破片などがあるが、いずれも東北部九州系の「く」の字形口縁をもつタイプの甕のものである。



第35図 第111・116・117次調査区全景

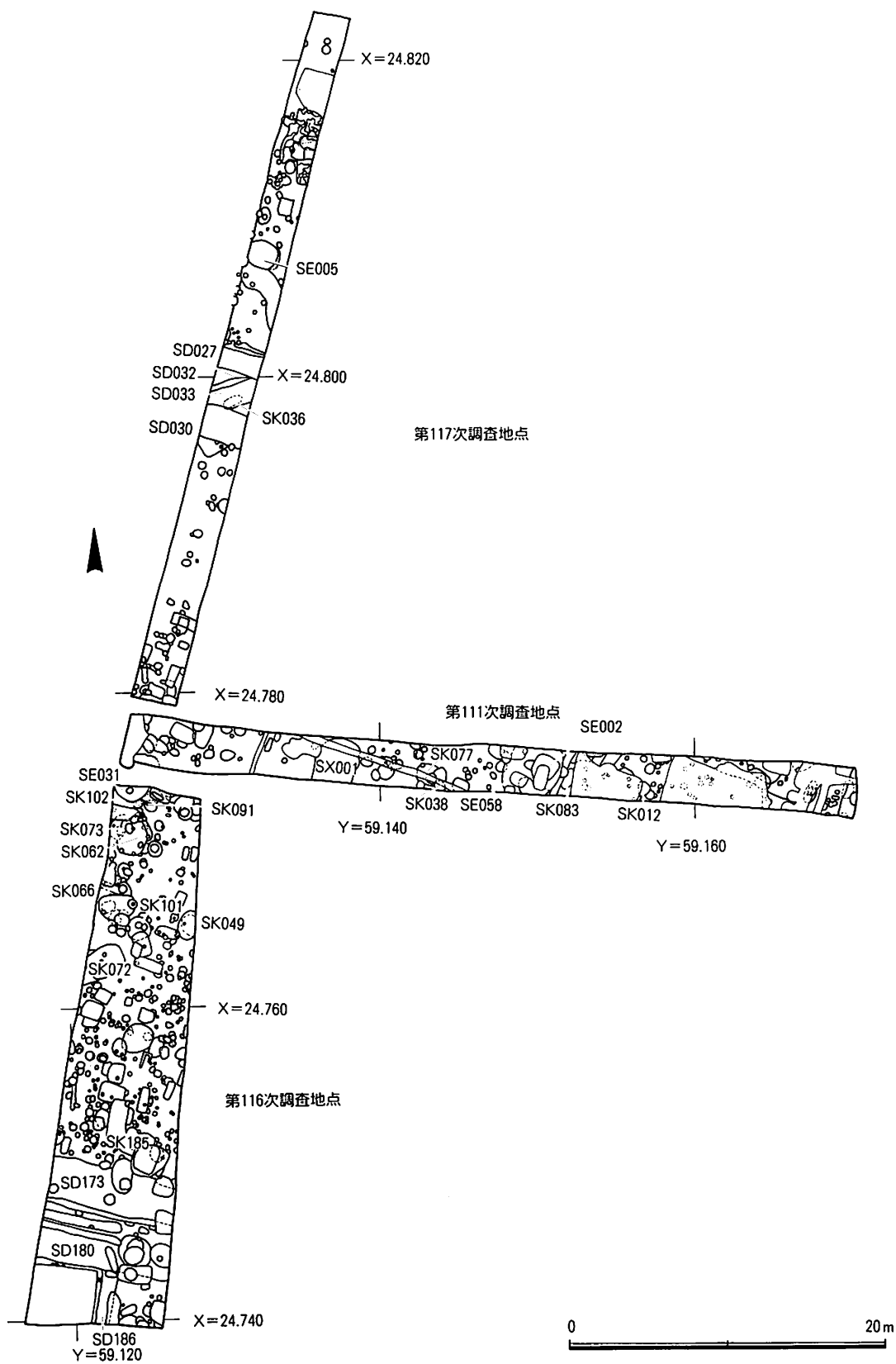
SK083は、先述のSK012の西側約4.5mの地点で検出された土坑である。東西両側を後世の遺構により切られており、全体形状は不明であるが、遺存部から推定される様態は、約1.3mの長楕円形プランを呈する土坑になるものと推定される。現存深度は最深部で約1.3mを測り、南側が浅く、北側が深いという段掘り状の形状を呈し



第36図 SK012遺物出土状況



第37図 SK083遺物出土状況



第38図 遺構配置図 (1/400)

ている。遺構埋土は上下二層に分層され、上部層は暗黒褐色土層、下層は暗黄褐色土層により構成される。底面直上には同一個体と考えられる甕口縁部があり、この甕形状から弥生時代中期の所産であろうと推定することができる。

近世遺構には溝、土坑、井戸跡などがある。

SE058は調査区のほぼ中央で検出された井戸跡である。現状で直径3.5mを測り、現在でも湧水が著しい。素掘りの井戸跡である。埋土は大きく6層に分層され、第4層から陶胎染付片が出土している他、本井戸跡を切って構築されているSE002が18世紀後半以降の所産年代が考えられる点などから、おおよそ18世紀中頃に機能していたと考えて大過ないであろう。

第116次調査地点

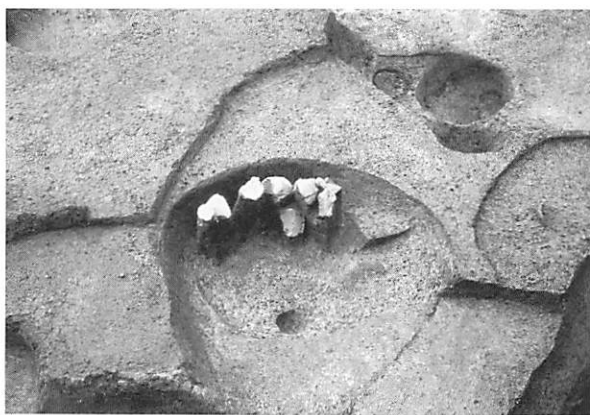
本調査区は3つの調査区の内、最も南側に位置する調査地点である。

調査の結果、弥生時代、古墳時代、近世の遺構を確認した。弥生時代の遺構には土坑がある。

SK091は調査区の北側で検出した土坑で、甕、壺の底部、蓋破片などが出土している。これらの土器はほぼ床面直上で出土しているが、いずれも土層に対応させると南側方向から流れ込んだような状況で出土しており、このような点から土坑が本来の機能を停止した直後に遺棄されたものと考えられる。出土土器の所産年代がいずれも須玖Ⅱ式古段階のものであることから、土坑は弥生時代中期中頃から後半前後のものと考えられる。他にSK049・066・072・073・101・158があり、楕円形、隅丸長方形、円形の3種の平面プランを有するものが認められたが、多くは楕円形、あるいは隅丸長方形を呈するものであり、円形プランのものはSK101のみであった。これらの土坑はいずれも現存深度0.2～0.4mであり、SK049・072には床面中央にセンターピットと考えられる窪みが認められている。出土遺物から判断される各土坑の所産時期は、SK049・073・101・158が中期前半、SK066・072が中期後半と考えられる。これらの土坑の機能については、規模・形状、所産時期から貯蔵穴としての機能が



第39図 第116次調査区全景（南西方向から）



第40図 SK091遺物出土状況



第41図 SK102土層断面



第42図 SK102遺物出土状況

考えられる。また、堆積土層の所見から人為的に埋め戻されたと考えられるものが多く認められ、それぞれに遺構の重複関係を有するものがある点などから各時期ともに隣接地点での造り替えを想定することが可能である。

古墳時代の遺構には唯一土坑（SK102）1基がある。

SK102は調査区北側部分で検出された楕円形プランを呈する土坑である。底面直上において須恵器坏身と坏蓋が重ねて埋置されていた。土層観察から土坑埋土は人為的に埋め戻されている状況を確認することができる。出土した須恵器は九州編年のV期に相当し、7世紀中葉前後の所産と考えられる。

近世以降の遺構には土坑、井戸跡、溝状遺構がある。

検出した土坑の大半は、埋土に焼土、陶磁器、瓦等を多量に内包する。

SE031は、調査区の北側部分で検出した井戸跡で、埋土上部には掘り返し痕跡が認められた。井筒は遺存していなかったが、土層観察所見から井戸機能時には井筒があったことが判明している。出土遺物から井戸の所産年代は18世紀後半以降と考えられる。

溝状遺構にはSD173とSD180がある。両者とも調査区の南側部分で検出された東西溝である。

SD173は幅約2.7m、現存深度1.4m、断面形状がY字形を呈する大型の溝状遺構であり、数回の掘り返し痕跡が認められた。下部埋土は粘質土、上部埋土にはシルト質基調の埋土が堆積しており、溝機能時に滞水していた状況が想定される。上部埋土からは18世紀末から19世紀前半の遺物が出土しており、下部埋土からは18世紀後半の遺物が出土している。このような状況から本溝は18世紀後半前後に掘削され、18世紀末～19世紀前半にかけて使用されたものと考えられる。

SD180は幅約2.0m、現存深度約0.8m、断面U字形を呈する溝状遺構である。土層観察所見から数回の掘り返し痕跡を認めることができた。埋土はシルト質基調であるが、最下層のみやや粘質を帯びている。出土遺物から18世紀末～19世紀前半の所産と考えられる。

SD186は調査区南側部分で検出された溝状遺構であり、SD180に切られている。幅約1.0mを測り、現存深度0.32mを測る。出土遺物から18世紀後半の所産と考えられる。

第117次調査地点

今次の調査地点は、近接する第111次・116次調査地点等の所見と同様、近世に比定される遺構がその大半を占めた。以下、主要遺構に関してその様相をまとめる。

検出遺構には古墳時代に比定される土坑（SK036）、溝状遺構（SD033）、近世～近代の溝状遺構（SD027・030・032）、井戸跡（SE005）などがある。

SD033は後述するSD027・030・032と重複して検出された溝状遺構である。遺構の大半が削平を受け、又、調査区外に存する為、遺存状況は良好でなくその全容を確認するには至らなかった。検出面での幅は1.4mを測り、N-75°-Eの方向で直線的に掘削される。現状で推定される溝の断面形状は逆台形を呈すると考えられる。調査



第43図 SD173完掘状況



第44図 SD180完掘状況

区の壁面での土層断面所見によると、人為的に埋め戻された状況が確認される。出土遺物には須恵器甕片が1点確認されている。

SK036はSD033の床面において検出された土坑である。SK036は長軸約1.3m、短軸約0.7mを測り、主軸方向はSD033と同方向である。平面形状は楕円形を呈し、遺構上面から底面にかけて窄まり気味の傾斜をなし、約0.6mで床面に達する。土層観察の結果から、3層の堆積埋土を確認することができる。底面形状は円形を呈し、径約0.3m、深さ約0.1mを測る。底面から須恵器甕の体部が出土しており、この土坑は古墳時代後期の所産であると推定される。



第45図 SE005検出状況

SD027は調査区の中央で検出された溝状遺構である。検出面での幅約1.4mを測り、N-75°-Wの方向で直線的に掘削される。断面形状はV字形を呈し、土層観察の結果から、数回にわたり掘り返された状況を確認できた。出土遺物は比較的多く、近世末から近代に比定される。

SD030はSD027の南側で検出された溝状遺構である。検出面での幅は約2.0mを測り、主軸及び断面形状はSD027と同様である。堆積埋土は自然堆積によるもので、出土遺物は概して少ないが、見込み部に蛇の目釉剥ぎの痕跡が認められる碗が1点出土している。

SD032は、その大半が前述のSD027により削平されている。検出面での現存の幅は1.2mを測り、主軸をN-80°-Eの方向で直線的に掘削される。現状で推定される断面形状は逆台形が考えられる。調査区西壁で観察した土層断面観察による埋土堆積状況は自然堆積と判断される。出土遺物は近世に比定される可能性の高い染付の小片が1点のみ確認されている。

以上の遺構の新旧関係は、SK036→SD033→032→030→027となる。

SE005は調査区中央よりやや北側で検出された。検出面での規模は長径2.0m、短径1.7mを測り、平面形状は円形を呈する。上部層は粘質の強い埋土であり、近代のものと考えられる陶磁器が多量に出土した。下層からは縦板組無支持型BⅡa類（『井戸考 史林』第65巻第5号 宇野隆夫）に分類される木枠が認められ、水溜部であったと考えられる。又、その内部には基石大の礫が多量に内包されていた。

以上が3調査地点の概要である。これらの調査では、近世に比定される遺構が大部分を占めたが、上限は弥生時代、下限では近代に比定される遺構も認められた。いずれの調査区も狭小で、検出された遺構は、その大半が調査区外に存し、遺存状況が良好でないなどの点から全体像を把握できるものは少ない。このような中であって注目されるのが、近世段階の溝状遺構である。18世紀後半前後を中心とするものであるが、第111次・116次・117次調査で確認された溝状遺構は一定の方向性をもって掘削されており、当該期に土地区画に関してひとつの画期の存在が予見される。現存する地割りと関連なども注目され、周辺の更なる調査データの蓄積と集積が囑望される。

（坪根・幸・苅谷）

参考文献

宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻 第5号

VII 下郡遺跡群第112次調査 E区 ㊀-14・15地点

調査面積 約160.5㎡
地域 A

調査期間 98.10.02～98.10.20
調査担当 坪根伸也・幸 しのぶ

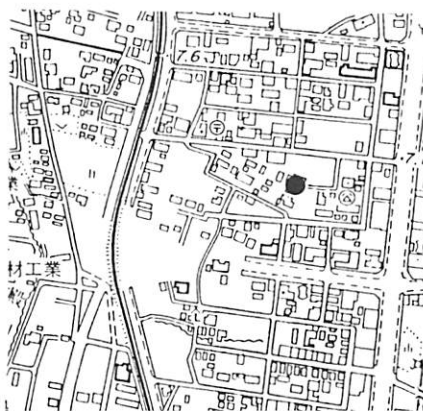
今回の調査地点は下郡地区のほぼ中央部分に相当し、現在の南下郡地区の集落に一部重複する。調査の結果、2枚の整地層を確認し、弥生時代、近世に帰属される遺構・遺物を確認した。整地層下の基盤土層は、硬質の灰茶褐色土であり、他の調査地点の土層所見との比較から基盤土層の中でも比較的下位で確認される土層に類似する。したがって、本地点では整地以前の段階において大きく削平を受けている可能性が高く、弥生時代の所産となる貯蔵穴の遺存状況が極めて悪いこともこの点に起因しているものと判断される。

調査対象地内には現地表下から約0.5mの客土層が確認され、この下位に黄褐色土ブロックを内包する灰褐色シルト質土により構成される上部整地層が存在する。この整地層上面で確認される遺構は近～現代のものばかりであり、この整地地業の帰属年代を近現代と推定することができる。この上部整地層の下位に黄褐色土ブロックを含む下部整地層が約0.2～0.3mの層厚を有して存在しており、この土層の上面から掘り込まれた遺構を確認することができる。下部整地層は土層を詳細に観察すると、整地にあたり、一度若干掘り込んだ後に土を盛って整地を実施するという方法により施工されていることが明らかになった。

今次の調査地点は住宅の密集する部分に相当するため、調査に際しては、現用道路を挟み、南北に2本の調査区を設定し、それぞれを北側調査区、南側調査区と呼称し、調査を実施した。

検出遺構には弥生時代の所産となる溝状遺構(SD020)、土坑(SK005)、近世時期の甕埋設遺構などがある。出土遺構の中で弥生時代の所産となるものは、下部整地層除去後に検出することができる。

SD020は南側調査区の北端において検出した。検出面での幅0.9m、現存深度約0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、堆積土層の観察から複数回の掘り返しの存在が確認される。現状では大きく2層に分層することができ、暗灰褐色土を上部埋土に淡灰褐色土を下部埋土とする。出土遺物は概して少ないものの、弥生時代中期に編年される東北部九州系の「く」の字形口縁甕の他、頸部に浮文と複数の三角突帯を有する壺破片が出土している。このような状況の中で、厳密な所産時期の確定は難しいものの、前述したような属性を有する壺破片の



第46図 調査地点位置図



第47図 南側調査区完掘状況(北方向から)



第48図 北側調査区完掘状況(北方向から)



第49図 SK005完掘状況



第50図 SX001検出状況

存在から弥生後期前葉以降のものであると推定される。

SK005は北側調査区の北側部分において確認された円形の土坑である。現存深度約0.1mと極めて浅い。底面はほぼフラットであり、底面中央には径約0.4mの円形ピットが存在する。出土遺物には下城式甕形土器の小破片があるのみであり、概して少ないが、遺構形態、推定される所産時期（弥生時代中期）から当該期の貯蔵穴であろうと考えられる。

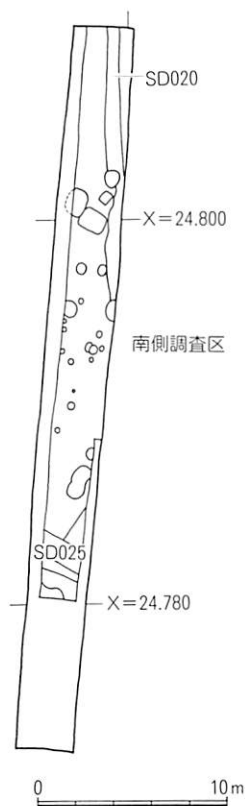
上部整地層直下で下部整地層が確認されたが、出土遺物はなく、所産時期は不明である。下部整地層については、一度若干の掘り込みを行った後に土を盛って整地を行うという方法によることが確認された。

本調査地点周辺では、過去の調査において泥炭土層が堆積する落ち込みが確認されている。また、調査区内でも数カ所の湧水点があるなど地盤が不安定な場所であり、土地基盤改良のために整地事業を行ったものと考えられる。

下郡地域では同様の理由によって形成されたと考えられる18世紀後半～19世紀初頭前後の整地層が第81次調査でも確認されている。このことから下郡地域では近世以降に土地基盤改良のため、随所で整地事業が行われたと推測される。

このほか、弥生時代の遺構は後期以降の所産である溝状遺構1条と、中期前半の所産である土坑1基が、近世の遺構は、甕埋設遺構が1基確認されている。弥生時代後期の溝状遺構は、下部整地層の下において確認されたが、その他の遺構に関しては帰属文化面を明らかにするには至らなかった。

(坪根・幸)



第51図 遺構配置図(1/400)

Ⅷ 下郡遺跡群第113次調査 H区q-16・17地点

調査面積 約301㎡
地域 A

調査期間 98.10.19～98.12.22
調査担当 坪根伸也・近藤晃弘

本調査区は、大分市下郡土地区画整理事業に伴う事前調査として平成10年10月19日から12月22日まで調査を実施した。調査面積は約301㎡である。

調査の結果、弥生時代から中世までの遺構・遺物を数多く検出した。以下に時代別に主要遺構について概説する。

弥生時代

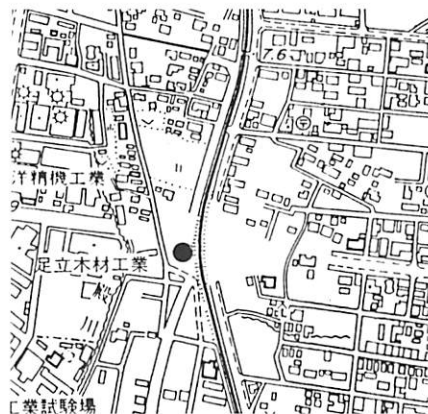
弥生時代の遺構には、竪穴住居跡1基（SH016）・方形周溝状遺構1条（SX433）・貯蔵穴1基（SK251）土器焼成坑？1基（SX379）などがある。

SH016は調査区北東部で検出された方形プランを呈する竪穴住居跡である。住居跡の大部分は調査区外に展開しており、南西側のコーナー部分を確認できたのみであるが、東西壁に沿って2本の支柱穴を確認することができた。これらの位置関係から4本柱の形態をとるものであろうと推定される。出土遺物は概して少ないが、下城式甕形土器の底部片が出土しており、中期前半以降の所産と考えられる。

SX433は検出面での幅0.4～0.5m、深さ0.7～0.8mを測る溝により構成される方形周溝状遺構であり、溝の断面形状はV字形を呈する。調査区南端部分で検出され、ほぼ直角に屈曲するコーナー部分を確認している。上部埋土に径0.1～0.3mの円礫が多数存在する。出土遺物には上部埋土を中心に弥生時代中期後半～末に比定される遺物が出土しており、この時期の所産とも推定されるがすべてが破片資料であり、また本遺構は下郡遺跡群第52次調査で確認された方形周溝遺構（SX001）の延長部にあたるものであり、所産時期の検討が必要である。

土層断面の観察結果から、複数回の掘り返しが想定される。

第57図4～9にはSX433から出土した土器の一部を呈示している。いずれも弥生時代中期に編年されるもので、特に8、9は下層埋土から出土したものであり遺構の帰属年代推定にあたり参考となる資料といえる。4は台付鉢の脚接合部である。内外面とも茶褐色を呈し胎土中には角閃石、石英、褐色粒子を含む。焼成は良好で接合部の円盤充填技法を明確に観察できる資料である。5は「く」の字形を呈する甕の口縁部破片である。淡黄茶褐色を呈し外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整が施される。6は明橙茶褐色を呈する甕形土器底部である。底面は若干上げ底状を呈しており外面端部には最終調整としてヨコナデが施されている。7はいわゆる下城式と呼称され



第52図 調査地点位置図

下郡遺跡群
第113次調査
H区q-16・17



第53図 調査区全景（北方向から）



第54図 SX433土層断面

る甕形土器の口縁部片である。口縁端部まで直線的に至り若干下がった位置に低平な刻目突帯を施す。内外面とも明黄橙色を呈し胎土中には角閃石、石英、褐色粒子、金雲母等を内包する。焼成は良好である。8は断面「く」の字形を呈し屈曲部に断面三角形の突帯を巡らせる。胎土中に角閃石、石英粒を含み焼成は良好である。9は高環口縁部片である。水平に伸びる口縁部を有し、ミガキないしはナデにより調整される。明黄橙色を呈し胎土中には角閃石、石英などを内包する。

SK251は長径2.4m、短径1.6mの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さ0.1mを測る。底面は皿状に窪み、中央部に柱穴が存在する。この柱穴には柱痕跡が認められる。出土遺物は皆無に近いが、遺構の形状等から弥生時代中期前後の貯蔵穴と考えられる。

SK379は長径0.88m以上、短径0.73m以上の略楕円形を呈する土坑である。遺存深度は0.1m程度であり、床面直上に硬く焼けた焼土の層が認められる。この焼土上面から甕破片等の遺物が検出されている。遺存状況が良好でないため具体的な検証は不可能であるが、土器焼成坑の可能性も考えられよう。出土遺物から弥生時代中期後半から末前後の所産年代が考えられる。

第57図1～3にはSX379出土土器の一部を掲載した。1は復元口径26.8cmを測り内外面とも淡黄白色を呈する東北部九州系の甕形土器の口縁部である。胎土中には角閃石粒、褐色粒子等を含み外面ハケ目、内面はナデによって仕上げられる。器壁は極めて薄く胴部径が最大になると考えられる部分ではおよそ2mmの壁厚を測る。2も1と同様の甕形土器口縁部破片である。口縁内部端面はつまみあげられ、丁寧なナデにより調整される。外面ハケ目、内面ナデによって仕上げられ器壁は薄い。3は甕の底部片である。淡黄橙色を呈し胎土中には角閃石、石英粒等を含む。底面には上げ底状に成形され外面とともに丁寧なナデが施されている。胎土状況等から1および2のタイプの甕の底部になるものと推定される。



第55図 遺構配置図 (1/200)

古墳時代

古墳時代の遺構には竪穴住居跡 2 基 (SH003・SH241)、土坑 1 基 (SK071) がある。

SH003は方形プランを呈すると考えられる竪穴住居跡である。一部分のみの検出であるが、先述のSH016を切る形で存在する。南西コーナー部分に主柱穴と考えられる柱穴を検出しており、この柱穴の存在から 4 本柱の形態を呈するものであると推定される。出土遺物が少なく所産時期の検討は困難であるが、想定される住居形態から古墳時代前半期のものと推定される。



第56図 SX379検出状況

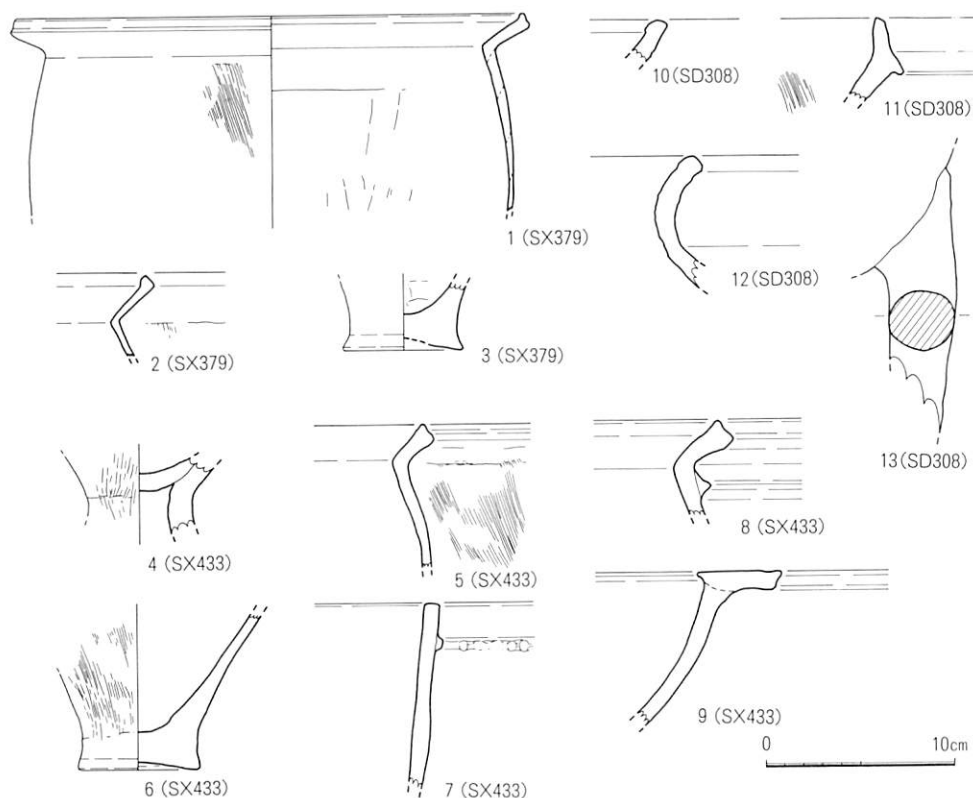
SH241は方形プランを呈する 4 本柱の竪穴住居跡である。西壁中央やや北寄りにカマドを付設する。現存する住居規模は南北5.2m、東西4.3mを測る。現存壁高は0.1m弱である。カマドの存在から古墳時代後期のものと考えられる。

SK071は長径2.5m、短径1.7m、深さ0.5mの不整な長楕円形を呈する土坑である。出土遺物には弥生時代中期から後期のものが主体として存在するが、少量の須恵器破片を含んでおり、6世紀代のものであろうと考えられる。

中世

中世の遺構としては、2 条の溝状遺構 (SD308・SD404) を検出している。

SD308は東西方向に展開する溝状遺構であり、検出長8.7m、幅1.75m、深さ0.9mを測る。土層断面の観察から複数回の掘り返しが認められる。掘削当初の溝断面形状は逆台形を呈していたが、後の掘り返し段階において断



第57図 出土遺物実測図 (1/4)

面U字形に掘り直している。溝底面には数多くの杭痕跡が認められ、柵状の構築物が存在していた可能性も考えられる。

第57図10～13にはSD308出土遺物の一部を呈示している。10は内外面とも淡灰色を呈する瓦質鉢の口縁部破片である。焼成は良好で口縁内面を若干突出させる点に特徴がある。防長系のものと推定される。11は備前焼播鉢の口縁部破片である。断面三角形を呈し破片資料ながらわずかにすり目を確認することができる。本資料は間壁編年のIV期に位置づけられるものである。12は瓦質の甕の口縁部破片である。端部が大きく外反し内外面とも黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒等を含む。焼成は良好である。

以上の出土遺物から本溝の帰属年代は中世後半期と推定される。

SD404は検出長9.0m、幅0.8m、深さ0.5mの断面逆台形を呈する溝状遺構である。東西方向に展開しSD308とほぼ並行する。出土遺物の状況もSD308と大差なく、同時期に存在した可能性も考えられる。



第58図 SD308・SD404検出状況（東方向から）

以上が下郡遺跡群第113次調査地点の概要であるが、今次の調査で注目される点に方形周溝状遺構（SX433）の検出があろう。これは本文中でも指摘したように隣接する下郡遺跡群第52次調査SX001の延長部にあたることは明白であり、今回の確認で第52次調査SX001の全容が明らかになった。遺構規模は12.0m×9.3mを測る方形周溝遺構であり、隣接する第52次調査SX003と近似した規模をもつ。SX003は積極的な根拠に乏しいものの、上部埋土から出土した高坏脚部小片から弥生時代後期後半以降の所産と考えたが、今回の調査所見ではこれを傍証する資料を得ることはできず、むしろ中期土器の大量出土が確認された。周囲には当該期の貯蔵穴が多数分布するため、これらの状況をもって中期の所産とするには慎重を期さねばならないが、いずれにしても前回の調査で時期比定の根拠になっている高坏脚部片の時間的な位置づけの再検討も含め、見直しが必要である。（坪根・近藤）

参考文献

「大分市埋蔵文化財調査年報」6 1994年度 大分市教育委員会 1995

IX 下郡遺跡群第114次調査 E区k～n-14地点

調査面積 約451m²
地域 A

調査期間 98.10.26～98.12.04
調査担当 坪根伸也・幸しのぶ

今次の調査は、区画街路6-34号線築造に伴うものであり、調査の結果、弥生時代、中世、近世の遺構・遺物を確認した。以下には時代別に主要遺構の概要を記す。

弥生時代

弥生時代に比定される遺構には溝状遺構2条（SD038・SD055）がある。

SD038は断面形状が逆台形を呈する溝状遺構で、隣接する下郡遺跡群第112次調査で確認されたSD020と同一遺構である。今回は弥生時代中期後半前後に位置づけられる遺物が少量出土したのみであるが、下郡遺跡群第112次調査SD020からは中期後半の遺物に混ざり、後期前葉の遺物がごく少量出土している。この点を考慮するとSD038の所産時期は弥生時代後期前葉以降と考えられる。

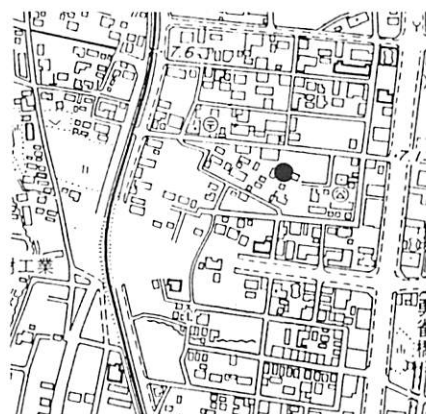
SD055は調査区のほぼ中央付近を斜めに走る溝状遺構で、断面形状はV字状を呈す。出土遺物から弥生時代後期末以降の所産であると考えられる。

中世

中世の遺構には井戸跡2基（SE048・SE074）、溝状遺構1条（SD053）がある。

SE048は石組みの井戸枠を持つ井戸跡で、直径約2.9m、現存深度は約1.6mを測る。検出面から約0.7mまで数回にわたり掘り返されており、井戸枠はその下部から検出された。SE048の西側部分では著しい湧水が認められ、井戸枠の湧水点側はすでに崩壊しており、井戸枠は東側半分のみ残存している状況であった。

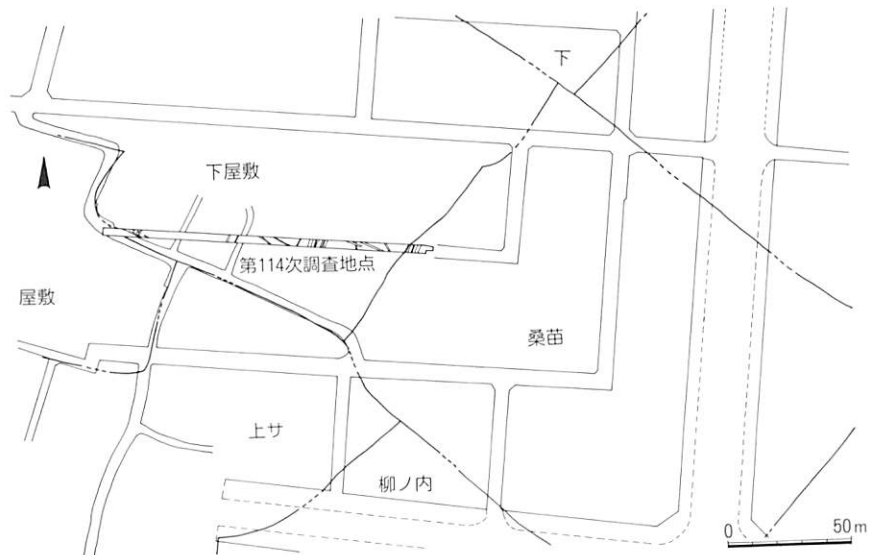
出土遺物は概して少なく、掘り返し部分から同安系青磁皿Ⅰ類、龍泉系青磁碗Ⅰ-4類などが出土しており、最終埋没時期は12世紀後半以降と判断される。出土遺物は少なく、厳密な機能段階の帰属年代推定は行えない。



第59図 調査地点位置図



第60図 調査区全景



第61図 調査地点位置図

い。井筒内部からは焼締陶器の破片などが出土している。

SE074は素掘りの井戸跡で、直径約0.75mを測る。出土遺物は概して少なく、土器小破片が数点と、青磁碗小破片が出土している。これらの遺物から、SE074はおおよそ15世紀末～16世紀初頭以降の所産と考えられる。

SD053は調査区の中央付近で検出された溝状遺構で、断面形状は逆台形を呈す。土層観察の結果、掘り返しがあったことが判明した。出土遺物は概して少ないが、堆積埋土内からは焼締陶器の破片や白磁碗Ⅳ類の底部などが出土しており12世紀前半以降の所産であると考えられる。

近世～現代

近世から現代に比定される遺構としては墓2基（ST068・ST069）、溝状遺構9条が確認された。

ST068は調査区の西側で検出した墓跡である。ほぼ床面での検出であり、遺存状況はあまり良くない。床面直上から板材が出土し、平面プランもほぼ円形であることから早桶による埋葬であったと考えられる。床面直上の板材の上からは骨と寛永通宝6枚が出土しており、いずれも1636年～1659年鑄造の古寛永銭であった。このことから本墓跡は17世紀中葉以降の所産と考えることができる。

ST069はST068の東隣で検出された墓跡である。平面プランは円形を呈し、土層観察から早桶に埋葬されていたことが判明した。骨が出土した他は遺物がほとんど出土しておらず、所産時期は不明である。

検出した溝状遺構にはSD026、SD030、SD032、SD036、SD051、SD057、SD058、SD067があり、これらの溝は出土遺物から18世紀前半以降の所産と考えられるもの（SD036）、18世紀中頃以降の所産と考えられるもの（SD030、SD032）、18世紀後半以降の所産と考えられるもの（SD057、SD058）、18世紀末以降の所産と考えられるもの（SD067）、19世紀以降の所産と考えられるもの（SD051）、近代～現代の所産と考えられるもの（SD026）の6段階の時期区分が可能である。

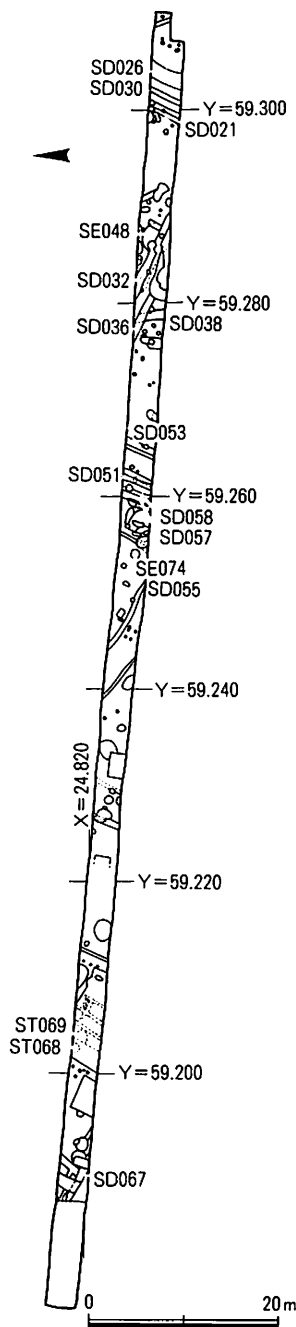
また、調査区東側で確認された杭列（SX009）はSD032に平行していることからSD032に伴うものと考えられる。

今回の調査では溝状遺構が多数検出された。本調査地周辺の字図と重ねるとSD021は「桑苗」と「下屋敷」の境に、SD067は「屋敷」と「下屋敷」の境と一致し、これらは字境の区画溝と考えられる。また、「下屋敷」と「屋敷」「上サ」の字境と旧道は同じ位置にあることから、旧道は字境に造られていたことがわかる。旧道はSD067の上部に造られており、本来溝があった部分を利用して造られている。

大規模な攪乱坑の存在からSD067の堆積土層の検討は行うことができなかったが、下郡遺跡群第76次調査や第97次調査で確認されている特異な構造をもつ道路状遺構、具体的には道路を溝状に掘り窪め、その中に土を充填していくことで路面および路床の整備を行う道路であった可能性も否定できない。SD021とSD067の両者を比べるとSD067のほうがSD021よりも規模が大きく、規模が一様でない点も前述の想定を示唆していることも考えられる。

SD067は出土遺物から18世紀末前後の所産と考えられ、現在、同地区で行われている土地区画整理以前の土地区画は少なくとも18世紀後半前後に行われていた可能性を指摘できよう。

（坪根・幸）



第62図 遺構配置図(1/800)

X 横尾遺跡群第67次調査（多武尾遺跡）

調査面積 約900㎡
地域 E

調査期間 98.04.20～98.06.25
調査担当 池邊千太郎・安部知美

遺跡は大野川下流の鶴崎丘陵上、標高約31mのところに位置している。南側には前年度調査の行われた第62次調査区が隣接する。

調査の結果、掘立柱建物跡9棟、溝状遺構4条、地層横転遺構3基をはじめ多数の土坑や柱穴が確認された。

弥生時代に相当する遺構としては、壺が廃棄された長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.15mの土坑（S012）があり、弥生時代後期に相当する。

また、古代においては土坑（S061）があり、長軸2.4m、短軸1.7m、深さは0.1mで楕円状を呈する。遺物は土師器や弥生土器片が出土している。

さらに、10～11世紀に比定される土師器杯・黒色土器A類が出土した楕円状の土坑（S062）が確認された。長軸3.0m、短軸2.4m、深さ0.35～0.4mを有する。

これまでの時期は、遺構の数や時期が散逸的な状況を呈しているが、16世紀から17世紀にかけては、これまでの様相とは異なり、多くの遺構が確認された。その中で最も多くの遺構が確認できたのが9棟もの掘立柱建物跡である。

規模・身舎面積・建物方向については次のとおりである。

SB01	1間（4.0m）×1間（2.8m）	11.2㎡	N-28°-E	
SB02	2間（3.6m）×1間（1.8m）+α	6.5㎡+α	N-13°-E	総柱
SB03	1間（3.9m）×1間（2.8m）	10.9㎡	N-16°-E	
SB04	2間（3.0m）×3間（5.0m）	15.0㎡	N-10°-W	総柱
SB05	1間（3.4m）×2間（4.0m）	13.6㎡	N-63°-E	
SB06	1間（2.6m）×1間（2.6m）	6.8㎡	N-53°-E	
SB07	1間（4.0m）×2間（4.6m）	18.4㎡	E-3°-S	
SB10	2間（3.6m）×1間（2.0m）+α	7.2㎡+α	N-28°-E	
SB12	1間（3.8m）×4間（6.0m）	22.8㎡	N-13°-W	

中でも、SB02は、調査区の北西隅に位置する。柱穴の掘り方は0.35～0.65mで、深さは0.25～0.8mを有する。北西隅の柱穴が土坑（S062）を切っている。遺物は土師質土器の坏が1点出土している。また、SB12は、調査区東南隅に位置し、柱穴の掘り方は0.25～0.5mで、深さは0.45～0.6mを有する。遺物は京都系土師器1点と古瀬戸と思われる陶器1点出土している。

こうした建物跡の周辺では溝状遺構が確認された。調査区の東を東西に走る溝状遺構（S146）は、検出長7.0m、幅1.0～2.1m、深さは0.05～0.1mを有する。土師器や土錘、中国産染付の皿が出土している。胎土目段階の陶器片が1点出土しており、16世紀末～17世紀初頭に比定される。溝状遺構（S114）とは同一遺構であり、南方向へL字に曲がっている。溝の内側には掘立柱建物跡があることから、区画溝として機能していたことが示唆される。

また、調査区の東を南北に走る溝状遺構（S082）は、幅1.9～2.8m、検出長9.0m、深さ0.4～0.45mをはかる。多量の礫が流れ込んでおり、礫中から茶臼片や瓦、唐人古場窯と思われる胎土目の目積みが見られる陶器皿が出土している。遺構の帰属年代は17世紀初頭～前半に求められる。

溝状遺構以外には、調査区東に0.1～0.2m大の礫を使用し円形に石組みされたS097が確認された。埋土の下



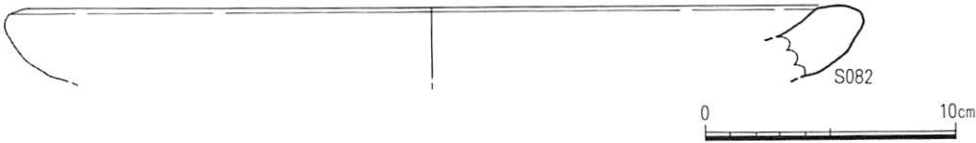
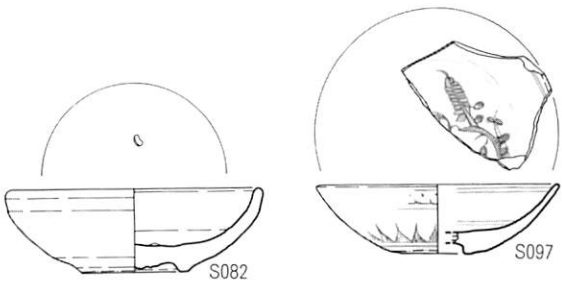
第63図 調査地点位置図

層には鉄分を多く含み、その掘り方には、10cm程度の礫を含んだ3層の堆積層が見られる。中でも最下層は多量の礫が内包し、水を石組み内に効率的に集めるためと考えられ、水溜まりに使用されたものと考えられる。出土遺物としては、天目碗（古瀬戸B類）や輸入染付皿のB群・C群が出土しているが、S082を切っていることから、遺構年代は17世紀以降になるものと考えられる。S097からは青磁碗や輸入染付皿C類のほか、土師質土器や陶磁器が出土しており、最終埋没年代は18世紀前半に下る。

以上、調査区内の溝からは茶臼片や天目茶碗、輸入陶磁器が出土しており、16世紀代を中心とする建物や溝が集中し一般集落とは異なった様相が窺える。茶臼や天目茶碗の遺物がこれにともなって出土していることから、有力者層の存在が考えられる。 (池邊・安部)



第64図 調査区全景（西方向から）



第65図 出土遺物実測図（1/3）



第66図 遺構配置図（1/400）

XIII 横尾遺跡群第68次調査（多武尾遺跡）

調査面積 950㎡
地域 E

調査期間 98.06.04～98.10.26
調査担当 池邊千太郎・永松正大

今回の調査は、区画街路建設に伴い実施したものである。調査地は、大分市大字横尾字南城の辻にある多武尾遺跡の西側に所在し、第62次・67次調査の西側に位置する。調査の結果、弥生、古代、中世～近世の遺構が確認された。

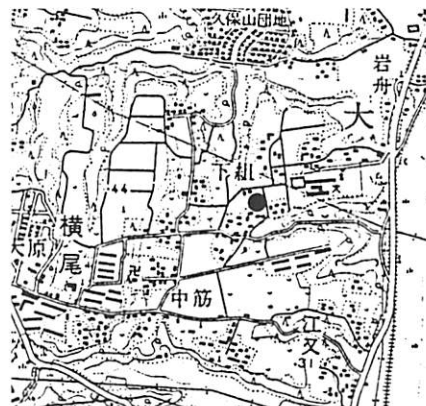
弥生時代の遺構としては、環濠遺構（SD008）が検出できた。環濠遺構（SD008）は、調査区東に位置する第62次調査で確認された環濠遺構の続きである。南東から北西に向かって深くなり、検出長21.9m、検出面での幅約4.5mを数え、断面形は逆台形に近似している。近代における整地作業の削平を考慮すると、遺構の幅は更に広がると考えられる。土層観察から、概ね3層に分層できた。下層は黒褐色土で、弥生時代中期末～後期前葉の安国寺式の複合口縁壺、壺、甕、鉢、器台や、赤色塗彩された高環が出土しており、遺物の多くが埋置された完形で出土せず、廃棄されたものと思われる。最下層には砂質の強いシルト質土が堆積し、滞水の痕跡と考えられる。中層は茶色土と黒褐色土の混土層で、須恵器壺（7～8世紀）・硯片、土師器環（10世紀）や 埴（10世紀中）・甕、弥生中期末～後期前葉、後期中葉の土器が出土しており、古代～中世にかけての段階で堆積したと考えられる。上層は褐色土で、自然堆積したと想定される。上層からは、瓦質土器播鉢、陶器片が出土し、中世末の所産と考えられる。

掘立柱建物跡（SB001）は、1間（3.0m）×2間（5.3m）で、柱穴の径は約0.4m、深さ約0.6mである。主軸はN-41°-Eに振っている。遺物は、弥生後期の鉢が出土しているが、埋土上層からの出土であり、表土からの落ち込みとも考えられ遺構に伴うのか不明である。

古代では土坑（SX031）が検出され、平面形態不整形で、削平により依存状態は悪い。炭化物の集中が見られ、火災後の処理を行ったのであろう。遺物は、須恵器高台付埴（8世紀後）、土師器環（9世紀前）が出土している。

道路状遺構1条（SF005）、柵列（SA001）1条、土坑1基が検出された。道路状遺構（SF005）は、南北方向、そして北西方向に延びる。土層観察から、地山を0.5～0.6mほど掘り込み、拳大の礫が一定のまとまりをもって、一部重なりながら敷設され、礫の直上には地山の黄褐色ローム土ブロックを粘質の黒色土とともに充填しているのが確認できた。SF005からは龍泉窯系青磁碗（I 5-b）、土師質土器火鉢、備前焼播鉢等が出土し、遺物から廃絶期は16世紀末に比定できる。また溝状遺構（SD006）は、土層観察からSF005に切られており、また滞水等の痕跡は確認できないため、道路状遺構の可能性も考えられる。床面からは、五輪塔の火輪3点・水輪1点・地輪2点が南北に並んだ状態で出土した。水輪と地輪に墨書梵字があり、製作時期は室町時代後期（16世紀代）と推定される。

掘立柱建物跡のSB002：2間（5.0m）×4間（8.2m）+α、SB003：2間（3.6m）×3間（6.0m）、SB004：1間（2.2m）×1間（4.2m）は、ほぼ真北に主軸をむ



第67図 調査地点位置図



第68図 調査区全景（南方向から）

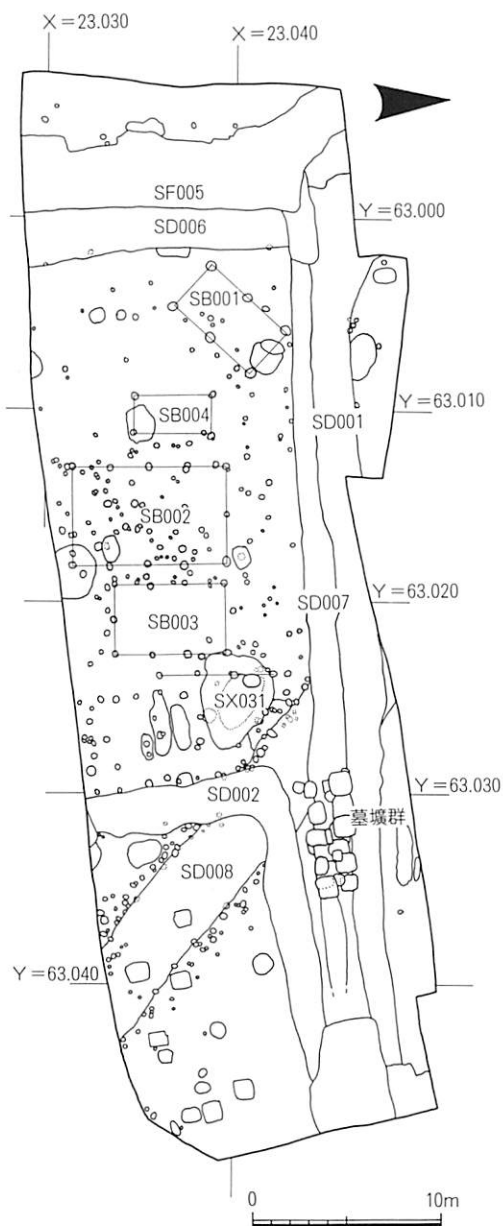
けている。SB002の遺物は、輸入染付皿（16世紀）、土師器坏片が出土しており、16世紀後半～末に比定できる。SB002～004は、同方向であるから、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。溝状遺構SD001（新）・007（旧）は、東西方向に延び、遺構西では、調査区外に向かってゆるやかに湾曲している。地山の黄褐色ローム層を掘り込んでおり、また滞水の痕跡が見られない点から、堀や道路等の性格が求められよう。

近世の遺構は、溝状遺構（SD002・032）2条、水溜め遺構2基、土坑9基、累系墓（墓壇群）が確認できた。SD002・032は調査区東から逆L字状に曲がり南へ延びている。土層観察からSD032を掘り返してSD002を造成したと考えられる。SD002・032を隔てて西には近世の土坑は確認されず、近世の区画溝の性格が考えられる。出土遺物は、瓦質土器火鉢・こね鉢、陶器蓋・土瓶・播鉢が確認された。土坑内の遺物も、肥前産広東碗・くらわんか碗・湯飲み碗等、磁器蓋物、銭貨（銅銭・古寛永?）などSD002の遺物と同時期と思われ、18世紀後～19世紀初に比定される。これらの土坑の性格としては、廃棄土坑が想定できる。水溜め遺構は、SD002・032を切る形で検出された。

累系墓（墓壇群）は、中世の溝状遺構SD001・007を掘り込む形で形成され、切り合いが著しいため、確認された墓壇は19基である。検出できた平面形態は、隅丸方形（8基）、隅丸長方形（5基）、円形（3基）が見られる。隅丸方形（縦×横）では、0.6m×0.6mの墓壇（幼児用）、1.2m×1.2mの墓壇（成人用）の2形態が確認できた。

人骨の出土状況や墓壇の平面形状から判断される埋葬形態は、臥葬と坐葬が想定できる。六道銭を含め銭貨が出土した墓壇は12基で、他に鉄釘、陶磁器小坏・くらわんか碗（1690～1780）、土人形、櫛片、磁器紅皿（18世紀後）が出土していることから、この墓壇群の形成時期を18世紀前～後に比定できる。

弥生時代の遺構は、多武尾遺跡に伴う環濠遺構が確認でき、多武尾遺跡の範囲の一端を窺い知る事ができ、更に環濠の掘り返しが認められ、弥生中期末～弥生後期中葉までの遺構廃絶の過程が把握できた。中世では、集落と集落を結ぶ交通施設である道路状遺構、それらに付随する動線としての道路状遺構を検出し、昨今において報告例が増加しつつある道路状遺構の形態も解明されつつある。近世では、累系墓（墓壇群）と区画溝が確認でき、横尾地区の近世集落の様相が垣間見えた。また今回表採資料の中に、貿易陶磁の輸入青磁碗・皿や輸入白磁碗・皿（12世紀初頭～14世紀代）が出土しており、この地域に搬入された資料と思われ、在地領主などの有力武士層の存在が窺われる。



第69図 遺構配置図 (1/400)



第70図 SF005掘り下げ状況(南方向から)

XII 横尾遺跡群第69次調査（多武尾遺跡）c-16・17地点

調査面積 252m²
地域 E

調査期間 98.06.10～98.07.10
調査担当 高畠 豊・野中慶誠

調査地点は、大東中学校建設に伴って1979～1980年に行われた多武尾遺跡第1次調査地点の北側に所在する。多武尾遺跡の所在する台地の北端に近い位置にあり、調査区北東側に北側から切れ込む開析谷が迫っている。今回の調査は、集合住宅建設に伴って行われたもので、建物建設部分について記録保存を目的として発掘調査を行った。以下、検出された主要遺構について年代別に説明する。



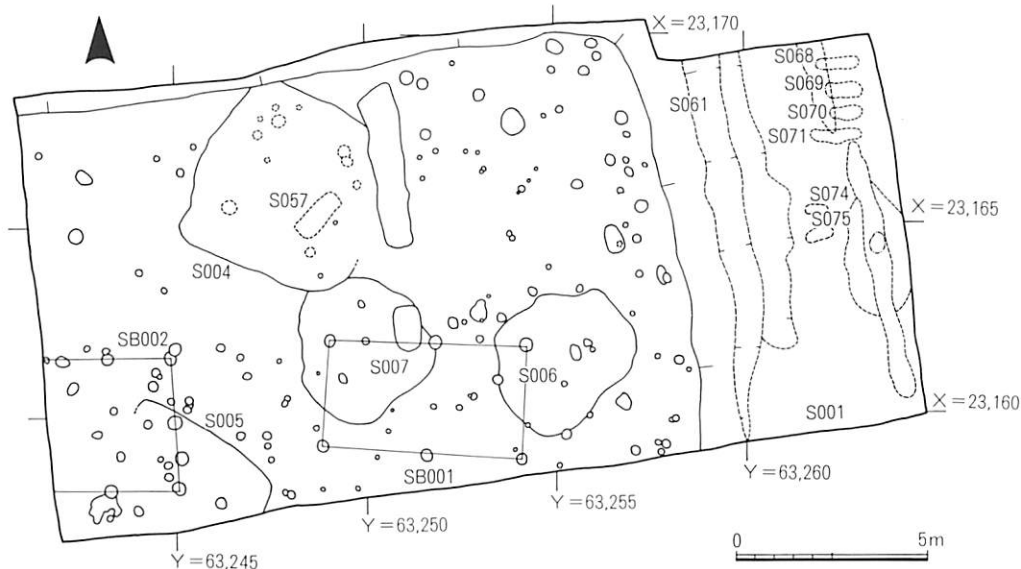
第71図 調査地点位置図

弥生時代終末～古墳時代初頭

竪穴住居跡が2基検出された。S004は調査区中央付近で検出され約5.0m×4.8mの隅丸方形を呈し、支柱穴は4本である。中央付近には屋内炉及び屋内貯蔵穴（S057）が造られており、後者からは、住居廃絶時に廃棄されたと思われる土器が一括出土した（第75図2～4）これらの中には完形であったと推定される小型丸底壺（2）や丹塗りの埴（3）を含んでおり住居廃絶時に何らかの祭祀行為が行われたことも考えられる。小型丸底壺は、在地における模倣形であり、その属性上の特徴を布留式土器の編年に直接当てはめることは困難であるが、概ね古墳時代初頭～前半期に位置づけておきたい。S005も方形の竪穴住居跡と考えられるが、後世の削平のため東辺及び南辺の一部しか残存しておらず、住居の掘り込みも最深部では0.05m程度しか残っていなかった。遺物も僅少であったが、S004と大差ない時期のものと思われる。

古代

近世の溝S001を完掘したところ、床面で楕円形の浅い土坑が連続して6基検出された。（S068～S071・S074・S075）S001により削平されているため、残存している深さは0.05～0.1m程度であるが、その埋土はS001とは明らかに異なるものであり、また、埴d等古代の遺物しか出土していない。このため古代の遺構である可能性が認められ、近年、下郡遺跡群等で検出例が増加しつつある当該期の道路状遺構と考えられる。S001は、調査区北



第72図 遺構配置図 (1/200)

側より切れ込む開析谷の谷頭部分に位置しており、元々存在した谷状の地形あるいは埋没谷をさらに掘り返したものと考えられることから、北側から谷に沿って登ってくる道路状遺構の一部である可能性を考えておきたい。

近世

東端で検出された大溝S001とその内部に繰り返し掘り込まれた溝4条を検出している。出土した陶磁器により、これらはすべて近世の所産と判断されるが、先述したように元々の谷状地形に掘り込まれたものであることから、これら自体も道路状遺構あるいはこれに付随する溝等の道路関連遺構である可能性も考えておきたい。これらのうち、S061からは越州窯系青磁碗Ⅰ-1-a類（第75図1）が出土しており、また、S001からは弥生時代終末～古墳時代初頭の多量の土器のほか平安時代から戦国時代にかけての陶磁器類も一定量出土している。従って今回確認できていないが、周辺には当該期の遺構群が存在することが推定される。その他 掘立柱建物跡2棟が検出されたが、遺物がきわめて僅少であったため時期が判断できなかった。また、風倒木痕と推定される土層横転遺構も2基（S006・S007）検出されている。これらのうちS007は竪穴住居跡（S004）に切られており古墳時代初頭以前に形成されたものであることが判明している。

まとめ

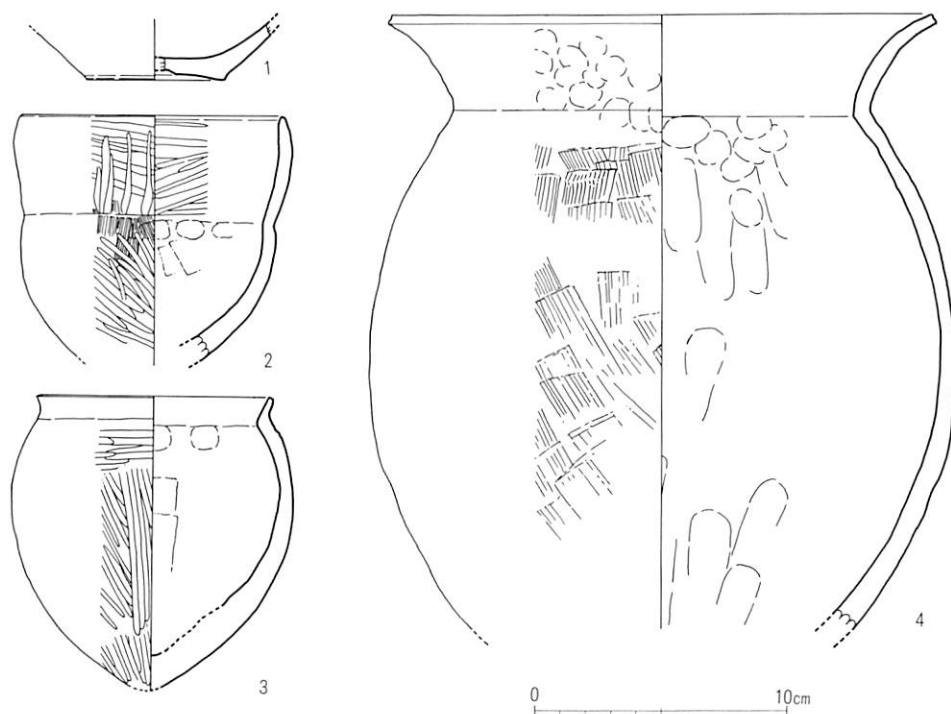
今回の調査では、古代の道路状遺構の可能性のある連続土坑が検出され、また、近世遺構からではあるが越州窯系青磁碗も出土したことが注目される。近年、横尾遺跡群を含む鶴崎丘陵周辺では当該期の遺跡の調査が相次いでおり、これらの成果も踏まえて遺跡の位置付けをはかっていく必要があろう。（高畠）



第73図 S004完掘状況（南東方向から）



第74図 道路状遺構検出状況（北方向から）



第75図 出土遺物実測図（1/3）

XIII 横尾遺跡群第70次調査（多武尾遺跡）

調査面積 800㎡
地域 E

調査期間 98.07.15～98.11.18
調査担当 池邊千太郎・水上 仁

遺跡は、大野川左岸の標高約31mの丘陵上にあり、南側は緩やかに谷に向かって傾斜しており、北側は丘陵上にかかる。主要な遺構としては、溝状遺構8条、掘立柱建物跡6棟、柵列4列、土坑9基、竪穴住居跡2基が確認された。

古墳時代の遺構は、直径が最大で7.0mの円形の竪穴住居跡（S211）、古代の遺構は、梁行2間（3.7m）×桁行2間（3.4m）の総柱の掘立柱建物跡（SB01）と梁行1間（2.5m）×桁行1間（1.5m）の掘立柱建物跡（SB05）が確認された。

中世の遺構は、溝状遺構7条、土坑1基（S320）、柵列1列が確認され、調査区の主体をなす。

溝状遺構（S001）は、南北端で西側に折れ曲がり、S012を掘り返している。掘り方は逆台形を呈し、幅2.5m、深度0.4mを計る。出土遺物には、龍泉窯系青磁輪花盤、輸入磁器染付皿、備前系播鉢、平瓦、京都系土師器、茶臼片等があり16世紀後半から16世紀末に比定できる。溝状遺構（S012）は、溝状遺構（S001）よりも古く、出土した茶臼片は、溝状遺構（S028）出土の茶臼片と接合し、両遺構がほぼ同一時期に埋没したことが判明した。

溝状遺構（S028）は、2条の溝状遺構（S002・S029）に切られ全体の形状は把握できない。

出土遺物には、備前系壺・播鉢、輸入青磁・白磁・磁器（染付）、軒丸瓦、瓦質土器、土師質土器など、輸入陶磁器の割合が多く、16世紀後半代である。

溝状遺構（S017）は、溝状遺構（S031）を掘り返し、出土遺物は、上層に漳州窯系染付皿など17世紀初頭にかかるものがあり、下層に京都系土師器など16世紀後半代のものが多く、最終埋没時期は16世紀末から17世紀初頭と考えられる。また、瓦質土器片が、S029（溝状遺構）出土のものと接合し、S017とS029は同一遺構と考えられる。出土遺物は、京都系土師器・輸入磁器染付碗など、16世紀後半代のものが多い。

溝に囲まれた内側には建物跡が多数存在しているが、中でも、梁行3間（6.2m）×桁行2間（4.1m）の大型の掘立柱建物跡が1棟（SB02）確認された。出土遺物には、石製の硯（硯縁）が出土している。

近代以降の遺構は、溝状遺構1条（S002）と、土坑3基（S003～S005）が確認されている。

今回の調査では、16世紀代の溝状遺構が6条確認され、古い溝状遺構（S012・S031・S120）は、16世紀後半から末頃に、新しい溝状遺構（S001・S017・S029）によって掘り返しを行っている。また、平行関係にある掘立柱建物跡群や柵列が溝の西側に集中している。また、S001と、第67次調査区の溝状遺構（S082）からそれぞれ出土した石臼片が接合した事実を考えると、一辺が30m前後の方形の溝を囲む居館の存在が想定される。さらに、溝状遺構から出土する遺物には、輸入磁器や石臼片が少なくないことを考えると、かなりの経済力をもった人物・組織の存在が考えられる。

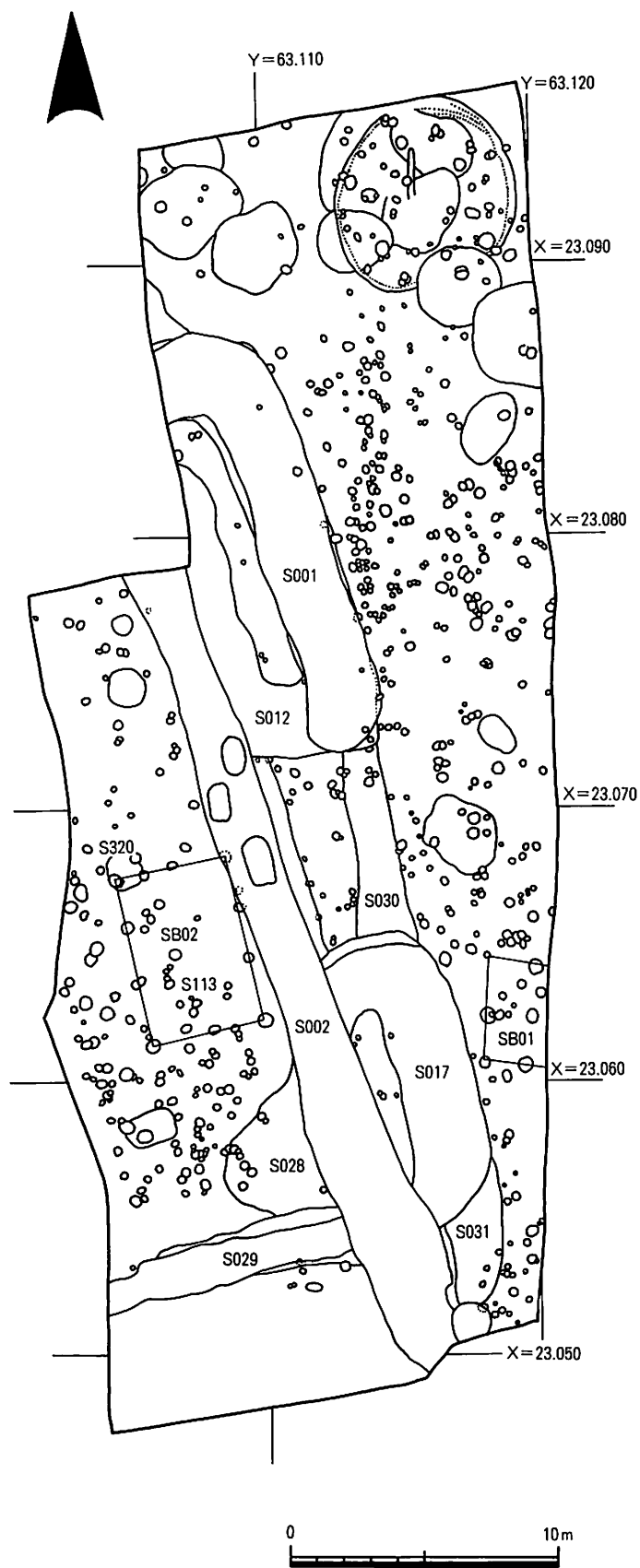
（池邊・水上）



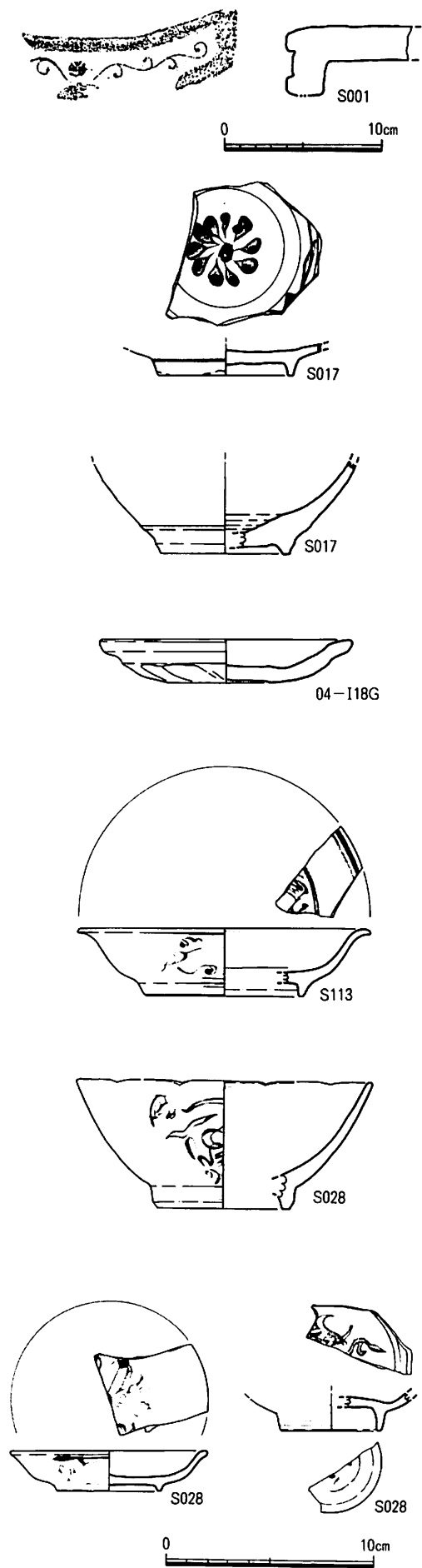
第76図 調査地点位置図



第77図 調査区全景（南方向から）



第78図 遺構配置図 (1/250)



第79図 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

XIV 横尾遺跡群第71次調査（多武尾遺跡）

調査面積	1,300㎡	調査期間	98.10.08～99.02.03
地域	E	調査担当	池邊千太郎・安部知美

遺跡は、大野川左岸の鶴崎丘陵上に位置し、区画整理事業に伴う道路建設によって調査が行われた。調査地点は攪乱が広範囲で見られ、特に東側では攪乱がひどく、遺構の遺存状況がよくない。

調査の結果、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構6条、土坑20基、地層横転遺構2基ほか、多数の柱穴が確認された。

掘立柱建物跡は、SB01とSB02の2棟確認された。SB01は、1間×4間の掘立柱建物跡で、北側の桁行7.8m、梁行5.0mを有する。桁行方向はN-87°-Eである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。さらに、SB01の東側に付随する状況で、南北方向に延びる柵列（SA01）を確認している。SB02は、2間×2間の総柱建物跡で、東西の柱間2.

0m+1.9m、南北の柱間2.1m+1.9mを有する。主軸方向はN-5°-Wである。遺物は、16世紀後半に比定される京都系土師器皿が1点出土している。

調査区内で溝状遺構は6条確認された。

溝状遺構（S105）は、東側が攪乱により切られ、西側は削平を受け次第に浅くなって消失する。検出幅2.0～2.5m、検出長6.5mを有する。遺物は、青磁片や土師器環、播鉢などが出土しており、中世に比定される。

中央には、南北に走る溝状遺構（S065）とこれにつながる溝状遺構（S052）がある。S065は、南端北端ともに攪乱による削平をうけているが、長さ約17.0m残存しており、中央は比較的遺存状態がよい。幅が0.35～0.4mのU字形の断面形状に0.2m大の礫が配列されている。S052は西側のS065の分岐点から2m余りのところに土坑状の掘り込みが見られ、多量の礫が含まれている。こうした構造から、これらの遺構は暗渠的な施設と考えられる。S065からは、配列石に混じって二次的に転用された茶臼の上臼部分が出土し、挽手口に施された菱模様が見られた。

溝状遺構（S001）は調査区西端を南北に走り、土坑（S080）に切られる。幅は0.45～0.65m、検出長は5.7m、深さは0.05～0.15mを有する。遺物は磁器や陶胎染付の碗、土人形、瓦質土器の火鉢が出土している。年代は19世紀前半～中葉に比定される。

調査区内で確認された土坑20基は、その大半が近世の所産であり廃棄土坑と考えられる。

土坑（S012）は、長軸1.1m、短軸0.6～0.8m、深さは0.45～0.5mを有する。人為的な堆積状況が窺え、埋土中からは陶胎碗や広東碗が出土しており、遺構の埋没年代は近世末期である。土坑（S020）は、長軸は1.3m、短軸は1.0m、深さは0.5mを有する。人為的な堆積状況が窺え、土坑内からは磁器紅皿と瓦質土器の破片が出土している。土坑（S028）は、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.2mを有する。土坑内には甕が埋置され、トイレ遺構と思われる。甕の内側床面直上からは煙管の吸口が出土している。土坑（S050）は、0.9×0.9mの隅丸正方形で、深さは0.3mである。上層には焼土や炭とともに見込み蛇の目釉剥ぎが施された18世紀中頃～19世紀初頭の肥前産の磁器皿や、18世紀後半の型打ち成形による磁器紅皿など多くの遺物が出土している。なお、上部の壁面には被熱による赤変がみられたが、遺構の性格は不明である。

以上のように調査区の主体を占めるのは土坑や埋甕など近世の時期のものである。また、掘立柱建物跡（SB01）と柵列（SA01）については遺物が出土しておらず時期は特定できないが、掘立柱建物跡（SB02）と建物配置が類似することから同時期の可能性がある。溝状遺構（S105）はSB01に対し、ほぼ並行であることから区画



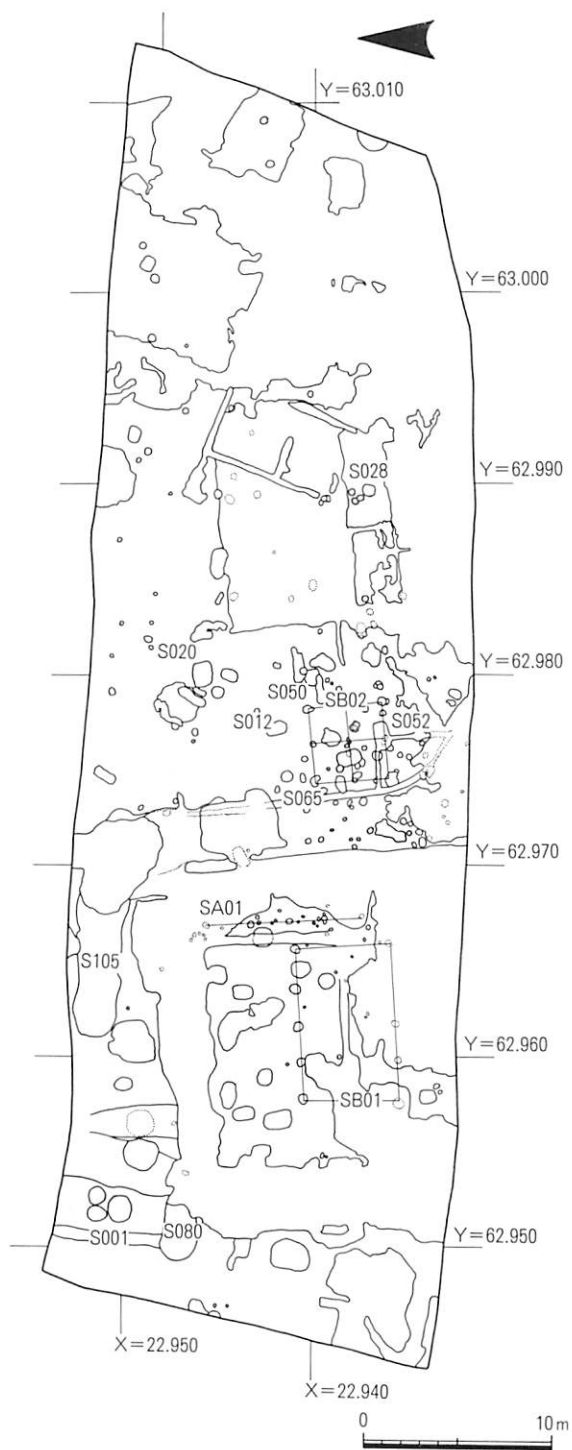
第80図 調査地点位置図

溝の可能性も考えられ、規格性のある建物配置の状況が見受けられる。また、北側に位置する第68次調査区で確認された掘立柱建物跡群（中世末～近世初頭）と今回確認されたものとが、方向性、柱間の間隔において類似しており、広い範囲での中世段階での集落の存在が窺える。

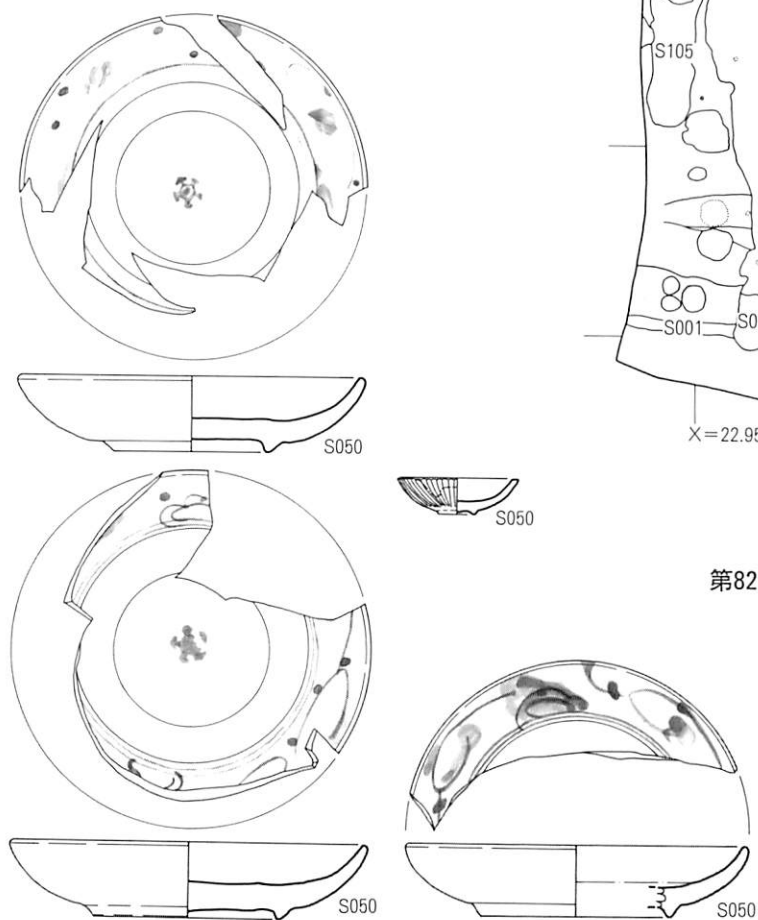
（池邊・安部）



第81図 調査区全景(西方向から)



第82図 遺構配置図 (1/400)



第83図 出土遺物実測図 (1/3)

XV 横尾遺跡群第72次調査（多武尾遺跡）

調査面積 600㎡
地域 E

調査期間 98.11.17～98.03.02
調査担当 池邊千太郎・永松正大

調査区は、弥生時代後期の環濠集落多武尾遺跡の範囲内に所在する。

調査の結果、弥生、中世、近世～現代の遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡（SH005・047）2基を確認した。SH005は円形プランを持ち、地床炉や貼床、壁周溝等は明確に確認できておらず、灰溜土坑の上面や、住居跡内で焼土の集中が見られる。中央から灰溜り土坑（隅丸長方形）が検出され、土坑内から、石器、弥生時代後期前葉の壺、鉢、甕、高坏等が、埋土中浮いた状況で出土した。支柱穴は、5本と思われる。SH047は、壁周溝のみ確認され、平面円形と考えられる。また、SD002の埋土中から弥生時代中期末～後期前葉所産の土器、及び石器が多数出土しており、削平時に一気に流れ込んだものと思われる。



第84図 調査地点位置図

中世の遺構は、土壇墓（SK034・066）2基、溝状遺構6条が確認された。SK034・066は、平面円形で径約0.95m、土壇内に掘り込みが確認された。土壇内からは、溶解した人骨片が確認され、さらに遺構埋土の土層堆積に不整合が見られる点、またSK066の遺構埋土内から鉄釘3点が出土する点など、木棺等の遺構内施設を持つ墓壇と考えられる。出土遺物は、SK034から瓦質碗4点、土師質土器小皿1点（瓦質焼成）、京都系土師器皿1点・小皿2点が出土し、SK066からは、前述した鉄釘以外に瓦質碗1点、刀子2点が出土している。特に注目すべきは、計5点の瓦質碗である。瓦質碗は、近年報告事例が増えており、今回の資料のように完存品で、一括性が高いのは初見であると思われる。5点の法量は、規格性をもつもので、口径11cm前後、底径4.1～4.8cm、器高4.5～5.1cm、内面コテ状工具によるミガキ調整、いわゆるミガキbが見られ、外面は横ナデをした後に、コテ状工具と思われる縦方向のミガキが施されている。高台部は、貼付高台である。土師質土器小皿は、ロクロ成形による回転糸切り底で、口径8.4cm、底径4.9cm、器高2.1cmである。京都系土師器皿は、口径12cm、底径4.8cm、器高2.5cmで、口縁部に強い横ナデを施すもので、16世紀後半（塩地氏の編年2期）の所産と考えられ、埋納時期も当該期と想定される。京都系土師器小皿は、口径7.8cm、器高2cm前後、内面に「の」の字ナデを施している。口縁部には煤が付着し、灯明皿に使用したと考えられる。

近代～現代の道路遺構（SF001）に切られる形で、近世の溝状遺構（SD002）1条が検出されている。SF001、SD002ともに、東西方向に延び、調査区外に逃げていく。SD002は、幅が約4m、深さは検出面から約0.9mで、断面逆台形を呈している。染付磁器碗（18世紀前～中）や、胎土目段階の灰釉陶器皿（1580～1600）が出土し、遺構の初現は18世紀中頃と思われ、廃絶期は道路遺構SF001の造成期に重なると考えられる。SF001は、遺構の幅が約5.5m、深さは検出面から最終段階の路面まで約0.9m、床面まで約1.5mを数える。最終段階の路面には轍跡や、路面の両側に側溝が付随する。土層観察の結果、本遺構は掘り込み知行を伴う道路遺構で、最下層で地山を掘り込んだ側溝が確認できた。その側溝を埋め戻し、砂利、粘土と粘質土を版築状に突き固め嵩上げし、小礫



第85図 調査区全景（北方向から）

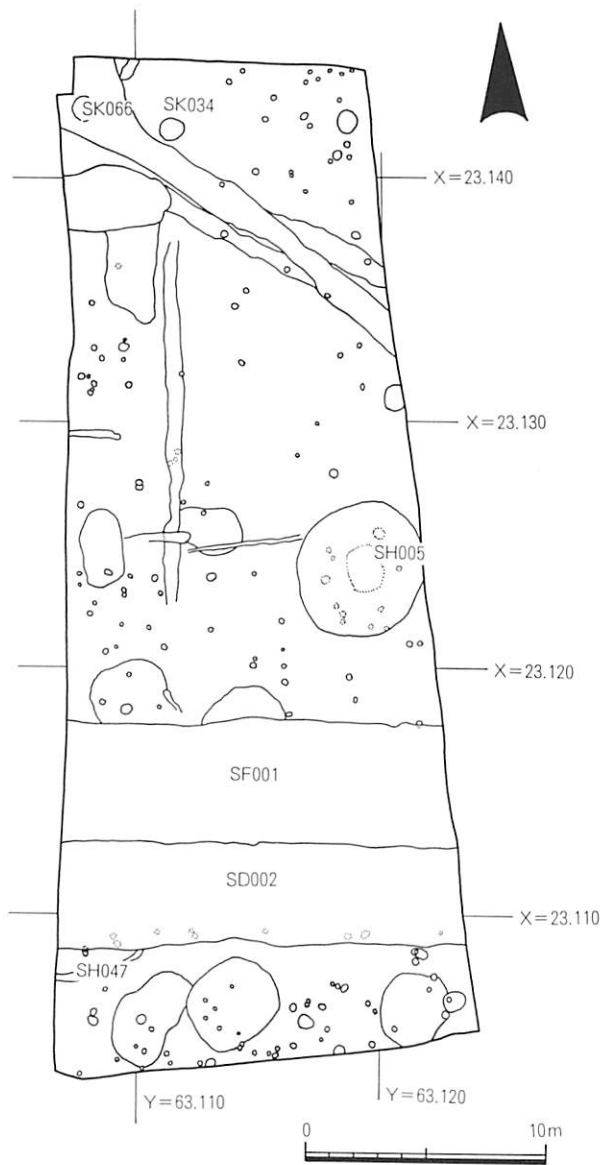
と砂を敷いた道路硬化面が認められ、道路面が計3回形成されている。SF001は昭和23年頃の農地整備事業で廃絶しており、最終段階の道路面上層には明らかな客土の流れ込みが認められる。

本調査区で、弥生時代において、多武尾遺跡の集落が台地の北西へ広がるのを確認できた。戦国期の遺構では、土壌墓を確認し、土壌墓内から出土した瓦質埴は、国東、宇佐地方で報告例があり、大野川流域でも確認されつつある資料である。出土した瓦質埴の外面縦方向のミガキは、暗文を意識したと思われ、近畿の大和地方では青磁碗模倣の縦方向にミガキをもつ瓦質埴の出土例が報告され、今回の資料も輸入青磁碗の連弁文を模倣したものであろうか。今後の資料増加を待ちたい。近代～現代の道路遺構が確認され、第68次調査に続き道路遺構の構造が解明できた。今回は道路遺構の機能時期を確定できていない。道路遺構の造成にはまだ多く不明点があり、今後の調査に期待したい。

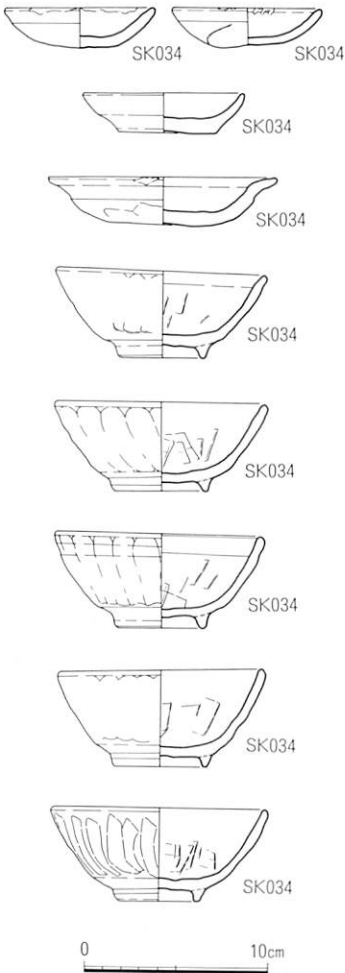
(永松)



第87図 SK034遺物出土状況



第86図 遺構配置図 (1/300)



第88図 出土遺物実測図 (1/4)

XVI 横尾遺跡群第73次調査（多武尾遺跡）

調査面積 800m²
地域 E

調査期間 99.02.01～99.03.08
調査担当 池邊千太郎・栃原嘉明

遺跡は大野川下流左岸、横尾地区区画整理事業区域の最南端に位置する。このうち乙津川支流の谷川に開析された河川敷部分が今回の調査区である。

この場所は、昭和の頃は水田として利用されていたため、上層0.2mに水田層を確認した。その下層は、川の氾濫や川の流れの変化による上流からの土砂・礫の堆積層が5層ほど重なった状態であった。最下層の黒褐色土層には土師器を含んでおりその下層から遺構が検出された。なお、表土から検出面までは0.75mほどである。

調査の結果、検出された遺構は、溝状遺構（S001）1条、土器溜まり遺構、土坑、ピット多数である。

溝状遺構（S001）は、幅2.5mの溝が弧を描き、両端を調査区外に延ばす。この溝は台地からの流水を河川に流す機能をもっている。埋土からは、土師器の甕・蓋が出土しており最終埋没時期が9世紀前半代に比定される。

調査区東よりには、土師器の甕・壺・移動式カマドを埋設した遺構が確認された。S007は、8世紀後半代の甕と土鍾4点が出土した。S008は、9世紀代の土師器壺が直立した状態で埋設されていた。肩部は壺の内側に落ち込んだ状態であり、口縁部は河川によって削平されている。S010は、9世紀代の移動式カマドが出土し、大半が河川によって破碎されている。



第90図 調査区全景(東方向から)



第91図 S008遺物出土状況

調査区東端には8世紀後半から9世紀前半の土師器が大量に出土する土器溜まり遺構が確認された。器種は、蓋・甕・甕・埴・坏・皿・移動式カマドをはじめ、黒色土器A類埴・製塩土器・土鍾など多くの遺物が出土している。

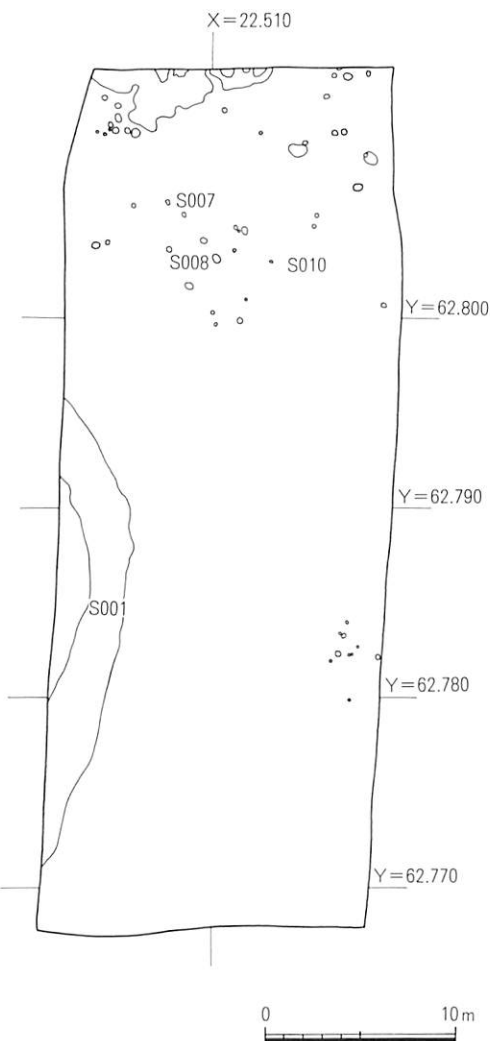
以上、遺跡の状況から、平成10年に調査が行われた井ノ久保遺跡に類似している。今回の調査では

土師器焼成坑が確認できなかったが、この付近で土師器が焼成された可能性は高く、井ノ久保遺跡の資料との比較検討を行う必要がある。（池邊）

参考文献：「井ノ久保遺跡」
大分市埋蔵文化財年報Vol.8
大分市教育委員会 1997



第89図 調査地点位置図



第92図 遺構配置図 (1/400)

多武尾遺跡
横尾遺跡群
第73次調査

XVII 横尾遺跡群第74次調査（多武尾遺跡）

調査面積 1010㎡
地域 E

調査期間 99.02.16～99.03.31
調査担当 池邊千太郎

遺跡は大野川下流左岸、横尾地区区画整理事業区域の中央に位置する。
調査区は南のA区と北のB区に分かれ、調査面積は1,010㎡である。

調査の結果、溝状遺構9条、地層横転層4基、ピット多数を検出した。

このうち、溝条遺構（S009）は、A区で東西方向に延び、一部北側のB区へT字状に分岐している。溝の幅は最大2.0m、深さは0.5mほどである。掘り返しが1度認められるが、埋土から陶器碗・陶胎碗・白磁の小碗・磁器の香炉などが出土しており、最終埋没時期は18世紀代と考えられる。

溝状遺構のうちS014・S011・S015・S010はいずれも検出面で幅0.7mほどで東西に平行して延びている。東側は削平によっていずれも消失しているが、西側ではS014とS015が5.0mの間隔で平行して延び、ほぼ同じ地点で収束している。類似する構造と平行して延びる溝であることから道路側溝の可能性も考えられる。S015からは15世紀代に比定される土師器小皿が出土しており、大枠でこの時期に比定される。

さらに、S010を切って東西に延びるS008は、床面に硬化面がないものの最下層に流水の状況が認められず、人為的な埋土層であることから道路状遺構と考えられる。掘り方は逆台形を呈し、幅1.8m、掘り込みの深さは0.5mを有する。遺物は中世の土師器坏片が出土し近世遺物を含まないこと、S015と一連の遺構であるS010を切って作られていることから、15～16世紀の範疇に比定される。

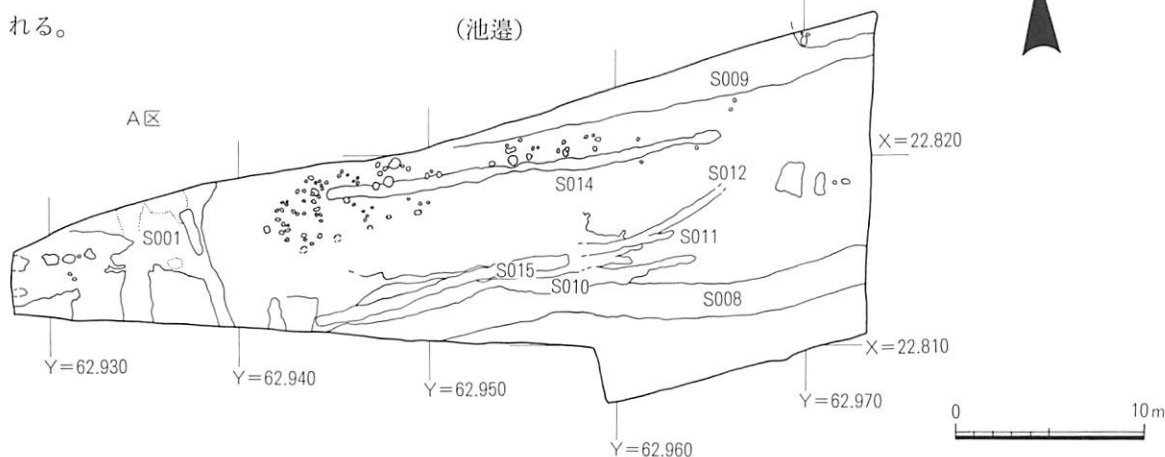
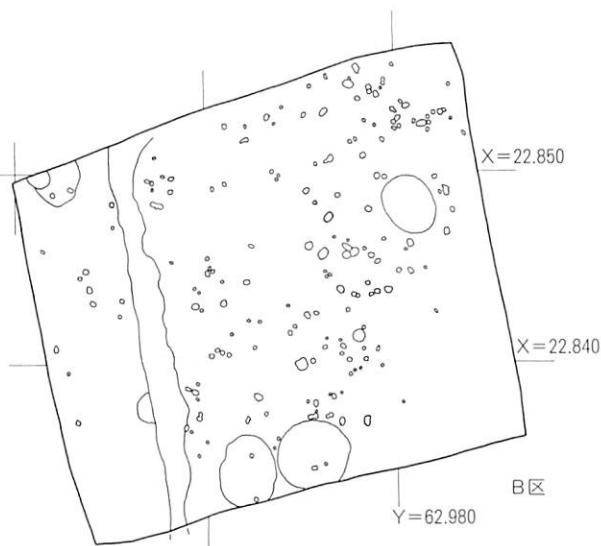
ピットは多数検出しているものの遺物が少なく、建物跡となるような配置は確認できなかった。

今回、15～16世紀代の道路状遺構と思われる遺構が検出したことから周辺遺跡との関連が注目される。

（池邊）



第93図 調査地点位置図



第94図 遺構配置図（1/400）

XVIII 中安遺跡第1次調査

調査面積 1200㎡
地域 F

調査期間 98.4.27～98.7.10
調査担当 藤沢敏夫・神尾 至

本遺跡は城原面と呼ばれている丹生台地の大字城原を中心に分布する段丘面にあり、東の方向には国指定遺跡「亀塚古墳」が位置している。調査対象地区は周知遺跡である中安遺跡にあたり都市計画道路横塚・久土線の建設に伴ない本調査を行った。

本遺跡は昭和30～40年代の開発により、かなりの削平を受けており、現況は、ほとんど3段からなる棚田、又は畑地であった。よって調査区も大きく3段に分かれ、遺構、遺物ともに少量であった。遺構は主に中段と上段の一部に集中していた。このような状況の中で今回の調査区では、中央に土坑を持つ方形周溝遺構、溝状遺構、竪穴住居跡、柵列状遺構とピット群を検出した。



第95図 調査地点位置図

方形周溝遺構 (S002)

方形周溝遺構の周溝は東西5.5m、南北4.7mで回っており、一部開口している。溝幅は0.8m～0.95mで深さは0.1m前後で南側が一番深い。周溝の南側からは古墳時代の遺物と思われる土師器の壺が出土した。これらは、その場で破却した遺物と思われ、一個体がある程度まとまった形で出土した。その隣からは粘土塊が検出された。内部からは須恵器の小片が出土したのみで何かを覆ったりしたものではなく、なんらかに使用した余りを廃棄した遺物と思われる。このほか周溝の南側から磨製石斧が一点出土している。中央の土坑は当初、土墳墓ではないかと考えられ、内部の土をふるいにかけるなど精査したが玉類などの副葬品などはなく、土器も小片ばかりで時期を特定できるような遺物は出土しなかった。また、土坑内部には粘土を使用した様子は見られなかった。この遺構は周溝からの遺物から古墳時代に属すると思われる。

溝状遺構 (S001)

溝状遺構は調査区内の南側、方形周溝遺構の西側に位置し、東西方向に延びており、直角に近い屈曲部を持っている。この屈曲部により竪穴住居跡の大部分を切っており、東側のほうでは一部が周溝と切り合っていた。溝自体は調査区の段落ちによって切られていた。溝の断面形状は逆台形である。この溝は特別掘り返された様子もみられなかった。埋土中には地山のブロックが含まれるなど一括して埋まった様子が見られた。この溝は直角に近い屈曲部を持つなど、何かを区画した遺構と思われるが調査区内ではこれに見合うだけの遺構は確認できなかった。時期の確定が出来る出土遺物としては、11～12世紀の土師器の坏が出土している。



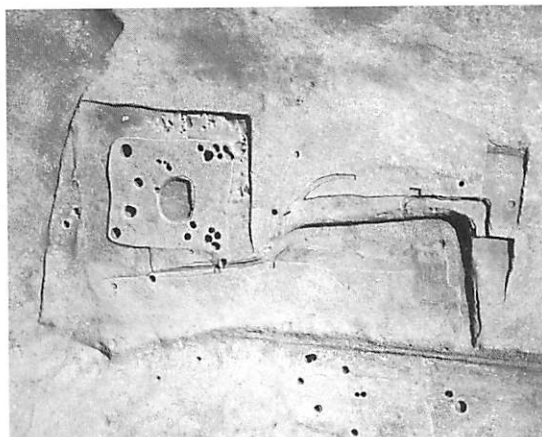
第96図 調査区全景（東方向から）

竪穴住居跡 (S024)

竪穴住居跡は溝状遺構の屈曲部により大部分が切り取られており、わずかに竪穴住居跡に付属すると思われる壁溝の東西方向の長さは約3.0mである。現存する床面からは柱穴、及び炉などは確認できなかった。この遺構からは壁溝の上面から5世紀の高坏の坏の部分が上を向けて出土した。

柵列状遺構

柵列状遺構は調査区内の東端に位置し、主軸をN-25°-Eの方向を向いている。柱穴間は約1.2mである。なお、調査区内においては、これに付属すると思われる遺構は確認できなかった。また柵列を構成する柱穴からの遺物はまったくなかった。

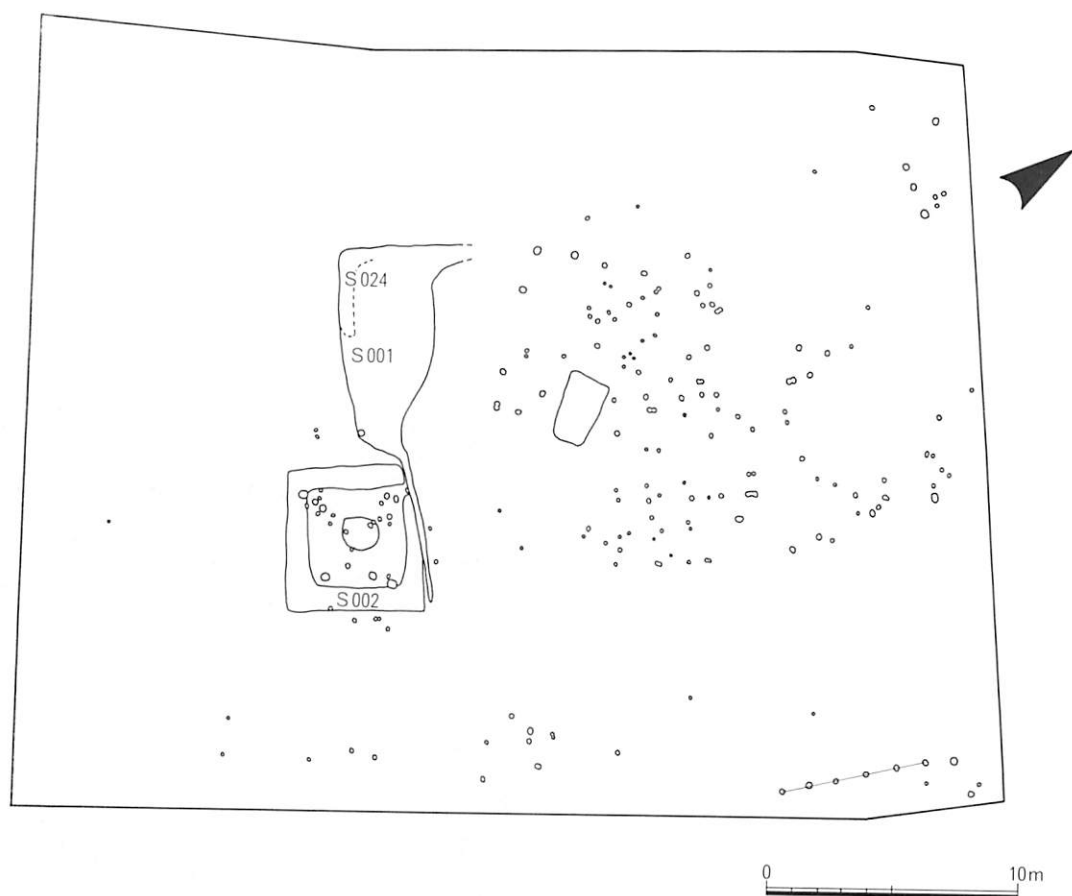


第97図 方形周溝遺構と溝状遺構

ピット群

ピット群は3段に分かれた調査区内の中段に集中していた。このうちから建物跡ではないかと思われる配置を一棟確認した。これは約2.0m×3.0mの大きさであり、6つの柱穴で構成されている。建物跡を構成すると思われる柱穴を含め、ほとんどのピットから時代を特定できる遺物は出土しなかった。ただピットの一つから6世紀末～7世紀初頭の須恵器の坏蓋が出土した。

(藤沢・神尾)



第98図 遺構配置図 (1/300)

XIX 久土遺跡第4次調査

調査面積 1800㎡
地域 G

調査期間 98.7.28～98.12.16
調査担当 藤沢敏夫・神尾 至

調査地は、久土遺跡第1～3次調査が所在する台地の南側にあり、丹生川沿いの平野を横切る県道大南・坂ノ市線を北側に見る台地の上に立地している。調査対象地区は、周知遺跡である久土遺跡にあたり、都市計画道路横塚・久土線の建設に伴ない本調査を行った。調査地の現状は、棚田又は畑地であり、調査区も3段に分けて設定した。調査区の北側約3分の1は、礫層であった。今回の調査では、主な遺構として石列1条、溝状遺構1条、土坑3基、ピット群を検出した。



第99図 調査地点位置図

溝状遺構 (S065)

溝状遺構は、3段に分けられた調査区の一番下の段で検出された。

南北方向に延びており、検出された溝状遺構は全長約20.0m、幅約1.7mであった。溝状遺構の南側は調査区外の里道により切られており、北側はごくわずかながら西側に曲がりながら徐々に浅くなり消滅している。遺構の断面形状はレンズ状であり、深さはほぼ0.3mであった。土層観察によると地山ブロックを含む暗褐色土であり、流水していた様子はなかった。なお、埋土の中より16世紀末の在地産の土師器の播鉢片、同じく16世紀末の火鉢片などが出土している。

石列遺構

石列は3段に分けられる調査区内の2段目の段落ち近くで検出された。検出された石列遺構は全長約13.0m、石列内には石臼片などが含まれていた。本遺構は段落ち近くに設定されていたことから水田または畑の畦を構成していたものではないかと考えられる。石列内からは間壁編年V期に相当する備前焼播鉢などが出土している。

土坑

今回の調査区内では3基の土坑が検出された。このうち2基は、一番上の段から、残りの1基は2段目から検出された。

a. S063

調査区内の一番上の段で検出された土坑であり、検出面での形状は1辺約1.5mの隅丸正方形で深さは約0.5mである。本遺構内には石臼片及び拳大の石が出土しており、埋土中には地山ブロックを含むなど一括して埋まった様子が確認でき、この土坑は廃棄用のものではないかと考えられる。なお埋土中より12世紀代の土師器皿、鍋、白磁片なども出土している。

b. S064

調査区内の一番上の段でS063の北側で検出された土

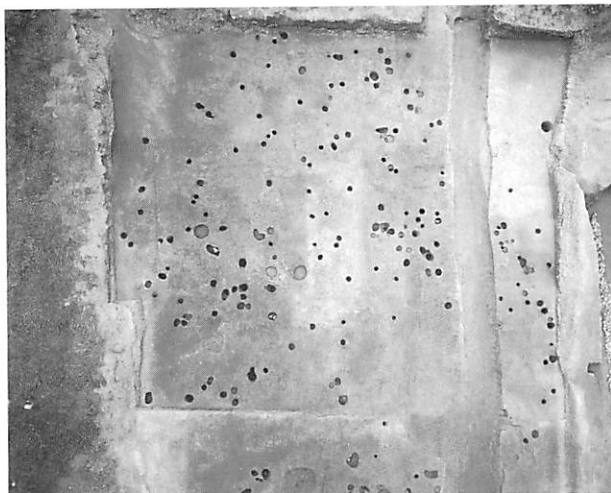


第100図 調査区全景（西方向から）

坑であり、検出面での形状は隅丸の長方形で長軸1.2m、幅0.9mである。断面形状は逆台形であり、深さは約0.2mである。埋土中より間壁編年Ⅴ期の播鉢片が出土している。

c. S066

調査区内の2段目で検出された土坑であり、検出面での形状は隅丸の長方形で長幅2.0m、幅1.5mである。断面形状はレンズ状で、深さは約0.2mである。埋土中より16世紀後半～末にかけての土師器の灰入れ片ひとつ、白磁のⅣ類に相当する口縁部片などが出土している。



第101図 溝状遺構と石列遺構

ピット群

ピット群はそこから建物跡と認識できる配置を1棟確認した。これは一番下の段で検出されたもので2間×2間の大きさである。各柱穴の深さは約0.15m～0.3mである。各柱穴からは時代を特定できる遺物は出土しなかった。それ以外のピットからは15世紀後半の土師器の坏が出土している。

(藤沢・神尾)



第102図 遺構配置図 (1/400)

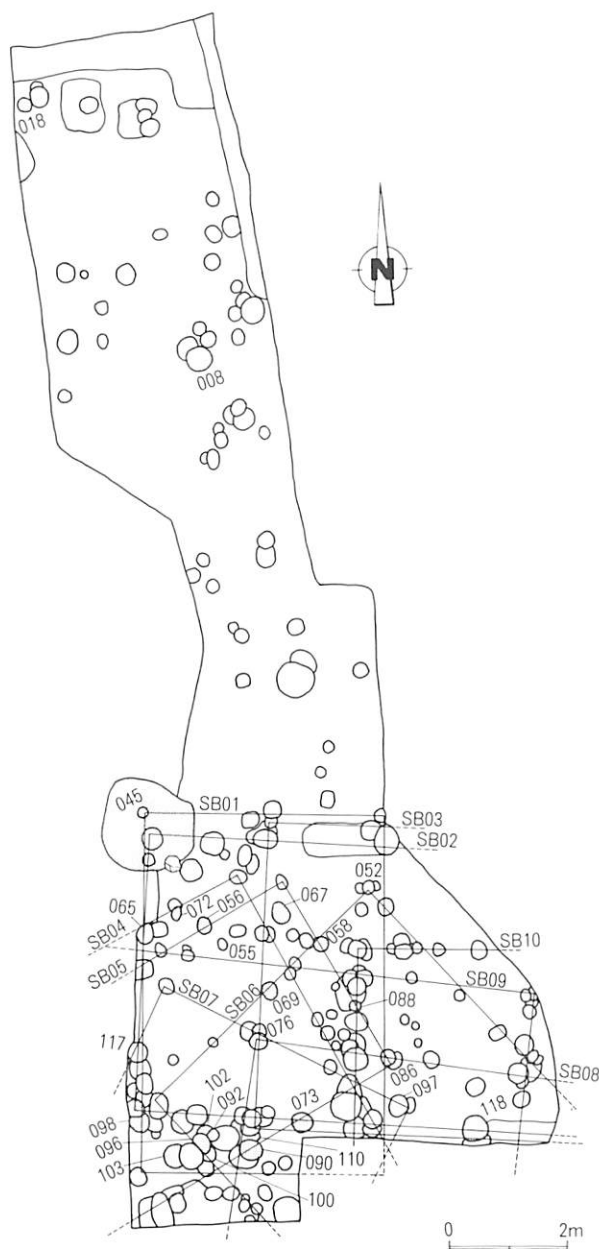
XX 上野遺跡群（上野丘東遺跡）

調査面積 約80㎡
地域 A

調査期間 98.06.03～98.07.03
調査担当 後藤典幸

今回の調査は、民間の共同住宅建設に伴う調査であり、調査地は周知遺跡である上野遺跡群内に所在し、上野丘東2-24にあたる。上野丘陵の東端部にある大友上原館跡より約200m南東に位置し、また、県文化課が調査したあけぼの学園跡より約50m南西に位置する。

調査地は、現況で北への傾斜が認められた。表土剥ぎ時に、調査地東側では、井戸など近現代の攪乱が著しく認められたので、比較的攪乱の少ない西側を調査の対象とした。



第104図 遺構配置図 (1/125)

調査の結果、古代から近世にお

ける柱穴群と中世の土坑一基を検出した。

調査区からは、地山と思われる安定した土層は検出されず、黄白色粘土と暗褐色土、山砂の混土層と、その下層から黄白色粘土層を検出した。上記混土層は、調査区北側より南側で厚く堆積していた。検出レベルは、ほぼ同一であるため、ある時期の整地層の可能性が考えられる。

調査区北側では、表土（埋土）から約0.4mほどで混土層となり、中央部では、攪乱層の下から黄白色粘土層がみられ、さらに南側では、表土から約0.8mほどで北側と同じ混土層が検出された。それぞれ検出した層の上面で、遺構は確認された。

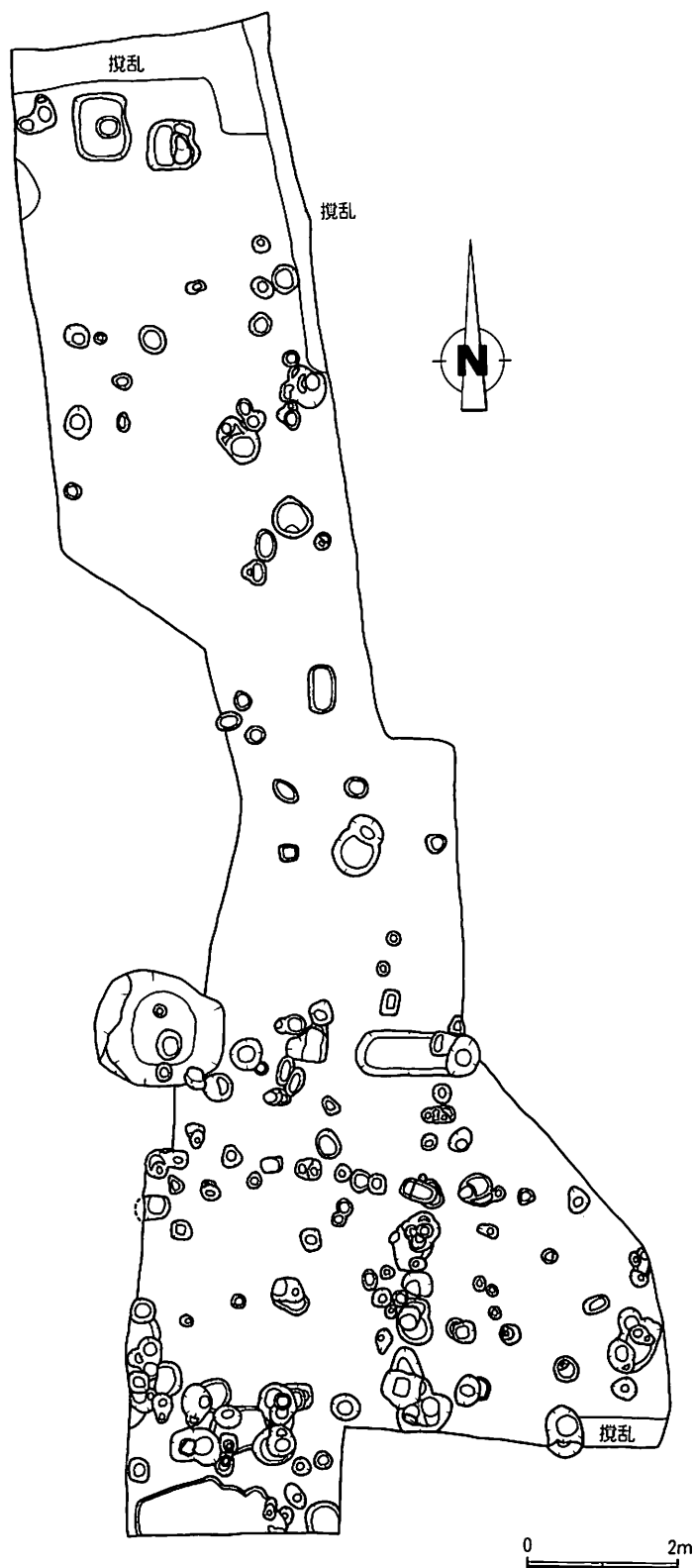
調査区全体から柱穴を検出したが、調査区南側では、切り合いがみられ時期の異なる掘立柱建物跡を10棟確認した。

遺物は、破片ではあるが、遺構に伴い多くの土師器が出土した。それらの大半は、戦国時代の16世紀後半から16世紀末に比定される京都系土師器であった。また、近現代の遺物も多くみられ、弥生土器片、須恵器片も若干検出された。

掘立柱建物跡は、切り合い関係から、大きくⅤ期に分けられた。出土遺物より、おおそⅠ・Ⅱ期が16世紀後半、Ⅲ期が16世紀末、Ⅳ・Ⅴ期が17世紀初頭の範囲であろうと思われる。また、建物跡の位置関係から、建物の同時期併存は考えられずⅡ～Ⅳ期はさらに細分されよう。しかし、残念ながら建物間



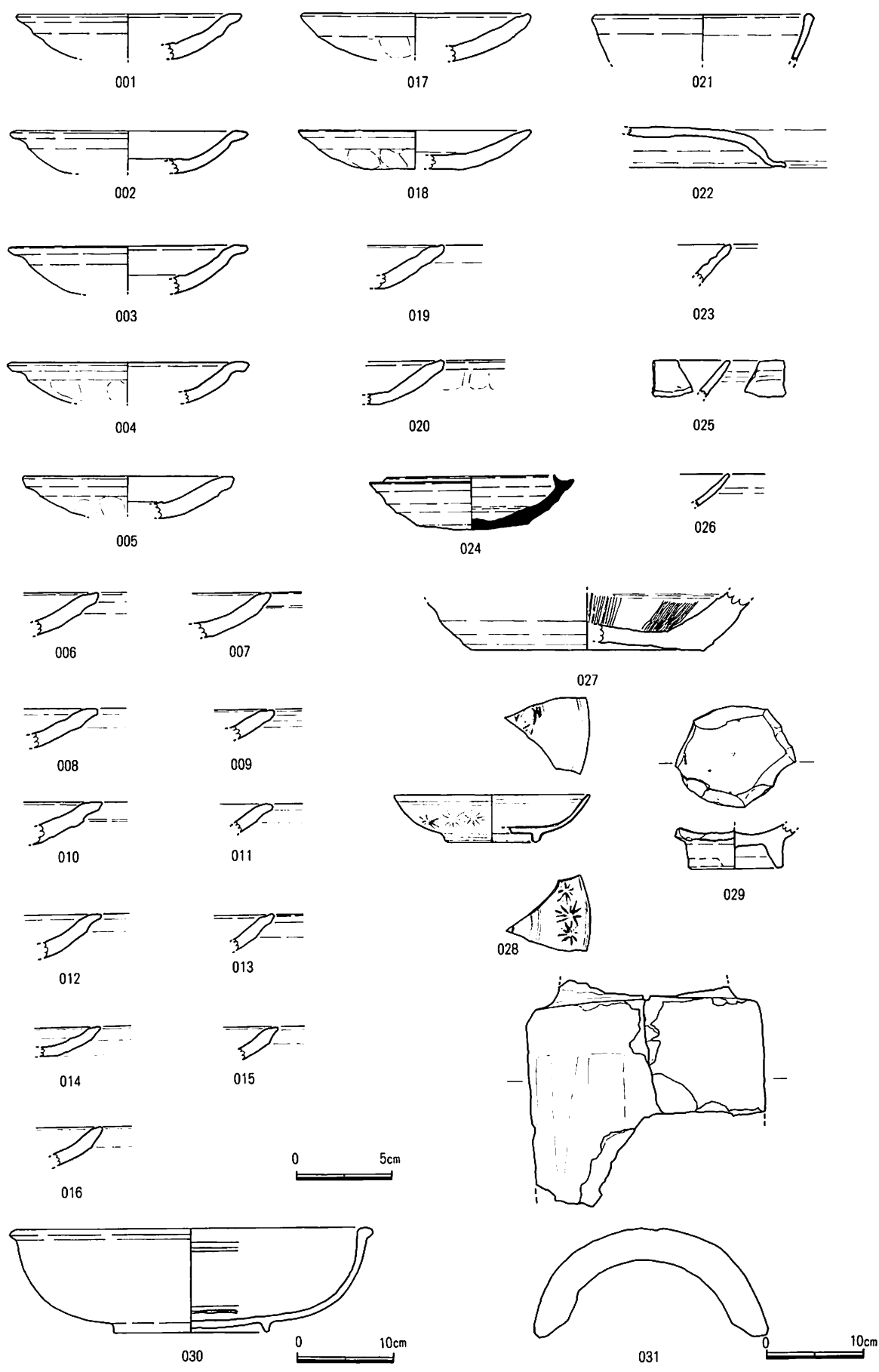
第103図 調査地点位置図



第105図 遺構平面図 (1/100)

に切り合いがなく、出土遺物からも新旧の区別がつかなかった。さらに、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の建物方向は類似し、方向を意識して建てられたものと思われる。

このように、狭い範囲の中で、16世紀後半から17世紀初頭にかけて、10棟もの建物が建て替えを続けながら存続していることや、多くの京都系土師器の出土などを考えると大友氏関連の遺跡であろうと思われる。（後藤）



第106図 出土遺物実測図 (1/3・1/6)



第107図 調査区全景（南方向から）

表 4 上野丘東遺跡遺物観察表

遺物 R番号	出土 遺構名 S番号	種類	特徴	器種	法 量 (cm)			年 代	備考
					口径	器高	底径		
001	045	土師器	京都系	小皿	(11.5)	—	—	16世紀後半	
002	058	土師器	京都系	小皿	(12.4)	2.2	—	16世紀後半	
003	092	土師器	京都系	小皿	(12.4)	—	—	16世紀後半	
004	096	土師器	京都系	小皿	(12.5)	—	—	16世紀後半	
005	096	土師器	京都系	小皿	(11.0)	2.1	(4.0)	16世紀後半	
006	045	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
007	045	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
008	045	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
009	045	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
010	056	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
011	067	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
012	069	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
013	090	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
014	098	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
015	098	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
016	110	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀後半	
017	045	土師器	京都系	小皿	(12.0)	2.4	(3.9)	16世紀末	
018	102	土師器	京都系	小皿	(12.2)	2.05	(3.2)	16世紀末	
019	076	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀末	
020	096	土師器	京都系	小皿	—	—	—	16世紀末	
021	073	土師器	—	碗	(11.6)	—	—		
022	072	土師器	—	蓋	—	—	—	9世紀前半	
023	086	土師器	—	坏	—	—	—	16世紀前半	系切り
024	—	須恵器	—	坏身	(8.8) (10.8)	2.8	5.8	17世紀中頃~後半	
025	018	陶器	絵唐津	碗	—	—	—	17世紀初頭	唐津系
026	118	陶器	—	—	—	—	—	17世紀初頭	唐津系
027	096	陶器	—	播鉢	—	—	12.6		備前産
028	090	磁器	染付	皿E群	(10.2)	2.45	(4.6)	16世紀中頃~後半	中国産
029	008	磁器	青白磁	碗	—	—	4.8	11世紀~12世紀	景德镇
030	103	瓦質	—	鉢	(37.8)	11.0	16.0		
031	—	瓦	—	丸瓦	—	—	—		

遺構 番号	間×間	器種	遺構の新旧関係	出土遺物 (遺物R番号)
SB01	2×3	N-1° 30'-E	SB03より旧・SB05より新 SB10より旧	S065京都系土師器 S117京都系土師器
SB02	2×3+α	N-4°-E	SB03より新・SB04より新	S118唐津 (025)
SB03	3×2+α	N-4°-E	SB01より旧・SB02より旧 SB04より新・SB07より新 SB08より旧	S076京都系土師器(019)
SB04	1+α×5+α	N-63° 30'-E	SB02より旧・SB03より旧 SB09より旧	S072土師器(022)
SB05	3×2+α	N-61°-E	SB01より旧 SB03より旧	S056京都系土師器(010) S058京都系土師器(002) S073土師器(021) S086土師器(023) S088京都系土師器
SB06	4×4+α	N-42° 30'-W	SB05より旧 SB08より旧	S069京都系土師器(012) S052京都系土師器 S100京都系土師器
SB07	3×α	N-27° 30'-W	SB03より旧・SB08より旧	
SB08	2+α×3+α	N-10°-E	SB03より新・SB06より新 SB07より新	
SB09	1+α×3+α	N-8°-E	SB04より新	
SB10	3+α×4+α	N-2° 30'-E	SB01より新・SB03より新 SB04より新・SB08より新	

遺構(掘立柱建物跡)切り合い新旧関係〈旧→新〉

	I	II	III	IV	V
掘立柱 建物跡	SB06	SB04 SB05 SB07	SB03 SB09	SB01 SB02 SB08	SB10

XX 豊後国分寺跡平成10年度確認調査

調査面積 270m²
地域 B

調査期間 98.07.04～98.09.01
調査担当 河野史郎

豊後国分寺跡平成10年度確認調査は、国史跡豊後国分寺跡の指定地内の民有地における個人住宅の建て替えに伴い建物計画地における遺構の有無の確認及びその保存を目的に行われた。

調査区は、豊後国分寺跡の推定回廊の内側、南東コーナーに近い部分に設定し、調査の結果、8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる梵鐘鑄造遺構の他、古代に位置づけられる小穴が2基、その他、昭和初期以降の建物基礎及び廃棄土坑・井戸等が検出された。特に、梵鐘鑄造遺構については、その残存状況も良好であり、古代の鑄造技術を復元するうえで貴重な情報が得られた。以下、九州では初めての検出例となった古代の梵鐘鑄造遺構について、その詳細を記す。

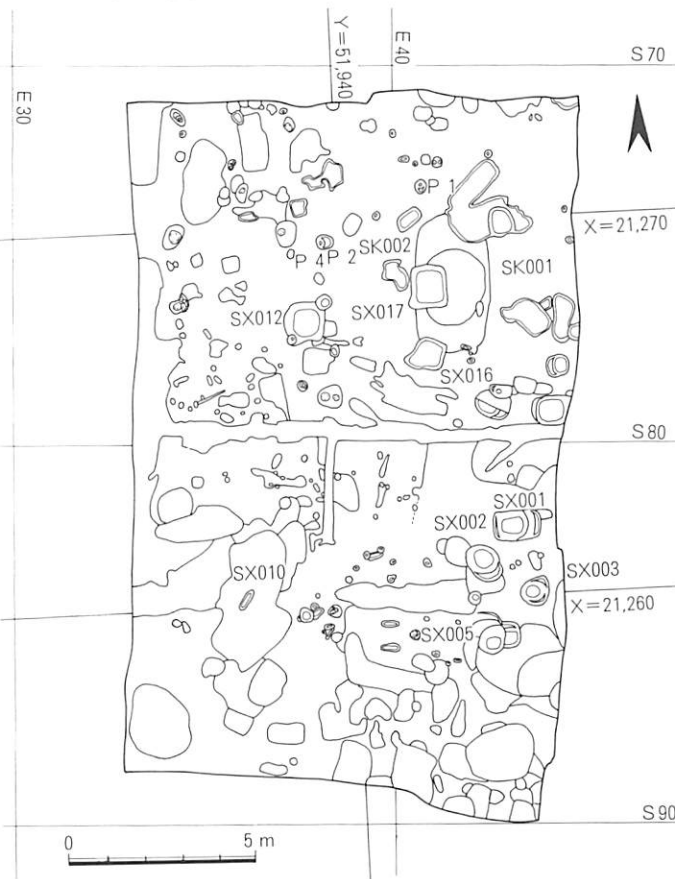
今回検出された梵鐘鑄造遺構は、鋳型に銅を流し込むために掘られる鑄造坑であり、平面プランは3.0×2.0mの隅丸長方形を呈し、深さは、0.7mを測る。土坑の中央には、鋳あがった梵鐘を取りだす際に掘られた2.1×1.7mの楕円形プランを呈する搬出坑が検出されている。この搬出坑の中からは、鋳型・溶解炉片・瓦・銅滓等が出土しており、搬出坑が、鑄造工程最後の片づけに使用されていたことがわかる。鑄造坑の本体については、底部にドーナツ状を呈するジョウ及び内型・外型の底部が残存しており、鋳型の設置状況が復元される状況であった。更にこれらの鋳型を固定する施設である掛木の痕跡が、作業面及び貼り床面の下層に空洞部として残っており、その埋設過程の復元についても可能な状況であった。

出土遺物には、鋳型・溶解炉（こしき炉）・銅滓・瓦・土師器等がある。鋳型については、外型・内型共に出土しており、その製品復元に加え鋳型成形技法の復元に係わる貴重な情報が得られた。溶解炉については、前述した片づけの際に廃棄されたものと考えられるもので、3段又は4段継ぎの構造が復元されていることに加え、こびりついた銅を剥ぎ取った痕跡から銅の再利用の状況が確認されている。この他、銅滓にまじって、帯金具が確認された。このような遺物が銅素材として使われたものであるのであれば、あるいは、官人が国分寺の梵鐘を鑄造するにあたり喜捨したものだろうか。

今回の調査では、鑄造坑底部に残るジョウや鋳型の底部に加え、出土した鋳型片から、豊後国分寺跡梵鐘鑄造遺構における鋳型成形技術の復元に関する貴重な情報が得られた。以下、出



第108図 調査地点位置図

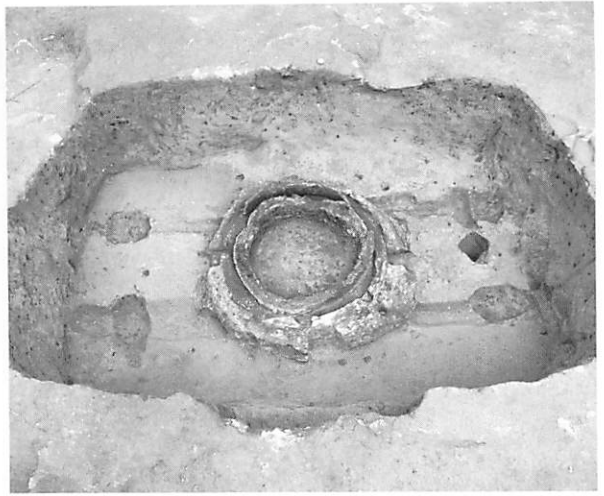


第109図 遺構配置図 (1/200)

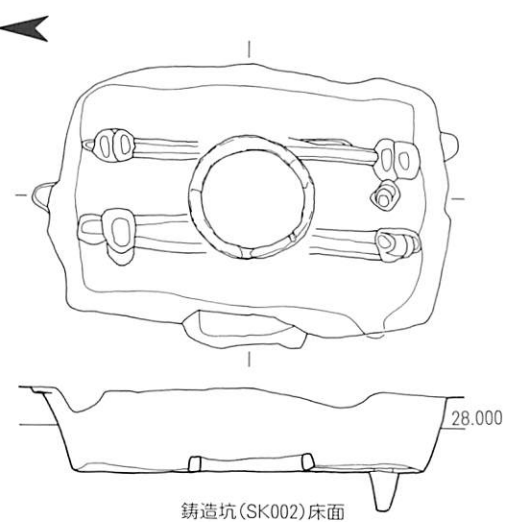
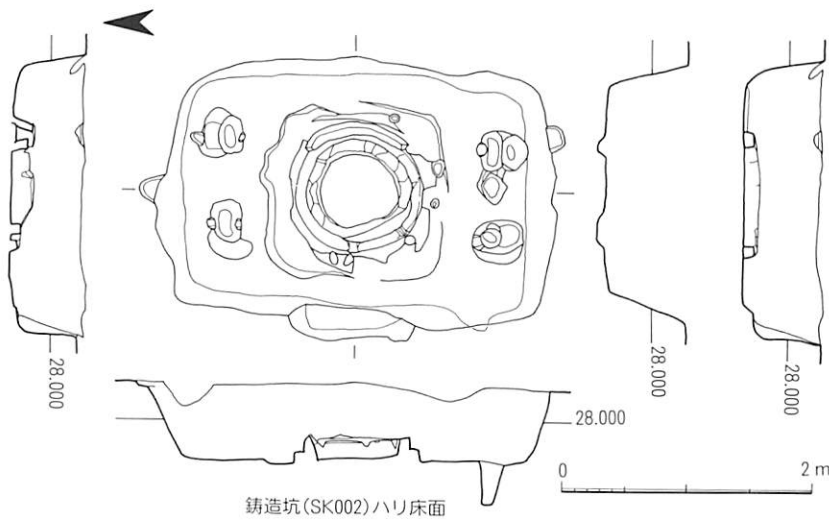
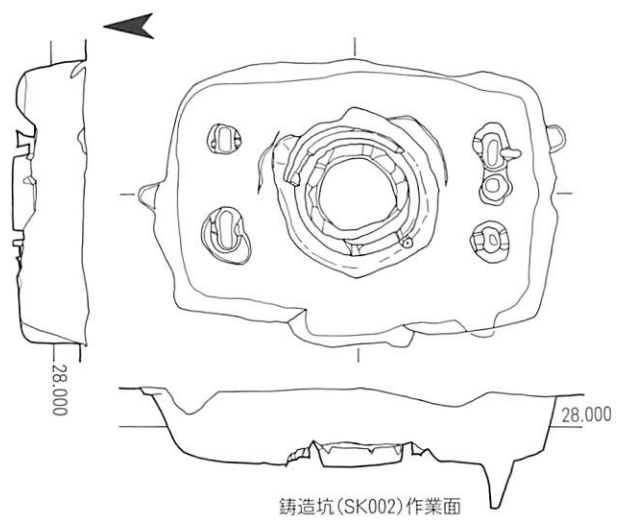
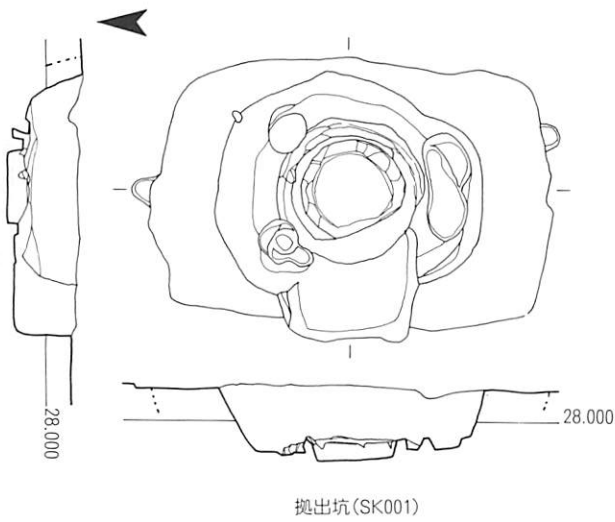
豊後国分寺跡
平成10年度
確認調査



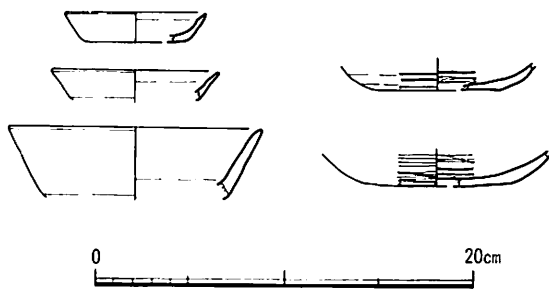
第110図 掛木埋設痕近景



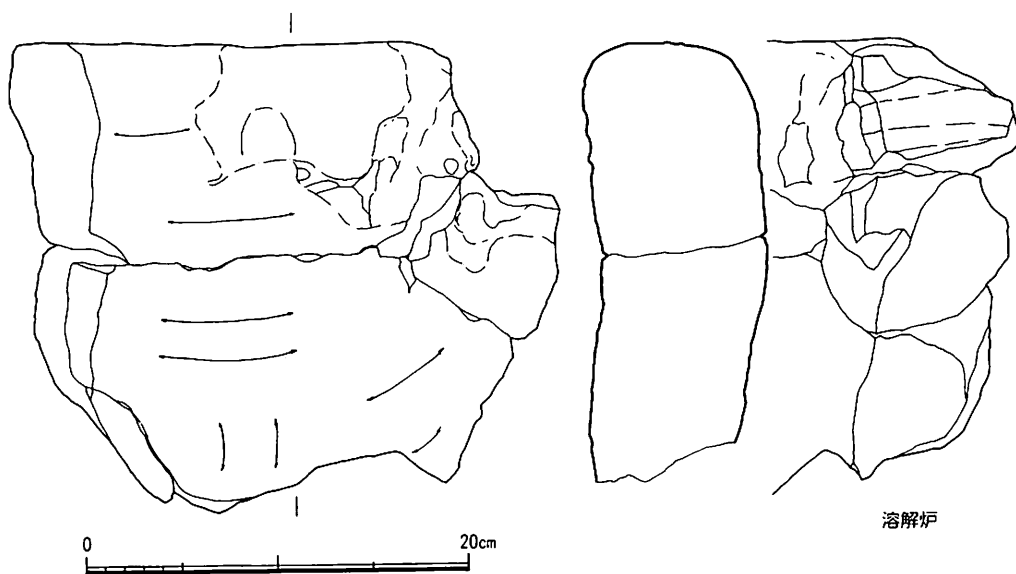
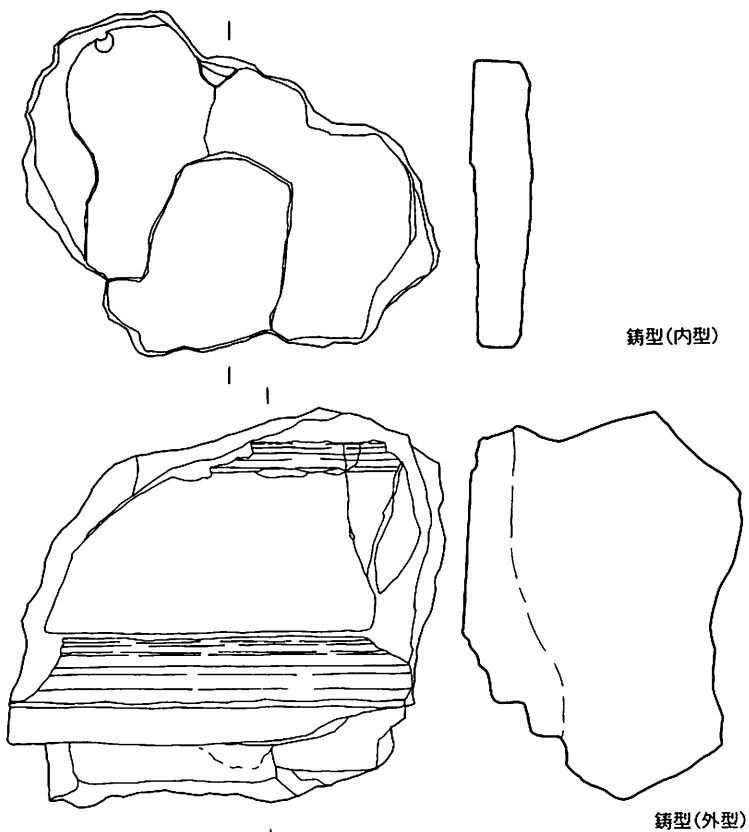
第111図 鑄造坑全景



第112図 梵鐘鑄造遺構実測図 (1/60)

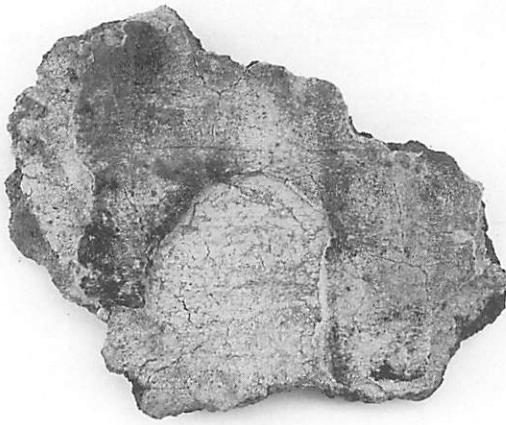


第113図 梵鏡鑄造遺構出土遺物実測図 (1/4)



第114図 梵鏡鑄造遺構出土遺物実測図 (1/4)

豊後国分寺跡
平成10年度
確認調査



第115図 鑄型（内型）



第116図 鑄型（外型）

土鑄型より復元される鑄型の成形方法について、考察を加えてまとめに替えたい。

現在、梵鐘鑄型の成形方法については、内型、外型共に挽型を使用する挽型法挽中子式と、内型を、削り中子で成形する挽型法込削り中子式の大きく2つの方法が存在し、現在復元されている古代の鑄型成形技術もこうした技法によるところが大きいといわれている。そこで、今回の調査例をみると、厚さ4cmと非常に薄い外型ではコミズナを込めることが困難であること、内型及びジョウに残る挽型の痕跡、鑄造坑内で内型が焼成された状況、南側の掛木の間にある柱穴及び北側の張り出し状の柱穴は、挽型を固定する「馬」に関する可能性をもつことから、きわめて挽型法中子式によって鑄型の成形された可能性が高いといえる。一方、挽型法挽中子式で鑄型を成形するには、鑄造坑内で、内型の成形がなされることから、その中心部には、挽型の廻転軸を固定する柱穴もしくは、鳥目受け等の存在が不可欠になる。今回の調査では、ジョウに残る挽型の痕跡は確認されているが、こうした軸を固定する施設については、内型焼成の際の焼土面の存在から確認できず、この点が問題点として残った。

古代における挽型法挽中子式の存在については、杉山洋氏により、現存する古代梵鐘の内側に挽型の痕跡が残されていることが指摘されており、今回の豊後国分寺の例がそれにあたるのであれば、その存在を遺構面で確認できた例となり、古代の梵鐘鑄造技術の復元や古代鑄物師の動向等様々な問題を投げかけるものとなった。加えて検出された梵鐘鑄造遺構は、その遺存率の高さ、時期的な位置づけ、立地、特殊な出土遺物等、古代の鑄造技術の復元はもちろんのこと、古代鑄物師の動向や、諸国国分寺の実態に至るまで、様々な問題を投げかけるものであり、今後の詳細資料整理を期待するところである。

（河野）

参考文献

「豊後国分寺跡」～平成10年度確認調査報告書～ 大分市教育委員会 1999

吉田晶子 1997「梵鐘鑄型の2つの造型方法について

～挽型法挽中子式と挽型法と削り中子式の比較と検討～」

『枚方市文化財研究会研究記要』第4集

XI 中世大友城下町跡第4次調査

調査面積 330m²
地域 A

調査期間 98.12.14～99.03.31
調査担当 河野史郎

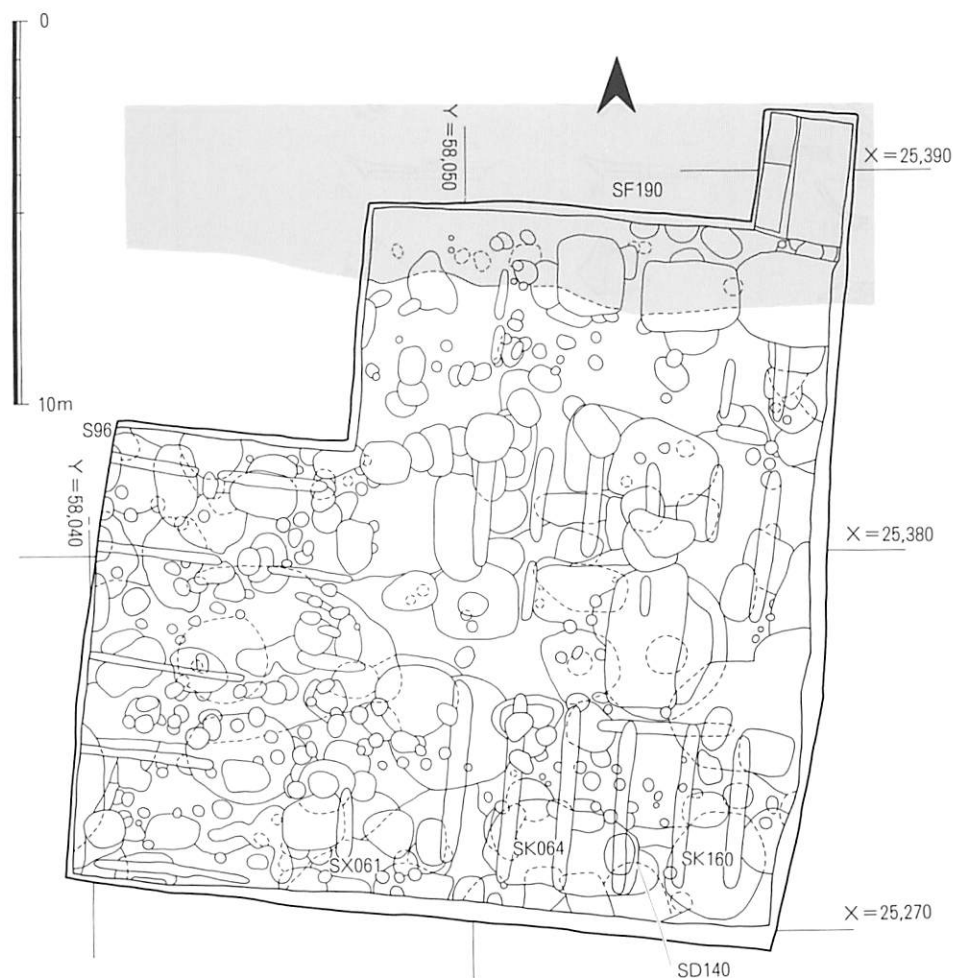
中世大友城下町跡第4次調査は、民間マンション建設に伴い行われた。遺跡は、大分川下流左岸に沿った標高4～5mの微高地に立地する中世府内町の一画、古絵図中の「上市町」にあたる。なお、調査地北辺の東西道路を挟んだ北側には「工座町」が存在する。

調査の結果、複雑な整地の状況が確認され、それに伴う遺構群が検出された。整地は、部分整地であり、調査区全面にわたるものではないが、その状況が良好に残る調査区南東壁の観察から大きく3面の遺構面が確認された。加えてそれぞれに火災の痕跡も認められており、注目される。以下上層より各遺構面から検出された遺構・遺物についてその概要を記す。

最上層の遺構面（第1面）は、表土直下にあたり、畑の開墾等で上面は削平を受けている。第1面からは火災処理と考えられる焼けた壁土が詰まった土坑や、焼けた石が詰まった土坑（SK064）、集石遺構、井戸跡等が検出されており、火災の痕跡が認められる。

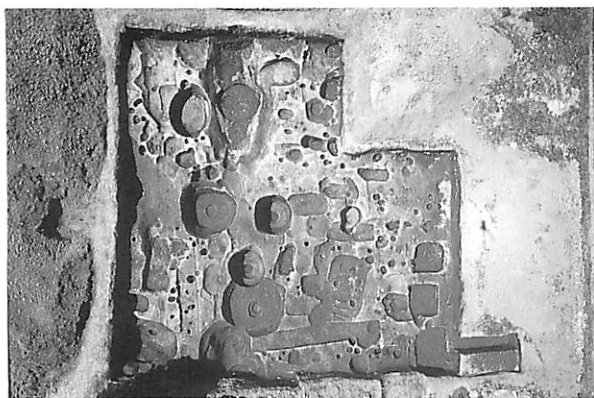


第117図 調査地点位置図



第118図 遺構配置図 (1/200)

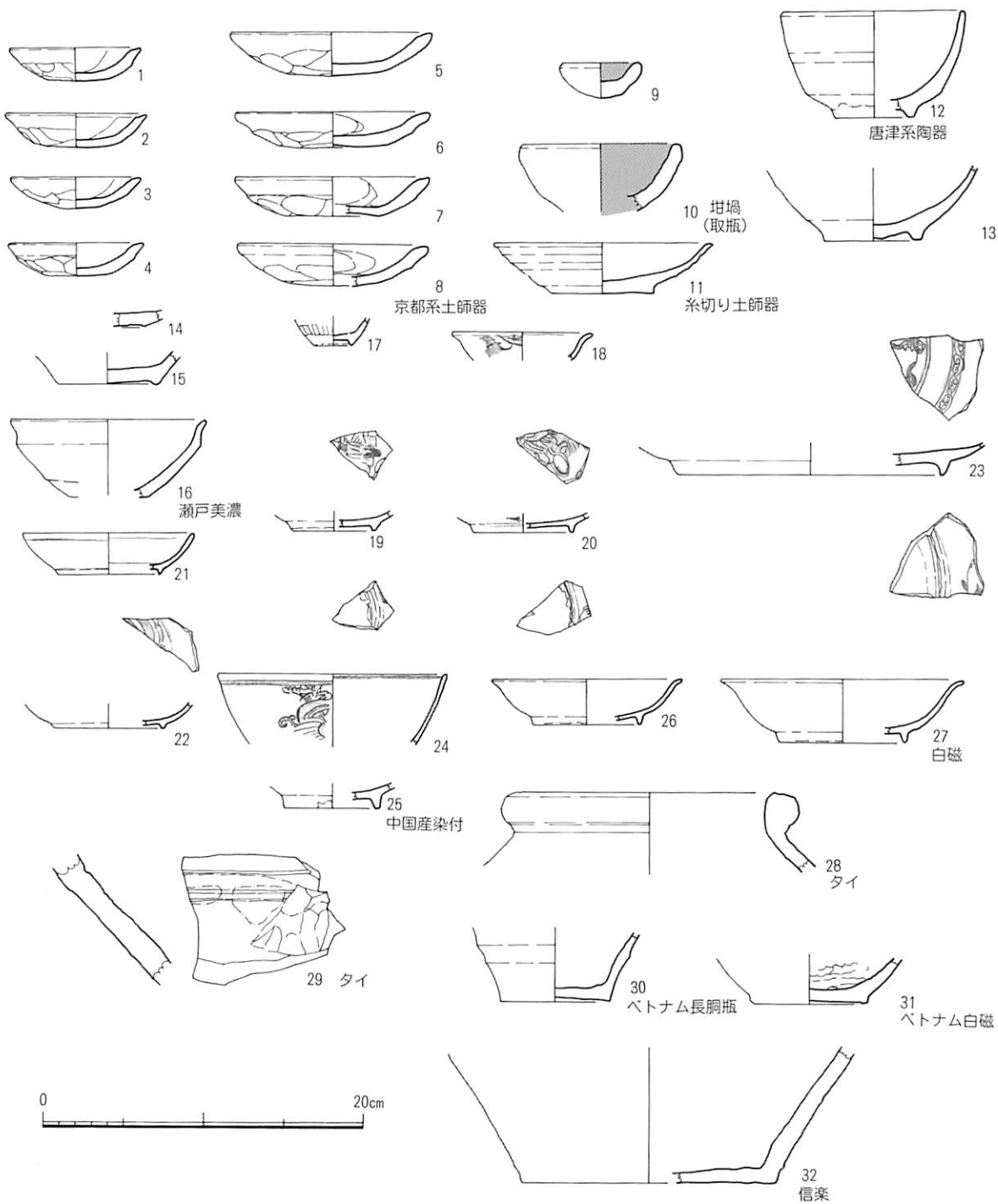
中世大友
城下町跡
第4次調査



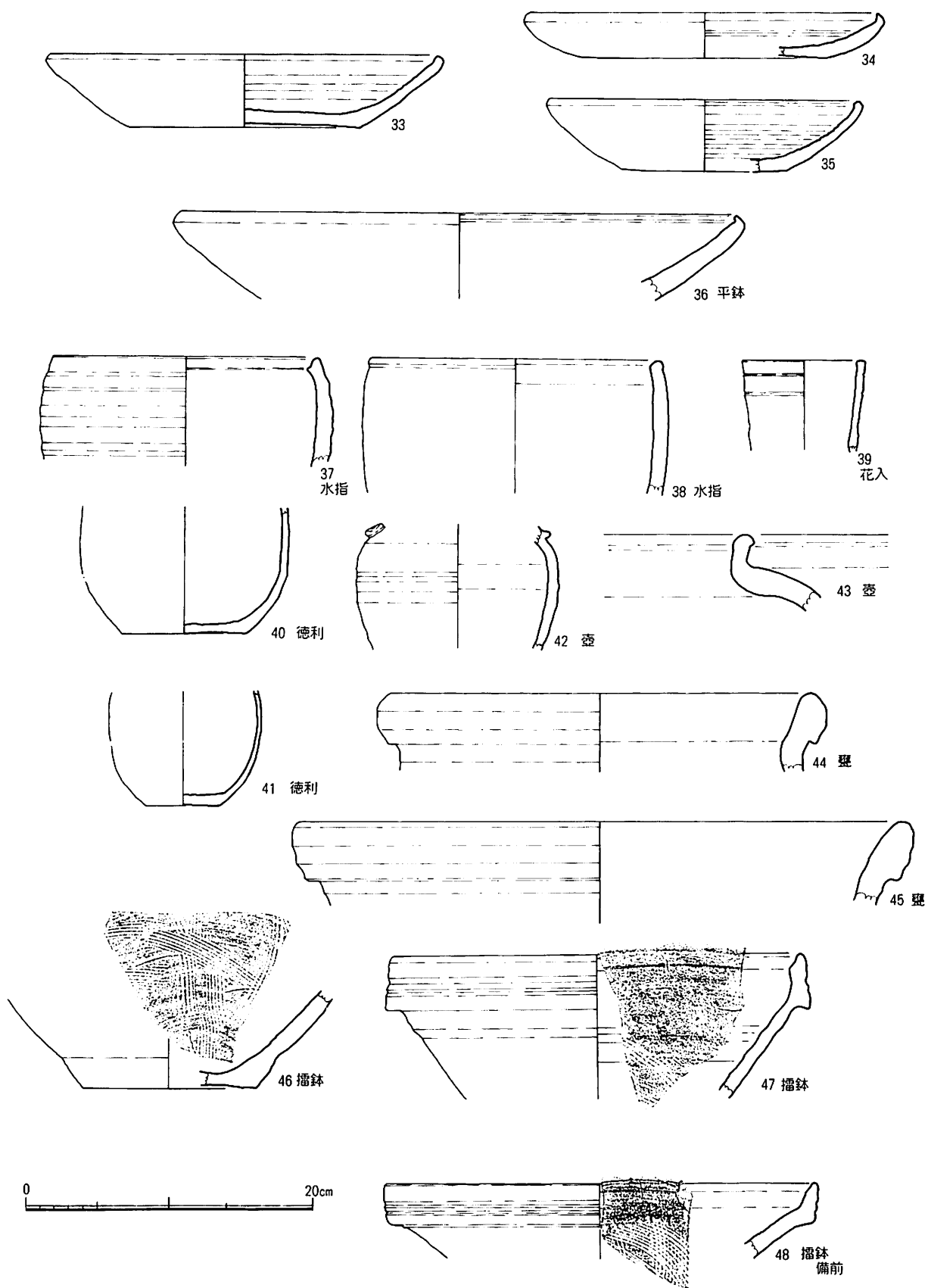
第119図 調査区全景（東方向から）



第120図 SK064完掘状況



第121図 SK064出土遺物実測図① (1/4)



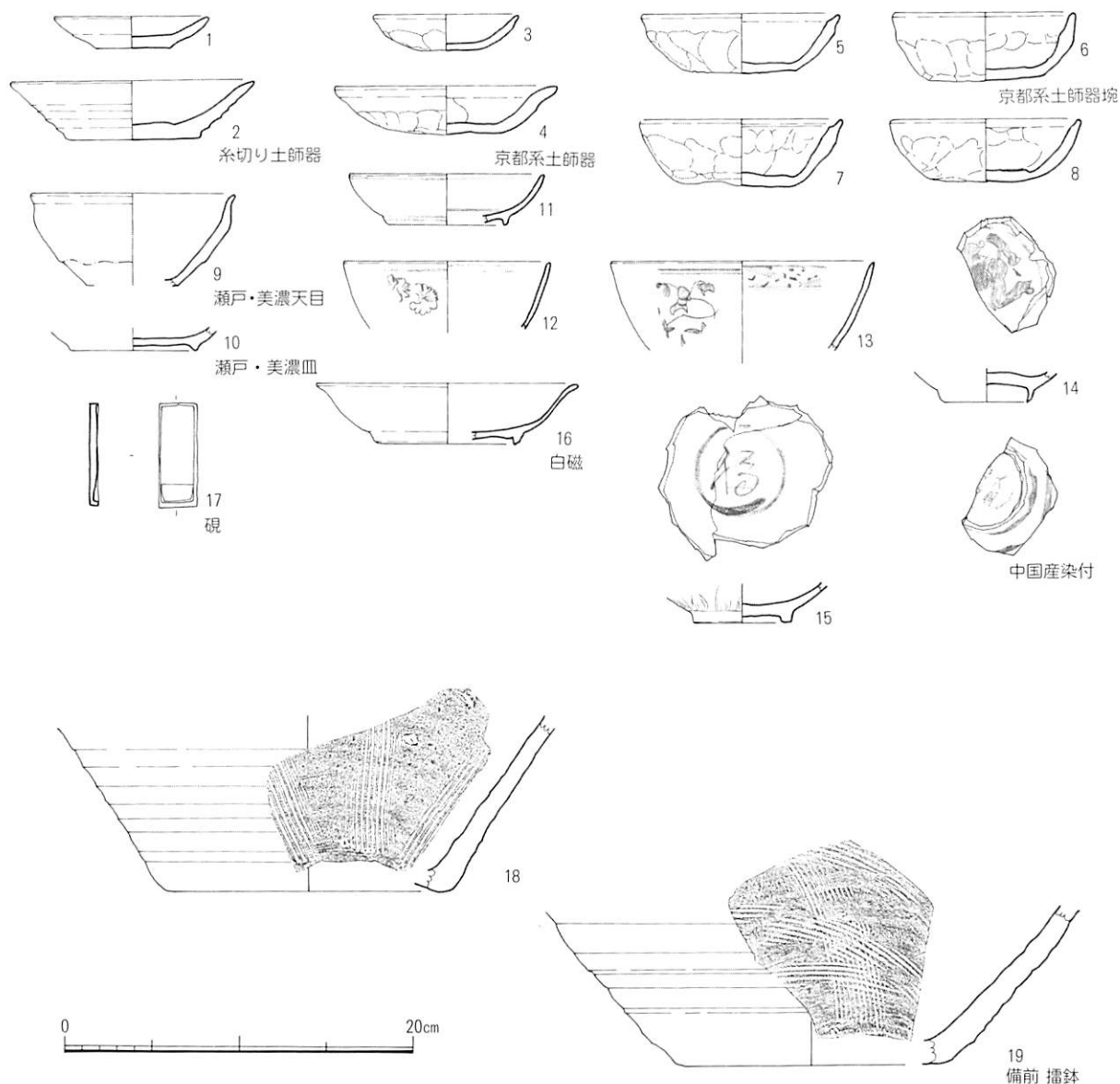
第122図 SK064出土遺物実測図② (1/4)

特に、SK064については、焼けた石が大量につまった大型の土坑で、東西4.0m、南北2.2m、深さ0.9mを測る。その性格については、これらの石が板葺きと考えられる屋根に置かれていたものであるとの指摘に加え、共に焼けた壁土が出土することから、火災処理土坑の一種と考えることができる。出土遺物には、京都系土師器皿、糸切り土師器皿、埴塙（取瓶）、唐津系陶器碗、瀬戸・美濃窯産皿・天目碗、各種備前焼、信楽焼壺、中国産染付碗・皿、白磁皿、タイ産焼締陶器四耳壺、ベトナム産焼締長胴瓶、ベトナム産白磁印花



第123図 SK160完掘状況

文皿等があり（第121・122図）特にバリエーションの豊富な備前焼については、平鉢、水指、花入、徳利等の茶陶器が目につく。加えてタイ・ベトナム等の東南アジア系の遺物がまとまって出土しているのも注目される。遺



第124図 SK160出土遺物実測図（1/4）

構の時期的な位置づけについては、胎土目段階の唐津碗が入っていることに加え、備前焼の編年における近世Ⅰ期bに相当する播鉢・甕皿F群が含まれる中国染付等の年代観から16世紀末～17世紀初頭、中でも九州陶磁編年Ⅰ-Ⅰ期（1580～1594年）に相当する唐津碗の時期を考えたい。

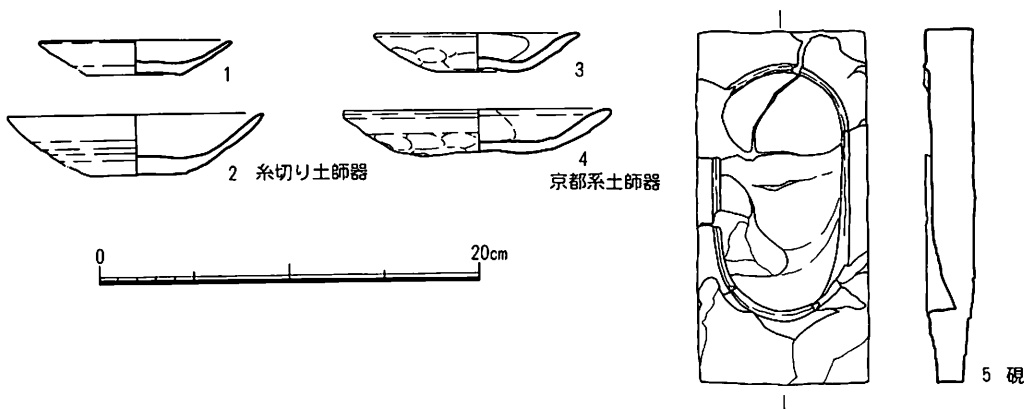
この他、第1面で検出された遺構群には、16世紀末を中心とした遺構群が展開している。

次の遺構面（第2面）については、焼土の入った土による整地層が調査区の北東部を中心に確認されており、第1面同様火災の痕跡が認められる遺構面である。この遺構面から検出された遺構には、井戸跡、溝跡、土坑（SK160）等がある。

第2面で検出された遺構群の中でもSK160については、平面隅丸方形を呈する廃棄土坑で、長軸3.0m、短軸2.5m、深さ0.9mを測る。SK160は、土坑床面にピットを伴う2条の溝（掛木の痕跡？）が存在することに加え、周辺遺構より出土した鋳型と考えられる遺物、桶状に組み合わせた瓦に溶けた金属が付着したもの等が存在することを考慮すると、最終的に廃棄施設とされたこの土坑が当初、鋳造に関連した遺構であったことが推定される。出土遺物には糸切り土師器皿、京都系土師器、瀬戸・美濃窯産皿・天目碗、中国産染付皿・碗、備前焼播鉢、硯がある。これら出土遺物の中には、碗状の形態を示す京都系土師器や、染付碗C群の模倣形態であることに加え高台の畳付きの部分に粉殻状の痕跡が認められる漳州窯系の染付の中でも古い属性を有するとの指摘される碗が含まれている。遺構の時期的な位置づけについては、塩地編年の2期にあたる京都系土師器、中国染付の主体となる碗・皿のE群の存在、備前焼について、近世Ⅰ期aとⅡ期bが共存している状況から16世紀後半～末にかけての時期が考えられる。

この他、第2面で検出された遺構群には、16世紀後半を中心とした遺構群が展開している。

第3遺構面については、一部地山に直接掘り込まれた遺構群を含むものであり、16世紀中頃～15世紀代のやや幅広い時期の遺構が存在する。検出された遺構については、土坑、溝、井戸跡などがあり、特に、大小の京都系土師器と糸切り土師器、壊れた硯が詰まった柱穴状の遺構（SX061）については、出土した京都系土師器の年代観から、その豊後における導入期とされる16世紀中頃と考えられるもので、導入期から広く町屋にまで普及する例としても注目される。この他にも中国染付皿C群との共伴が認められたSD140の京都系土師器については、2枚重なった状況で出土しており、その時期的な位置づけを考察する資料であると共に、町屋におけるその初現期の使用方法に関する良好な資料であるといえよう。



第125図 SX061出土遺物実測図（1/4）



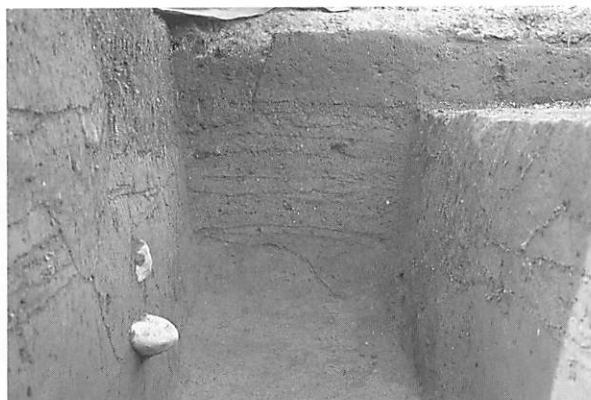
第126図 SD140遺物出土状況



第127図 SX061遺物出土状況



第128図 火災処理土坑土層断面



第129図 SF190土層断面

この他、第3面で検出された遺構群の中でも最も古いと考えられる15世紀代の遺構については、やや底径の広い土師器杯の出土する土坑（S096）等があるが、当該期の土師器編年の遅れから、その詳細時期については不明である。加えてこの時期に該当する遺構は少なく遺構密度は極めて低いものであった。

道路状遺構については、上市町と工座町を画する東西道路が調査区の北辺部で検出されており、サブトレンチによる断面調査等から掘り込み地行を伴う道路で、複数時期の路面を有することが確認された。特にその最終面を切る火災処理土坑の存在は、中世府内町の終焉に関する良好な資料であると考えられる。

今回の調査区である「上市町」及び「工座町」周辺を、中世府内町のルーツとなる平安時代末に河原市が開かれた市河とする説があるが、調査の結果、当該期の遺構は確認されなかった。しかしながら、各遺構には少量ながらこの時期の遺物が混入しており、今後の周辺地区の調査の課題となった。

（河野）

XII 大友館跡第1次調査

調査面積 2,200㎡
地域 A

調査期間 98.07.21～99.05.19
調査担当 高 島 豊

今回の調査は大分駅周辺総合整備事業に係る代替地事業に伴って行われた遺構確認調査である。調査地は顕徳町3丁目に所在し、大分市史中巻付図2「戦国時代の府内復元想定図」によれば中世に存在した大友館跡の東南隅に比定される位置であった。調査は平成10年7月21日から平成11年5月19日まで行われ、その結果、池を伴う庭園と推定される遺構など、大友館の手がかりとなる重要な遺構が検出された。しかし、館外郭線を示す堀・溝・築地等の遺構は検出できず、これらは本調査区の外にあるものと推定される。



第130図 調査地点位置図

庭園遺構

庭園遺構は館の推定外郭線に並行し、南北18m以上、東西約35m以上にわたって検出された。未確認ながら、西側・南側にはさらに広がっているものと推定される。遺構は当時の地表面を約2m以上掘り込み、最も深い部分を池にしていたと考えられるもので、池の周辺には巨石を使用した石組みが認められ、池護岸及び景石と考えられた。庭園遺構東端は最も良好に石組みが残っているが、東へ行くほど石組みが狭まって収束し、石の高さも次第に高くなるよう立体的に配置されていたことが窺われる。池底には青灰色土層が20cm以上堆積しており、少なくとも廃絶前に一定期間は湛水していたと判断できたが、粘土や石を敷いていた痕跡は確認できなかった。池に水を導入する導水口は検出されなかったため調査区外にあることが考えられ、池底のグライ層のレベルから判断すれば、自然湧水によって水を得ていた可能性も考えたい。護岸状の石組みと庭園遺構の掘り方との間は幅約5m程度の緩やかなスロープとなっており、土層からは地表を斜めに掘り込んだ後、スロープ状に整地していることが看取された。この整地土下部より出土した京都系土師器（第135図1～3）の年代観により、庭園遺構は16世紀後半に築造されたか、あるいは最終的な改修が施されたものと考えられる。

大友館跡
第1次調査



第131図 遺構配置図 (1/500)

検出された石組みの中には、人為的に破碎されているものが見られるほか、移動あるいは倒伏しているとみられる石も存在するなど、廃絶に先立って大規模な破壊を被っていると推定される。こうした破壊の後、砂を主体とする土層によりまず池部分が埋積し、さらに残った凹地も人為的に埋め立てられて、近世には水田化される。遺構を覆う砂層の上面、あるいはその上の埋め立て土層から出土する遺物の中に胎土目段階と推定される唐津焼碗（第135図7）が存在する一方、砂目積段階の唐津焼及び志野が存在せず、さらに出土した京都系土師器の中に17世紀初頭に比定できるものがないことから、廃絶年代は1580年代～90年代になる可能性が高い。



第132図 庭園遺構東端の石組み

庭園遺構から出土した遺物（第135図）の多くは最上層の埋め立て土層からの出土であるが、タイ産の鉄絵小壺片（5）や陶器四耳壺片（4）、華南三彩水注片（6）といった貿易陶磁が多数認められた。青花では小野分類の碗E群・皿E群を主体として皿F群（10）も伴っており、漳州窯系の磁器（8）も一定量含まれている。また、天目や茶臼、備前焼平鉢（12）・建水（11）・水屋甕（15）、信楽焼壺（9）等の茶器類も多く出土している。とくに備前焼の掛花入（14）は、ロクロ成形した円筒形の体部を工具により縦方向に面取り調整し、多角形に造り出しているもので、大名による特注品とも考えられる希少なものである。少量ではあるが瓦も出土しており（16・17）、建物の一部には瓦が葺かれていたものと思われる。近年大分平野を中心に確認されつつある、唐草状の文様が施された瓦質火鉢（13）も出土した。池底の青灰色土層中からは下駄や漆器碗・皿、扇の要部分等、有機質の遺物が良好な状態で包含されていることが確認できた。マツカサも多数出土したことから、遺構内及び周辺におけるマツの植栽が想定される。

庭園遺構に先行する遺構

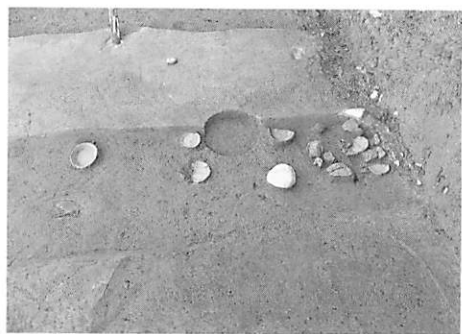
そのほかの遺構については、庭園遺構北側には少なく、東側・北東側で多く検出されている。今回の調査では庭園遺構の確認に主眼をおいたため、周辺の遺構の調査は十分でなく、庭園遺構との並行関係について十分明らかにできていないが、庭園遺構に確実に先行する遺構を複数確認することができた。

S008は長方形の土坑で、庭園遺構によって一部が切り取られている。土師器の坏・小皿が多数廃棄された状態で出土している。出土した土師器坏（第136図）はいずれも底部糸切りであるが大別すると次の三種類に分類される。すなわち、1類：体部が直線的または僅かに内湾気味に立ち上がり、口径／底径比が小さいいわゆる「箱形」の器形で、器壁は体部より底部が厚く、胎土は橙褐色系の色調を呈するもの、2類：体部が直線的に立ち上がり、器高が比較的高い器形となるもので、胎土は1類より白っぽい淡褐白色系である、3類：ほとんど白色に近い胎土で、口径／底径比が大きく体部は僅かに外反しながら直線的に立ち上がり、器壁が非常に薄いもの、である。これら相互には法量差があり、小皿も加わるため、総体として器形口径のバリエーションは大きくなっている。

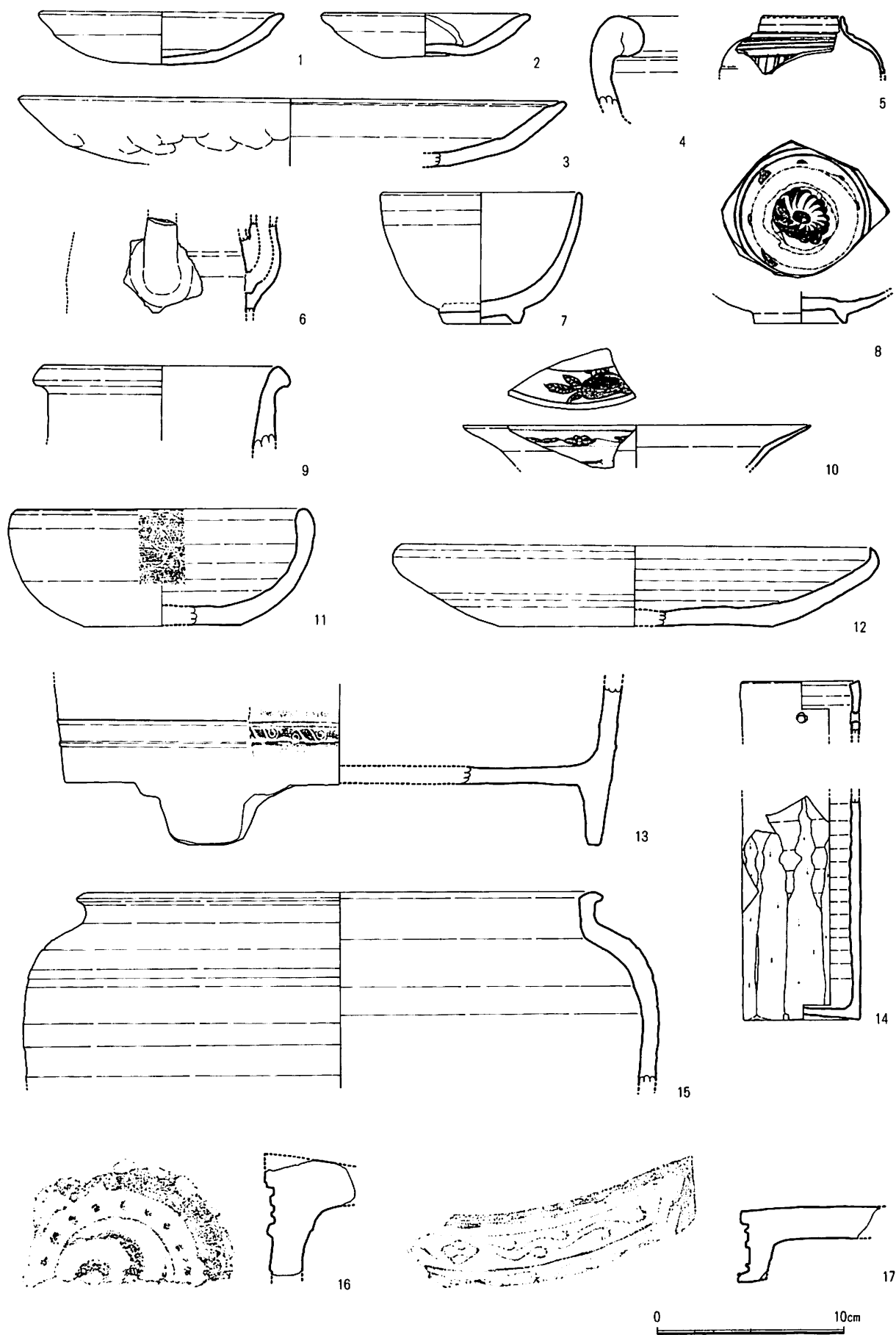


第133図 S008遺物出土状況

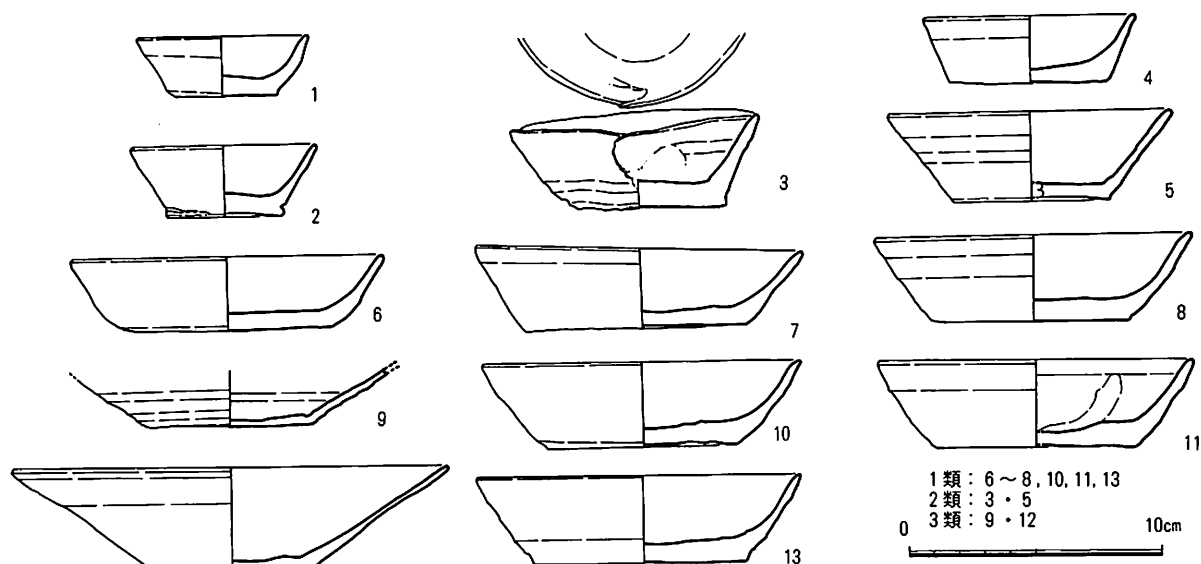
S019は調査区東端付近で検出されたほぼ真東西方向の溝で、幅約0.5m、深さ0.3m程である。西側は攪乱によって切られ、東側は調査区外に延びている。埋土中から完形に近いものを含む土師器が多く出土している（第137図）。これらの土師器はいずれも底部糸切りで、S008の1類に類似した形態が主体であるが、体部がより内湾気味で



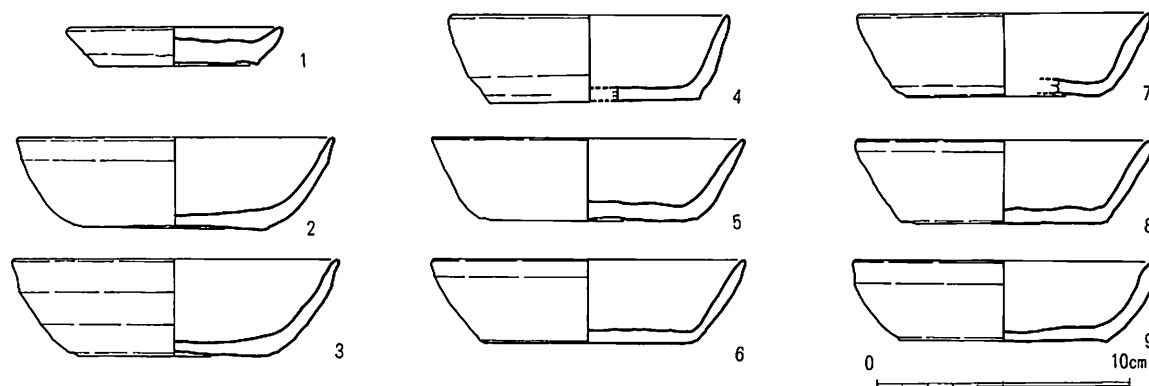
第134図 S019遺物出土状況



第135図 庭園遺構出土遺物実測図 (1/3)



第136図 S008出土土器実測図 (1/3)



第137図 S019出土土器実測図 (1/3)

開きが小さくまた底部が厚くないなど違いが見受けられる。また、器高がやや高く口縁部付近に著しく強いヨコナデが施された特徴的な器形のものもある（第137図2・3）。これらの遺構は土器の特徴からおよそ15世紀代のものと推定されるが、S008出土の土器に法量分化が認められ、さらに1類のような山口県大内氏館跡出土の土器に類似する、非在地系とみられる土器を含むことから15世紀後半に位置づけられ、土器に法量分化がみられないS019についてはこれよりも古い時期に位置づけられるものと考えたい。

まとめ

今次の調査の結果、大友館比定地内の東南隅に当たる地点において大規模な庭園遺構が検出されたことで、この地点が大友館の内部である蓋然性は高まったといえることができる。

大友館の変遷については文献上必ずしも明らかになっていないわけではないが、16世紀中頃から後半にかけて館の改修あるいは拡張と解釈される文書が発給されていることが知られている。今次の調査結果より推定される、庭園遺構の築造時期はまさにこの時期に相当しており関連が注目される。

しかしながら、今回の調査では館東側及び南側の外郭施設が検出されなかったことから、本調査地点が16世紀後半における大友館の内部であることを証明するための必要条件は未だ得られていないのも現実である。今後、当該期における館外郭施設を検出して大友館の四至を考古学的に確定することが、もっとも緊急を要する課題であるといえる。

（高畠）

XXIII 上野遺跡群（上野廃寺跡）

調査期間 98.06.01～98.07.23
調査担当 讃岐和夫

当遺跡は、大分川左岸の標高35m前後の上野丘陵上に位置しており、上野丘墓地公園の東側山裾部にあたる畑地の大分市上野丘 1 丁目500番1（字山下）に所在している。

この地域は、古代寺院跡の存在を窺わせる遺物が採集されており、特に古代瓦である百済系単弁軒丸瓦・上野廃寺跡特有の均正唐草文軒平瓦等の破片と格子目叩きの平瓦等が見られた。

このため平成10年2月12日と13日の2日間にかけて確認調査を行い、9世紀代の遺物・遺構を確認したので、6月から本調査を行った。

その結果、古代寺院跡と思われる遺構（上野廃寺跡）を確認することが出来た。



第138図 調査地点位置図

申請地の調査区は、東西方向に長い約42m×24mの土地区画の規模もち、山裾部に隣接しているため、地形は西から東にかけて比高差は約1.7mの傾斜面をもっていた。

調査については、掘削する建物基礎部分については、発掘調査を実施し、それ以外の部分については遺構の保存を行った。

遺構については、調査区の西側隅には、3条の小溝が新旧切り合いながら南北方向に掘られており、流路は北側の方向である。この小溝の用途は、山際に近いためか、湧き水等を防ぐために掘られたものと思われる。

調査区の中央部から東にかけて、版築状に5 cm単位で黄色粘質土と黒色土を交互に叩き締めて積み上げた基壇状の遺構が確認された。

この遺構は、地形の状況からみても、低い東側では約1 m以上版築状に積み上げられていた。遺構上面は若干平坦面を成していたことがサブトレンチで確認された。

基壇状の遺構規模は、南北15.0m、東西26.0mを測り、後世の削平等によって一部改変されていたが、基壇の西側では、基壇端部と思われる部分を確認した。

この遺構の上面には、自然礫（30cm）を使用したと思われる化粧基壇が施されていたことが確認された。また、南西側でも基壇の区画コーナー部分が確認されており、遺構の規模を一部確認することができた。

この基壇状遺構には礎石建物（SB01）が建てられていたことが窺える礎石抜き取り跡の遺構と廃棄された礎石が1点確認された。

この礎石建物跡は、すでに礎石は抜き取られているが径1.5mの掘り方と拳大の根石が残っており、この抜き取り跡が等間隔に掘られていた。

確認出来た建物跡の規模については、梁行が南北方向で4間、桁行が東西方向で5間+ α の4面庇大型礎石建物跡であることがわかった。柱間の寸法をみると梁行と桁行が共に3.5mを測るため、梁行で長さ14.0mを測り、桁行では17.5m+ α 以上を測ることが確認できた。

礎石建物跡の時期については、周りからの出土遺物等からみて8世紀代～9世紀代に比定されると思われる。

版築状基壇遺構の下層には、礎石建物跡よりも、時期の古い掘立柱建物跡の掘り方が2棟分確認された。

礎石建物跡の直下にある、掘立柱建物跡の掘り方を3間分（SB02）確認しており、長軸の方向をN-98°-Wにむけており、掘り方の規模は1.5m×1.1m、深さ0.8mを測り、隅丸方形を呈している。柱間寸法は1.8mを測り、この掘り方から7世紀中頃以降に比定される須恵器のツマミ付坏蓋片が出土している。

もうひとつの掘立柱建物跡（SB03）は、N-80°-Wに向いており、礎石建物跡の南側に確認されている。SB02・SB03は礎石建物跡より若干方向がずれていた。

礎石建物跡の南西隅に幅1.2m、深さ0.5mを測り、逆台形を呈している溝状遺構が基壇遺構と礎石建物跡を切るように掘られていた。溝状遺構は南北から東西にかけてのコーナー部がみられた。

西側基壇端部から西へ9.6mの間には大型の掘り込み事業遺構がある。この遺構については、礎石建物跡と掘り方の方向が同じであり、西側で標高35.5mの高い部分から掘り込まれており、床面では標高34.4mを測り、比高差が1.1mである。遺構の床面状況は平坦面を成している。

この遺構からは、西から東に向かって多量の瓦類と土師器の坏・埴・蓋類等が層を成して廃棄された状況で確認された。

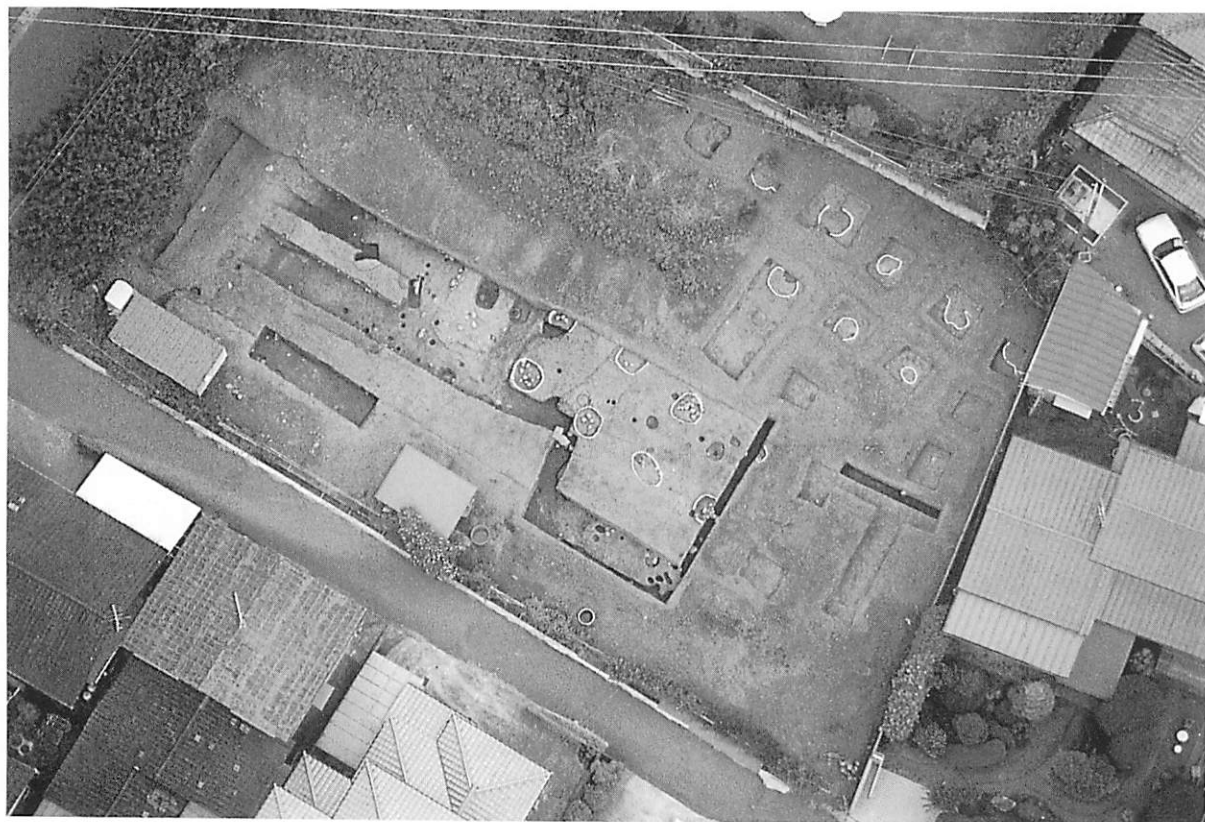
特に遺物の瓦については、軒丸瓦では大きく2種類に分けられる。まず、百済系単弁軒丸瓦と上野廃寺跡の独特な文様である複弁7葉蓮華文軒丸瓦である。

また軒平瓦も2種類が見られる。まず、豊後国分寺創建時の扁行唐草文軒平瓦と上野廃寺跡の独特な文様をもつ均正唐草文軒平瓦である。

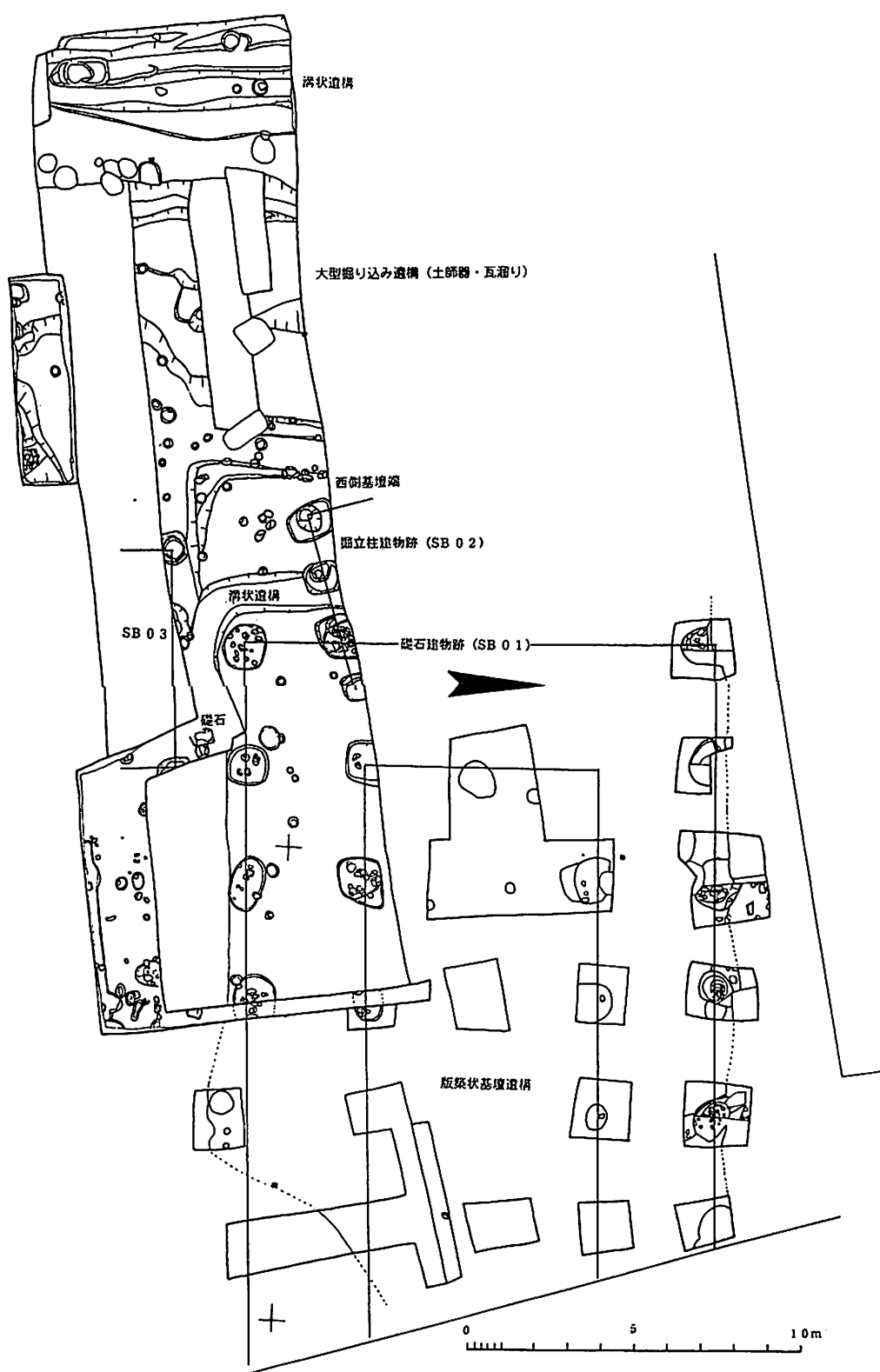
平瓦には叩きの文様があり、縄目叩きと格子目叩きに大きく分けられ、瓦は布目の桶巻造りによるものである。丸瓦には玉縁付丸瓦と行基葺丸瓦の2種類に分けられる。

特殊な遺物としては、周防産の緑釉陶器片2点と白磁1類片1点やレンガ状の埴の破片などがみられた。その他の遺物としては、鉄製角釘、鉄製飾り金具なども出土している。

当調査区に隣接する北東30m付近の畑から古瓦が多量に採集されていたり、試掘調査等で豊後国分寺創建時の複弁10葉蓮華文軒丸瓦も1点出土しており、この一帯を含めて礎石建物の存在を窺える伝承も残っているため、上野廃寺跡の壮大な伽藍配置の様子を窺い知ることが出来よう。（讃岐）



第139図 上野廃寺跡全景（空撮）



上野遺跡群
(上野廃寺跡)

第140図 遺構配置図 (1/200)

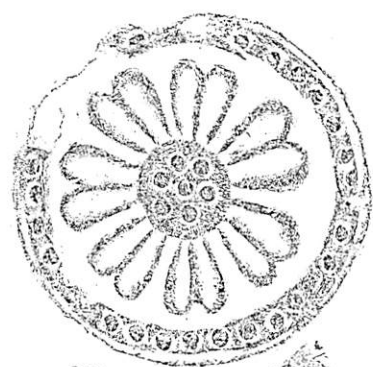


第141図 豊後国分寺創建軒平瓦出土状況および土師器

軒丸瓦



百済系単弁8葉蓮華文軒丸瓦



上野廃寺跡複弁7葉蓮華文軒丸瓦

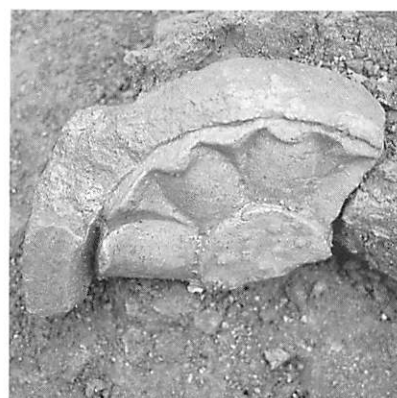
軒平瓦



上野廃寺跡均正唐草文軒平瓦



豊後国分寺創建時偏行唐草文軒平瓦



第142図 百済系軒丸瓦出土状況

第143図 瓦拓影 (1/4)



第144図 遺物（瓦・土師器等）廃棄状況



第145図 礎石建物跡遺構検出状況

XXIV 大友館跡第2次調査

調査面積 557m²
地域 A

調査期間 98.11.04～99.04.30
調査担当 塩地潤一

調査地は大分川左岸の微高地上に位置し、推定大友館跡の西側外郭線上に位置する。今回の調査はマンション建設に伴う事前調査として行われたものである。

調査の結果、16世紀代の整地層ならびに3面の文化面が確認された。以下にその概要についてまとめる。

第1面検出遺構

16世紀末～17世紀初頭に比定される遺構群である。平面調査を実施した浅い南北溝跡は唐津陶器を含む唯一の遺構であり、第1次整地層を基盤面として形成されている。

この第1次整地層については、調査最終段階における調査区壁の土層観察により検出されたものである。

また、この作業では第1次整地層を基盤面として一定量の溜まり状遺構の存在も確認でき、面的な遺構の広がりが想定される。

第2面検出遺構

16世紀後半～末頃に比定される遺構群である。大規模な南北溝跡（SD001）をはじめ、柵列跡や土坑等が検出され

ている。これらの遺構群は16世紀後半と考えられる第2次整地層（SX065）を基盤面として形成されたものである。遺構密度は少なく、この段階の館の外郭線を示す遺構については検出されていない。

この第2次整地層（SX065）は最深部で約0.8mを測り、調査区のほぼ全面において確認された大土木事業である。埋土は暗黄茶色ブロック土を基調とし、砂層やシルト質土層の堆積も見受けられるものの、不整合な堆積状況を呈しているため、一連の堆積土と判断できるものである。この整地層からは中国染付碗のB2群・E群や皿のB2群をはじめとして、中国南部産の見込み蛇の目釉剥ぎの白磁皿や豊後型火鉢片、京都系土師器皿などが出土している。

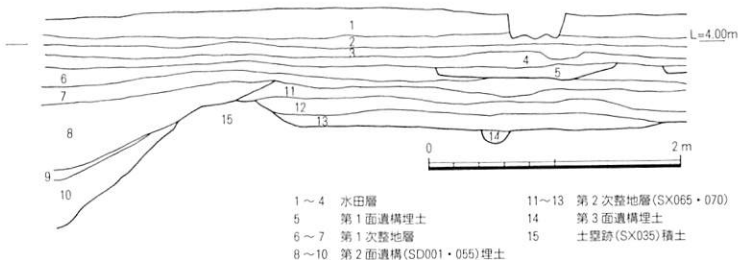
第151図の1～3は第2次整地最下層（SX031）から出土した京都系土師器皿であり、16世紀後半に比定される。第2次整地に伴って行われた掘削地業については先述のSX031をはじめ、調査区壁の土層観察によって南北方向を主軸とした大きなプラン（SX070）が想定できる。

第3面検出遺構

16世紀前半～中頃に比定される遺構群である。L字状に折れ曲がる土塁跡をはじめ、大規模な東西溝跡（SD030）ならびに井戸跡3基（SE04・5050・060）と不定形土坑などが検出されている。（第152図）



第146図 調査地点位置図



第147図 調査区南側壁土層図 (1/60)



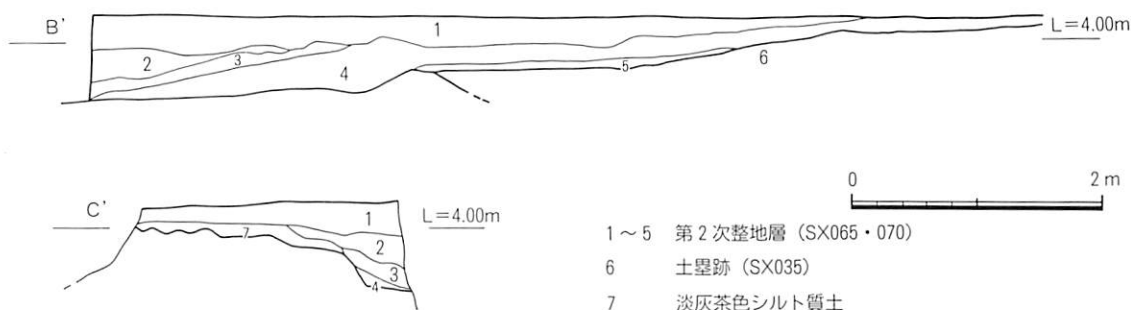
第148図 調査区南側壁土層観察時 (北方向から)

土塁跡 (SX035) については推定大友館西側外郭線上において検出されたものであり、調査区内 (推定西側外郭線のほぼ中心) においてL字状に屈曲する。その規模は現状で南北方向では幅約5m、東西方向では幅約6mを検出したが、調査区外にも延びていることから、検出幅を大幅に上回る可能性が高い。また、基底部から頂部までの比高差は約0.3mを測る。

その構造については、基盤層を掘り込み、そこに茶色ブロック土と灰色ブロック土を大きな単位として、中央部に向けて斜め方向に積み上げている状況が看取される。積土内からは京都系土師器皿が出土しており、土塁の構築時期については16世紀中頃と考え



第149図 第2次整地層土層観察時 (北方向から)

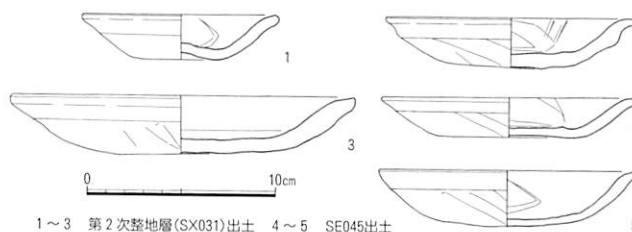


第150図 第2次整地層 (SX065・070) 土層図 (1/60)

られる。

また、この土塁跡に重複して東西溝跡 (SD030) と井戸跡 (SE060) が形成されている。これらは遺構の変遷を検討する上で看過できない現象と考えられるものである。

前者からは中国南部産の見込み蛇の目釉剥ぎの白磁皿やタイ・ノイ川窯産焼締陶器、後者からは中国染付皿B1群をはじめ、大量のロクロ土師器が出土している。SE060から出土した土師器はすべて井戸の廃絶に伴う一括廃棄資料であり、焼土ブロックや炭化物、そして壁土を多量に含む埋土から出土している。(第156図)



第151図 SX031・SE045出土遺物実測図 (1/4)

これらはすべて底部を回転糸切りによって切り離されたものであるが、第156図の3・4・10には板状圧痕が確認できる。

また、灯明に使用したものが大半であり、タールの付着が認められる。出土した土師器は坏と小皿で、坏の法量は口径11.4~12.1cm、器高2.8~3.2cm、底径5.9~6.7cmを測る。

小皿については2タイプのものが伴っており、体部の立ち上がりがきつく直線的なもの (1) と外側に大きく開きながら直線的に立ち上がるもの (2・3) がある。これらの法量は前者で口径7.4cm、器高2.2cm、底径5.1cmを測り、後者では口径8.9cmと8.7cm、器高2.2cmと2.0cm、底径は双方とも5.4cmを測る。これらの土師器は1を除き外面に強い横ナデが施されている。また、4については体部屈曲部から内面にかけて2の字ナデが施されており、大変注目されるものである。この現象に呼応するかのように1を除くすべての資料には体部内面に丁寧な横ナデが施されており、外面に認められるような段は残されていない。この資料は先述のとおり、遺構の重複関係から土塁構築後から大規模盛土整地以前のものであり、その帰属年代については16世紀中頃と考えておきたい。

さらに、第151図の4・5に示した遺物はSE045から出土した京都系土師器皿で、4は井戸の埋め戻しに伴って埋

置されたものである。16世紀中頃に比定される。

この他にも今回の調査ではガラス製の皿や鉄砲弾（鉛玉）をはじめ、華南三彩鳥形水注や朝鮮王朝産白磁碗、そして威信財として位置付けられる青磁掛花入なども出土している。

まとめ

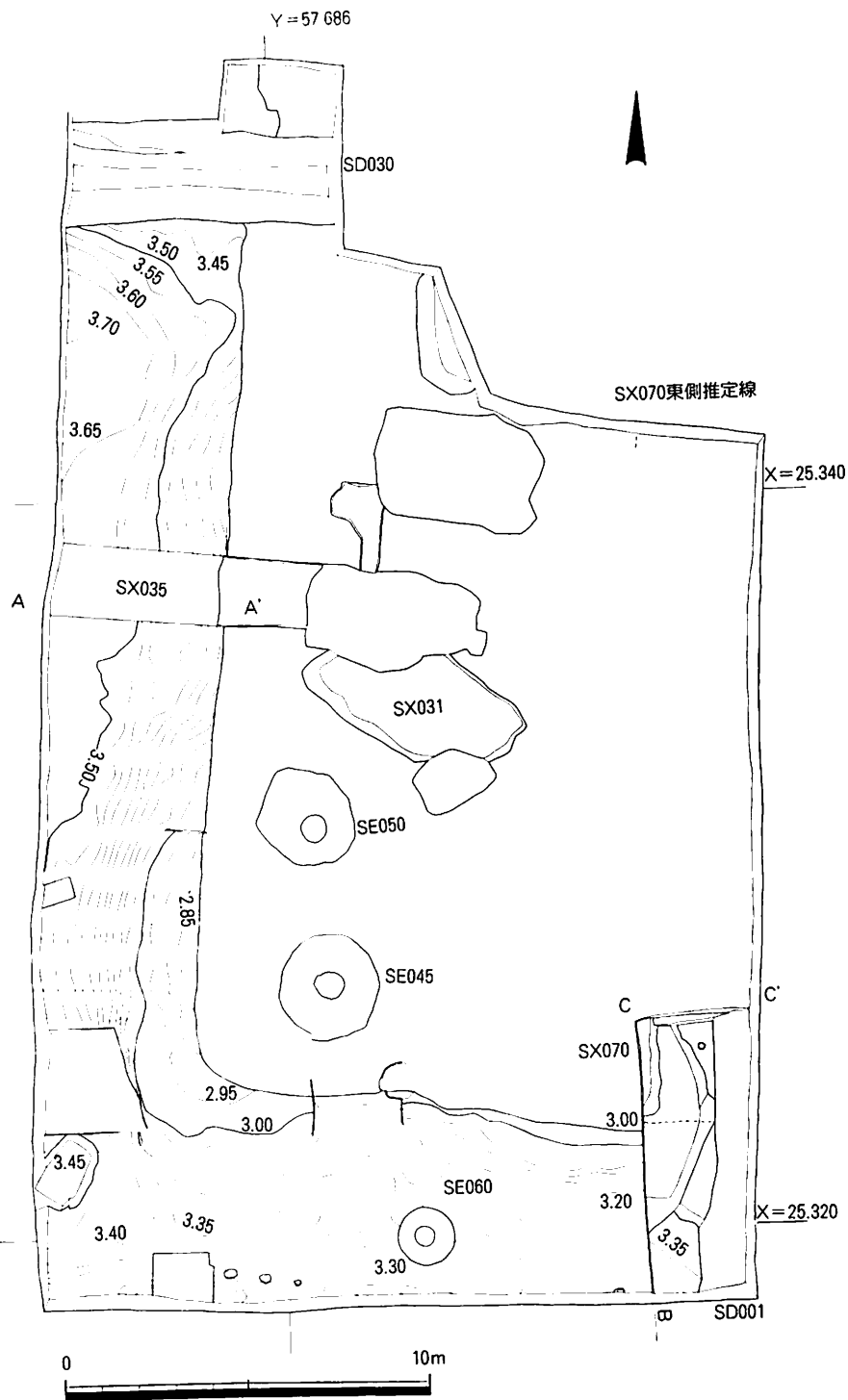
今回の調査では推定大友館跡西側外郭線上において土塁跡を検出することができた。その構築方法については第1次調査で検出された庭園遺構や中世大友城下町跡第1～3次調査における道路状遺構と同様、掘り込み地業によるものであり、その関連性が注目される。さらに、この土塁跡は16世紀後半段階において削平され、大規模な盛土整地によって埋められたことも判明した。

これらの遺構群と大友館との関連性を示す史料としては戦国末期の府内の様子を描いたとされる「府内古図」と16世紀後半頃、家臣に宛てて命じた「土井廻屏之儀」に関する文書がある。

とりわけ後者については16世紀後半に行われた館の再整備を示唆するものと考えられ、土塁を埋める大規模な盛土整地とそれを基盤面とする第2面（16世紀後半～末段階）の遺構群において、館の外郭を示すような施設が確認できなかったことを踏まえれば、今回検出された遺構群は大友館を構成する施設である蓋然性が極めて高いと判断される。

調査はまだ緒についたばかりであり、今後の調査の進展に期待したい。

（塩地）



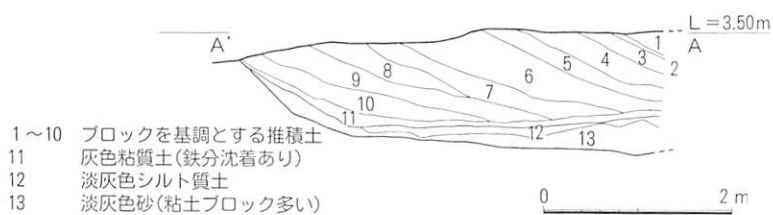
第152図 第3面遺構配置図 (1/200)



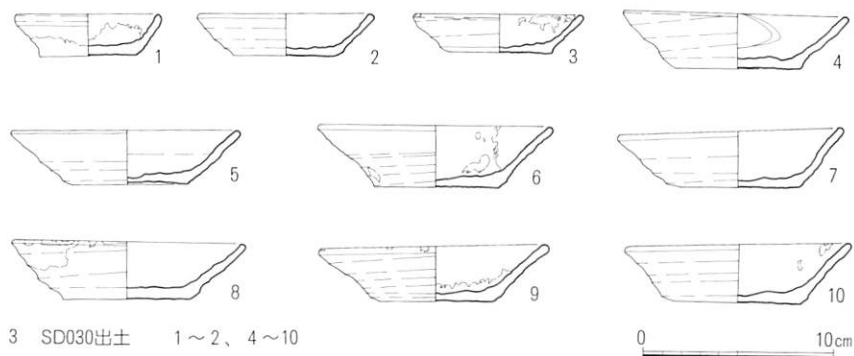
第153図 第3面調査区全景



第154図 土塁跡 (SX035) 土層観察時 (北方向から)



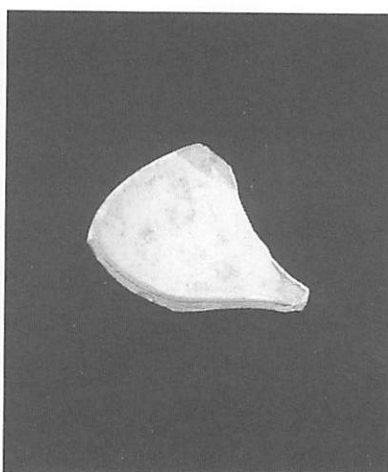
第155図 土塁跡 (SX035) 土層図 (1/80)



第156図 SE060・SD030出土遺物実測図 (1/4)



第157図 華南三彩鳥形水注片



第158図 ガラス製皿片



第159図 鉄砲弾

XXIV 府内城・城下町跡第11次調査

調査面積 250㎡
地域 A

調査期間 98.07.28～98.10.31
調査担当 玉永光洋・橋本幸治

今回の調査は近世段階の武家屋敷地として整備された府内城三ノ曲輪内の西部に位置し、諸資料から南側は浄安寺（旧同慈寺）に接し、北側の通りに門を開いた三ノ曲輪覚勝寺町「表二十二間五尺 入十間半」とされる屋敷区画の東側部分にあたる。

また、中世段階においては絵図に描かれた同慈寺ならびに同村に比定され、遅くとも鎌倉時代以降、国津として機能したと考えられている勢家津が所在する笠和郷の一角にあたる。

調査の結果、屋敷区画に伴う武家屋敷関連遺構をはじめ、三時代の遺構群を確認した。

以下に各時代の概要についてまとめる。

【江戸時代】

18世紀後半～幕末の武家屋敷跡の礎石列と土坑及び連続する井戸跡群、石列などが確認されている。

調査区南側で検出された東西方向の石列は、「府内城下の復元図」（註1）によると、浄安寺の北側外郭線上で検出されたものであり、この石列の延長を境とする調査区南側において、備前焼の大甕に埋葬された人骨が出土したことによって、石列南側が旧寺域である蓋然性は極めて高いと判断される。

石列の北側で検出された南北方向の礎石列は、重複する各遺構の最上面に据えられており、幕末期に存在した武家屋敷建物跡の東壁際部分と推定される。西側の母屋部分については後世の攪乱やビルの基礎によって破却されていた。礎石列より東の空地では多くの廃棄土坑を検出し、18世紀後半から19世紀中頃に比定される陶磁器類が大量に出土した。これらの磁器類の中

には「名ヶ小路村田」、「木村下」、「森下」、「森下氏」といった焼継銘のあるものが認められた。特に「森下氏」銘については、三ノ曲輪の各武家屋敷の歴代当主をまとめた「御家中屋敷附」（嘉永七・1854）の当該屋敷の項に森下氏三代が当時の屋敷主として記述されており、文献上の記録が考古学的に実証された（註2）。

井戸跡については調査区南側、つまり武家屋敷地の東南部に集中しており、礎石列下層において連続する3基と東側屋敷地境界部に1基検出した。連続する井戸跡群のうち、切り合いの古いSE139は石組みの井筒を伴い、井筒内部より土師器の皿や中国染付片と共に朝鮮王朝期の胎土目白磁碗が出土しており、特筆される。また、この井戸は浄安寺との境界である石列の下に跨っていることから、城下町成立段階の屋敷地南面の境界線は位置が異なる可能性も推定される。この見解に符合するように、武家屋敷地側の土坑から出土した志野焼陶器片と、境界石列南側、つまり浄安寺側の土坑出土資料との接合関係が認められる。

これらの遺構が展開する整地層からは、京都系土師器、備前焼陶器片、唐津焼折縁皿片、絵唐焼津皿片など17世紀初頭段階の遺物が多数出土し、三ノ曲輪造成に伴う基盤整備層と推定された。この整地層はほぼフラットに



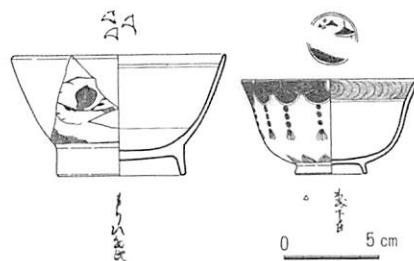
第160図 調査地点位置図



第161図 石列検出状況（西方向から）

形成されていたが、南面から北面にかけての堆積は厚く盛土されており、整地層下層で茶灰砂土の安定地盤を検出した。これは旧地形が北側に低く、海に近かったことを意味しており、海浜部を埋め立てて城郭を形成したことを物語っている。

【戦国時代】 溝状遺構ならびに土坑などが確認されている。溝状遺構については調査区北西隅において検出されたもので、幅約2.6m、深さは最深部で約0.6mを測る。出土遺物の年代観より16世紀末頃に埋没したと考えられる。また、土坑については調査区南側・推定の浄安寺（旧同慈寺）域において検出されたもので、一辺約1mを測り、平面形状は隅丸正方形を呈す。出土土師器より16世紀代に比定される。



第162図 焼継文字を有する磁器碗(1/4)

【鎌倉時代】 ほぼ併行する3条の溝状遺構と小土坑群などが確認され

ている。溝状遺構については調査区を北西から南東方向に縦断する形で検出されたもので、人工掘削により形成された極めて規格性の高いものと考えられる。これらの遺構からは和泉型瓦器碗や東播系須恵器鉢をはじめ、土師器小皿などが出土しており、同時併存していた可能性は高い。出土遺物の帰属年代より12世紀末頃に埋没したと判断される。



第163図 調査区全景

この溝状遺構に挟まれた空間には浅い小土坑群が検出された地点はあるものの、その土坑の埋土について

特筆できる状況は認められず、今回の調査では溝状遺構との積極的な関連性を示唆することは出来なかった。

よって、これらの溝状遺構については現状では区画溝としての性格を想定しておきたい。

以上、三時代の遺構について概観した。従来の城下町の調査において、武家屋敷や町屋の区画については、城下町成立段階の町割りがほぼ踏襲されてきたものと推定されてきた。しかし今回、武家屋敷の境界を跨いだ井戸跡の存在や志野焼陶器片の接合関係などから、城下町成立段階の武家屋敷地割りが後世の絵図・文献史料の記述と異なっていた可能性を指摘することができる。また、三ノ曲輪造成に伴う整地層は、南側から北側にかけて低くなる低地を埋め立て、フラットに形成されたことが判明した。松平氏以前の諸資料は皆無に近いこともあり、17世紀前半代を含む築城当初の府内城と城下町の様相については、今後の府内城・城下町跡調査の進展により明らかにしていく必要があるだろう。

さらに、城下町形成以前においても既往の調査地点同様、『府内古図』に描かれた町屋に関わる遺構や鎌倉時代の遺構が展開しており、この実態解明についても今後の課題である。

(大野・塩地)

註1 『大分市史 中巻』付図 大分市 1987

註2 大野康弘 1999 「府内城三ノ曲輪覚勝寺町「表二十二間五尺 入十間半」の歴代当主について」
『大分・大友土器研究』第25号 大分・大友土器研究会

XXVI 津守遺跡第3次調査

調査面積 502.23m²
地域 A

調査期間 98.05.25～98.06.29
調査担当 塔鼻光司・橋本幸治

遺跡は、大分市大字津守字修善寺173-3・5に所在しており周知の津守遺跡内に属しているため、共同住宅建設に伴う確認調査を平成10年1月22日実施した。その結果、遺構を確認されたため、本調査を平成10年5月25日～6月29日にかけて実施した。

津守遺跡は、北側に米良川、西側では大分川で分断され、南西側は守岡遺跡が所在する森岡台地にぶつかる、標高7.0mの沖積平野に位置している。

調査の結果、土坑6基（SX01・05・46・64・68）、不定形の土坑（SX11）、土壌墓1基（ST01）と掘立柱建物跡4棟（SB01～04）及び建物形成しない柱穴群が確認された。

掘立柱建物跡SB01は1間（2.0m）×2間（1.0m×1.5m）の規模で長軸の方向はN-58°-Wに向いており、柱穴径0.5mを測る。SB02は1間（2.8m）×2間（1.8m×2.1m）の規模を測り、長軸の方向はN-64°-Wに向いている。SB03は1間（2.0m）×1間（2.0m）の規模を測り、長軸の方向はN-10°-Wに向いており、一番小型の建物跡である。SB04は長軸方向の南西側が調査区外のため延びは不明ではあるが、2間（2.0m×2.0m）×1間+α（2.4m×α）の規模が一番大型の建物跡であり、長軸の方向はN-52°-Eに向いている。SB01・SB02・SB04の建物方向はほぼ同方向であった。

土坑跡については、SX01の長さ1.7m・幅0.9m・深さ0.57mを測る。平面形は隅丸長方形を呈しており、2次焼成を受けた拳大から20cm前後の礫が両隅に施され中央は空間を有しており、土壌墓的な様相を示している。遺物は皆無にひとしかったが、16世紀に比定される備前焼播鉢片が1点出土している。SX05は長さ0.65m・幅0.50m・深さ0.32mを測り、平面形は楕円形を呈している。遺物は皆無である。SX46は長さ0.95m・幅0.55m・深さ0.37mを測り、平面形は隅丸長方形を呈している。遺物は古墳時代初頭の甕形土器破片が出土している。SX64は長さ0.9m・幅0.6m・深さ0.56mを測り、平面形は楕円形を呈している。遺物は皆無である。SX68は長さ1.5m・深さ0.49mを測るが南西側は調査区外のため全体の把握は出来なかった。また、SX11は直径約3mほどの不定形なもので、深さ0.19mを測る。遺物は小形の京都系土師器や青磁片等で16世紀後半頃に比定される。土壌墓のST01は長さ0.98m・幅0.65m・深さ0.24mを測り、平面形は楕円形を呈しており、0.1m下で人骨の大腿骨片2本と歯を検出した。遺物はほぼ完存の京都系土師小皿が出土しており、この時期は16世紀後半に比定される。

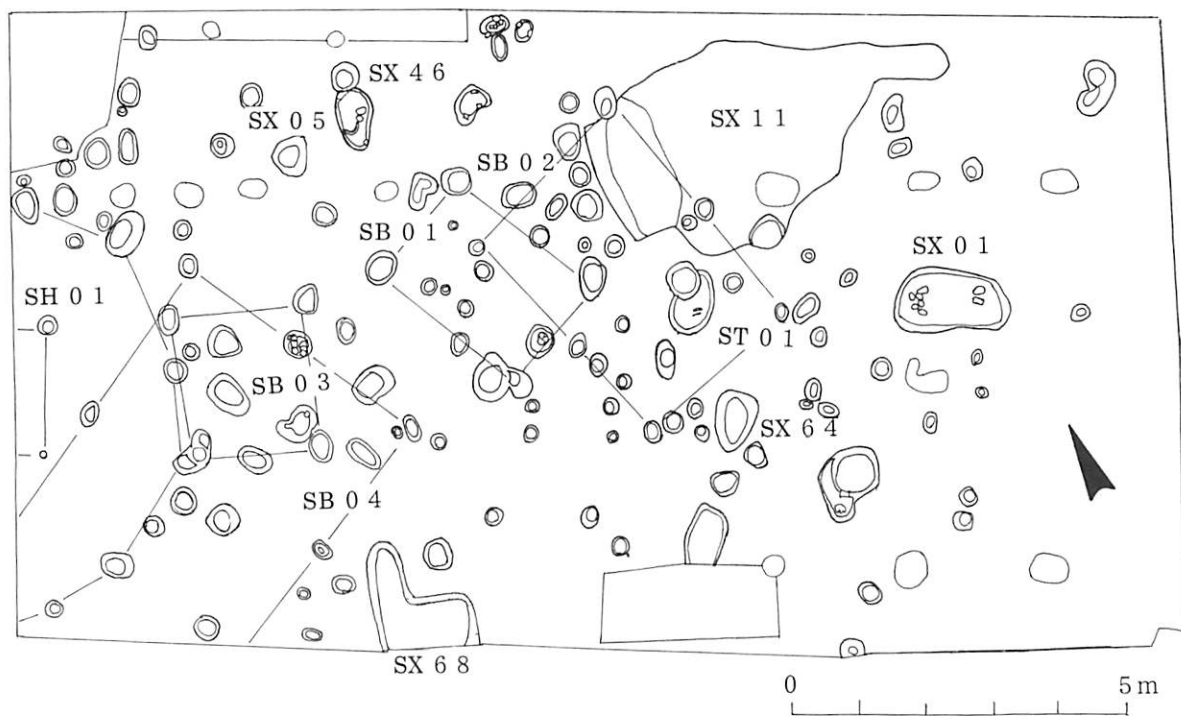
また、調査区の南西隅に円形住居跡と思われる柱穴が半円形状に6本と支柱4本の内2本が確認できた。時期の確認は不明であるが、弥生時代後期終末の土器がまわりで出土しているためこの時期に比定されると思われる。

この遺跡の所在している小字「修善寺」には、今も臨済宗妙心寺派蔭山万寿寺末慶雲山修善寺がある。

津守地域は、古代律令時代には大分郡津守郷に属し、中世荘園時代には津守荘に属していたことが文献等で見られる。近世では松平忠直（一伯）の居館が寛永三年（1626）に萩原から津守に移っている。津守館の規模は、七反二畝二十四歩（約7300m²）であったとされている。この地は下郡にかけて、古代から近世における豊富な遺構・遺物を出土していることや大分川河口付近にあたる地理的環境からみても、極めて重要な場所にあたると思われる。（讃岐）



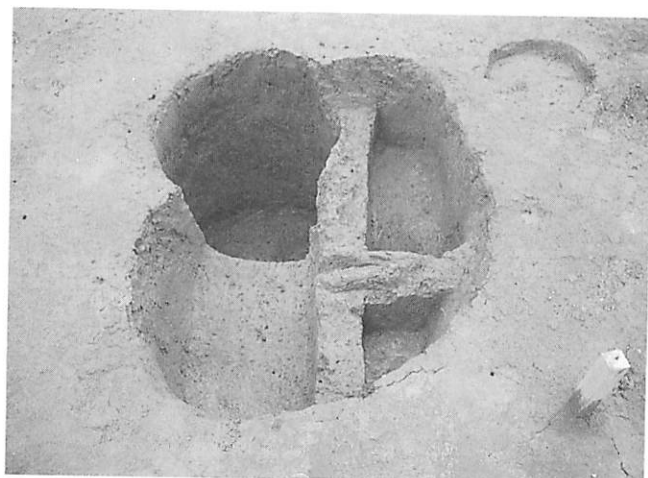
第164図 調査地点位置図



第165図 遺構配置図



第166図 調査区全景（空中写真）



第167図 ST01検出状況（南西方向から）

XXVII 大道条里遺跡

調査面積 95㎡
地域 A

調査期間 98.06.29～98.07.06
調査担当 塔鼻・塩地・奥村・羽田野

調査地は大分市大道町2丁目に所在し、大分川左岸に形成された標高5m前後の沖積平野に位置する。さらに、この地点には約35度東偏する条里状地割が現存しており、大道条里跡として周知されている。

今回の調査は大分都市計画道路東大道南春日町線の道路改築工事に伴って行われたもので、井戸1基と土坑4基、そして柱穴群が検出された。

しかしながら、これらの遺構群から出土した遺物は皆無であり、時期の確定は出来なかった。

また、今回検出された遺構群の方向は当地に現存する条里状地割りの阡線とは一致せず、その関連性も看取できない。

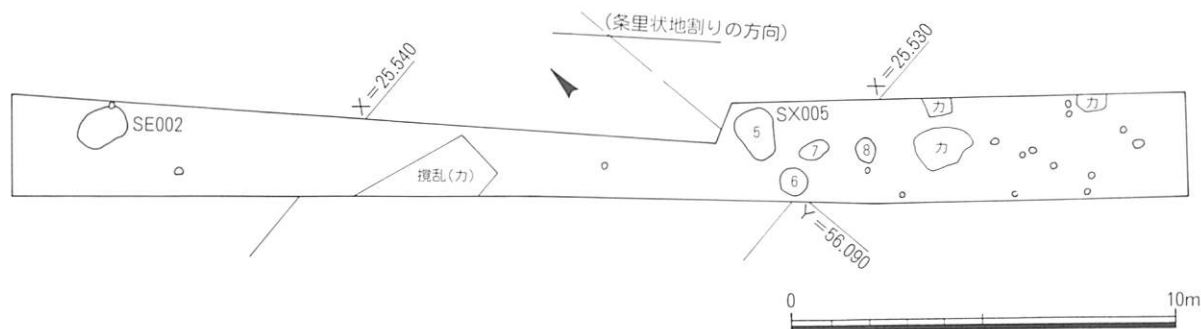
一方、これら遺構群の大半は人為的に埋め戻された可能性が高く、出土遺物が僅少という現象は隣接する東田室遺跡と共通するものである。

今回の調査は道路改築工事に伴うもので、かなり制約がかかった調査区の設定を余儀なくされたため、調査成果としては遺構の存在確認までとなってしまったが、周辺に遺構が展開している可能性は極めて高く、今後の調査の進展が期待される。

(塩地)



第168図 調査地点位置図



第169図 遺構配置図 (1/200)

参考文献

『東田室遺跡』大分市教育委員会 1999

XXVIII 大友館跡 下水道工事立会調査

調査面積 120m²
地域 A

調査期間 99.01.11～99.01.27
調査担当 高畠 豊・羽田野達郎

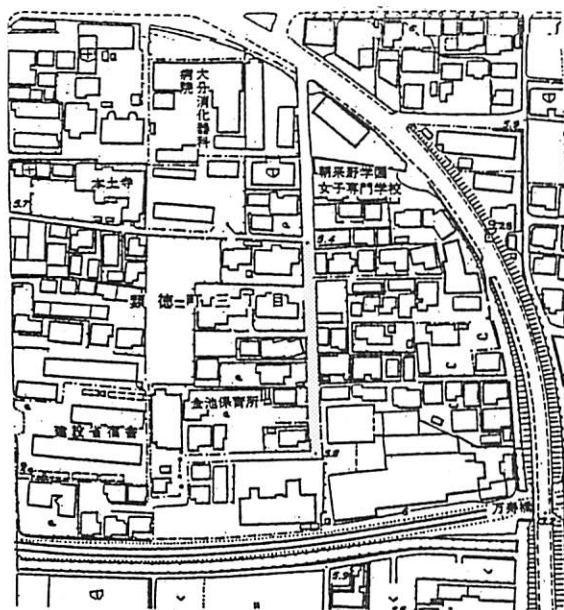
調査地は、「戦国時代の府内想定復原図」によると、大友館推定地内の中心部付近にあたり、庭園遺構が確認された大友館第1次調査地点の西側隣接地に位置する。そのため、下水道施設埋設工事に伴う立会調査を平成11年1月11日から1月27日まで実施した。

標高3.6mで暗褐色シルト質土の遺構面を確認し、溝状遺構を検出している。溝状遺構は、N-5°-Eに振って調査トレンチ内を南北に縦走している。深さは0.48m、幅は推定で約1.4mもしくはそれ以上、掘り返しが一度認められる。立会調査であるため、出土位置を確定できる遺物は少ないが、溝状遺構からは備前焼播鉢口縁部片などが出土している。(第178図) このうち備前焼播鉢は16世紀前半～中葉頃のもので、これが溝の埋没時期を示唆するものとなる。なお、大友館第2次調査で検出された土塁遺構の延長線上にあたる部分も調査したが、攪乱が著しく土塁は確認できていない。

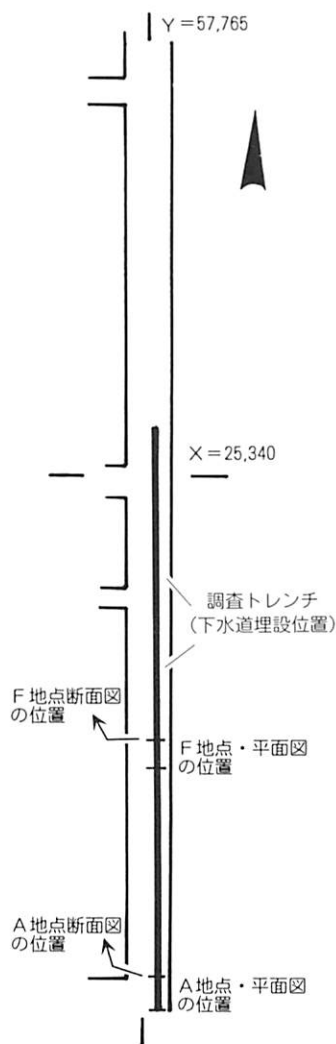
検出された溝状遺構はその検出位置及び帰属時期から、大友館跡第4次調査で検出された16世紀中頃の区画溝S006と同一のものである可能性が高いと推定され、今後、大友館の内部構造と変遷を解明する上で重要になると考えられる。(高畠・羽田野)



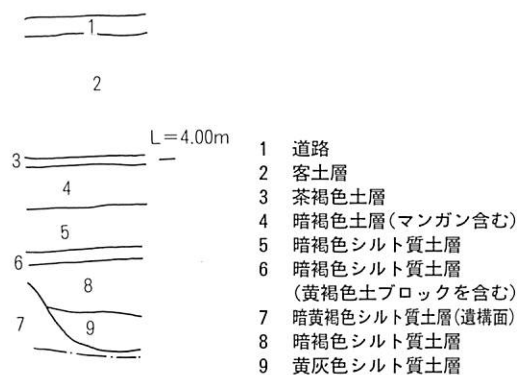
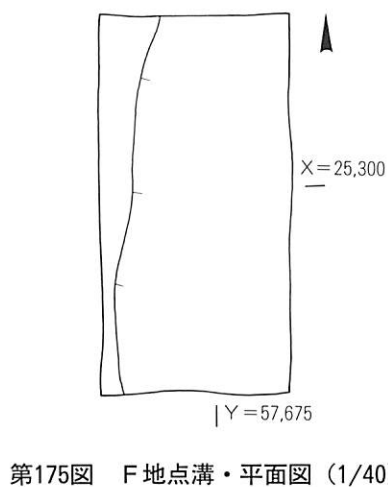
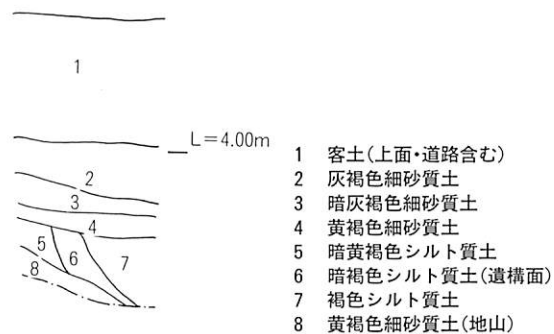
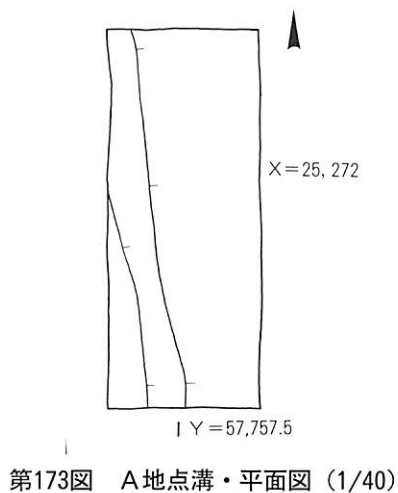
第170図 調査地点位置図



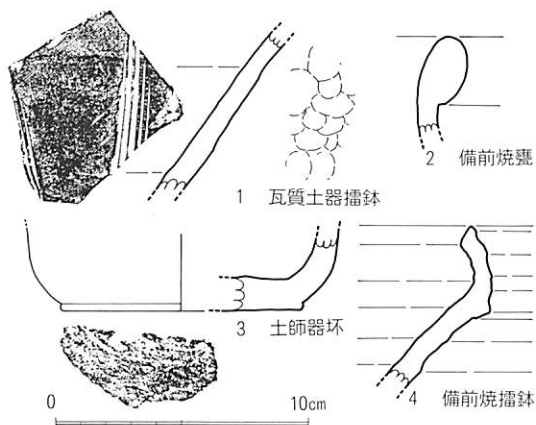
第171図 調査地・拡大図 (網掛部分が調査地)



第172図 平面・断面図位置図



大友館跡
下水道
立会調査



1998年vol. 9 報告分の訂正

玉沢地区条里跡（市・印楡地区）99頁～103頁

本調査は七瀬川自然公園建設に伴って1997年6月9日～同年10月4日まで実施したものである。その報告において提示した遺跡の年代観について若干の補訂を行い、遺跡の性格について再検討を試みたい。

ここで問題とする資料は第181図と184図に掲載した中世土師器である。これらは井戸ならびに土器埋納土坑から出土したもので、その帰属年代を本遺跡が最も栄えた時代として13世紀後半に比定した資料である。

しかしながら、これらはすべて14世紀代の属性と考えられる土師器坏の体部から同じ器厚を保ちながら口縁部まで立ち上がるという特徴と同小皿の底部の肥厚化が認められ、とりわけ14世紀前半に比定される国東町六田遺跡2号溝状遺構出土資料の様相と近似しているものである。

さらに、第183図に示した土師器の大量投棄についても、近年、京都・鎌倉・博多などをはじめ、全国的にも同様の現象が指摘されており、13世紀後半～14世紀代に集中している状況が看取される。

以上のことから、今回の調査所見は全国的な傾向とも符合するものであり、すでに報告しているとおり、当該期が円寿寺の移設（1306～08年）・万寿寺の建立（一説では再興1306年）に代表される国府域の再整備を意図した神社仏閣の再建事業が大友氏によって頻繁に行われた時代にあたる。よって、遺跡の性格付けについて前回の所見を変更する必要性はないと判断される。

（塩地）

参考文献

『六田遺跡・前田遺跡・秋国遺跡・外園遺跡』 国東町教育委員会 1997

山川 均 1994「土器をまとめてすてること―「中世土器集積」の具体的解釈に関する試み―」

『文化財学論集』文化財学論集刊行会

鋤柄俊夫 1994「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第4輯

馬淵和雄 1997「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

大庭康時 1999「博多かわらけ考1―土師器皿―括廃棄遺構を中心に―」『博多研究会誌』第7号

第Ⅳ章 受贈図書目録

1. 調査報告書

福島県	福島県県中建設事務所 郡山市教育委員会財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	国道288号（郡山東バイパス）改築事業関連 野中遺跡（第2次）山田C遺跡（第2次）仁戸内館跡	－発掘調査報告－	1998
	いわき市教育委員会 財団法人いわき市教育文化事業団		
	根岸遺跡	－平成9年度範囲確認発掘調査概報－	1998
	平成10年度発掘調査概報 平窪諸荷遺跡	－弥生墓跡の調査－	1998
	泉第三土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅱ	いわき市埋蔵文化財調査報告 第54冊	1998
	折返A遺跡		
	いわき市教育委員会 日本道路公団 財団法人いわき市教育文化事業団		
	上ノ原経塚 常磐自動車道いわき市内埋蔵文化財調査報告書12	いわき市埋蔵文化財調査報告 第55冊	1998
	郡山市建設部 郡山市教育委員会 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	市道小川高倉線改良工事関連 高倉栗遺跡	－発掘調査報告－	1998
	市道栃山神上渡線改良工事関連 一ツ松遺跡	－発掘調査報告書－	1997
	御前南土地区画整理事業関連 清水内遺跡	－5区調査報告－	1997
	御前南土地区画整理事業関連 阿良久遺跡	－2・3区調査報告－	1998
	郡山市富田東土地区画整理組合 郡山市教育委員会 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	富田東土地区画整理事業関連 山王林遺跡		1998
	郡山市都市開発部 郡山市教育委員会 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	郡山南拠点土地区画整理事業関連 荒井猫田遺跡（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区）	－第1次～第6次発掘調査報告－	1998
	群馬県	郡山市教育委員会	
御前南土地区画整理事業関連 阿良久遺跡		－2区調査報告－	1998
大安場古墳群		－第2次発掘調査報告－	1998
郡山館跡		－第1次遺構確認調査報告－	1998
郡山市埋蔵文化財分布調査報告5			1998
郡山市教育委員会 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団			
富田第二土地区画整理事業関連 天神南遺跡（伝五輪壇殿墓山）		－発掘調査報告－	1998
蒲倉古墳群		－55・56・57号墳調査報告－	1998
蒲倉古墳群		－測量調査・補足調査報告－	1998
高崎市教育委員会 高崎市遺跡調査会			
若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡		－高崎駅周辺（西口）土地区画整理事業安国寺墓地移転に伴う埋蔵文化財調査報告書－	高崎市文化財調査報告書 第156集 1998
高崎市教育委員会			
高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書12		高崎市文化財調査報告書 第154集	1998
高崎市遺跡分布地図 高崎市内遺跡詳細分布調査報告書		高崎市文化財調査報告書 第155集	1998
平成9年度高崎市内子規模埋蔵文化財発掘調査概報2		高崎市文化財調査報告書 第158集	1998
上中居荒・遺跡 倉賀野東上正六遺跡 新保八坂遺跡			
下中居条里遺跡Ⅱ 都市計画部道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）		高崎市文化財調査報告書 第159集	1998
高崎市遺跡調査会			
引間Ⅴ遺跡		発掘調査報告書	高崎市遺跡調査会文化財調査報告書 58集 1997
埼玉県	飯塚新田西Ⅱ遺跡	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市遺跡調査会報告 第69集 1998
	上中居西屋敷Ⅲ遺跡	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市遺跡調査会調査報告 第70集 1998
	八幡二子塚遺跡	一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市遺跡調査会報告書 第71集 1998
	剣崎稲荷塚遺跡	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市遺跡調査会調査報告書 第72集 1998
	山名柳沢遺跡	グリーンヒル高崎住宅団地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	高崎市遺跡調査会文化財調査報告 第74集 1998
	寄居町遺跡調査会		
	田代遺跡		寄居町遺跡調査会報告 第15集 1998
	むじな塚遺跡（第5次調査）		寄居町遺跡調査会報告 第16集 1998
	用土北沢遺跡（2次） 用土台遺跡 用土柿林遺跡		寄居町文化財調査報告 第19集 1997
	用土第三土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（2）		
千葉県	町内遺跡6	ゴシン遺跡（第2次調査） 赤浜天神沢遺跡（第3次調査）	寄居町文化財調査報告 第20集 1998
	六太塚遺跡（第1次調査）		
	国立歴史民俗博物館		
	社寺の国宝・重要建造物等 棟札銘文集成	－東北編－	「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書 1997
	社寺の国宝・重要建造物等 棟札銘文集成	－関東編－	「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書 1997

	社寺の国宝・重要建造物等 棟札銘文集成 ー近畿編一ー	「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書	1996
	社寺の国宝・重要建造物等 棟札銘文集成 ー近畿編二ー	「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書	1996
山田区 財団法人山武郡市文化財センター			
	山田新田Ⅱ遺跡	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第32集	1998
東洋ランディック株式会社 財団法人山武郡文化財センター			
	上岩ノ谷遺跡	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第36集	1998
株式会社エルカクエイ 財団法人山武郡文化財センター			
	谷台遺跡	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第44集	1998
山武建設砂事業協同組合 財団法人山武郡文化財センター			
	小野遺跡F区	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第51集	1998
株式会社関電工 財団法人山武郡市文化財センター			
	京寺遺跡	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第52集	1998
千葉県成東町 財団法人山武郡市文化財センター			
	小泉遺跡B地区	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第53集	1999
千葉市史編纂委員会			
	天保期の印旛沼堀割普請		1998
東京都	東京都教育委員会 東京都埋蔵文化財センター		
	多摩ニュータウン遺跡	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第44集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告 8（本文編・図版編）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第51集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告 9	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第52集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告 10	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第62集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告 11	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第63集	1998
	東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター		
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（1）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1999
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（3）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（4）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（5）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（6）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（7）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（10）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（11）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa72・795・796遺跡ー（12）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1998
	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第53集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa27遺跡ーⅠ	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第54集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa27遺跡ーⅡ	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第54集	1998
	烏屋敷遺跡	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第55集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa924遺跡ー	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第56集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa245・341遺跡ーⅠ	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第57集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa245・341遺跡ーⅡ	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第57集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa344遺跡ー	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第58集	1998
	三吉野遺跡群ー1ー	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第60集	1998
	三吉野遺跡群ー2ー	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第60集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa918遺跡ー（本文編）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第61集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa918遺跡ー（図版編）	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第61集	1998
	多摩ニュータウン遺跡 ーNa107遺跡ー 旧石器・縄文時代編	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第64集	1998
	足立区伊興遺跡調査会		
	足立区北部の遺跡群 若宮八幡神社遺跡・花畑遺跡・法華寺境内遺跡・白旗塚古墳群・大鷲神社境内遺跡・古千谷地区 下水道敷設工事に伴う発掘調査		1998
	世田谷区教育委員会		
	世田谷区史料叢書 第十三巻		1998
	世田谷区史料叢書 第十四巻		1999
	国分寺市遺跡調査会		
	武蔵国分尼寺跡Ⅳ 平成7年度発掘調査概報	国分寺市文化財調査報告 第44集	1997
	多摩岡坂遺跡Ⅱ	都営内藤1丁目第3団地建設に伴う事前調査	1997
	恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅶ	国分寺市公共下水道面整備工事に伴う調査	1997
	武蔵国分寺跡発掘調査概報XXⅡ	国分寺市公共下水道面整備南部地区15号工事他に伴う調査	1998
	文化庁文化財保護部		
	伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討報告書	平成9年度 国土庁地域活性化推進費地域の歴史的特性を活かした中山間地域の活性化推進方策のあり方に関する調査	1998

財団法人日本城郭協会		
日本の城郭城址に関する調査報告書Ⅷ 九州・沖縄編		1998
武蔵国分寺関連（府中都市計画道路3・2・2の2号線）遺跡調査会		
武蔵国分寺関連遺跡の調査Ⅸ 南・南西地区 府中都市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う平成九年度発掘調査概報		1998
府中病院内遺跡調査会		
武蔵国分寺跡西方地区府中病院道路拡張に伴う試掘調査報告書Ⅰ		1997
漆利用の人類誌調査グループ 飛騨山峡の人類誌調査グループ		
人類誌集報1998 漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌 考古資料からの人類誌	東京都立大学考古学報告3	1998
日野新町一丁目住宅遺跡調査会		
東京都日野市 姪久保遺跡Ⅰ - 日野新町一丁目住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -		1997
浅草寺		
浅草寺 佛教文化講座 平成九年度 第42集		1998
神奈川県 海老名市教育委員会		
海老名の馬頭観音・不動塔・地神塔・水神塔		1998
海老名市№35遺跡調査団		
神奈川県海老名市 国分尼寺北方遺跡 第16次調査		1998
望地遺跡発掘調査団 国分尼寺北方遺跡調査団 海老名市遺跡調査会		
神奈川県海老名市 望地遺跡 - 第4次調査 - 国分尼寺北方遺跡 - 第12次調査 - 発掘調査報告書		1998
山梨県 甲府市教育委員会		
史跡 武田氏館跡Ⅲ - 平成7年度・8年度試掘調査概要報告書 -	甲府市文化財調査報告7	1998
福井県 福井市教育委員会		
今市遺跡 福井県立音楽堂（仮称）周辺整備事業に伴う発掘調査概要報告書		1996
遺跡発掘事前総合調査Ⅰ - 安田城山前遺跡・細坂遺跡・北堀貝塚 -		1997
遺跡発掘事前総合調査Ⅱ 開発遺跡 高柳遺跡 石盛遺跡		1997
和田神明遺跡 北陸電力株式会社成和変電所建設工事に伴う発掘調査報告書		1997
石川県 野々市町教育委員会		
富樫館跡Ⅰ - 集合住宅建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -		1998
粟田遺跡Ⅲ - 社屋建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -		1998
野々市町教育委員会 野々市町御経塚第二土地区画整理組合		
長池・二日市・御経塚遺跡群 御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ		1998
野々市町教育委員会 野々市町南部土地区画整理組合		
上新庄ニシウ遺跡 野々市町南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ		1998
有限会社ぶった農産 野々市町教育委員会		
上林遺跡 - 農産加工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -		1998
富山県 財団法人富山県文化財振興財団 埋蔵文化財調査事務所		
五社遺跡発掘調査報告 - 能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ - 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 第9集		1998
岐阜県 大垣市教育委員会		
荒川南遺跡 - 出土火山灰の分析調査報告書 -	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第4集	1995
大垣市遺跡詳細分布調査報告書 - 解説編 -	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第5集	1997
曾根八千町遺跡	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第6集	1997
神岡町教育委員会		
江馬氏城館跡 - 下館跡発掘調査報告書 -		1996
江馬氏城館跡 - 下館跡門前地区と庭園の調査 -		1998
愛知県 名古屋市教育委員会（担当：文化財保護室）		
大高南地区遺跡発掘調査報告書 NA207号窯 NA324号窯 NA336号窯群		1998
名古屋市教育委員会		
高蔵遺跡第17次発掘調査報告書		1998
高蔵遺跡第18次発掘調査報告書		1998
銭瓶谷古窯群発掘調査の概要 - NA208号窯 -		1998
徳重北部古窯跡発掘調査概要報告書 緑区鳴海町字神ノ倉所在 NN261号窯跡		1998
寺山2号墳発掘調査報告書 名古屋市守山区上志段味		1998
遺贈文化財調査報告書27 天白元屋敷遺跡（第3次）	名古屋市文化財調査報告書35	1997
埋蔵文化財調査報告書28 小幡遺跡（第1・2次）	名古屋市文化財調査報告書36	1998
埋蔵文化財発掘調査報告書29 正木町遺跡（第7次～第9次）		1998
伊勢山中学校遺跡	第7次発掘調査の概要	1998
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター		
上品野蟹川遺跡 - 品野台小学校移転に伴う発掘調査 -	瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第16集	1998

	駒前第1号墳	瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第19集	1998
	市内遺跡調査報告Ⅰ	瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第20集	1998
	豊田市郷土資料館		
	愛知県豊田市挙母城 内藤氏居城・七州城跡の発掘調査報告書	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集	1997
三重県	津市教育委員会		
	山王遺跡 中勢北部サイエンスシティ第1期事業区域内埋蔵文化財発掘調査報告	津市埋蔵文化財調査報告27	1998
	津市教育委員会 津市埋蔵文化財センター		
	三重県津市高茶屋小森町 四つ野C遺跡発掘調査報告	津市埋蔵文化財調査報告26	1997
	四日市市教育委員会		
	公事出古墳群 公事出遺跡	四日市埋蔵文化財発掘調査報告書20	1998
	一般国道1号 北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ	山奥遺跡(5次)ほか	1998
	北中寺遺跡3 ー共同住宅建設に伴う北中寺遺跡第3次発掘調査報告書ー	四日市市遺跡調査会文化財調査報告書	1994
滋賀県	滋賀県教育委員会		
	織豊期城郭基礎調査報告書Ⅰ		1996
	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅲ	大手道・伝羽柴秀吉邸跡	1996
	滋賀県教育委員会 滋賀県安土城郭調査研究所		
	東南寺文書目録	安土城・織田信長関連文書調査報告5	1996
	特別史跡安土城跡発掘調査報告7	百々橋口道周辺・主郭南面の調査	1997
	滋賀県安土城郭調査研究所		
	安楽寺文書目録 超光寺文書目録	安土城・織田信長関連文書調査報告6	1997
	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅳ	大手道	1997
	滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会		
	上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡 ー京極氏の居館跡ー	伊吹町文化財調査報告書 第12集	1998
	大津市教育委員会		
	穴太庵寺		1995
京都府	長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京跡右京第580次 今里遺跡発掘調査報告書	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第12集	1998
	城陽市教育委員会		
	城陽市埋蔵文化財調査報告書 ー森山遺跡発掘調査報告書ー	第32集	1997
	城陽市埋蔵文化財調査報告書	第33集	1997
	城陽市埋蔵文化財調査報告書	第34集	1998
	城陽市埋蔵文化財調査報告書	第35集	1998
	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京市埋蔵文化財調査報告書第13集		1999
	立命館大学文学部		
	嶋谷東古墳群第3・4次発掘調査概報	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第4冊	1992
	久米田貝吹山古墳 第1～4次調査概報	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第7冊	1998
大阪府	高槻市教育委員会		
	安満宮山古墳		1998
	史跡・今城塚古墳 ー平成9年度・規模確認調査ー		1998
	高槻市教育委員会 高槻市立埋蔵文化財調査センター		
	嶋上遺跡群22	高槻市文化財調査概要	1998
	豊中市教育委員会		
	桜井谷窯跡群2 ー29号窯跡		1996
	熊取町教育委員会		
	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書Ⅻ	熊取町埋蔵文化財調査報告 第30集	1998
兵庫県	尼崎市教育委員会		
	平成7年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡復旧事業に伴う発掘調査概要報告書 尼崎市文化財調査報告 第26集		1998
	姫路市都市局 城周辺整備事務所		
	特別史跡 姫路城跡 石垣修理工事報告書(6) 三国堀南辺石垣		1998
奈良県	奈良県立橿原考古学研究所		
	保津・宮古遺跡 第4次発掘調査報告	奈良県文化財調査報告書 第59集	1990
	天理市櫛町福ヶ谷遺跡・白川火葬墓群発掘調査報告書	奈良県文化財調査報告書 第73集	1996
	奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1996年度		1997
	奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1996年度		1997
	宇陀郡榛原町石榴垣内遺跡	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告70冊	1997
	平城京左京三条三坊八坪 ー東三坊坊間路西側溝の調査ー	奈良県文化財調査報告書 第76集	1998

	山辺郡都祁村 小山戸城跡	奈良県文化財調査報告書 第77集	1998
	平城京右京二条二坊七・八・九・十坪 発掘調査報告	奈良県文化財調査報告書 第79集	1998
	奈良県吉野郡大淀町 越部古墳(越部1・2号墳発掘調査報告書)	奈良県文化財調査報告書 第82集	1997
	財団法人櫻井市文化財協会 櫻井市教育委員会		
	箸墓古墳	纏向遺跡第109次発掘調査資料	1998
	河合町教育委員会 河合町		
	国指定史跡 ナガレ山古墳		1998
	高取町教育委員会 奈良県立橿原考古学研究所		
	タニグチ古墳群(付 タニグチ墳墓群)発掘調査報告	高取町文化財調査報告 第17冊	1996
和歌山県	財団法人和歌山市文化体育振興事業団		
	鷺ノ森遺跡第3次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第6集	1998
	中野遺跡 第2次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第16集	1998
	木ノ本Ⅲ遺跡 第9次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第17集	1998
	友田町遺跡 第2・3次発掘調査概報 一店舗建築に伴う調査一	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第18集	1998
	秋月遺跡 第6次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第19集	1998
岡山県	岡山市教育委員会		
	造山第4号古墳		1998
	すくも山遺跡 城郭、中世墓、古墳の発掘調査報告		1998
	史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告		1997
	岡山城内堀 本丸西側内堀の構造調査、石関町内掘跡の発掘調査		1998
	高梁市教育委員会		
	史跡 備中松山城跡 本丸復元整備工事報告書		1997
	倉敷埋蔵文化財センター		
	湾戸7号墳	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第7集	1998
広島県	東広島市教育文化振興事業団 文化財センター		
	高屋町 大畠 古慈喜城跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第8冊	1996
	西条町御園字 財実 下上戸遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第10冊	1996
	西条町吉行 後迫1号遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第13冊	1997
	志和町志和東 小越遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第15冊	1997
	上溝上3号遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第18冊	1998
	広島市郷土資料館		
	農山村部の暮らし 一年中行事編一	広島市郷土資料館調査報告書 第12集	1998
	稲作農具	広島市郷土資料館資料解説書 第13集	1998
	財団法人広島市歴史科学教育事業団		
	巣取遺跡発掘調査報告 一広島市安佐南区高取北3丁目所在一	財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第21集	1997
	梨ヶ谷遺跡発掘調査報告 一広島市安佐北区口田町所在一	財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第22集	1998
山口県	山口県埋蔵文化財センター 阿知須町教育委員会		
	神正遺跡(A地区)一平成8年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告一	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第8集	1998
	赤迫遺跡(A地区)一平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告一		
	下関市教育委員会		
	長門国府跡 山口県下関市長府金屋町地内長門国府跡(金屋地区)発掘調査報告書	下関市埋蔵文化財調査報告書 66	1998
	防府市教育委員会		
	周防国府跡第94・96次発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要 9701	1997
	平成7年度 防府市内遺跡発掘調査概要 周防国府跡 第93・95次調査	防府市埋蔵文化財調査概要 9702	1997
	周防国府跡第101次発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要 9801	1998
	平成8年度 防府市内遺跡発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要 9802	1998
	周防国府跡 第100・102次調査 下右田遺跡		
	周防国府跡調査会 防府市教育委員会		
	周防国府跡 第86次調査(SK-DD)	防府市埋蔵文化財調査概要 9502	1995
	下右田遺跡 1994-A次調査・第11次調査(SM-DG)	防府市埋蔵文化財調査概要 9603	1996
	周防国府跡第99次発掘調査概要(SK-CC・CD)	防府市埋蔵文化財調査概要 9803	1998
	周防国府跡第98次発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要 9804	1998
	山口市教育委員会		
	山口市内遺跡詳細分布調査大蔵地区	山口市埋蔵文化財調査報告 第68集	1998
	阿知須町教育委員会		
	山口県吉敷郡阿知須町 平成9年度県営圃場整備に伴う赤迫遺跡B地区発掘調査報告	阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告 第15集	1998
	株式会社庭司苑 株式会社日企都市開発研究所 山口市教育委員会		
	寺内遺跡Ⅱ七尾山古墳 一宅地造成に伴う発掘調査一	山口市埋蔵文化財調査報告 第54・55集	1995

徳島県	徳島市教育委員会		
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 8		1998
愛媛県	愛媛県埋蔵文化財調査センター		
	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ埋蔵文化財調査報告第68集 猿ヶ谷2号墳・上三谷原古墳 大人塚古墳・名護池古墳Ⅱ・原池遺跡・西杏花遺跡・銘白遺跡・西杏花塚・向山遺跡・免渡護Ⅱ遺跡 登畑遺跡（埋蔵文化財調査報告 第69集）	伊予市編Ⅱ 一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ	1998 1998
	松山市教育委員会 埋蔵文化財センター財団法人松山市生涯学習振興財団		
	大峰ヶ台遺跡Ⅱ ー 9次調査ー 朝日谷2号墳 和気・堀江の遺跡Ⅱ 姫原遺跡 谷町遺跡 石井・浮穴の遺跡 浮穴小学校構内遺跡3次調査 石井東小学校構内遺跡・越智遺跡石井幼稚園遺跡2次調査地 福音寺地区の遺跡Ⅱ 北久米浄蓮寺4・5・6次 筋違J・K	松山市文化財調査報告書 62 松山市文化財調査報告書 63 松山市文化財調査報告書 64 松山市文化財調査報告書 65 松山市文化財調査報告書 67	1998 1998 1998 1998 1998
	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター		
	火内遺跡・臥間遺跡 湯築城跡 第1分冊（観察表・図版）（本文）「湯築城跡（第1分冊）」付図 斎院・古照 新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 （遺物編・遺構編・図版編） 四村日本遺跡 ー県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集ー 西野春日谷遺跡 通谷池2号墳 ーえひめこどもの城建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー 糸山5号土坑墓 糸山ミカン谷遺跡 姫内城跡Ⅱ次 中駄場遺跡 平成10年度主要地方道宿毛津島線埋蔵文化財調査報告書	来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 第3集 道後公園埋蔵文化財調査報告書 第66集 埋蔵文化財発掘調査報告書 第67集 埋蔵文化財発掘調査報告書 第71集 埋蔵文化財発掘調査報告書 第72集 埋蔵文化財発掘調査報告書 第73集 埋蔵文化財発掘調査報告書 第74集	1998 1998 1998 1998 1998 1999 1999
香川県	高松市教育委員会 建設省四国地方建設局		
	蛙股遺跡 一般国道11号高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第六冊 居石遺跡 一般国道11号高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第七冊	高松市埋蔵文化財調査報告 第29集 高松市埋蔵文化財調査報告 第30集	1995 1995
	高松市教育委員会		
	都市計画道路福岡福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡 太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 堺目・下西原遺跡	高松市埋蔵文化財調査報告 第34集 高松市埋蔵文化財調査報告 第36集	1997 1998
福岡県	福岡県教育委員会		
	福岡県朝倉郡朝倉町所在才田・東才田遺跡の調査 朝倉郡杷木町所在 楠田遺跡 小覚原遺跡 二十谷遺跡 陣内遺跡 上野原遺跡 朝倉郡朝倉町所在中妙見遺跡の調査 原の東遺跡の調査 甘木市所在宮原遺跡の調査（D地区）Ⅳ 貝元遺跡Ⅰ 九州自動車道筑紫野Ⅰ.C建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告 甘木市所在宮原遺跡Ⅴ 鈴ヶ山遺跡 広ミ遺跡 八女郡広川町新代所在遺跡の調査 諸田仮塚遺跡 福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田所在遺跡の調査 以来尺遺跡Ⅱ 福岡県筑紫野市大字筑紫野所在遺跡の調査 上桑野遺跡 宇野代遺跡Ⅱ 福岡県筑上郡新吉富村所在遺跡の調査 大塚本遺跡 福岡県筑上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査 郷ヶ原遺跡 福岡県筑上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査 鷹取五反田遺跡Ⅰ上巻 稲崎A・B遺跡下巻 下唐原宮園遺跡 福岡県筑上郡大平村所在遺跡の調査 三井郡大刀洗町所在の弥生時代・古代の遺跡 下高橋馬屋元遺跡（2）福岡県文化財調査報告書第133集 穴田古墳群 観山城跡 福岡県行橋市所在遺跡の調査	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー48ー 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー49ー 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー50ー 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー51ー 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー52ー 広川インターチェンジ関係埋蔵文化財調査報告 一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集 一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集 一般国道10号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集 一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告2 県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告8 観山無線中継所関係埋蔵文化財調査報告書	1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998 1998
	大野城市教育委員会		
	大野城市の文化財 〈第30集 大野城市の石碑〉 谷川・池田・池ノ上遺跡 石勺遺跡Ⅲ ーA・B・C・E・I地点の調査ー 後原遺跡Ⅰ ー第1次～6次調査ー	 大野城市文化財調査報告書ー第51集ー 大野城市文化財調査報告書ー第52集ー 大野城市文化財調査報告書ー第53集ー	1998 1998 1998 1998
	北九州市教育委員会		
	冷水遺跡第2地点 ー徳力・葛原線道路新設改良工事関係埋蔵文化財調査報告ー 片伊田遺跡ⅩⅠ区 ー徳力・葛原線道路新設改良工事関係埋蔵文化財調査報告ー 廣隆寺跡 ー北九州市小倉北区所在ー 乙丸遺跡第2地点 ー北九州市若松区大字乙丸所在ー 紅梅（A）遺跡第3地点 ー北九州市八幡西区所在ー 小倉城跡Ⅳ ー御花畠跡の調査ー	北九州市文化財調査報告書 第73集 北九州市文化財調査報告書 第74集 北九州市文化財調査報告書 第75集 北九州市文化財調査報告書 第76集 北九州市文化財調査報告書 第77集 北九州市文化財調査報告書 第78集	1998 1998 1998 1998 1998 1998

中尾遺跡	－区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査－	北九州市文化財調査報告書 第79集	1998
天神遺跡	－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査－	北九州市文化財調査報告書 第80集	1998
財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室			
小倉城跡 2	(第1分冊 本文編、第2分冊 遺構編、第3分冊 遺物編)	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第196集	1998
大島遺跡	－古墳時代後期の集落跡と墳墓の調査－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第200集	1998
金丸遺跡 2	－一般国道200号線直方バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第210集	1998
境町遺跡 2		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第211集	1998
金山遺跡 0・Ⅳ区	－都市計画道路横代28号線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告 3－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第212集	1998
徳力土地区画整理事業関係調査報告11	守恒遺跡第11地点 守恒遺跡第12地点 玉塚遺跡第6地点 玉塚遺跡第7地点 玉塚遺跡第8地点 上徳力遺跡第24地点 上徳力遺跡第25地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第213集	1998
潤崎遺跡 6 (第8地点)	－公営住宅潤崎団地建替工事に伴う古代遺跡の調査－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第214集	1998
金田遺跡		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第215集	1998
永大丸遺跡群 2 (八反田遺跡・松本遺跡・永大丸遺跡)	－北九州市永大丸・則松土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告 2－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第216集	1998
峠遺跡	－徳力・葛原線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告 6－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第217集	1998
森山西遺跡Ⅲ区	－徳力・葛原線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告 7－	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第218集	1998
乙丸宮ノ下遺跡		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第219集	1998
上貫遺跡 (C) 1	貫川都市小改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第220集	1998
上貫遺跡 (C) 2 2区		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第221集	1998
貫川都市小河川改修に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告13		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第222集	1998
小倉城下屋敷跡		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第222集	1998
太宰府市教育委員会			
大宰府条坊跡 X	－推定大宰府市朱雀大路周辺の調査－	太宰府市の文化財 第37集	1998
成屋形古墳	太宰府インターチェンジ ー拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査－	太宰府市の文化財 第38集	1998
太宰府佐野地区遺跡群Ⅷ	前田遺跡第7次・宮ノ本遺跡第9次調査報告	太宰府市の文化財 第39集	1998
筑後市教育委員会			
梅島遺跡 第一次調査		筑後市文化財調査報告書	1992
筑後東部地区遺跡群Ⅰ	県営園場整備事業筑後東部地区内所在遺跡の調査	筑後市文化財調査報告書 第11集	1994
筑後東部地区遺跡群Ⅱ	県営園場整備事業筑後東部地区内所在遺跡の調査	筑後市文化財調査報告書 第12集	1995
蔵敷赤坂遺跡		筑後市文化財調査報告書 第14集	1995
筑後西部地区遺跡群		筑後市文化財調査報告書 第15集	1995
福岡県筑後市大字井田・島田・古島所在遺跡の調査		筑後市文化財調査報告書 第16集	1995
筑後北部第2地区遺跡群		筑後市文化財調査報告書 第17集	1995
低コスト水田農業大区画は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		筑後市文化財調査報告書 第17集	1995
羽犬塚射場ノ本	福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査	筑後市文化財調査報告書 第18集	1998
久宮大門口遺跡	福岡県筑後市大字久富所在遺跡の調査	筑後市文化財調査報告書 第18集	1998
筑紫野市教育委員会			
隈・西小田地区遺跡群	－隈・西小田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－	筑紫野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集	1993
筑紫野市岡田土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査		筑紫野市文化財調査報告書 第56集	1998
岡田地区遺跡群 ～Ⅰ・Ⅱ区の調査～		筑紫野市文化財調査報告書 第57集	1998
国史跡 五郎山古墳	－保存整備事業に伴う発掘調査－	筑紫野市文化財調査報告書 第57集	1998
福岡市教育委員会			
有田・小田部	第30集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第547集	1998
三苦遺跡群 3	－第4次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第548集	1998
多々良込田遺跡	－第7次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第549集	1998
箱崎遺跡 5	－箱崎遺跡群第9次調査－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第550集	1998
蒲田部木原遺跡 5	－蒲田部木原遺跡群第5次調査－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第551集	1998
箱崎 6	－箱崎遺跡群第10次調査の報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第552集	1998
吉塚 4	－吉塚遺跡群第4次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第553集	1998
吉塚 3	－吉塚遺跡群第3次調査の報告－うかがい	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第554集	1998
吉塚 5	－吉塚遺跡群第5次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第555集	1998
吉塚 6	－吉塚遺跡群第6次調査の報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第556集	1998
博多61	－下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第89次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第557集	1998
博多62	－博多遺跡群第90次発掘調査概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第558集	1998
博多63	－博多遺跡群第97次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集	1998
博多64	－博多遺跡群第98次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第560集	1998
博多65	－博多遺跡群第99次・第101次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第561集	1998
比恵遺跡群25	－比恵遺跡群第58次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第562集	1998
比恵遺跡群26	－比恵遺跡群第59次・第60次・第61次調査の概要－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第563集	1998
那珂遺跡20	－那珂遺跡群第58次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第564集	1998
那珂遺跡群21	－第59次調査報告－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第565集	1998
雀居遺跡 4	福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第565集	1998

下月隈C遺跡2 下月隈C遺跡2次、3次調査－	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第566集	1998
福岡市板付周辺遺跡調査報告書第19集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第567集	1998
麦野B遺跡 ー第3次・4次発掘調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第568集	1998
雑餉隈遺跡4 ー雑餉隈遺跡5次、8次、10次調査ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第569集	1998
中南部(5) ー五十川遺跡群第3・4次、雑餉隈遺跡群第9次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第570集	1998
井尻B遺跡6 ー第8次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第571集	1998
和田B遺跡 ー野多目台住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第572集	1998
野方岩名隈1 藤崎12 ー野方岩名隈遺跡第1次調査及び藤崎遺跡第27次調査報告書ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第573集	1998
有田・小田部31 ー有田遺跡群第181次、184次調査報告書ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第574集	1998
野芥遺跡2 野芥遺跡群第4次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第575集	1998
野芥遺跡3 第7次・第8次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第576集	1998
入部 ー東入部遺跡群第1次調査報告(1)・第7次調査報告(2)ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第577集	1998
松木田遺跡群 第2・第3次調査 縄文時代早期から平安時代の集落跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第578集	1998
金武古墳群 金武古墳群吉武G群の調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第579集	1998
吉武遺跡群X飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書4 ー弥生時代の墓地の調査報告1ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第580集	1998
福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告ー4ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第581集	1998
福岡市早良区賀茂所在野芥大数遺跡第1次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第582集	1998
福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告ー5ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第583集	1998
福岡市西区橋本一丁目遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第584集	1998
国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ飯氏遺跡第6次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第585集	1998
飯氏引地遺跡第1次調査 徳永A遺跡第4次調査 青木遺跡第3次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第586集	1998
今山遺跡 第7次調査の報告		
飯氏古墳群B群第14号古墳		
福岡市西区飯氏所在前方後円墳の重要遺跡確認調査		
鴻臚館跡9 ー平成9年度発掘調査概要報告ー		
前原市教育委員会		
泊桂木遺跡 福岡県前原市大字泊字桂木所在遺跡の調査報告書	前原市文化財調査報告書 第64集	1997
川原川右岸地区遺跡群Ⅱ川原川右岸地区県営は場整備事業に伴う文化財調査報告	前原市文化財調査報告書 第65集	1998
宗像市教育委員会		
宗方名残Ⅰ ー福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告ー	宗像市文化財調査報告書 第18集	1998
朝町山ノ口Ⅱ ー福岡県宗像市大字朝町字山ノ口所在遺跡の調査報告ー	宗像市文化財調査報告書 第34集	1998
浦谷古墳群Ⅲ	宗像市文化財調査報告書 第36集	1998
光岡辻ノ園 福岡県宗像市光岡所在遺跡の発掘調査報告	宗像市文化財調査報告書 第43集	1998
野坂新田 福岡県宗像市野坂所在遺跡の発掘調査報告	宗像市文化財調査報告書 第45集	1998
朝倉町教育委員会		
矢林遺跡 国道386号線バイパスに係る発掘調査報告 ー1ー	朝倉町文化財調査報告書 第6集	1997
朝倉町内遺跡等分布調査報告書	朝倉町文化財調査報告書 第7集	1998
芦屋町教育委員会		
芦屋町遺跡詳細分布調査報告書 1997	芦屋町文化財調査報告書 第9集	1998
碓井町教育委員会		
上臼井日吉古墳 ー測量・実測調査および保存整備のための発掘調査ー	碓井町文化財調査報告書 第3集	1998
宇美町教育委員会		
上角遺跡 福岡県糟屋郡宇美町大字宇美字上角所在遺跡の調査	宇美町文化財調査報告書 第10集	1996
表田遺跡 福岡県糟屋郡宇美町大字宇美表田所在の遺跡調査報告書	宇美町文化財調査報告書 第11集	1996
上角遺跡 福岡県糟屋郡宇美町大字宇美上角所在遺跡の調査	宇美町文化財調査報告書 第13集	1998
大刀洗町教育委員会		
本郷野開遺跡Ⅱ 福岡県三井郡大刀洗町大字本郷所在遺跡の調査	大刀洗町文化財調査報告書 第13集	1997
本郷野開遺跡Ⅲ 福岡県三井郡大刀洗町大字本郷所在遺跡の調査	大刀洗町文化財調査報告書 第15集	1998
高樋塚添遺跡Ⅱ 福岡県三井郡大刀洗町大字高樋所在遺跡の調査	大刀洗町文化財調査報告書 第17集	1998
津屋崎町教育委員会		
勝浦北部丘陵遺跡群勝浦水押遺跡 勝浦浦ノ谷遺跡 勝浦乗越古墳	津屋崎町文化財調査報告書 第13集	1998
勝浦坂口遺跡 勝浦高原遺跡 勝浦井ノ口遺跡	津屋崎町文化財調査報告書 第14集	1998
生家釘ヶ裏遺跡 担い手育成基盤整備事業勝浦浦地区に伴う発掘調査報告		
豊津町教育委員会		
上荒谷北遺跡 福岡県京都郡豊津町大字上荒谷所在遺跡の調査	豊津町文化財調査報告書 第19集	1998
豊前国分尼寺跡 福岡県京都郡豊津町大字徳政所在寺院跡の調査	豊津町文化財調査報告書 第20集	1998
那珂川町教育委員会		
平蔵遺跡Ⅲ 福岡県筑紫郡那珂川町大字上梶原字平蔵所在遺跡群の調査	那珂川町文化財調査報告書 第41集	1998
城ノ下遺跡群 福岡県筑紫郡那珂川町大字山田所在遺跡の調査	那珂川町文化財調査報告書 第42集	1998
福岡町教育委員会		
津丸横尾遺跡	福岡町文化財調査報告書 第11集	1997

	八並中原遺跡	福岡町文化財調査報告書 第13集	1998
	夜須町教育委員会		
	池田・黒水遺跡 夜須地区遺跡群XⅥ	夜須町文化財調査報告書 第26集	1993
	福岡県朝倉郡夜須町大字三牟田・砥上所在遺跡	夜須町文化財調査報告書 第28集	1994
	松崎遺跡Ⅰ 県道山家・西小田線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ	夜須町文化財調査報告書 第30集	1995
	百万遺跡 福岡県朝倉郡夜須町大字東小田所在遺跡調査報告	夜須町文化財調査報告書 第31集	1995
	大坪遺跡（夜須町立東小田小学校内遺跡）	夜須町文化財調査報告書 第33集	1996
	福岡県朝倉郡夜須町東小田所在遺跡調査報告	夜須町文化財調査報告書 第34集	1996
	松崎遺跡Ⅱ 夜須地区遺跡群XⅧ	夜須町文化財調査報告書 第36集	1997
	法福寺遺跡 夜須地区遺跡群XⅣ	夜須町文化財調査報告書 第37集	1997
	福岡県朝倉郡夜須町大字三並所在遺跡調査報告		
	切杭遺跡 夜須地区遺跡群XⅪ		
	福岡県朝倉郡夜須町大字松延所在遺跡調査報告		
	中牟田小学校遺跡 福岡県朝倉郡夜須町大字中牟田所在遺跡調査報告		
	若宮町教育委員会		
	原田遺跡群 原田地区遺跡の調査概報福岡県鞍手郡若宮町	若宮町文化財調査報告書 第14集	1998
	大字原田字惣連寺、三月田、損ヶ熊、東向原、西屋敷所在遺跡の調査	若宮町文化財調査報告書 第15集	1998
	小原古墳群福岡県鞍手郡若宮町大字山口所在小原古墳群北支群の調査九州電力株式会社500KV特別送電線 鉄塔・148新設工事に係る埋蔵文化財調査報告書		
佐賀県	佐賀県教育委員会		
	東福寺遺跡九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（17）	佐賀県文化財調査報告書 第121集	1994
	肥前國長嶋莊領関係史料集『東福寺遺跡』別冊	佐賀県文化財調査報告書 第121集	1994
	伊万里市教育委員会		
	祐造坊たたら跡 市道長浜33号線道路改良事業に伴う文化財調査報告書	伊万里市文化財調査報告書 第42集	1995
	宮ノ前北遺跡 農業基盤整備地区内遺跡に伴う文化財調査概要報告書	伊万里市文化財調査報告書 第43集	1996
	楠久御牧場跡 伊万里港臨港道路工事に伴う文化財調査報告書	伊万里市文化財調査報告書 第44集	1997
	唐津市教育委員会		
	唐津市内遺跡確認調査（13）	唐津市文化財調査報告書 第80集	1998
	唐津市内遺跡確認調査（14）	唐津市文化財調査報告書 第81集	1998
	八幡溜Ⅱ遺跡（2） 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	唐津市埋蔵文化財調査報告書 第82集	1998
	雲透遺跡（Ⅱ）KUMOSUKI SITE（Ⅱ）	唐津市文化財調査報告書 第83集	1998
	佐賀市教育委員会		
	金立遺跡Ⅱ 4～9区の調査	佐賀市文化財調査報告書 第87集	1998
	久富遺跡 - 2区 - 友貞遺跡 - 13区～17区 -	佐賀市文化財調査報告書 第88集	1998
	東千布遺跡 - 4 A区～4 B区 -	佐賀市文化財調査報告書 第89集	1998
	牟田寄遺跡 - 15・16・17区の調査 -	佐賀市文化財調査報告書 第90集	1998
	修理田遺跡Ⅱ - 2・3区の調査 -	佐賀市文化財調査報告書 第91集	1998
	若宮原遺跡（2・3区）	佐賀市文化財調査報告書 第92集	1998
	東千布遺跡（5区）	佐賀市文化財調査報告書 第93集	1998
	坪の上遺跡 - 佐賀導水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 -	佐賀市文化財調査報告書 第94集	1998
	コマガリ遺跡	佐賀市文化財調査報告書 第95集	1998
	琵琶原遺跡 6区の調査	佐賀市文化財調査報告書 第96集	1998
	佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書 - 1993・1994年度 -	佐賀市文化財調査報告書 第97集	1998
	赤井手遺跡1区 先立山遺跡1区		
	- 佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 -		
	武雄市教育委員会		
	武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅴ山崎御立目窯跡 釜ノ頭窯跡	武雄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集	1998
	久保田町教育委員会		
	後藤館跡	久保田町文化財調査報告書 第3集	1998
	鎮西町教育委員会		
	特別史跡 松浦鎮信陣跡 細川忠興陣跡	鎮西町文化財調査報告書 第15集	1998
	塩鶴遺跡 - 県営畑地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査 -	鎮西町文化財調査報告書 第16集	1998
	三日月町教育委員会		
	石木中高遺跡	三日月町文化財調査報告書 第7集	1996
	土生遺跡Ⅰ - 土生遺跡第9次調査報告書 -	三日月町文化財調査報告書 第8集	1998
	土生遺跡Ⅱ - 土生遺跡第10次調査報告書 -	三日月町文化財調査報告書 第9集	1998
熊本県	熊本県教育委員会		
	堂園遺跡 中尾遺跡 別府遺跡 - 県営緊急畑地帯総合土地改良事業（須恵・深田地区）に伴う文化財の発掘調査 -	熊本県文化財調査報告 第159集	1997
	庵ノ前遺跡Ⅲ 一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告 第160集	1997
	塚坊主古墳 - 肥後古代の森整備事業に伴う埋蔵文化財調査 -	熊本県文化財調査報告 第161集	1997
	打碎遺跡 古池さん遺跡 古池さん北遺跡	熊本県文化財調査報告 第162集	1997
	主要地方道路熊本高森線改良工事に伴う埋蔵文化財調査		
	万年寺遺跡 - 建設省 南九州西回り自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告 -	熊本県文化財調査報告 第163集	1997
	鞠智城跡 - 第18次調査報告書 -	熊本県文化財調査報告 第164集	1997
	頭地松本B遺跡(1) - 建設省川辺川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の調査 -	熊本県文化財調査報告 第165集	1997

	黒橋貝塚　－浜戸川中小河川改良事業に伴う埋蔵文化財の調査－	熊本県文化財調査報告　第166集	1998
	二本木前遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査	熊本県文化財調査報告　第167集	1998
	鶴羽田遺跡（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財調査	熊本県文化財調査報告　第168集	1998
	鞠智城跡　－第19次調査報告－	熊本県文化財調査報告　第169集	1998
熊本市教育委員会			
	つつじヶ丘横穴群　発掘調査概報Ⅲ		1997
	五丁中原遺跡　五丁中原遺跡群第1次調査区発掘調査概要報告書		1997
宇土市教育委員会			
	椿原遺跡	宇土市埋蔵文化財調査報告書　第20集	1997
旭志村教育委員会			
	尾足横穴群　甲号横穴発掘調査報告書	旭志村文化財調査報告	1997
大分県	大分県教育委員会		
	安平遺跡　居屋敷地区　城山遺跡　木部地区　大根川遺跡　向野地区	一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（5）	
	二本木遺跡　県道緒方大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書	大分県文化財調査報告書　第99集	1998
	大分の前方後円墳　三重・西国東地区編	大分県文化財調査報告書　第100集	1998
	かわじ池遺跡	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（8）	1998
	佐寺原遺跡　尾漕遺跡群　有田塚ヶ原古墳群	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（9）	1998
	日田市高瀬遺跡群の調査2　手崎遺跡　大部遺跡	一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	1998
	佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書	1998
	宇佐市教育委員会		
	塔ノ本遺跡　瓦塚遺跡5次調査　法鏡寺遺跡3次調査　別府遺跡12次調査　小部遺跡14次調査 台ノ原遺跡8次調査　川部遺跡2次調査　弥勒寺跡1次調査　虚空蔵寺跡12次調査	宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅹ	1998
	別府遺跡	国道387号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ	1998
	佐伯市教育委員会		
	天祐館遺跡	美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1998
	壱野古墳	農免農道堅田地区建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1998
	中津市教育委員会		
	中津城下町遺跡　京町　御用屋敷跡	中津市文化財調査報告書　第21集	1998
	日田市教育委員会		
	萩鶴遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第9集	1995
	郷四郎遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第10集	1996
	会所宮遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第11集	1996
	牧原遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第12集	1997
	森ノ元遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第13集	1998
	三和教田遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第14集	1998
	馬形遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第16集	1998
	口が原遺跡	日田市埋蔵文化財調査報告書　第17集	1998
	安岐町教育委員会		
	安旨遺跡	安岐町文化財調査報告書第4集	1998
	吉松市場遺跡	安岐町文化財調査報告書第5集	1997
	一ノ瀬古墳群	安岐町文化財調査報告書第6集	1997
	光広遺跡（平地区）	安岐町文化財調査報告書第7集	1998
	両子寺関遺遺構	安岐町文化財調査報告書第8集	1998
	大野町教育委員会		
	酒井寺西遺跡　表遺跡　長寿庵遺跡	大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ	1997
	久住町教育委員会		
	県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ		1997
	－市第Ⅱ遺跡　市第Ⅲ遺跡　仏原第Ⅰ遺跡　仏原第Ⅱ遺跡　仏原第Ⅲ遺跡－ 尾首遺跡・市第Ⅴ遺跡	県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う発掘調査報告書Ⅲ	1998
	国東町教育委員会		
	安国寺遺跡（日ヶヶ1地区）平等寺遺跡　原遺跡（餅田1地区、餅田2地区） 畑中遺跡　松屋敷遺跡　小谷遺跡　大分県国東町文化財調査報告書第17集	県営圃場整備国東川南地区関係発掘調査報告書	1998
	川原条里遺跡　千疋上り1地区 森本1地区　大分県国東町文化財調査報告書第16集	県営圃場整備国東中部地区関係発掘調査報告書	1998
	九重町教育委員会		
	釘野千軒遺跡Ⅰ	九重町文化財調査報告第22集	1997
	直入町教育委員会		
	釘小野遺跡	大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査報告書	1996
	高畑遺跡	大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査報告書	1996
	本耶馬溪町教育委員会		
	下屋形遺跡		1998

	武蔵町教育委員会		
	宝命寺国東塔	大分県武蔵町宝命寺国東塔解体修理報告書	1996
	大田村教育委員会		
	ヒノクチ石塔群	大田村文化財調査報告書 第5集	1998
	三光村教育委員会		
	三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ		1995
	三光村の遺跡 一倉迫工場団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	三光村文化財調査報告書(第2集)	1995
	倉迫二ツ塚古墳 倉迫平古墳		
宮崎県	宮崎県埋蔵文化財センター		
	広木野遺跡・神殿遺跡A地区 県立学校運動場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集	1997
	尾平・橋原遺跡 橋原遺跡 県営特殊農地保全整備事業(中尾地区 橋原工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第8集	1997
	前田遺跡 一般国道10号宮崎北バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第9集	1998
	市位遺跡 希望ヶ丘西区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第10集	1998
	荒迫遺跡 宮崎フリーウェイ工業団地造成に伴う発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第11集	1998
	平成9年度東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ(西都～清武)	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第12集	1998
	宮崎県教育委員会		
	国衙跡保存整備基礎調査概要報告書Ⅱ 寺崎遺跡第6次調査		1998
	平成9年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書 ハツ山地区遺跡 古城遺跡 船引地区遺跡 横市地区遺跡		1998
	宮崎県文化財調査報告書 第41集		1998
	特別史跡西都原古墳群 発掘調査・保存整備概要報告書(Ⅲ)		1998
	宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ 地名表・分布地図編		1998
	宮崎市教育委員会		
	椎屋形第1遺跡 椎屋形第2遺跡 上の原遺跡 県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		1996
	大町遺跡	宮崎市文化財調査報告書 第33集	1998
	京園遺跡 ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第34集	1998
	二月田遺跡・芋字遺跡 県営担い手育成基盤事業 富吉地区にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第35集	1998
都城市教育委員会	天神原遺跡 民間の事務所・倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	都城市文化財調査報告書 第23集	1993
	久玉遺跡第5次発掘調査 油田遺跡 正坂原遺跡	都城市文化財調査報告書 第25集	1993
	加治屋遺跡2	都城市文化財調査報告書 第35集	1996
	大浦遺跡 臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	都城市文化財調査報告書 第37集	1997
	田谷・尻枝遺跡	都城市文化財調査報告書 第38集	1997
	都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書	都城市文化財調査報告書 第41集	1997
	鶴喰遺跡 一横市地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	都城市文化財調査報告書 第44集	1998
	西都市教育委員会		
	市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ 日向国分寺跡	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集	1998
えびの市教育委員会	昌明寺遺跡 県営担い手育成基盤整備事業昌明寺地区開場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告Ⅰ	えびの市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集	1998
	清武町教育委員会		
	白々野第1・第4遺跡 県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書	清武町文化財調査報告書 第5集	1997
	滑川第1・第2遺跡 一 滑川第3遺跡 県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書	清武町文化財調査報告書 第6集	1998
高原町教育委員会	高原町遺跡詳細分布調査報告書	高原町文化財調査報告書第3集	1998
	田野町教育委員会		
	長藪遺跡 県営農地保全整備事業八重地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	田野町文化財調査報告書 第17集	1994
	元野地区遺跡(高野原遺跡) 県営農地保全整備事業元町地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	田野町文化財調査報告書 第18集	1994
	八重地区遺跡 県営農地保全整備事業八重地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	田野町文化財調査報告書 第19集	1994
	前畑第1遺跡 前畑第2遺跡 棚現谷第1遺跡 棚現谷第2遺跡 砂田遺跡 宮田遺跡	田野町文化財調査報告書 第20号	1994
	町内遺跡発掘調査 松井坊遺跡・飯屋城跡	田野町文化財調査報告書 第21集	1996
	永迫第2遺跡	田野町文化財調査報告書 第22集	1996
	馬渡第1遺跡	田野町文化財調査報告書 第24集	1996
	株式会社南国殖産ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田野町文化財調査報告書 第25集	1997
	元野地区遺跡(高野原遺跡) 県営農地保全整備事業元町地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	田野町文化財調査報告書 第27集	1997
	七野第4遺跡 西地区開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田野町文化財調査報告書 第28集	1998
	元野河内遺跡 県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書		
	鹿毛第3遺跡 県営地帯総合整備事業・八重地区に伴う野崎地区鹿毛第3遺跡発掘調査報告書		

鹿児島県	鹿児島市教育委員会		
	滝ノ上火薬製造所跡		
	稲荷川県単河川緊急整備事業に伴う緊急発掘調査報告書	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)	1998
	祇園之洲砲台跡 高麗橋・玉江橋移設復元工事に伴う緊急発掘調査報告書	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)	1998
	隼人町教育委員会		
	弥勒院		1996
定期刊行物・図録等			
北海道	財団法人北海道埋蔵文化財センター		
	テエタ	財団法人北海道埋蔵文化財センターだより第3号	1999
福島県	財団法人いわき市教育文化事業団		
	いわき市教育文化事業団 年報7 平成7年度		1997
	いわき市教育文化事業団 年報8 平成8年度		1998
	いわき市教育文化事業団 年報9 平成9年度		1999
	いわき市教育文化事業団研究紀要 第9号		1998
	いわき市教育文化事業団研究紀要第10号 1999		1999
	郡山市教育委員会 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	第3回市内遺跡発掘調査成果展 きらめく歴史の流れ		1997
	第4回市内遺跡発掘調査成果展 阿尺歴史紀行		1998
	筑波大学歴史・人類学系		
茨城県	筑波大学先史学・考古学研究第9号		1998
栃木県	全国史跡整備市町村協議会事務局		
	1998 全史協会報 一平成9年度 全国史跡整備市町村協議会一		1998
	全国史跡整備市町村協議会		
群馬県	第6回全史協海外視察研修事業 シルクロードの文化財を訪ねて 一ウズベキスタン視察研修報告一		1998
	笠懸野岩宿文化資料館		
	Origin第24号	岩宿時代通信No.24	1998
富山県	第24回企画展 槍 一その起源と歴史を探る一		1998
	財団法人富山県文化財振興財団 埋蔵文化財調査事務所		
	埋蔵文化財年報(9) 平成9年度		1998
埼玉県	埋蔵文化財調査概要 一平成9年度一		1998
	富山考古学研究 紀要 創刊号		1998
	浦和市教育委員会		
千葉県	国指定史跡 見沼通船堀整備事業のあらまし		1998
	山武考古学研究所		
	山武考古学研究所年報No.16		1998
東京都	財団法人山武郡文化財センター		
	文化財かわら版 さんぶぐんしぶんかざいせんたーこーほーし 第10号		1998
	財団法人山武郡市文化財センター 年報No.12 平成7年度		1997
	財団法人山武郡市文化財センター 年報No.13 平成8年度		1998
	財団法人山武郡市文化財センター 年報No.14 平成9年度		1999
	株式会社ぎょうせい		
	文化庁月報No.355 平成10年4月		1998
	文化庁月報No.356 平成10年5月		1998
	文化庁月報No.357 平成10年6月		1998
	文化庁月報No.358 平成10年7月		1998
東京都	文化庁月報No.359 平成10年8月		1998
	文化庁月報No.360 平成10年9月		1998
	文化庁月報No.361 平成10年10月		1998
	文化庁月報No.362 平成10年11月		1998
	文化庁月報No.363 平成10年12月		1998
	文化庁月報No.364 平成11年1月		1998
	文化庁月報No.365 平成11年2月		1998
	文化庁月報No.366 平成11年3月		1998
	文化財保護行政ハンドブック 美術工芸品編		1998
	株式会社ジャパン通信情報センター		
	月刊文化財発掘出土情報 1998・4		1998

	月刊文化財発掘出土情報	1998・5		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・6		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・7		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・8		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・9		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・10		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・11		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1998・12		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1999・1		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1999・2		1998
	月刊文化財発掘出土情報	1999・3		1998
第一法規出版株式会社				
	月刊文化財	4 平成10年度 Na.415		1998
	月刊文化財	5 平成10年度 Na.416		1998
	月刊文化財	6 平成10年度 Na.417		1998
	月刊文化財	7 平成10年度 Na.418		1998
	月刊文化財	8 平成10年度 Na.419		1998
	月刊文化財	9 平成10年度 Na.420		1998
	月刊文化財	10 平成10年度 Na.421		1998
	月刊文化財	11 平成10年度 Na.422		1998
	月刊文化財	12 平成10年度 Na.423		1998
	月刊文化財	1 平成11年度 Na.424		1999
	月刊文化財	2 平成11年度 Na.425		1999
世田谷区立郷土資料館				
	平成10年度特別展図録	江戸の文人交友録 亀田鵬斎とその仲間たち 一渥美コレクションを中心にー		1998
財団法人環境文化研究所				
	記念物を素材とした生涯学習プログラムの研究開発			1998
早稲田大学考古学会				
	古代	第104号		1997
	古代	第105号		1998
昭和女子大学国際文化研究所				
	ベトナム・ホイアンの町並みと建築	昭和女子大学国際文化研究紀要Vol. 3 / 1996		1997
	ベトナムの日本町 ホイアンの考古学調査	昭和女子大学国際文化研究紀要Vol. 4 / 1997		1997
東京大学 大学院人文社会系 研究科・文学部 考古学研究室				
	東京大学考古学研究室研究紀要第15号			1997
財団法人ポーラ伝統文化振興財団				
	伝統と文化	第22号		1998
株式会社講談社				
	古写真大図鑑 《日本の名城》			1998
株式会社新人物往来社				
	別冊歴史読本 野外復元 日本の歴史			1998
有限会社黒崎書店				
	黒崎書店古書目録			1998
石川県	金沢市			
	市史かなざわ	第4号		1998
	市史かなざわ	第5号		1999
	金沢市史編さん委員会			
	金沢市史 資料編1	古代・中世一		1998
	金沢市史 資料編17	建築・建設		1998
愛知県	名古屋見晴台考古学資料館			
	曽池遺跡	第2次発掘調査概要報告書		1998
	名古屋見晴台考古学研究会			
	名古屋見晴台考古資料館報	みはらしNa198		1998
	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター			
	平成9年度 瀬戸市埋蔵文化財センター年報			1998
	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要	第6集		1998
	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録	『六古窯の時代』		1998

	豊田市郷土資料館		
	豊田市郷土資料館だよりNo.24		1998
	企画展 村上忠順と蓮月		
	とよた発掘ファイル'98夏		1998
	豊田市郷土資料館だよりNo.25		1998
	豊田市郷土資料館だよりNo.26		1999
三重県	四日市市教育委員会		
	四日市市文化財保護年報 8 ー平成 8 年度ー		1997
	津市埋蔵文化財センター		
	津市埋蔵文化財センター年報 2 平成 8 年度		1998
滋賀県	滋賀県教育委員会 滋賀県安土城郭調査研究所		
	研究紀要第 4 号		1996
	研究紀要第 5 号		1997
	滋賀県安土城郭調査研究所		
	滋賀県安土城郭調査研究所年報 1995年度		1996
	滋賀県安土城郭調査研究所年報 1996年度		1997
京都府	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター		
	京都府埋蔵文化財情報 第68号		1998
	京都府埋蔵文化財情報 第69号		1998
	京都府埋蔵文化財情報 第70号		1998
	小さな展覧会	平成9年度京都府内遺跡発掘調査成果速報	1998
	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 8 年度		1998
	広陵町教育委員会		
	広陵町指定文化財 平成 7 年度版		1997
	広陵町指定文化財 平成 9 年度版		1999
	奈良大学文学部文化財学科		
	文化財學報 第16集	岡田英男・古原宏伸先生送別記念論集	1998
大阪府	高槻市教育委員会		
	高槻市文化財年報 平成 8 年度		1998
	豊中市教育委員会		
	豪族の時代 ー古墳と倉からみた とよなかの古墳時代ー	とよなか文化財ブックレットNo.5 通史編V	1996
	技の旅びと ー渡来人が変える 古墳時代のくらしと技術ー	とよなか文化財ブックレットNo.6 通史編VI	1997
	大阪府立近つ飛鳥博物館		
	大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 1		1996
	大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 2		1997
	大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 3		1998
兵庫県	尼崎市教育委員会		
	尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成 5 年度		1998
	姫路市教育委員会文化部文化課		
	TSUBOHORI 平成 8 年度 (1996) 姫路市埋蔵文化財調査略報		1998
奈良県	飛鳥資料館		
	それからの飛鳥		1998
	UTAMAKURA 映像・翻訳・万葉集		1998
	奈良県立橿原考古学研究所		
	橿原考古学研究所年報 23 平成 8 年度 (1996)		1997
	橿原考古学研究所1938～1998		1998
	ー黒塚古墳 (奈良県天理市柳本町)ー (奈良県立橿原考古学研究所リーフレット 第 5 号)		1998
	橿原市千塚資料館		
	平成 9 年度埋蔵文化財発掘調査速報展 かしはらの歴史をさぐる 6		1999
和歌山県	財団法人和歌山市文化体育振興事業団		
	和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 5 ー平成 7 (1995) 年度ー		1998
岡山県	岡山市教育委員会		
	岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996 (平成 8) 年度		1998
	総社市教育委員会		
	総社市埋蔵文化財調査年報 8 (平成 9 年度)		1998

	倉敷埋蔵文化財センター		
	倉敷埋蔵文化財センター年報 4 -平成 8 (1996) 年度-		1997
	たんけん！くらしきの古代		1998
	平成 9 年度企画展 発掘くらしき わたしの町の遺跡展		1998
広島県	財団法人広島市歴史科学教育事業団		
	第20回文化財展 [味な考古学]		1997
	弥生時代の土笛づくり -平成 9 年度考古学教室から-		1998
山口県	下関市立考古博物館		
	下関市立考古博物館年報 3 平成 9 年度		1998
	平成10年度 企画展 下関の弥生時代 -近年の発掘成果から-		1998
	研究紀要第 2 号		1998
徳島県	徳島市教育委員会		
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 7		1997
愛媛県	松山市教育委員会 埋蔵文化財センター財団法人松山市生涯学習振興財団		
	松山市埋蔵文化財調査年報 X 平成 9 年度		1998
	財団法人愛媛県埋蔵文化財センター		
	まいぶん えひめ No.25		1998
福岡県	福岡県教育委員会		
	福岡県埋蔵文化財発掘調査年報 -平成 7 年度-		1998
	財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室		
	研究紀要 -第12号-		1998
	埋蔵文化財調査室年報14 平成 8 年度		1998
	北九州市立考古博物館		
	北九州市立考古博物館年報 -平成 9 年度-		1998
	開館15周年記念特別展 西と東の縄文土器 -土器が語る縄文時代の日本列島-		1998
	研究紀要 Vol. 5		1998
	筑紫野市教育委員会		
	筑紫野市内遺跡分布図		1998
	福岡市教育委員会		
	福岡市埋蔵文化財年報Vol. 1 1996年度 (平成 8 年度)		1998
	福岡市埋蔵文化財センター年報 第17号		1998
	前原市教育委員会		
	福岡県前原市 市内遺跡等分布地図		1998
	博物館等建設推進九州会議		
	文明のクロスロード Museum Kyusyuuu	季刊 第16巻 第 3 号 通巻第61号	1998
	九州・沖縄水中考古学協会		
	NEWSLETTER Vol. 4 No. 2		1997
	NEWSLETTER Vol. 4 No. 3		1998
	NEWSLETTER Vol. 4 No. 4		1998
	草書房		
	九州の郷土誌を中心とした 西日本文献目録 No.30		1998
	王塚装飾古墳館		
	王塚装飾古墳館年報 3 《平成 9 年度》		1998
佐賀県	武雄市教育委員会		
	武雄市内古窯跡群発掘調査報告書 V 山崎御立目窯跡 釜ノ頭窯跡	武雄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集	1998
	武雄市の文化財		1998
熊本県	熊本県教育委員会		
	文化財通信くまもと 第12号		1997
	文化財通信くまもと 第13号		1997
	文化財通信くまもと 第14号		1998
	文化財通信くまもと 第15号		1998
	熊本県立装飾古墳館		
	平成10年度前期企画展 今どきの考古学 くまもと考古速報展	熊本県立装飾古墳館展示図録 第10集	1998
大分県	大分県教育委員会		
	大分県 埋蔵文化財年報 6 平成 8 (1996) 年度版		1998
	日田市教育委員会		
	平成 4 年度 (1992年度) 日田市埋蔵文化財年報		1994

	平成5年度（1993年度）日田市埋蔵文化財年報	1995
	平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報	1997
	平成8年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報	1998
	居館の里 小迫辻原遺跡 大分県日田市	1998
	まちづくりフォーラム'96 黎明の比多国 小迫辻原遺跡の世界	1996
	天瀬町教育委員会	
	あまがせの文化財	1998
	大分市歴史資料館	
	大分市歴史資料館年報 1989	1990
	大分市歴史資料館年報 1990	1990
	大分市歴史資料館年報 1991	1992
	大分市歴史資料館年報 1993	1993
	大分市歴史資料館年報 1996	1996
	大分市歴史資料館年報（平成7年度）	1996
	大分市歴史資料館年報（平成8年度）	1997
	豊予海峡シンポジウム実行委員会佐賀関町・佐賀関町教育委員会 1997	
	豊予海峡シンポジウム 古代の豊予交流	1997
	清川村教育委員会	
	きよかわの文化財 第2集	1997
	大南地区文化財同好会	
	落穂 第59号 平成10年（1998）8月	1998
宮崎県	宮崎県埋蔵文化財センター	
	宮崎県埋蔵文化財センター年報 創刊号平成8年度（1996）	1997
	埋蔵文化財通信 みやざき 第3号	1998
	西都市教育委員会	
	平成9年度 西都原古墳研究所・年報 第14号	1998
鹿児島県	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報12 平成8年度	1998



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 10

1999

発行日

平成11年12月31日

編集・発行

大分市教育委員会文化財室

大分市荷揚町2番31号

〒870-0025 (097)534-6111

印刷

大分市顕徳町2丁目2-38

(有) 中央印刷
